
R18
ADULT ONLY
イズモと神の棲む森
下
むらうえ
イラスト：窓枠

祈りの獣

イズモと神の棲む森　下

むらうえ

イズモと神の棲む森　下　目次

イズモと神の棲む森　上　目次

イズモと神の棲む森　下

イラスト　窓枠

四章　鼠の策謀

「兄弟は見つけた洞穴で体を休めていた」

「どちらも長旅と心労で疲れ果て、特に体の弱い兄の衰弱は激しかった。しかし、待っても待っても、父親は迎えに来なかった」

「木の実や果物で飢えをしのいでいたが、それも限界だった」

「弟が言った。少し遠くまで食べ物を探してくる。兄さんは待ってて、と」

「ありがとう、と兄は申し訳なさそうに言った。そして、くれぐれも危ないことはしないように、と忠告した」

「分かってる。弟はそう言うと、森の中へ駆けていった」

1

夜が明ける少し前に、イズモは家を出た。
東の空は明るくなり始め、空に浮かぶ星々の姿が薄れていく。鳥も虫もまだ眠っているらしく、森はとても静かだった。
大あくびとともに体を伸ばすと、早朝の澄んだ空気が肺を満たし、眠気が少し和らいだ。
昨日は興奮でほとんど眠れなかった。
目を閉じると魔石の輝きがまぶたの裏に現れ、売り捌く算段をとめどなく考えてしまう。夢ではなかったかと不安になり、何度も起きて確かめた。魔石は間違いなくそこにあり、イズモの未来を象徴するように煌めいていた。
——あの鉱脈はオレのものだ。誰にも渡さない。
カリムはこの森に誰も来たことがないと言っていた。しかし、イズモやユピトガ一家が来たのだから、いずれ他の人間もやってくるだろう。彼らが鉱脈を見つけた

ら、独占しようと企むに違いない。先に見つけたのは自分なのに、対応が遅れたせいでライバルが増えてしまうのだ。

横取りは好きだが、されるのは許せない。誰かが来る前に、鉱脈を我が物にしなくてはならない。そのための段取りを、イズモは昨夜の内に考えていた。

——何はともあれ、まずは下地作りだ。

イズモは鞄に必要な物が入っていることを確認すると、カリムの家に向けて歩き出した。

カリムを足がかりに、ゆくゆくは村を掌握するつもりだった。

イズモが鉱脈を手に入れた暁には、村の男たちは魔石を掘り出す労働力として死ぬまで働くことになるだろう。自分より顔も体も優れた人間を隷属(れいぞく)させ、彼らの血と汗の結晶で豪遊する。その光景を想像するだけで、イズモの足取りは羽毛のように軽くなった。

歌いたくなるような気分で緩やかな坂を登っていると、前方から足音が近づいてくることに気づいた。

足を止め、相手を見やる。

背が高く、均整の取れた強靭な肉体。夜明け前の薄暗がりでも分かる闇色の被毛と雷光を思わせる縞模様。一瞥されただけで体がすくんでしまう鋭い相貌。

アドル。
認識した途端、猛獣に間合いを詰められるような緊張感に包まれる。
よりによって、今、一番会いたくない相手だった。
――落ち着け。目が合ったからって思考を読まれるわけじゃない。それに、オレが神域に入ったことはラティフしか知らない。
もし誰かに見られていたのなら、昨夜のうちに騒ぎになっているだろう。魔石は子どもたちが集めてきた石の山の中に隠した。見つかったとしても、イズモが神域から持ってきたものだと証明する手立てはない。
切り抜ける方法は何重にも用意していたが、アドルの姿を見ると心穏やかではいられなかった。
いっそ出直そうかと迷っているうちに、アドルがイズモに気づいた。一瞬、眉根が寄るのを見てしまい、余計に気まずくなる。
「よう」片手を上げ、できるだけ親しげな笑みを送る。
気分が悪くなるような沈黙。
だが、アドルは軽く目礼をしただけで、足を止めることなく行ってしまった。
イズモは肩透かしを食らった気分で、アドルを見送る。大股で遠ざかっていく広い背中には、どこか急いでいる雰囲気があった。

何かあったのだろうか。言葉が通じないとはいえ、よそ者が夜明け前に村をうろついていたら、ひと声かけそうなものだが。気になったが、詮索されずに済んだのは僥倖（ぎょうこう）だ。深く考えないことにする。

坂を登りきると、家の戸口から淡い光が漏れているのが見えた。

「カリム、起きてるのか？」

声をかけるが返事はない。中を覗くと、小さく燃える炉の火と、寝床に横たわる白い背中が見えた。どうやら、まだ眠っているらしい。

――昨日はカリムが勝手に入ってきたんだ。別にいいよな。

今度はこっちが驚かす番だ。そう思い、足音を立てないように侵入する。

家に入った途端、生々しい青臭さが鼻をついた。春先に木々から漂ってくる、むせ返るような臭いだった。十中八九、精液だろう。自慰の後始末をせずに寝たのだろうか。

カリムらしくないように思えたが、イズモもカリムのすべてを知っているわけではない。案外、だらしのない面があるのかもしれない。無造作に脱ぎ捨てられた腰布を見ながら、イズモはそんなことを思った。

――さて、どうやって起こしてやろうか。

かすかに寝息を立てるカリムを前に、イズモは腕を組んで思案する。

起きるまで顔を覗き込む。耳に息を吹きかける。気付け薬を使う。いくつか案を思いついたが、カリムはこちらに背を向けているので、どれも難しい。
だんだん考えるのが面倒になり、普通に起こすことにする。そもそも用があって来たのであって、驚かせに来たわけではない。
「おい、カリム。起きろ」
声をかけながら、カリムの丸々とした肩を揺する。柔らかな毛の下に重厚な筋肉の感触があり、イズモが少々力を入れたくらいでは、びくともしなかった。血管の浮いた筋肉の塊が飾りの訳がない。
だんだんと苛立ちが募ってくる。
「おい、カリム！　起きろ！」
両手で腕を掴み、全身の力を使って揺さぶる。それでもカリムが起きる気配はなかった。
ふと、カリムの下半身が目に入る。
黒縞の長い尻尾は床に垂れ、芸術的な造形の尻が露わになっていた。豊かな双丘の谷間からは得体の知れない液体があふれ、内腿と寝床を汚していた。
「アドル……私は……大丈夫ですから……」
カリムが寝返りを打ち、イズモの手を払うように腕が振られる。無造作に放たれ

た裏拳が、尻を凝視していたイズモの顔を直撃した。
　ゴツッ、と鈍い音がした。
　手の甲に走った違和感でカリムは目を覚ました。
　ぼんやりとした目で横を見ると、小柄な鼠人が手で顔を覆い、床をうち回っているのが見えた。
　眠気が吹き飛び、慌てて体を起こす。
「い、い、い、イズモ様⁉」
「よう。ゆうべはお楽しみだったみたいだな」
　鼻先を押さえ、涙目になりながら、イズモは意地悪な笑みを浮かべた。
　カリムの体には、昨晩行われたであろう享楽の痕跡が色濃く残っていた。
　分厚い胸元から引き締まった下腹部にかけての毛が粘着質な液体で塗り固めたように乱れ、股間に垂れ下がる著大(ちょだい)な茎の先端には肉欲の残滓が滴(しずく)を作る。体のあちこちには噛まれたらしい血の跡があり、行為の激しさを物語っていた。
「さっき、アドルとすれ違ったんだが、そういうことか？」
「あ、いえ、これは――」
　言いかけたカリムが急に黙った。口を開けたまま、視線を泳がせている。不思議に思っていると、イズモから目を逸らすように頭を垂れた。

「――そうです。私の相方はアドルなのですが、ここ最近、相手をしていなかったので、あの、その……」

カリムは戸惑った様子で言葉を濁す。直接ではないにしても、相方との営みを見られて気分がいいはずがない。

しかし、イズモの優先事項はそこではなかった。

「そうだったのか。間が悪くて申し訳ないことをした。ただこっちも急ぎの用で来たんだ。早速で悪いんだが――」

「イズモ様、あの」

言いかけたイズモをカリムが遮る。

「なんだ？」

「身支度を整えますので、私が呼ぶまで、外で待っていていただけませんか？」

カリムを待つ間、イズモは苛立たしげに歩き回っていた。

腕を組んだり腰に手をやったりして、地面を睨みつけながら同じ場所を何度も往復する。幾重にも重なった足跡で、地面には太い線ができていた。

「ったく、なんだってんだ」

不愉快さを吐き出すよう悪態をつく。

カリムが自分以外の誰かと寝た。
先ほどはとっさのことで何かを感じる余裕はなかったが、時間とともにモヤモヤとした感情が湧き上がってきた。
カリムにも相方くらいいるだろう。それがアドルだったとしても、不思議ではない。やることをやっていても、おかしくはない。彼らにとって、それは普通のことなのだ。
しかし、いざ、それを目の当たりにすると、イズモは平静を保てなかった。動揺したという事実が、さらにイズモの心をかき乱した。
——あいつが誰とヤろうと、オレには関係ないだろ。何をうろたえてんだ。
カリムが自分と体を重ねたのは偶然だ。命を助けられ、薬酒を飲ませた責任から処理役を買ってでただけ。それ以上の意味はない。イズモという人間に意味があったわけではない。
——オレだってそうだろ。あいつが村の窓口として、都合がいいから利用しているだけだ。用がなくなれば切り捨てる。邪魔なら消す。
金(カネ)より重い命なんてない。これまでも、これからも。
「お待たせいたしました」
そのとき戸口からカリムが顔を覗かせ、イズモはびくりと体を震わせた。

「どうされました？」
「いや、なんでもない。それで要件なんだが――」
「立ち話もなんですから、お入りください。朝食も用意してあります」
「ん、ああ、助かる」
内心を悟られないよう笑顔を作り、中に入る。
家はいつもの祈祷師の棲家に戻っていた。臭いも痕跡も一掃され、何かがあったことさえ感じさせない。朝食を用意したのは、食べ物の匂いでごまかすためでもあるのだろうと、余計なことを考える。
「朝早くから突然押しかけた上、勝手に入って悪かった。以後気をつける」
「ご心配なく、普段ならもう起きているはずでした」
イズモに器を差し出しながら、カリムが答える。
そのことには触れてほしくなさそうな空気を感じ、イズモは口をつぐんだ。目の前の食事に集中しようと、匙を口に運ぶ。懐かしい味が今は鬱陶しかった。
イズモが二回目のおかわりを詰め込んだころ、カリムが切り出した。
「それで、ご用件とは？」
「ああ、そのことなんだけどな」
器を置き、居住まいを正す。

「用件は三つだ。ひとつ目は前々から頼まれていた魔術を見せる準備が整った。村の皆を集めてほしい」
カリム目が驚きに見開かれる。
「魔石が見つかったのですか？」
嘘ではない。それ以外に、ラティフが持ってきたものと、神域から持ち出したもの。
「子どもたちが見つけてきた石の中に、使えそうなものがあったんだ」
のがあるというだけだ。こんなことだから魔術師より詐欺師が向いていると言われてしまうのだろうが、今は考えないことにする。
「とうとう、イズモ様の魔術が見られるのですね」
カリムの嬉々とした笑顔に、後ろめたさが募る。
イズモが魔術を見せるのは、約束を守る以上に、男たちに自身の実力を知らしめる意図があった。ムグニのような反抗的な人間も、魔術の威力を見せつければ、少しは態度を改めるだろう。
「分かりました。アドルに聞いてみます」
「それにも許可がいるのか？　ちょっと人を集めて見せるだけなんだが」
「村の者たちに何かさせるときは、物事の大小にかかわらず、長の判断を仰がねばなりません。祈祷師にはなんの権限もないのです」

「それはなんというか、大変だな。お前もアドルも」
「それが長の役目ですから」カリムが苦笑する。「ご心配なさらずとも、よほどのことがない限り、アドルが拒むことはありません。イズモ様の魔術を見たいのはアドルも同じでしょう」
「それなら良かった」
ひとまずほっとする。魔石に関して根掘り葉掘り聞かれるのではと心配していたが、杞憂だったようだ。
「そういうわけで、これはお前にやる」
イズモは懐から紐のついた石を取り出した。円筒形の黒っぽい石に革紐を通しただけの簡素な首飾りだった。
「これは魔石ですか？」
「ああ。昨日、お前が見つけた原石を加工したんだ」
「でしたら、イズモ様がお使いください。そのために探したのです」
「必要な分は確保してある。それに、せっかくお前が見つけてくれたんだ。他のと一緒に使い捨てるなんてもったいないだろ。いわゆる『記念品』だ」
イズモが差し出すと、カリムはおずおずと受け取った。目の前にかざし、輝きに目を細めている。

「首飾りにできるように紐をつけたんだが、使い方は好きにしてくれ」
「では、お言葉に甘えて」
カリムは手を首の後ろに回し、紐を結ぼうとする。しかし、いつまで待っても結び終わらない。カリムの表情がだんだん曇ってくる。
「あー、よければオレがやろう」
カリムの返事を待たず、背後に回って紐の端を奪い取る。ほどけないよう、しっかりと結ぶ。
「ありがとうございます」
カリムは胸元で揺れる魔石を愛おしそうに撫でる。カリムの気持ちを反映するように、魔石がきらきらと光った。
「ふたつ目はこれだ」
鞄から黒光りする金属の塊を取り出す。
「……これは？」
「銃の魔術具だ。魔術を習っていたころ、練習の一環で作ったんだ」
威力は魔術とは比べ物にならないが、いざというときのために持ち歩いていたものだった。ただ、魔術具の要である祈りを込めた魔石には、ラティフと取りに行った魔石の中でも極上のものと交換してあった。



イズモが差し出すと、カリムは首をぶんぶんと横に振った。着火の魔術具の二の舞いを警戒しているらしい。
「弾は入っていないし、安全装置がかかっているから大丈夫だ」
イズモがそう言うと、カリムはこわごわと受け取った。
「魔術具ということは、魔術の才能がなくとも使える、ということですね？」
「ああ。本体に組み込んだ魔石にオレの銃撃の祈りが込めてある。銃把……握るところの下から適当な大きさの石を入れて、引き金を引けば石が飛び出す」
「いかにも、森の外の武器という感じですね」
カリムは銃をしげしげと触った後、イズモに返した。
「これをどうなさるのですか？」
「ラティフに贈ろうと考えている」
「ラティフに？」
「あいつにもう一度、狩りをさせてやりたいんだ。銃なら両手で支えて、引き金を引くだけだ。走り回らなくていいし、火薬式拳銃と違って反動がないから、握力もそこまで必要ない」
カリムは「なるほど」と言って、再び銃に目を落とした。「イズモ様はあの子のことを、ずっと気にかけてくださっていたのですね」

内面を押し隠し、イズモは照れくさそうに頬を掻いた。
実際のところ、銃は魔石を探してくれたことへの感謝と、口止め料を兼ねたものだった。ラティフが裏切るとは思えないが、後になって罪悪感が出てこないとも限らない。念には念を入れておきたかった。
「アドルは許すと思うか？」
「大丈夫だと思います。皆、口には出しませんが、ラティフのことを気にしていました。イズモ様から贈り物をされたとしても、妬む者はいないでしょうし、ラティフも見せびらかすことはないでしょう。本当のところは聞いてみないと分かりませんが、きっと大丈夫です」
イズモは再びほっと胸を撫でおろす。
「それで三つ目はなんでしょうか？」
「ちょっと大変だと思うんだが、オレに村の言葉を教えてほしいんだ」
カリムが今度はキョトンとした顔をする。
「それは構わないのですが、私の通訳では不都合がありましたか？」
「まさか、とても助かっている。ただ、この村に来て日がたつのに、まったく話せないのもどうかと思ってな。何かしてもらったのに、直接礼が言えないのは気まずいだろ」

村での交流において、最大の障害が言葉だった。

カリムに仕事を与えるという点ではいいのだろうが、ちょっとした質問さえ自分でできないのは不便だった。村に滞在する以上、言葉の習得は必須だった。

「なるほど、おっしゃる通りです。村の者たちも、イズモ様が村の言葉で返事をしてくれたら喜ぶでしょう」

何も知らないカリムは、顔を綻ばせるだけだった。

「言葉の練習には時間がかかると思いますので、先にアドルと話してきます。少々お待ちください」

「おいおい、外の人間を祈祷師の家にひとりにしていいのか」

イズモがそう言ったときには、すでにカリムは家を飛び出した後だった。

「オレを信用しすぎだろうが」

文句を言いつつ、冷めてしまったスープをすする。

家を調べる絶好の機会だが、今はそんな気分にはならなかった。いつ戻ってくるか分からないと慎重になる気持ちが半分、申し訳ないと思う気持ちが半分だった。

何度目かのおかわりを自分で注いでいると、カリムが戸口から飛び込むようにして戻ってきた。

息を切らせているが、顔には満面の笑みを湛えていた。
「ただいま戻りました」
「ずいぶん早かったな」
「アドルも私と同じ考えで、細々と説明する手間が省けました。場所の用意や人を集めるのもアドルがやってくれるそうです」
それはよかった。カリムに喜ぶ顔を見せる一方で、イズモは不安を覚えた。
魔術を見せることも、魔術具を与えることも、村には前例がないはずだ。それがこんな簡単に許可されていいのだろうか。
気にはなったが、考えたところで答えは出ない。計画通りに進むなら、それに越したことはないと思い直す。
「では、何から始めますか？」
カリムは炉のそばに腰を下ろすと、ワクワクした様子で尋ねてきた。さっそく言葉の練習に取り掛かるらしい。
「そうだな。じゃあ、『ありがとう』から教えてくれ」
「承知しました。では、私が発音しますので、続いて繰り返してください。いわゆる『リピートアフターミー』ですね」
カリムは咳払いをすると、重々しく告げる。

「ありがとう」「あるごたお」
イズモの発音に、カリムが難しい顔をする。自分ではそれらしく言えたつもりでも、母語話者からすると違うらしい。
カリムはゆっくりと、音節を区切るようにして発音する。
「ありがとう」「あるがたお」
「ありがとう」「あるがとお」
「ありがとう」「おおきに」
「イズモ様」カリムが肩を震わせながら、無理やり真面目な顔を作る。「発音が違うと、ニュアンスが変わってしまいますので、お気をつけください」
何が面白かったのか分からないまま、イズモは神妙な面持ちで頷いた。
しばらく続けていると、だんだんとコツが掴めてくる。
「ありがとう」「あるがとう」
「ありがとう」「ありがとう」
「今のとてもいいですね！」
カリムの顔がパッと明るくなる。
忘れないよう、すぐに何度も確認する。慣れてしまえば簡単だった。
イズモは咳払いをし、真っすぐカリムを見る。ついでに、カリムの手を取り、自

分の手を重ねる。

「カリム、ありがとう」

言った途端、カリムの顔がみるみる赤くなっていく。尻尾は激しくうねり、唇が震えている。しまいには顔を逸らし、俯いてしまった。

「お、おい。大丈夫か？　オレの発音が何かまずかったか？　お前を辱めるような意味になったとか？」

「い、いえ、完璧だと思います。他の者が聞いても違和感はないはずです」

「ありがとう」

「あ、あのイズモ様！」カリムは慌てたように言う。「次に行きましょう！　まだまだ覚える言葉はたくさんあります！」

「そうだな。じゃあ、次は――」

自分は何かまずいことを言っただろうか。

新たな言葉を練習しながら、イズモは不思議に思った。

2

イズモが魔術を見せる。

ラティフから話を聞いたとき、ムグニはひどく嫌な気分になった。狩りでもないのに魔術を見せるなど、力を誇示したがっているとしか思えなかったからだ。
イズモがカリムを救った英雄なのは誰もが認めるところだ。にもかかわらず、どうして村を騒がせることをするのか、ムグニには理解できなかった。
「ね、一緒に行こう」
「オレは行かない。行きたいんなら、ひとりで行けばいいだろ」
「せっかくの機会なのにもったいないよ」
「そもそもアドルがそんなことを許すはずがないだろ」
「そのアドルから、皆に伝えろ、って言われたんだよ」
ラティフが「その」の部分を強調して言う。
ムグニの気分は一段と落ち込む。アドルはカリムの味方で、カリムはイズモの味方だ。イズモはそれを利用して、何か企んでいるのではないか。
昨日、バーリを相手に、いささか卑怯な手を使ったとはいえ、勝利した時は正直驚いたし、少し見直しもした。その次の日に、これだ。評価をあらためた自分が馬鹿らしかった。
「魔術には魔石が必要なんだよな？　昨日は全然見つからなくて文句を言ってたくせに、見せびらかすために使っていいのかよ。たしか、かなりの量がいるんじゃな

かったか？」
「イズモがいいって言ってるんだから、いいんじゃない。きっと誰かがいっぱい見つけてきたんだよ」
ラティフは素っ気なく言う。
おや、とムグニは思った。一昨日は魔石探しで日が暮れるまで帰ってこなかったのに、誰かに先を越されて悔しくないのだろうか。
――昨日から、なんか変なんだよな。
ラティフはイズモに心酔している。命の恩人というだけでなく、魔狼と渡り合った実力に魅せられている。十年以上も相方をしていれば、それくらい分かる。
そのため、ムグニはラティフを無理に止めることはせず、昨日もラティフが魔石探しで貢献できるよう、裏方に徹したのだ。
しかし、昨日のラティフは目に見えて集中力を欠いていた。同じ石を何度も確認したり、明らかに魔石だと分かるものを捨てたり。そのくせ、イズモのことをずっと気にしていた。
そして今日、自分以外の誰かが無駄遣いできるくらいの魔石を見つけたというのに、平然としている。
「お前、何か隠してないか？」

「何かって、何を？」

「俺に言えない何かだよ。昨日から、なんか変だぞ」

「そんなの言いがかりだよ」ラティフはムグニを見ないまま答える。「イズモを認めるのが悔しいからって、話をすり替えるのは恥ずかしくない？」

　さすがに、カチンとくる。

「お前、喧嘩売ってんのか！」

　ラティフの肩を掴もうとして、空を切る。

　しゃがんで死角に入ったのだと理解するの同時に、下からの蹴りを察知。とっさに顎（あご）を上げ、上体を逸らす。

　目の前をラティフの右足が通過。即座に引き戻され、次の蹴りが放たれる。

　ムグニはそのまま後ろに倒れ、両手を地面について後方回転。蹴り上げる足で追撃を牽制しつつ、足を折り曲げて着地。

　飛びかかろうと顔を上げた瞬間、顔に粉状のものをぶつけられる。

　――砂か！

　体に衝撃。なすすべもなく押し倒される。起き上がろうとして、腹と肩にかかる重さに防がれる。見なくても、ラティフが馬乗りになり、肩に体重をかけているのが分かった。

「今夜は僕が上だね」
ラティフの勝ち誇った声が降ってくる。
「目潰しなんて卑怯だぞ！」
目の違和感に涙をあふれさせながら、ムグニが叫ぶ。
「卑怯でもなんでもいい。僕はもう、手段を選ばない」
呪詛のような言葉が顔に吹きかかる。
ようやく目を開くと、ラティフの顔がすぐそばにあった。静かな琥珀色の瞳がムグニを覗き込んでいる。
ムグニはラティフの顔が好きだった。端正な中にも荒々しさを感じさせる顔立ちが。柔らかな物腰とは裏腹に、獣のような凶暴さを秘めた目が。
しかし、今のラティフの顔は、ムグニの知っているどの顔とも違っていた。
「お前、何があったんだ？」
声がかすれているのが分かった。口がカラカラに乾いていた。
「俺の知らないところで、あいつと何を――」
続く言葉は、押しつけられたラティフの唇の中に消えていった。舌にドロドロとしたものが絡みついてくる。屈辱的な状況にもかかわらず、下腹部に血が集まっていく。ラティフの手が、いきり立ったムグニ自身に触れる。その存在を確かめるよ

うに愛撫する。触れ合った唇の隙間から、熱い息が漏れる。
「僕の相方はムグニだけだ。続きは夜にして、そろそろ行こう」
口を離したラティフが、言い含めるように言った。
――本当に、何があったんだ？
支度をする相方に無言で問いかけた。
ラティフは、相方にムグニは自分にも言えない秘密を抱えている。それが何か想像もつかないが、好ましいこととは思えなかった。
――俺はどうすればいい？　どうしたら、こいつを守れる？
答えはなく、ムグニはついていくことしかできなかった。

イズモが魔術を見せる場所は、村を出てすぐの森の中だった。
ムグニとラティフが着いたときには、すでに大勢の男たちが集まっていた。イズモの魔術について、あれこれ話している。
「ほとんど全員じゃないのか？」
「みんな、イズモの魔術が気になるんだよ」
ラティフの勝ち誇った顔に苛立ちが募る。
すでにイズモも来ているようだが、ふたりの身長では男たちの広い背中と好奇心

に揺れる尻尾しか見えなかった。
人混みを押し分け、前へと出る。
人垣の最前列では、カリムを前に、子どもたちが行儀よく並んでいた。彼らのために席が用意されていたらしい。
「危ないから、足元の線より前に出ないでくださいね」
カリムが年少の子どもたちに言い聞かせる。胸元で、昨日はなかったはずの首飾りが揺れていた。
「どうして危ないの？」
「誰かが槍や弓を構えているときは、前を横切ったり近づいたりしてはならないと教わったでしょう？　それと同じことです」
「でも、イズモはあんなところにいるよ」
ひとりが離れたところにいるイズモを指差す。イズモは、ムグニがいる場所から村の広場の半分ほど離れたところで、何か作業をしていた。
「魔術はそれほど危険だということです」
子どもたちは不服そうだったが、当然の措置だと思った。
ムグニは魔狼の体を回収した際に、魔術の痕跡を見ていた。地面に空いた大きな穴、幹を穿たれ折れた木々、焼け焦げた森、炭になった兎や穴熊の死骸。災害とし

か思えない徹底的に破壊された光景。
　アドルが村の広場を選ばなかったのも納得だった。
「そういや、アドルは来てないのか？」
「ほら、あそこにいるよ」ラティフが森の奥を指差す。
　アドルは、男たちからもイズモからも離れたところに、ひとりで立っていた。
　魔術の見物というにはやや遠く、周囲に鋭い視線を走らせている。どうやら見張りをしているらしい。
　よく見ると、他にも数人、槍を手にした男たちが警備にあたっていた。自分にも声をかけてくれればいいのにと不満に思ったが、それだとラティフを守れないなと思い直す。
「アドルがここにいるってことは、バーリは留守番か」
「仕方ないよ。バーリは一回見てるし。……あ、イズモが気づいた。おーい！」
　イズモがラティフを見つけ、手を振っていた。
　ラティフも嬉しそうに手を振り返す。
　――なんだよ、それ。
　昨日感じていたイズモとラティフを隔てる壁が、完全になくなっていた。消えてなくなったというより、ラティフが壁の向こう側へ行き、ムグニが取り残された印

象だった。やはり、何かあったらしい。
　イズモがカリムを呼び、カリムが走っていく。
「あの鼠野郎、神の使いを顎で使いやがって」
　後ろの方でボソリと呟く声が聞こえ、ムグニは思わず耳をそばだてた。
「何から何までやらせて、神にでもなったつもりか」
「イズモさんには命を助けられてるんだし、仕方ないっすよ」
　不満を隠そうともしない年上の声と、それをなだめる若い声だ。魔術に期待するざわめきの中で、ヒソヒソと話す声は逆に耳についた。幸い、ラティフは気づいていないようだ。
「それにしたって限度があるだろう。毎日、飯を作らせて、どこへ行くにも同行させる。アドルは何を考えているんだ」
「カリムが自分からやってるんでしょ。アドルは許可してるだけで」
「本人の意志より身の安全が大事に決まっている。あんな胡散臭い鼠をうろちょろさせるなんて、もってのほかだ。そもそもアドルは一度、禁忌を犯している。あんなやつを長に選ぶなんて、バーリもバーリだ」
「もうやめましょ。皆、聞いてるっすよ」
　そこで声は途切れた。

ムグニはカリムに目を向けた。イズモと話すカリムは心から楽しそうだった。ムグニが覚えている限り、あんな笑顔を見たのはこれが初めてだ。

「それでは始めます」

イズモと話していたカリムが、男たちに向かって言う。

「これからイズモ様が魔術を見せます。危険なので決して前に出ないように」

カリムが説明している間に、イズモは森の奥へと歩いていく。

一本の木の前まで行くと、懐から光る何かを取り出した。刃物のような形をしていたが、細身で全体に細かな模様が刻まれていた。それで、木の幹に大きくバツ印を付けた。

「私のいる位置から、魔術であの印を付けた木を倒します」

「かなり距離があるぞ」「あんなの弓でも届かないだろう」「木を倒すって、どういうことだ？」

男たちがどよめく。ラティフだけは、男たちの信じられないといった空気を楽しんでいるようだった。

「イズモ様が持っているのは、魔術銃という魔術を使うための道具です」

イズモは皆に見えるように、杖のようなものを掲げる。ごちゃごちゃとした装飾の奇妙な形の武器だった。持ち歩いているところは何度も見たが、どう使うのか想

像もできない。
イズモは印をつけた木に向き直ると、銃の片方の端を右の肩に当て、反対の端を木に向けた。銃身に頬を寄せ、先端を覗き込むようにする。体はやや前傾。背筋は曲がっている。槍の構えとも、弓の構えとも、まったく似ていない。
端的に言えば、不格好だった。お世辞にも、これから未知なる力を使うようには見えない。そう感じたのはムグニだけではなかったらしく、周りで押し殺した笑いが聞こえる。
——本当にすごいのかよ。
そう思った直後、空気が軋んだ。
息が詰まるような圧迫感。バーリやアドルといった、歴戦の勇士だけが持ちうる気迫。貧相に感じたイズモの背中が、数倍に膨れ上がったように感じた。
騒いでいた子どもたちや、笑っていた大人たちが表情を凍らせる。
しかし、ラティフだけは目を輝かせていた。口元には微笑みを浮かべ、イズモを食い入るように見ている。息もできない緊張感を楽しんでいるようだった。
緊張の糸が弾ける寸前、イズモが銃を下ろした。
張り詰めていた空気が風に吹かれるように消え、ムグニはいつの間にか止めていた息を吐いた。

「魔術は、使ってない、んだよな？」
見たところ、木に変化はない。魔術が不発に終わったのだろうか。イズモの発する雰囲気が本物だっただけに、男たちも戸惑ったように疑問を口にしている。しかし、イズモは森の奥の睨んだまま、動く気配がない。
「何かあったのか？」
さすがに異常を感じ、ラティフに声をかける。しかし、ラティフもイズモと同じように遠くを見ていた。
「おい、お前までどうしたんだ」
「何か来る」
ラティフの呟きに眉をひそめたとき、地面が揺れているのに気づいた。揺れはすぐに地響きとなり、男たちも異常事態に気づく。
そのとき、木々の奥に動くものが見えた。
黒く短い毛に覆われた胴体、ほっそりとした六本の足。全体としては鹿に似ているが頭はなく、首の断面から無数の角が樹冠のように生えていた。それが森の奥から次々と姿を現し、こちらへ向かってくる。
「千手鹿（せんじゅろく）!?」誰かが叫ぶ。
千手鹿は鹿の魔獣だ。角に見えるのは実は触手で、高い枝の柔らかな葉や木の実

を巻き取り、触手の付け根にある口で食べる。性質は温和で臆病。数十頭の群れを作って行動し、人間の気配を察するとすぐに逃げてしまう。

――それがなんで、こっちに向かってくるんだ⁉

何かに追われているようには見えないが、脇目も振らずに突っ込んでくる。いくらおとなしいといっても、体高は大猪口よりも高く、体重は人間の数十倍はある。脚に巻き込まれ、蹴られたり踏まれたりすれば命に関わる。巨大な魔獣の群れが、無数の触手をうねらせて迫ってくる光景は、悪夢としか思えなかった。

「子どもたちを連れて村に走れ！　手の空いている者は前へ！　壁を作れ！」

アドルの怒号で、男たちが弾かれたように動き出す。

近くにいた大人たちが怯える子どもを両脇に抱え、一目散に逃げる。残った男たちは槍を構え、時間を稼ぐための壁を作る。

ムグニも近くにいた子どもを抱き上げる。異様な軽さに、手元を見る。たくましさより、かわいらしさが勝る顔立ち。最近、村に来たムフィだった。まだまだ幼い少年は、大きな目を涙でうるませていた。

「ぼく、死んじゃうの？」

「馬鹿。俺たちが死んでも守ってやる」

ムグニは震える少年に笑いかけ、頭を撫でてやる。顔に傷のある男が笑っても怖

いだけだろうが、少年は安心したように頷いた。
「ラティフ、行くぞ」
相方に声をかけるが、返事がない。見ると、見慣れた後ろ姿が、壁を作る男たちの列に加わろうとしていた。思わず舌打ちする。
「くそっ。悪い、この子を頼む」
ムグニは近くにいた男に少年を託し、苦い気持ちでラティフの元に走った。槍を構え、隊列に加わる。
「行ってくれてよかったのに」ラティフはムグニを見ないまま言う。
「お前を置いていけるかよ。あのときとは違うんだ」
笑うムグニに、ラティフは一瞬、悲しそうな目をしたが、それ以上は何も言わなかった。
「カリム！　下がれ！」アドルが叫ぶ。
見ると、カリムはイズモのそばで立ち尽くしていた。イズモもカリムに何か言っているようだが、逃げるどころか、魔獣の群れにも気づいていないように、ただ呆然と明後日の方向を見つめている。
——どいつもこいつも！
ムグニが飛び出そうとしたとき、ドン、という腹に響く轟音が鳴った。逃げてい

た男たちも、何事かと振り返る。
　イズモの魔術だった。音とほぼ同時に、イズモが印を付けた木の、さらに奥にある木の幹が爆ぜる。イズモは次々と撃ち、使い終わった魔石が銃から飛び出す。男たちは逃げることも忘れ、イズモの魔術に目を見張っている。
　しかし、魔術は魔獣の手前の木に当たるばかりで、魔獣の群れは怯むことなく突き進んでくる。
「なんだよ、全部外してるじゃないか！」
　ムグニが文句を言ったとき、耳を聾（ろう）するような破砕音。幹を穿たれた木が傾いていく。倒れた木々に行く手を阻まれ、魔獣たちは驚いたように触手を震わせ、横へと跳ねる。先頭が向きを変えると、後続もそれにならう。魔獣の群れはムグニたちから離れた方へと走り去っていく。
　男たちが歓声を上げる。
「すごい。群れの向きを変えたんだ」ラティフが感心したように呟く。
　ムグニも、イズモの機転と実力には、納得せざるを得なかった。
　数十という魔獣の群れを、一匹一匹撃っていては間に合わないし、撃ち漏らすおそれがある。イズモは魔獣の進路そのものを変えることで、魔石の消費を抑えつつ確実に対処できる方法を選んだ。

もっとも、言うは易し行うは難しだ。木が倒れる方向と時間を考え、瞬時に、正確に、必要な数の木を撃たなければならない。魔術の威力もさることながら、尋常ではない射撃の精度だった。

「あいつ、やっぱりすごいんだな」

「そうだよ。ようやく信じる気になった？」

ムグニの呟きを聞きつけ、ラティフが笑う。まるで自分のことのように嬉しそうだった。腹立たしく思いながらも、ムグニは頷いた。自分の感情と相手の評価は分けて考えなければならない。

――ラティフが憧れるのも無理ないか。

そう思ったとき、新たな影が飛び出してきた。

千手鹿が二頭。だが、先ほどの群れの個体より一回り大きい。足だけでもバーリより高く、頭ははるか上にある。大木が意思を持ち、動き出したような圧迫感。倒れた木を軽々と跳び越し、一直線にこちらに向かってくる。

「足を止めるな！　村に急げ！」

アドルが怒鳴り、男たちが再び逃げ出す。

イズモが、今度は魔獣を狙って撃つ。しかし、魔獣は左右に飛び跳ねるように動き、魔術は背後にあった木を穿つだけ。

イズモが連射。右側の一頭に着弾。首の付け根が爆ぜ、触手の付いた首が血を撒き散らしながら宙を舞う。残った胴体が前のめりに倒れ、沈黙。しかし、もう一頭がイズモの横を抜ける。

イズモは銃を下ろし、苦い顔で走り出す。

位置的にムグニたちを巻き込んでしまうと判断したのだろう。しかし、イズモの足では間に合わない。

「散開！　投擲準備！」アドルが再び指示を出す。

男たちが鹿を囲むように散る。ムグニもそれに続き、槍を投げる体勢に入る。離れたところに、ラティィフが構えているのが見えた。

「放て！」

号令とともに投げる。数十の槍が空気を切り裂くように飛翔。魔獣の体に次々と突き刺さり、鮮血が跳ねる。

体を貫く痛みに巨体が震える。だが、魔獣は傾きかける体を持ち直し、方向を変えつつも前進を続ける。

「道を開けろ！　追撃はするな！」

魔獣の進行方向にいた男たちが転がるように道を開ける。しかし、ひとりが逃げ遅れる。小柄な少年は、迫ってくる巨体を呆然と見上げていた。

――ラティフ。

ムグニは走り出していた。

大人たちが何か言っている気がしたが無視する。

間に合うかどうかも、魔獣のことも頭になかった。

ラティフの体に魔獣の影が落ちる。

――させるか！

ほとんどぶつかるようにしてラティフの体を突き飛ばす。

「ムグニ！」我に返ったラティフが叫ぶ。

顔を上げると、目の前に魔獣の蹄があった。

反射的に目を閉じる。

体が揺れる。

地響き。

大木が倒れるような音が耳を震わせる。

しかし、いつまでたっても痛みがやってこない。何か温かいものに包まれている感覚があるだけだ。

おそるおそる目を開ける。

目の前に千手鹿が倒れていた。

　首から生えた触手が、痛みに悶えるようにのたうち回り、何本かの触手の先に付いた血走った眼球が、周囲に憎悪の視線を投げる。触手の奥の、尖った歯の並ぶ丸い口からは、泡がこぼれていた。

　魔獣は立ち上がろうともがいていたが、奇妙なことに前脚の大部分が切り落とされたようになくなっていた。周りには前脚の残骸と思しき肉片が転がっており、流れ出した血が地面を赤く染めている。

「けがはないか？」

　頭上から低い声が降ってくる。顔を上げると、黒虎のいかめしい顔があった。魔獣に踏みつけられる寸前で助けられたのだと気づいた。

　ムグニがおずおずと頷くと、アドルはムグニを地面に下ろした。

「ムグニ！」

ラティフがしがみついてくる。支えきれず、押し倒される。

「おい、危ないだろ！」

「無事で良かった」

湿った声に、引き剥がそうとした手が止まる。ラティフはムグニの胸に顔を埋めたまま、体を震わせていた。

　ムグニはふっと力を抜くと、ラティフの背中を撫でた。

そうこうする内に大人たちが集まってきた。注がれる視線に恥ずかしくなり、ラティフを無理やり引き剥がす。
「ラティフ！　ムグニ！」
遅れてイズモとカリムがやってきた。イズモはふたりの顔を見ると、ほっとしたように表情を和らげた。
イズモが何か言おうとして、魔獣の様子に気づく。イズモは難しい顔で魔獣を眺めていたが、ムグニには分からない言葉で、カリムに何か言った。
「イズモ様が、アドルが魔獣に何をしたのか、と尋ねています」
「答える義理はない」
アドルは素っ気なく言うと、近くに落ちていた槍を拾った。全員が見守る中、魔獣の腹に突き立て、ねじ込む。
魔獣は大きく体を震わせると頭を落とし、動かなくなった。触手も力をなくしたように垂れ、目から光が消える。
「ここで解体する。村に戻り、準備しろ」
アドルはそう言うと村へと歩き出した。
ムグニも続こうとして、ふと足を止めた。ラティフが魔獣を見つめたまま、動こうとしなかった。

「おい、ラティフ。行くぞ」
　声をかけても、ラティフはその場から動こうとしない。
「どうしたんだよ」
「槍が、届かなかった」ラティフがポツリと言う。
　アドルは魔獣にとどめを刺すとき、近くに落ちていた槍を使った。あれはラティフが投げそこなったものだったらしい。
「仕方ないだろ。お前、握力がほとんどないんだから」
「でも、あのときはできたんだ」
　ラティフは悄然（しょうぜん）として、自分の手に目を落とした。あのときとは、魔狼に襲われた際、槍を投げてイズモを救った件のことだろう。
　ラティフはその体験が忘れられず、再び実行した。結果、失敗し、以前にも増して無力さに打ちのめされた。あまりにも哀れだった。
「いいかげん目を覚ませ。お前に魔術は使えない」
「そんなことない。僕は本当に投げたんだ」
「んなこと言ったって――」
「私は信じます」
　ふたりが振り返ると、カリムの穏やかな顔があった。いつの間にか話を聞いてい

たらしい。
「イズモ様がおっしゃっていました。ラティフが助けてくれなければ、今ごろ、魔狼の腹の中だったと」
「だったら、なんで今回はできなかったんだよ」
「祈りが変わってしまったからです。一度目の経験が邪魔をして、二度目以降できなくなるのは、魔術ではよくあることだそうです」
「僕はもう、魔術が使えないってこと？」ラティフが顔を歪める。
「分かりません。ですが気を落とさないでください。イズモ様がラティフに渡したいものがあるそうです」
　カリムがイズモに目配せすると、イズモは懐から何かを出した。イズモの持っている銃を小さくしたような、手のひらほどの黒い塊だった。
　イズモは咳払いをすると、それをラティフに差し出した。
「これ、あげる」
　イズモの言葉にラティフが目を見開く。イズモが村に来て数日、ようやく言葉を覚える気になったらしい。
「これ、銃。私、作る。ラティフ、あげる」
　たどたどしく、意味も微妙に通じないが、言いたいことは分かった。しかし、ラ

ティフの表情は晴れない。
「嬉しいけど、僕は魔術が使えないから」
「これ、いらない、魔術」
イズモはラティフの手を取ると、手に銃を握らせた。ラティフはまだ信じきれない様子で、銃を見つめている。
「どうやって、使う？」
ラティフもイズモに合わせて言葉を短く区切り、ゆっくりと話す。
イズモはラティフの背中に回り込むと、ラティフの手に自分の手を重ね、銃を構えさせた。イズモは背伸びをして、ラティフの肩越しに前を見る。
「狙う」
イズモはラティフの腕を動かし、銃口を近くの木の幹に向ける。
「撃つ」
イズモはラティフの右手の人差指を銃の中央にある輪の中に入れ、引き金を引かせる。
タンッ、と何かが爆ぜる音がして、木の幹に穴が空く。
「当たり」イズモがラティフの後ろで微笑む。
ラティフは手にした銃と、幹の銃痕を交互に見る。自分の行為と結果がうまく結

びつかないらしい。横で見ていたムグニも、あまりのあっけなさに驚いていた。
「ラティフ。撃つ。ひとり」
イズモはラティフから離れ、そばに立つ。
「狙う」
ラティフは先ほどと木に狙いを定める。
「撃つ」
引き金に指をかけ、引く。
また音がして、先ほど撃った場所の近くに穴が開く。爆ぜるような音は弾が木に食い込む音だったらしい。
ラティフの顔が喜びに輝く。
「ムグニ、見た⁉」ラティフが興奮した顔で振り向く。
その拍子に銃口がムグニに向いた。人差し指は引き金にかかったままだ。ラティフの指に、おそらく本人も意識しないうちに、力が込められるのが見えた。
世界から音が消え、目に映るすべての動きがゆっくりになる。
ムグニの視界の端でイズモが動く。イズモは銃口を左手の手のひらで覆い、そのまま銃身を掴んで上に向ける。
銃口を塞いだ手の甲から、赤い飛沫が吹き出す。

イズモが右足でラティフの足を払う。ラティフがバランスを崩し、銃が手から離れる。倒れたラティフにイズモが馬乗りになる。
そこで音が戻り、世界が元の速さで動き出した。
「イズモ様!?」カリムが慌てて駆け寄る。
手当てをしようとするカリムに、イズモは首を横に振って何か言うと、ラティフに視線を戻した。
「銃。危険。人。向ける。駄目。絶対」
低い声で言うイズモの目は、普段とは別人のように鋭かった。手の甲から流れる血が、銃を伝って地面に染みを作る。
「ご、ごめんなさい」ラティフが顔を蒼白にして謝る。
イズモは立ち上がると、懐から魔術符を取り出し、左手に貼り付けた。血はすぐに止まり、傷痕すら残らなかった。
「ラティフ、練習。イズモ、見る」
イズモが倒れたままのラティフに手を差し伸べる。
ラティフは滲んだ涙を拭い、イズモの手を掴んだ。
「あんなものを勝手に渡していいのかよ」

ラティフが銃の練習をする傍らで、ムグニはカリムに尋ねた。
「引き金を引くだけで手を撃ち抜けるなんて、危ないだろ」
「許可はもらっています。ただ、威力については、私も今知りましたが」
「適当すぎる」
今になって、全身から汗が吹き出す。一歩間違えれば、自分は死んでいたかもしれない。槍や弓よりはるかに簡単に命を奪えるものが、あんなに簡単に使えるとは思わなかった。
「ムグニの言いたいことは分かります。しかし、ラティフのあの顔を見たら、取り上げるわけにもいかないでしょう」
カリムの視線の先には、銃を構えるラティフの姿があった。
イズモの説明を聞き、的を狙うラティフの眼差しは怖いほど真剣だった。誰よりも貪欲に闘争を求める、在りし日のラティフの顔だ。
「そのうち、狩りに連れて行けって言うんだろうな」
「ムグニも望んでいたのではないですか？」
「それは、そうだけどさ」ムグニは言葉を濁す。
ラティフと狩りができる。嬉しくないわけがない。しかし、叶うはずがないと諦めていた願いがこうもあっけなく実現することに、ムグニは漠然とした不安を感じ

ていた。
　ラティフは何かを隠している。それには間違いなくイズモが関わっている。イズモがラティフに銃を与えたのは、本当にただの善意だろうか。何かの布石だと思うのは考えすぎだろうか。
　イズモはラティフを捨て駒にする気ではないだろうか。
　根拠はない。杞憂かもしれない。それでも、胸騒ぎは収まらない。
「ラティフが危険な目に遭わないか、心配なのですね」
　ムグニの表情をどう解釈したのか、カリムはそんなことを言った。
「そんなことなら、さっきみたいに盾になればいい。あいつは俺のために狩りを捨てたんだ。俺は死んだって構わない」
　だが、それで済むのだろうか。奇跡には代償が伴う。ラティフが再び狩りをするために差し出したものは、自分の命で釣り合うものなのだろうか。
「ムグニ。少し話をしても、よろしいですか」
「なんだよ、改まって」
「君は、ラティフにならなくていいのだよ」
　突然の低い声に虚をつかれ、カリムを見る。赤い瞳がムグニを見つめていた。
「〈風〉って、儀式でもないのに勝手に降りてきていいのかよ」

「今回はカリムの許可をもらってるよ」カリムが、カリムではない声と顔でクスクス笑う。「君と話せる機会は、おそらくこれが最後だ。後悔してほしくなかった」
　言い方に含みを感じたが、気づかなかったことにする。
「それで、俺に用ってなんだ」
「君が歌と顔を捨て、血なまぐさい狩りの世界に身を投じたことを、我々は尊敬している」「だけど、君がいかに努力しようと、君は君以外のものにはなれない」
「……何が言いたいんだよ」
「君は君の人生を歩まなくてはならない」「君はラティフじゃないし、ラティフも君じゃない」「彼の人生の責任を君が取ることはできないし、彼が失った時間は誰にも取り戻せない」
「そんなの分かってる。でも、俺はそうするしかなかったんだ。それとも、あいつのことは放っておいて、好きに生きればよかったっていうのか？」
「まさかまさか。君の決断は我々にも予測できなかった。祈りこそが、人間に残された可能性であり希望だ」〈風〉が大仰に言う。「それはそれとして、君たちは相方だ。話し合って、衝突して、それでも信じあう」「彼が何か秘密を抱えているとして、揺らぐ間柄でもなかろう」
　ハッとして、顔をあげる。

「お前は知ってるのか？　ラティフは何を隠している？」
「ラティフは何か隠し事をしているのですか？」
カリムが不思議そうな顔でムグニを見る。目はいつもの薄青に戻っていた。
ムグニは盛大にため息を吐き、「なんでもない」と雑にごまかす。
「都合が悪くなったら逃げる。だから〈風〉は嫌いなんだ」
「そう言わないでください。彼らはあなたに期待しているのです。私やアドルと同じように」
「思ってるんなら言えばいいだろ」
「……すべて話せたら、どれほど楽だったでしょうか」
どういう意味か尋ねようとしたとき、森に大声が響いた。
「お前たち、ずっとそこにいたのか！　魔獣を捌(さば)くから手伝ってくれ！」
見ると、バーリと男たちが道具を持ってやってくるところだった。
ラティフがイズモに礼を言って、銃を腰の物入れにしまう。その顔はかつてないほどに輝いていた。
ムグニは、もう一度だけ、ラティフに尋ねてみようと思った。
後悔していないか、と。
ごまかすなら、もう干渉しない。

後悔しているなら、一緒に謝る。
後悔していないなら、信じる。
——そうだ、それでいい。
自分はラティフにはなれない。でも、ラティフの味方にはなれる。
それは絶対に変わらない。
たとえ、何があっても。

ラティフに銃の扱いを一通り教え終わったとき、バーリが男たちを連れて戻ってきた。バーリが指示を出し、二頭の千手鹿が手際よく捌かれていく。今回もイズモとカリムは邪魔なだけなので、見学に徹していた。
男たちに混じって、ラティフとムグニも作業をしていた。ラティフと話しながら作業をするムグニの顔からは、これまで感じていた険が嘘のように消えていた。
魔獣を撃退したことで警戒感が解けたのだろうか。予想外の事態だったが、計画がうまくいっていることに、イズモはほくそ笑む。
「イズモ様。手のけがは、もう大丈夫なのですか？」
「ああ、骨は無事だったし、弾も抜けたから安い魔術符で済んだ」
イズモは手をひらひらさせて見せる。

「つかぬことをお聞きするのですが、先ほど、イズモ様はわざとけがをなされたのですか？」

「よく分かったな」イズモが苦笑する。「あれは教育の一環だ。銃がいかに危険か口で説明するより、自分のせいで傷ついた人間を見るのが一番効く」

イズモも初めて銃を手にしたとき、師匠に「ワシを撃ってみろ」と言われた。日頃の鬱憤もあって、躊躇うことなく弾倉が空になるまで連射したが、いくら恨んでいても人が血を流す光景は気分のいいものではなかった。

あの様子なら、ラティフも銃を慎重に扱うだろう。

「いわゆる『失敗は成功の母』ですね。しかし、そのためにご自身の手を撃ち抜かせるとは、感服いたしました」

「魔術符のおかげで、即死と毒以外はなんとかなるからな。それに心の痛みに比べれば、肉体の痛みはまだマシだ」

カリムはしばらくイズモを見つめていたが、小さく「そうですね」と同意した。

魔獣を解体していたひとりが何かに気づき、周りに声をかける。男たちが見守る中、腹から黒い塊を取り出す。

それは千手鹿の胎児だった。大きさは仔牛ほどで、触手や体毛、蹄など生きるために必要なものは揃っていた。母親が殺されていなければ、近いうちに生まれてい

たに違いない。
　男たちは柔らかい肉に喜んでいたが、カリムはそっと目を伏せた。
「それにしても、千手鹿が突っ込んでくるなんて、とんだ災難だったな。お前も驚いただろ」
　イズモは意識して大きな声を出し、カリムに話を振る。
「今回はなんとかなったが、オレが逃げろって言ったら、ちゃんと逃げろよ。アドルも何か叫んでただろ」
「申し訳ありません。あまりの恐ろしさに、体が動かなかったのです」
「ああ、〈魔獣酔い〉か」
　〈魔獣酔い〉は魔獣を見たときに発生する精神的および身体的不調の一種だ。
　主な症状は対象から目が離せなくなるというものだが、他にも心拍数の上昇、発汗、呼吸困難、判断力の低下などが挙げられる。一般人はもとより、魔獣に慣れていない魔術師が、動けないまま殺される場面を何度も見てきた。
「原因は諸説あるが、あの非常識な外見のせいで現実感を失ってしまうからって説が有力だ。千手鹿の群れなんか最悪中の最悪だな」
　しかし、カリムは首を横に振る。
「そうではありません。とても大きく恐ろしい声が、ずっと聞こえていたのです」

「オレは何も聞こえなかったが、〈風〉の声か？」
「違うと思います。〈風〉は意味の分からないことをよく言いますが、それでも言葉として認識できます。しかし、今回は感情を無理やり声に置き換えたような音の連なりでした」
カリムにしか聞こえない、声とも言えない音。考えているうちに、ひとつの可能性にたどり着く。
「ちょっと、試したいことがある。何か聞こえたら教えてくれ」
イズモはそう言うと、術式機構に触れ、祈る。
「あっ、何か聞こえました」
「マジか……。お前が聞いたのは祈りそのものだ」
カリムが「聞いた」と感じたのは、魔力と結びつく前の祈りだった。
普通の魔術師でも、慣れれば他人の魔術を発動前に察知できる。しかし、それは祈りが魔力と結びつき、物理法則を書き換える際の気配を読み取るもので、祈りそれ自体を認識できるわけではない。
それが知覚できるとなると、カリムは魔術の才能があるというより、特異体質と呼ぶべきだろう。魔術の研究者が喉から手が出るほど欲しがる人材だ。
「だとすると、イズモ様以外の誰かが魔術を使った、ということですか？」

「そうだ。状況を考えると、誰かが魔術を使って千手鹿をけしかけたんだろう。それなら、温厚なあいつらが突っ込んで来たのも納得できる」

イズモの脳裏にある考えが閃く。イズモの中で違和感がつながっていく。

「そうか、魔獣使いだ。魔獣を使えば、大量の食料を運ぶことができる」

魔術で獣や魔獣を操る魔術師のことを、俗に魔獣使いと呼ぶ。使役の難しさはあるものの、魔獣固有の力を行使できるため、応用の幅は極めて広い。大魔獣を作り出したグレアドラスも、魔獣使いだったという。

「……イズモ様は以前、魔術は魔獣が使う術だとおっしゃられていましたが、魔獣を操る魔術を、魔獣が使うことはありますか？」

「もちろんだ。高位の魔獣が、格下の魔獣を手下にするのは珍しくない」

過去には、それを人間に応用する研究も行われていたという。しかし、人間の精神は複雑かつ繊細で、下手に干渉すると簡単に壊れてしまう。研究していた人間も精神に異常をきたして自殺しており、今では誰も関わりたがらない。

「ユピトガが魔獣使いだったとして、一度に数十頭の魔獣を操るなんて一級から特級レベルだぞ」

念のため手帳を見直す。四級。魔術師としては中程度で、警備会社勤務にしては心細い。イズモなら苦もない相手で、だからこそ気軽に引き受けたのだが。

――もしかして、オレもガラントも根本的な部分で勘違いしてるんじゃないか？
ふと、カリムが何か言いたそうにイズモを見ていることに気づいた。
「どうした？」
「……今回の一連の出来事は、本当にその方が起こしたのでしょうか」
「正直、オレも同じ気持ちだ」イズモは手帳を閉じ、首をひねる。「だが、他に誰ができ――」
言いかけて、ある可能性に思い至る。
――まさか、問題は子どもの方なのか？
イズモはユピトガが問題を起こし、子どもたちは連れ回されているだけだと思っていた。だが、事実は逆だとしたら？　息子たちが魔獣使いだったとしたら？
王都で事件を起こしたのは、本当はふたりの息子だった。ユピトガは彼らを匿うために逃げた。人目を避けるうちに、この森に迷い込んでしまった。
なんとか村を見つけるが、子どもたちの空腹が祈りとなって魔獣を操り、倉庫を壊してしまった。通報や敵対を恐れ、ユピトガはやむなく食料を持ち去った。
そして今日、村の近くで男たちが集まっているのを目撃し、自分たちを捕まえに来たと思った。子どもたちの恐れが祈りとなり、鹿の魔獣をけしかけた。
――一応、筋は通るが……。

どうにも釈然としない。ただの会社員の子どもが、実は高位の魔術師だったという漫画のような展開は、現実に起こりうるものだろうか。
もっとも、アドルやカリムといった超常の存在が目の前にいる以上、今さらという気がしないでもない。それに、魔石をどうするかのほうが、よほど重要だった。
「さあな。オレに言えるのは、今回の件が人為的だった可能性が高いってことだ」
「ならば、恐ろしいことです」
カリムがイズモを見る。血のように赤い瞳がイズモを見据える。
「かの者は、我々をひどく恨んでいます。何千、何万回と殺しても、殺し足りないほどに」
カリムの声には、人間らしい感情が微塵も感じられなかった。

3

千手鹿に襲われてから数日後の早朝。イズモが家を訪れたときには、カリムはすでに朝の支度を始めていた。炉の火が煌々と燃え、家の中を明るく照らしている。
「おはようございます。今日はお早いですね」
「ああ、なんか目が覚めちまってな。来てもよかったか？」

「もちろんです」カリムが嬉しそうに言う。「ただ、これから食事の準備に取りかかるところでして、しばらくお待ちいただけますか？」
「おっ、それなら少し手伝わせてくれないか。これでも家事は一通りできる」
「イズモ様のお手を煩わせるなど、恐れ多いことです」
「そう言うなって。作ってもらってばかりで申し訳ないと思ってたんだ。何もさせてもらえないもどかしさは、お前もよく知ってるだろ？」
カリムはハッとしたように目を開くと、力を抜くように微笑んだ。
「たしかにそうですね。では、お手伝いをお願いいたします」
「よっし、任せておけ」
イズモはシャツの袖をまくり、力こぶを作ってみせた。
もっとも、やることはほとんどなかった。棚から干した肉と野菜を集め、沸騰した鍋に火の通りにくいものから順に入れる。具に火が通ったら塩で味を整える。それで終わりだった。
「張り切ったはいいが、手伝うほどでもなかったな」出来上がったスープを食べながら、イズモが残念そうに呟いた。「皮むきの速さには自身があったんだが」
カリムの家にあった食材はどれも皮が剥かれ、同じ大きさに切ってあった。カリムにけがをさせない配慮なのだろうが、偏執狂的なまでの過保護だった。カリムの

不器用さは、上達の機会を奪われているせいかもしれない。
「私はイズモ様と一緒に作業できて楽しかったです」
カリムは気にした様子もなく、うまそうに匙を口に運ぶ。
「不思議ですね。イズモ様が来られてから、まだ数えるほどだというのに、ずっと前からいらっしゃったような気がします」
「村に馴染んできたってことだろうな。なんだかんだ言って、言葉が通じるってのはいい」自分でおかわりを注ぎながら、イズモが言う。「お前がいなかったら、こうはならなかった。感謝している」
実際、イズモだけでは意思疎通に一週間以上はかかったはずだ。魔術を説明して魔石を集めるには、さらに時間がかかっただろう。
カリムのおかげで、計画は驚くほど順調に進んでいる。当のカリムはイズモの企みなど露知らず、優しく微笑んでいる。
「今日はどうされますか？　会話の練習をしますか？」
「ああ、そのことで相談したかったんだ」イズモは匙を置く。「今日は本当に森から出られないのか試したいと思っている」
「そう、ですか」
カリムも食べる手を止め、考えるように、器に視線を落とした。普段ならふたつ

返事で受け入れるのに、今日は反応が芳しくない。
「なんか、まずいのか？」
カリムのいつもと違う様子に、嫌な汗が滲む。
森を出たい最大の理由は、魔石を採掘する準備のために、外部と連絡を取りたいからだ。もちろん、カリムに言えるはずもない。
「森に何者かが潜んでいる今、村を離れていいものかと思いまして」
「あ、そうか。そうだったな」イズモは思わず、声を出していた。魔石のことで頭がいっぱいで、完全に失念していた。
先日の魔獣の件があってから、村人の行動は厳しく制限されている。子どもたちは川に遊びに行けず、大人たちの狩りも村の近くで必要最低限にされている。そんな状況で、よそ者が私情で行動するのは好ましくないだろう。
しかし、ここで引き下がっては、いつ森から出られるか分かったものではない。
「お前の懸念も分かるが、オレがいれば大丈夫だろ。それに護衛を多めに付けてもらえば、最悪、オレが時間を稼いでいる間に逃げられるはずだ」
祈るような気持ちで言葉を重ねる。
もっとも、駄目なら駄目で、ひとりで行けばいいだけの話だ。勝手に動いて心象を悪くするのは望ましくないが、背に腹は代えられない。

――ま、どうせ、いつかは恨まれるんだ。

魔石があるのは彼らが神聖視する場所だ。採掘が本格化すれば、対立は避けられない。そもそも、イズモは彼らを奴隷として売り払うつもりだった。逆らうなら殺すことも厭わない。いまさら、何を躊躇うことがあるのか。

「承知しました。とにかくアドルに相談してみましょう。アドルもこのままでいいと思っているはずがありません」

カリムの言葉にほっとする。ひとまず、無断で出歩くリスクは遠のいた。

――こいつには嫌われたくない、なんてのは身勝手すぎるか。

食事を再開しながら、イズモはカリムの様子を伺う。ラティフの銃の扱いがますます上達していると、嬉しそうに話すカリムの表情には一点の曇りもない。イズモの願望を抜きにしても、イズモを信じているのは疑いようもなかった。

その信頼を、自分は食い物にしようとしている。これまでに何度もやってきたことだったが、今はただ、自分がひどく浅ましく思えた。

カリムが返事を持ってやってきたのは、昼を過ぎてからだった。

イズモが銃の整備をしていると、戸口から名前を呼ばれた。外に出てみると、カリム、バーリ、ラティフ、ムグニがイズモを待ち構えていた。カリム以外は表情に

硬いところがあり、イズモは自分の行いが露見して、連行されるのだと思ったほどだった。

「思ったより、時間がかかったな」

「アドルとしても、今回は判断が難しかったようです。それでも、最後には許可してくれました」

カリムが説得してくれたのだろうか。だとしたら、本当に頭が上がらなかった。

「じゃあ、さっそく行くか」

「どこに向かわれるのですか？」

「オレがお前と出会った場所、魔狼に襲われた花畑だ」

イズモの言葉に、全員がビクリと体を震わせる。彼らにとっては苦い思い出のある場所だ。あまり気が進まないのだろう。

「それは、何か意図があってのことですか？」

「意図も何も、オレがそっちから来たってだけだ」

あれこれ試すのも大切だが、まずは現状を正しく把握するところからだ。そのためには、来た道を戻るのが手っ取り早かった。道に迷った原因が、不慣れな土地と疲れなら、そのまま森を出られるかもしれない。

「バーリ、それで構いませんか？」

「我々はやるべきことをやるだけだ」
カリムの問いかけに、バーリは重々しく言う。さすがのバーリも、強敵やイズモの魔術よりも、カリムの安全が気がかりらしい。
「いざとなれば、オレが全力で守るから安心してくれ。じゃ、行くか」
森を出られたら、夢の生活が待っている。イズモは居ても立ってもいられず、意気揚々と森に入っていった。
久しぶりの森は、特に変わったようには見えなかった。どこかで鳥が鳴き、頭上では葉の擦れる音が響く。すでに日は高く、風のない森の中はやけに蒸し暑い。背嚢に接する背中には、すでに汗で染みができ始めていた。
イズモとカリムが並んで歩き、前方をラティフとムグニ、後方をバーリが警護していた。それぞれ武器を構え、周囲を警戒しつつ進む。
ラティフはもう槍を持っていなかった。代わりに、右足の太ももに皮で作ったホルスターを括りつけ、そこに銃を収めていた。右手は銃把に添えられ、いつでも抜けるようにしている。銃を渡してから、まだ数日にかかわらず、動きはずいぶんと様になっていた。
「普通に歩いて出られるとは思えないけど、何か考えがあるの？」
視線を感じたのか、ラティフがイズモに声をかける。

「大丈夫だ。いくつか案を用意してきた」
　イズモは背中の荷物を叩いてみせる。中には脱出に使えそうな道具が入れてあった。いくつか試せば、手がかりくらいは掴めるだろう。
「オレたちが何度も試して駄目だったんだから、やるだけ無駄だと思うけどな」
「イズモなら違うかもしれないよ」
　明らかに乗り気でないムグニを、ラティィフが諫める。
「意外だな。お前たちも森を出ようとしたのか」
「村の者で試していない者はいない。むろん、誰ひとり成功していないが」
　バーリが後ろから答える。
「ってことは、お前やアドルも、外の世界に興味があったってことか？」
　イズモが振り返って尋ねると、バーリは困ったような顔をしたあと、しばらくして「そうだ」と答えた。
　意外だった。彼らは自ら望んで、この森に留まっていると思っていた。彼らがイズモの存在を柔軟に受け入れたのは、少なからず外界に対して興味を持っていたからなのだろうか。
　話をしている内に、花畑に到着した。
　魔狼との戦いから、まだ一週間ほどしかたっていないはずだが、焼き払われた大

地には草が芽吹き、倒れた木には苔や菌類が居場所を構えていた。驚くべき生命力の強さだった。
　イズモは消えつつある戦闘の痕跡を頼りに、自分が来た方角を確認する。
「よし、まずはあちらの方向に普通に歩く」
　イズモは懐から短剣を取り出すと、近くの木に印を付けた。木の横を通り過ぎるたびに、同じように印を付けていく。原始的かつ地味な方法だが、真っすぐ歩いていること、同じ場所を歩いていないことを手っ取り早く確実に確認できる。
「イズモ様。先日も気になっていたのですが、その道具はなんでしょうか？　武器にしては緻密で美しい装飾が施されていますね」
　カリムが興味深そうにイズモの剣を見る。
「ああ、これは師匠からもらった魔術剣だ」イズモが慌てて言う。「もっとも、魔石周りの機構は壊れていて、取り外してあるけどな」
　詳細を聞かれる前に、先回りして答える。師匠からもらったこと、魔術剣なのは間違いないが、魔石に関する機構は最初から存在しない。術式機構単独で成立する特殊な武器だ。
「イズモの師匠って、どんな人？」ありがたいことに、ラティフが横から食いついてくる。「やっぱり、すごい魔術師なんだよね」

イズモは考えるように顎に手をやる。
「魔術師としてすごいのは間違いないな。人としては尊敬できないが」
「そうなの？」
「性に奔放で誰彼見境なく声をかけるし、訳の分からないものに大金を使うし、面倒事は全部オレに押しつけてくるし、好き嫌いが多いし、寝言がうるさいし……」
師匠の悪口を並べるとキリがない。ムグニが「だから弟子がこうなのか」と言いたげな目で見てくるが無視する。
何十本目か木に印をつけていると、周りの木を見ていたムグニが声を出した。
「やっぱり駄目だな」
「どういうことだ？」
「ほら、これ」ムグニが近くの木を指差す。
見ると、イズモが今まさに印をつけた木の真横の木に、同じ印があった。
「んな、馬鹿な」
慌てて周りの木を調べる。印のある木は、直角に交差するように並んでいた。つまり、真っすぐ歩いていたつもりが、いつの間にか円を描いて、元の場所に戻ってきたということになる。
「どこで道を間違えた？　オレは真っすぐ歩いていたつもりなんだが」

「イズモ殿。我々は道を間違えていないし、途中で曲がってもいない。しかし、どれほど注意していても、同じところに戻ってきてしまうのだ」

バーリが子どもに言い聞かせるように言う。

「ここで待っていてくれ。もう一度、確認する」

イズモはカリムたちをその場に残し、印のある木をたどって歩く。何度も後ろを確認し、四人がいることを確かめる。しばらく歩いていると、四人の姿が木の陰に隠れ、見えなくなった。

周りを見回す。太い木が立ち並ぶ、鬱蒼とした森の中。足元には落ち葉が積み重なり、かさかさと音を立てる。それだけだ。何も異常は感じられなかった。

「カリム、聞こえるか？」

「聞こえます！」

後方からカリムの声が聞こえる。当たり前だ。当たり前のはずだ。

印を確かめつつ、前に進む。しばらくして、前方に人影が見えた。横を向いたカリムたちだった。

ムグニがイズモに気づき、肩をすくめる。

「おばけじゃないからな」ムグニがつまらなさそうに言う。

その後も声をかけあったり、紐を使ったり、場所を変えたりしたが、結果は同じ

だった。どんな方法を使っても、いつの間にか元の場所に戻ってきてしまう。
「なんだこれ？　どうなってるんだ？」
「だから無駄だって言ってるだろ。ここだけじゃない。山の向こうも、女の村の方も同じだ。俺たちはこの森から出られない」
　ムグニはさも当然のように言う。まるで、太陽が東から昇るのと同じだと言わんばかりに。だが、イズモがそれを受け入れられるはずがない。
　肉体的にも、精神的にも異常はない。内的な問題でないなら、外的な要因だ。つまり誰かに何かをされている。しかし、その感覚がまったくなかった。正体を掴むどころか、得体の知れなさに拍車がかかっただけだ。
「カリム、お前は何か感じないか？　風が何か言っていたり、祈りが聞こえたりしないか？」
　すがる思いで尋ねてみるが、カリムは首を横に振るだけだった。
　何ひとつ手がかりが得られないとなると、次の手も打ちようがない。
　自分の置かれている状況の厄介さを、今になって実感する。楽観していた自分を呪いたくもなるが、ここまで常識はずれの事態に巻き込まれるなど、想像しろというほうが無理だった。
　――この森は、なんなんだ？

イズモは天を仰ぐ。樹冠の間に空が見え、雲がゆっくり流れていた。カリムたちと出会う前に見たのと同じ、代わり映えしない平和な空だった。
「イズモ殿、少し休まれてはどうだろう。落ち着いて考えれば、新たな案が出てくるかもしれない」
「賛成。僕も歩き疲れた」「俺も」
バーリが見かねたように言い、まだ元気そうなラティフとムグニが賛同する。
「では花畑に戻って休憩しましょう。水と果物を持ってきています。いわゆる『ピクニック』ですね」
カリムが屈託のない笑顔を向けてくる。
彼らは一度助けられたという理由で、赤の他人である自分に協力してくれる。それも、打算ではなく、純粋な好意で。本当に気のいい人々だった。自分はそんな彼らを騙し、利用しようとしている。
自分は、そこまでして金が欲しいのだろうか。計画がうまくいったとして、魔石を売って得られるものは、彼らと過ごす時間より価値があるのだろうか。
――あるはずだ。あるに決まってる。
そうでなければ、自分が今まで信じてきたことは、なんだったのか。
イズモは無理やり笑顔を作り、彼らに向けた。

「そりゃいいな。じゃあ、行くか」
カリムとたわいのない話をしながら、イズモはそっと、懐に手を入れた。指先で、忍ばせていた魔石の感触を確かめる。
しかし、あの高揚感はどこからも湧いてこなかった。

花畑には色とりどりの花が咲き誇っていた。赤、黄、白、紫、薄青。名も知らぬ草花たちが、降り注ぐ日差しを一身に浴び、光り輝いていた。
ここで魔狼と戦ったのが嘘とさえ思える、平和な光景だった。
「あのときは薬草を集めていた、って言ってたよな。どんなものだ?」
「この花の蕾ですね」カリムが近くに生えていた植物を指差す。
カリムの繊細な指の先に、目の覚めるような赤い花があった。鉢のような、大きな花弁の中央に、黄色い雌しべが並んでいる。イズモの知識にない植物だった。
「この蕾をすり潰して薬にするのですが、時間がたちすぎると効力がなくなってしまう上、この時期にしか花をつけないので、儀式が近づくと皆で集めるのです」
「どんな効果があるんだ?」
「緊張の緩和、性機能向上、催淫作用などですね」
「それ、お前たちに必要か?」

見た目からして精力絶倫な彼らが、そんなものを使ったらどうなるのだろうか。
「儀式は一晩中、休みなしだからね。さすがに疲れちゃうよ」
「向こうは二十人くらいいたし、狩りのほうがよっぽど楽だな」
「ムグニはおっきいから、ちょっと苦しそうな子もいたよね」
「そう言うお前は、何人か気絶させて怒られてただろ」
「それはムグニが昔から激しいのが好きだったからでしょ。昨日だって……」
「俺のせいにする気か？　今晩、同じことしてやろうか？」
ラティフとムグニが、夜の営みについて恥ずかしげもなく言い合う。聞いているカリムやバーリは特に気にした様子はなく、居心地が悪いのはイズモだけらしい。
言葉を学んで分かったことだが、虎人たちはイズモが思っていた以上に性に大らかだった。昼間から赤裸々な話をし、人目も気にせず互いの体を触り合う。
――もしかして、オレが思うほど、ラティフとの関係は深くなってないのか？
あの夜以降、イズモはラティフと何度か関係を持っていた。イズモが誘うこともあれば、ラティフから誘われることもあった。イズモはそれを、ラティフが自分に服従したと解釈していた。ムグニよりも強い関係が築けたのだと。しかし、今の話を聞くと、ラティフもそう思っているとは、到底思えなかった。
「ふたりとも痴話喧嘩はそれくらいにしろ。休むのなら、ちゃんと休むべきだ」

　バーリがイズモを気遣うように言い、イズモの思考は途切れた。
「疲れたときは甘いものに限ります」
　カリムが鞄から何かを取り出す。濃いオレンジ色の干からびた何かだった。
「果物って、干したカンロの実かよ」
「おや、ムグニの好物ではありませんでしたか？」
「そうだけど、いつも食ってるし、喉が渇くし」
「それなら、いいものがある。森の外で、よく飲まれている飲み物だ」
　ふと思い出し、口を挟む。全員が興味津々といった目でイズモを見る。
「火をおこす必要があるんだが、それまで待てるか？」
「俺が薪を集めよう。イズモ殿、すまないが手伝っていただけないか」
　バーリの目が何か言いたげに見え、イズモは頷いて大男の背中を追った。
「イズモ殿、あまり気を落とされるな」
　森の中で枝を拾っていると、バーリが話しかけてきた。
「この森は神の庭だ。普通の方法で出られるとは思えない」
「お前がそう言うってことは、よっぽどなんだろうな」
「俺も何十、何百と試したが駄目だった。この世には、自分の意志ではどうにもならないことがある。俺が昔、痛感させられたことだ」

その声に悲哀の響きを感じ、イズモは手を止めた。
バーリはイズモに目を向け、何か話したそうにしていたが、しばらく待っても話し出す気配はなかった。
イズモはため息を吐くと、バーリの目の前にしゃがんだ。
「オレが外の世界に興味があったのかと尋ねたとき、返事に困っていたな。本当は森を出たい切実な理由があったんだろ？　そして、それを話すために、オレに声をかけた。違うか？」
「イズモ殿は察しがいいな。話すべきことがあるが、どう切り出すか迷っていた」
「いいから早く教えろ。オレは気が長いほうじゃない」
バーリは苦笑すると、ぽつりぽつりと、心の中を整理するように話しだした。
「もう昔のことだが、俺にはジャリルという相方がいた。頑固で融通が利かないところがあったが、誰よりも強く、誰よりも優しい男だった」
バーリとジャリルは村で一番の猛者を争う仲だった。
小さい頃から足の速さや力の強さ、捕らえた獲物の大きさを競い合い、口汚く罵り合うことも、激しく殴り合うことも珍しくなかった。それゆえに、ふたりは親友だった。全力でぶつかれば、全力で応える。手加減も隠し事も必要ない、もうひとりの自分と心から言える相手だった。

「あいつといれば、毎日が楽しかった。どちらが長になっても、もうひとりが右腕として支える。そう信じて疑わなかった」
過去を懐かしむバーリの目がふいに暗くなる。
「だが、ある日、狩りの最中にジャリルが魔獣に噛まれた。逃げ遅れた仲間の身代わりになったのだ。体に大きな穴が空いて、血が止まらなかった。ラシド殿も処置をしてくれたが助からないだろうと言った。俺は諦めることができず、森の外に望みを懸けた」
バーリはジャリルを背負うと、皆が止めるのも聞かず、走りだした。森の外に希望があると信じて。背中に、ジャリルの命がこぼれていくのを感じながら。
走って、走って、走って、走った。
それでも、どこにもたどり着かなかった。
日が沈み、夜になり、朝が来て、ジャリルの体が冷たくなっても、バーリは走り続けた。止まることを恐れるように。三日三晩走り続け、とうとう気を失った。
ラシドの家で目を覚ましたときには、すべてが終わっていた。
「その一件により、我々は神の目の届く範囲でしか、生きることを許されないのだと悟った。イズモ殿には申し訳ないが、あまり希望は抱かないほうがいい」
バーリは憂いを帯びた表情で言った。余命を宣告する医者の顔に似ていると、イ

ズモは思った。
「諦めろというつもりはない。だが、相手は神だ。その意志に背くのなら、相応の力と覚悟が求められる」
「上等だ」イズモはバーリに不敵な笑みを向ける。「悪いが、オレはやるなと言われるとやりたくなって、できないと言われると是が非でもやり遂げたくなる性分なんだよ。相手が神だろうが、知ったことか」
バーリは驚いた顔をしたが、すぐに破顔した。
「イズモ殿はやはり英雄だな。俺には神に逆らうほどの気概はない」
「神のせいで大切なやつを助けられなかったんだろ。悔しくないのか？」
「それは俺に太陽や風を憎めと言うようなものだ。寂しくなかったと言えば嘘になるが、もう慣れてしまった。ひとりで食べる飯にも、ひとりで眠る寝床にも」
バーリの口元には笑みがあった。カリムにも感じた、諦めの笑みだ。この村の人間は皆、幸せそうでいて、どこか諦めている。
「周りからは新たな相方を作れと言われたが、実力を認めた相手でなければ、ジャリルに申し訳が立たない」
「あの家にひとりで暮らしていたってことは、見つからなかったのか？」
「残念ながらな。俺が認めた男はジャリルとアドル、そしてイズモ殿だけだ」

「オレか？　それこそ、お前の相方に向ける顔がないだろ」
「俺は本気だ。イズモ殿となら、褥（しとね）を共にすることも、やぶさかではない」
　バーリがニヤリと笑って腰布をまさぐると、赤黒い肉棒がまろび出た。
　興奮した様子もないのに、太さはイズモの手首以上もあり、浮き出た血管が縦横に走る。後ろの垂れ下がった子種の袋も、大振りな果実と見紛う大きさだった。
　イズモが呆気に取られていると、バーリの太い指が茎の根本を掴み、上下に揺さぶる。風を切る音が聞こえてきそうな重量感。鼻先をかすめる蒸れた雄の臭い。凶悪とか凶暴といった言葉が似合う、まさに男の象徴だった。
　バーリが身をかがめ、イズモの耳元で囁（ささや）く。
「ジャリルと磨いた性技の数々、必ずや満足してもらえると自負している。イズモ殿さえ良ければ、今夜いかがだろうか」
　イズモはポカンとして、バーリを見る。
「それって、オレが」イズモは左手の親指と人差し指で円を作る。「お前と」今度は右の人差し指を立てる。「寝る？」右の指を左の輪に出し入れする。
「むろん、逆でも構わない」バーリが重々しく頷く。
　イズモの中で、損得勘定の計算機が目まぐるしく動く。信頼。嫌悪感。魔石。
　結論。イズモは表情筋を総動員し、最大級の笑みを作る。

「お前に誘ってもらえるなんて光栄だ。こちらこそ、よろしく頼む」
イズモを見るバーリの瞳には、引きつった笑みに脂汗を浮かべ、シャツの裾を握りしめる鼠の姿があった。捕食者に楽に殺してくれと媚びる獲物の姿だった。
バーリはしばらくイズモを見つめていたが、ふいに吹き出した。
「今のは冗談だ」バーリは笑いながらイズモの肩をバンバンと叩く。「イズモ殿が熱心に見つめてくるものだから、からかいたくなった」
イズモはぽかんとした後、恥ずかしさと怒りで顔を真っ赤にした。
「お前、冗談とか、ふざけるなよ。オレは、本気で――」
「承知している。だが、その気持ちだけで俺は十分なのだ。それに」バーリの目が意地悪な色を帯びる。「俺の味を知ったら、他の男では満足できなくなる。ラティフと遊べなくなっては困るだろう？」
ヒッ、と思わず小さな悲鳴が漏れる。
「ななな、なん、なん、なんで、そそ、そんな、こと、ことを」
「先日、森の中でラティフと仲睦まじくしていたではないか」
あまりのことに、声が出なかった。
バーリは顔面蒼白で口をパクパクさせるイズモをしばらく眺めていたが、やがて深々とため息を吐いた。

「イズモ殿。隠すつもりなら、もう少しうまくやるべきだ。俺に気づかれるくらいでは、アドルはとっくに把握している。おそらくムグニも察しているだろう」
「……オレは、何か罰を受けるのか？」
「立場や暴力を使って関係を迫ったのなら、な。そうではないだろう？」
ガクガクと首を縦に振る。完璧に隠していたつもりだったが、すべて筒抜けだったらしい。魔石の件がバレていないのが奇跡としか思えない。
「そんな顔をなさるな。誰もイズモ殿を責める気などない」
バーリがイズモを見る。琥珀色の瞳には優しい光が宿っていた。
「イズモ殿はあの子に銃を与え、狩りの可能性を取り戻させた。それは魂を救うに等しいことだ。イズモ殿を慕うのは当然だろう」
「なんで、そこまで狩りにこだわる」
「それが我々に許された生き方だからだ」バーリは悲しげな笑みを浮かべる。「獲物と自分、生きるか死ぬか。苛烈な命のやりとりだけが、我々の魂を震わせる」
以前、カリムに説明されたことだが、当事者の執心はもっと激しいものだった。
「あの子は我々の生き方の極致だ。あの子の戦う姿を見たら、イズモ殿も俺の言っている意味が分かるだろう」
バーリが花畑に目を向ける。普段の荒々しさからは想像もできない、穏やかな顔

だった。ふと、ある考えが頭に思い浮かぶ。
「もしかして、お前はラティフの父親なのか？」
「なぜ、そう思う？」
「お前がラティフを『あの子』と呼ぶとき、とても優しい目をしている。他人とは思えない」
「イズモ殿の観察力には恐れ入る」
バーリはフッと息を吐くように微笑んだが、首を横に振った。
「だが、ラティフは俺の子ではない。ジャリルの、俺の相方の息子だ」
イズモは花畑の方をそっと見た。ムグニと何事か言い合いながら、地面を掘っている少年の姿があった。
「間違いないのか？」
「揺らぐことのない、強い意思を宿した目。引くことを知らず、前だけを見て突き進む姿。危なっかしいところも驚くほどよく似ている」
ラティフを見るバーリの眼差しは、まるで自分の子を慈しむ温もりがあった。その目が、イズモに戻される。
「あの子を救ってくれた恩を、俺は生涯忘れない。それに賭けの約束もまだだ。俺にできることなら、なんでも言ってくれ」

「そう言われても、すぐには思いつかないぞ」
「イズモ殿は欲がないな」バーリが苦笑する。
欲はある。村を飲み込むほど大きな欲が。ただ、その欲を満たすために小さな欲
にかかずらっている暇がないだけだ。そこで計画のことを思い出した。
「あ、そうだ。お前にしか頼めないことがあった」
「なんなりと」
「オレの味方になってくれ」
「味方？」バーリが首をかしげる。「俺はいつでもイズモ殿の味方だが」
「味方は味方でも、心から信頼できる味方がほしいんだ。何があっても、どんな相
手を敵に回すことになったとしても、オレの味方をしてくれるやつが」
頭にあったのは鉱脈採掘計画だ。イズモが村と敵対しなければならなくなった場
合に、バーリは有用な対抗手段になりうる。むろん、バーリが本当に味方するとは
思っていないが、牽制の材料にはなるだろう。
今は計画どころではないが、白紙撤回する気などさらさらない。
「なるほど、承知した」バーリが大きく頷く。「だが、そうなると口約束で済ませ
るべきではないな」
「そんな大げさに受け取らないでくれ。気持ちだけで十分だ」

「そうはいかない。その程度の覚悟だと思われては、俺の沽券に関わる」
　バーリは腕を組んで考え込んでいたが、はっと顔を上げた。
「イズモ殿、いい案がある」
「なんだ？」
「俺とケッコンしてくれ」
「……………………は？」
　耳を疑ったが、バーリの目は真剣だった。
「えっと、あの、ケッコンって……？」
「〈結魂の儀〉。相方を決める儀式だ。祈祷師の前で、互いの指を切り、触れ合わせる。そうやって、互いの魂を結びつけるのだ」
　結婚じゃないのか、とほっとするが、数秒してから、まったく安堵できないことに気づく。
「いや、それ、めちゃくちゃ重いやつだろ⁉　思いつきでやっていいのか⁉」
「もちろん本式でやるつもりはない。あくまで俺の覚悟を示すものだ。祈祷師は立てず、指を切るのは俺だけ。それなら構わないだろう」
　言うが早いか、バーリは腰の物入れから石のナイフを取り出すと、右手の親指に当て、軽く動かす。指の腹に赤い線が走り、血がじわりと染み出す。

「イズモ殿、握り拳を作り、親指を立ててくれ」

バーリが手本を見せる。いわゆるサムズアップだ。

とんでもないことになってきたが、言い出した手前、断ることもできない。仕方なく言われたとおりにする。

イズモが手を差し出すと、バーリは拳をぶつけ、親指を触れ合わせる。

「我が名はバーリ。魔術師イズモと、ここに契りを交わす」

バーリが重々しく宣言する。

その瞬間、指の触れ合わせた部分が、焼けるように熱を帯びる。

慌てて引き離そうとするが、腕がまったく動かない。それどころか声を出すこともできなかった。

――これは、魔術!?

驚くイズモを無視し、バーリは続ける。

「かの者が道を見失いしとき、かの者が何処（いずこ）にいようと、かの者の元へ馳せ参ずることを誓う。我が魂に懸けて。光の導きがあらんことを」

言い終わると同時に熱が消え、手が離れる。

慌てて指を見るが、バーリの血がついているだけで、異常はなかった。触れてみても、違和感はない。

「どうなされた？」
「いや、お前、今、魔術を使っただろ。オレに何をした？」
「魔術？　俺は何もしていないが」
バーリが心底不思議そうに言う。嘘をついているようには見えなかった。
――無自覚に魔術を発動させたっていうのか？　身体強化とはわけが違うぞ。
イズモが驚いていると、バーリの首飾りが目に入った。異様に大きな牙と黒い石をあしらった、質素だが優美なものだった。
「バーリ、その首飾りの牙は、何か特別な魔獣のものか？」
「特別と言えば、特別だな」バーリが胸元に視線を落とし、牙に触れる。「これはジャリルを殺した〈森の主〉と呼ばれていた大猪口の牙だ」
術式機構は魔獣の肉体を加工して作られる。強大な魔獣の牙なら、持ち主の祈りに反応してもおかしくなかった。
だとして、バーリがどんな魔術を使ったのか見当もつかない。本人に自覚がないから発動条件も分からない。やましいことをしているときに発現したら、取り返しがつかない。
「イズモ殿、そろそろ行こう。あの子たちが待っている」
バーリは立ち上がると、薪を持って花畑へと向かった。太い尻尾を機嫌良さそう

に揺らしながら。
　どうしてこうなった。イズモは肩を落とした。
「たったそれだけの枝を拾うのに、どれだけ時間がかかってるんだよ！」
　花畑に戻ると、ムグニが不満を爆発させた。本来なら十数分で終わる作業を、話をしながら長々とやっていたのだから無理もない。
「イズモ殿と、男同士の大切な話をしていた。大目に見てくれ」
　バーリの発言に、ラティフとムグニが顔を見合わせる。何かを察した表情。
「違う。お前たちが考えているようなことは、断じてしていない」
「イズモ殿、恥ずかしがることはない。俺はイズモ殿と、誰よりも深く、強くつながったと確信している」
　バーリの思わせぶりな言い方に、ラティフが興味津々といった顔をし、ムグニは付き合っていられないとばかりに、火をおこす準備を始める。
　ただ、カリムだけは心配そうな顔をしていた。
「イズモ様。実際のところ、バーリと何があったのですか？」
「分からん。オレが聞きたい」
　カリムもバーリの祈りを聞いていたのだろう。しかし、何があったのかまでは分

からないらしい。
　それはイズモも同じで、説明しようがなかった。
「バーリ、イズモ様に失礼はありませんでしたか？」
「心配にはおよばない。聞いたら、お前は嫉妬するだろうが」
「私が嫉妬!?　私のイズモ様に何をしたのです!?」
「イズモはいつからカリムのものになったの？」
　バーリとカリムとラティフが妙な言い合いを始める中、ムグニは黙々と小枝を積み上げ、火をおこす準備をしている。イズモは三人から離れ、ムグニを手伝う。
「ムグニ、お前の素っ気なさが今はありがたい」
「なんだそれ。ラティフ、火をおこす道具を持ってきてるか？」
「それなら、いい道具がある」
　イズモは懐から発火の魔術具を出し、小枝の山に火をつける。枝がすぐに燃え上がり、焚き火となった。
　イズモは鞄から五徳と小鍋を取り出し、鍋に水筒の水を注いだ。焚き火の上に五徳を置き、その上に鍋を置く。水が沸騰したら火から下ろし、茶葉の入った小袋を入れる。しばらくすると、袋から茶色い靄（もや）が染み出し、芳醇な香りが立ち始める。
　匂いにつられ、言い合いをしていた三人も集まってくる。

十分に色が出たところで袋を取り出し、火から下ろして砂糖を入れる。
ムグニが並べた杯に少しずつ注ぐ。
それぞれに杯を手渡すと、不思議そうに香りを確かめていた。
「心配しなくても毒はないぞ」そう言って、少しすする。
四人は神妙な顔で杯を見つめていたが、おそるおそる杯に口をつける。
「熱いから少し待ってから――」
「ゴャーッ!?」
イズモが言い終わる前に、四人が同時に叫んだ。湯気の立っている液体を普通に飲もうとしたら、猫舌でなくとも熱いだろう。
イズモに習い、少し冷めてから、ゆっくりと口に含む。
「あ、美味しい」「花みたいな匂いがするのに、渋みと甘みがある」「これはいいものだな」「とても美味しいですね。アドルも気に入りそうです」
口々に感想を言う。
「これは茶といって、森の外では一般的な飲み物だ。この袋の中に、植物の葉を蒸して乾燥させたものが入っていて、湯に入れると成分が染み出してくる。同じ茶でも蒸し方や発酵させる時間で味が変わる」
「なるほど。『お茶会』というのは、これをみんなで飲むことなのですね」

「外の世界には、面白いものがいっぱいあるんだね」
ラティフが感慨深そうに言う。
「お前たちも森を出たいと思うか？」
バーリの話を思い出し、全員におかわりを注ぎながら尋ねてみる。
「外にはイズモみたいなすごい魔術師がいっぱいいるんでしょ？　どんな魔術があるのか見てみたいな」
「俺は別にいい。外に行ったって、手に負えないことが増えるだけだ。外の世界が本当にあるって分かっただけで、俺は満足してる」
ラティフにムグニが、それぞれに想いを告げる。
多くを求めなければ、この森は楽園なのだろう。食べることにも、性欲の捌け口にも困らない。どこまでも穏やかな日々が保証されている。しかし、好奇心を埋めるには、圧倒的に足りない。
カリムとバーリは会話に混ざることなく、ふたりを眺めながら茶を飲んでいる。
何か思うところがあるのだろうか、と思っていると、次第にソワソワと落ち着かない素振りをし始める。
「イズモ様、申し訳ありません。少し席を外します」
カリムが、こらえきれなくなったように立ち上がる。

「どうした？」
「お恥ずかしい話ですが、小用です」
そう言うカリムの顔には、冷や汗が浮かんでいた。限界が近いらしい。
茶に含まれるカフェインには利尿作用があり、飲み慣れない彼らには強く作用したのかもしれない。
「俺が見張りをしよう」
バーリが助かったと言わんばかりに立ち上がり、カリムを急かしながら茂みの方へと消えていった。よほど慌てていたのか、カリムは杯を持ったままだった。
「歳を取ると小便が近くなるんだよな」
ムグニが言ってはいけないことを口にする。
「イズモもだいぶ村に馴染んできたけど、困っていることとか、気になっていることとかない？」
ラティフがここぞとばかりに話しかけてくる。大人たちに遠慮して、発言を控えていたようだ。
「困っていることは今のところないな。ただ、この村の成り立ちに関しては、前々から気になっていた。いつごろ、何があって、どうやってできたのか、だ」
「なんでそんなことが気になるんだよ」

ムグニが茶をすすりながら、疑わしそうな顔をする。
「お前たちにとっては当たり前かもしれないが、森から出られないなんて異常極まりない。いつからそうなったのか分かれば、脱出のヒントになる」
ふたりは記憶をたどるように、視線をさまよわせる。
「それなら、伝承がいいかも」
ラティフがふと思いついたように言う。
「どんな話だ？　ぜひ聞かせてくれ」
「いいよ。ムグニ、お願い」
「なんで俺なんだよ。自分で引き受けたんだから自分で話せよ」
「ねえ、イズモ。ムグニって歌うのが上手なんだよ」
ムグニの抗議を無視して、ラティフが嬉しそうに言う。
「すっごくきれいな声で、昔はよく歌ってくれてたんだ。あのラシドも褒めるくらいで、いろんな歌を教えてもらってた」
そう言うラティフの顔は、まるで自分のことのように自慢げだった。
「最近は歌わないのか？　歌は士気を鼓舞したり、悲しみを癒やしたり、歴史を伝えたりする大切なものだ」
「歌がうまくたって、誰も守れない」

ムグニはふてくされたように言うが、否定はしなかった。
歌が得意なのは事実らしい。うねるような尻尾の動きからすると、満更でもないようだ。ただ、それを素直には喜べないという、複雑な心境が伺えた。歌をやめたのには、イズモには言えない事情があったのだろうか。
ムグニは渋っていたが、ラティフに急かされると、仕方ないというふうに咳払いをした。
「昔々あるところに、豊かな国があった」
ムグニは虚空を見つめ、朗々と歌うように語りだす。
「そこは神の住む国と呼ばれ、人々は神に守られ幸せに暮らしていた」
少年の姿からは想像できない澄んだ声が花畑に響く。
「しかし、あるとき、他国が攻め込んできた。国の富を羨み、あらゆる物を奪うために。神は国を守るため、人々と共に戦った」
ムグニの声が一転、暗くなる。太陽に雲がかかり、辺りが薄暗くなる。
「来る日も来る日も、争いが続いた。月が欠け、再び満ち、多くの命が失われてもなお。神は力を尽くしたが、運命は非情だった。神は深手を負い、生き残っていた人々と共に聖地である山の麓に逃げた。だが、敵は彼らを見逃さなかった」
風がざわざわと木々を揺らす。ひんやりとした風がイズモの首筋を撫でる。

「追手が迫り、誰もが死を覚悟したとき、神の前にふたりの子どもが進み出た。黒虎と白虎の双子の兄弟だった。黒虎が神に言った。我に力を与えよ。我と共に敵を討て、と。しかし、神は答えた。自分は光を失った。もう戦えない、と。今度は白虎が言った。ならば我を喰らえ。我と共に皆を守れ、と。神はそれを聞き入れ、白虎を飲み込んだ。そして、人々はまばゆい光に包まれた」

雲が晴れ、花畑に光が戻る。こころなしか鮮やかさを増したように感じられた。

「光が収まると、敵の姿も神の姿も消えていた。代わりに、金色の毛の少年が倒れていた。人々は彼に導かれ、新たに村を作り、そこを安住の地とした」

ムグニはふうと息を吐くと、お茶を口に含んだ。ラティィフが拍手を送る。

「こんな話なんだけど、何か分かる？」

ラティィフが尋ねるが、イズモは返事ができなかった。

イズモの心臓は激しく脈を打っていた。伝承は往々にして脚色されている。話を盛り上げるために誇張し、都合の悪い部分を削っていることも珍しくない。それでもなお、動悸は止まらなかった。

「どうしたの？　大丈夫？」ラティィフが心配そうに覗き込む。

イズモが口を開きかけたとき、カリムとバーリが戻ってきた。ふたりともスッキリとした顔をしている。

「……遅かったな」なんとか、言葉を絞り出す。
「申し訳ありません。少し時間がかかってしまいました」
　カリムが舌を出す。
「せっかくなので、もう一杯いただいてもかいませんか？」
「あんまり、飲みすぎるなよ」
　残っていた茶をカリムの杯に注いでやる。カリムは杯を両手で包み込むように持つと、大事そうにゆっくりと傾ける。
　イズモはその様子を、じっと見つめていた。
「この後はどうされますか？」イズモの視線に気づき、カリムが尋ねてくる。「村に戻って作戦を立て直すのもひとつと思いますが」
「いや、もうひとつだけ試したいことができた」
　全員の目がイズモに集まる。期待と諦念が入り混じった視線。
　伝承の内容をすべて信じるわけではない。しかし、逸話における神とは実在の人物であることが多く、誰かがこの森に虎人たちを閉じ込めたのなら、その方法は魔術以外に考えられない。
　だとすれば、あの方法が使える。危険だが試す価値はある。
「今度は、うまくいくはずだ」

不安げな四人に微笑んで見せる。
イズモが向かったのは、最初に異常を経験した木のところだった。
木にふたつ印がついていることを確認し、四人に向き直る。
「お前たちはここに残って、オレが声をかけたら返事をしてくれ」
イズモが先へ進むと、カリムが当然のように後をついてきた。イズモは何かを言いかけたが、諦めたように前を向いた。
「ラティフ、声はどこから聞こえる？」「前から聞こえる！」
少し歩を進める。
「今度はどうだ？」「前から！」
ラティフに声をかけながら、少しずつ前に進む。
「これは何をされているのですか？」
「声が聞こえる向きが変わる場所を探してるんだ」
また少し進む。
「ここならどうだ？」「横に変わった！」
ラティフの声も前から聞こえてきた。
「この辺か」イズモが少し戻る。

周囲には木々しかなく、特に変わったようには見えない。
「声の方向が変わったということは、オレたちとラティフたちの位置関係が変わったということだ。おそらく、誰かが結界で空間を歪めている」
魔術の中でも、空間に作用するものを結界と呼ぶ。音を遮断する防音結界や、姿を見えなくする隠蔽結界。即席の無菌室を作る滅菌結界というものもある。
しかし、それらは通常、限られた範囲に短時間だけ構築するものだ。
ひとつの森を包むほどの結界を、誰にも知られることなく、何百年と維持するとなると、世界を創生するに等しい力を必要とする。まさに神の所業であり、常識的に考えればありえない。
しかし、現象を元に仮説を立てるとそうなる。ならば、それに賭ける。
「カリム、少し離れてくれ」
カリムが数歩下がるのを確認し、イズモは懐から短剣を取り出した。
息を整え、目を閉じる。
ざわざわと風が木を揺らす音が聞こえる。
意識を自分の奥深くへと向ける。心の深淵に降り、名もなきもの、名前を付けられる前の感情をすくい上げる。
――無限錯誤の果てに至る万物真理の極限を束ね。

世界から音が消え、暗い静謐の中で、イズモは祈りを練り上げる。
「イズモ様!!」
「うわあああぁぁぁ!?」
耳元で大きな声を出され、イズモは文字通り跳び上がった。
祈りが途切れ、構築されかけていた魔術が霧散する。
振り返ると、カリムがいつになく険しい顔をして立っていた。
瞳は燃えるように赤く輝き、全身から気迫のようなものが立ち上っている。カリムの尋常ではない様子に、イズモは思わず一歩下がった。
「な、なんだ？」
「おやめください」
有無を言わせぬ迫力に、続けようとした言葉を飲み込む。
「イズモ様が何をなさろうとしたのかは存じません。しかし、それは絶対にしてはならないことです」
「イズモ殿！　どうされた!?」
イズモの悲鳴を聞きつけ、槍と銃を構えた三人が走ってくる。しかし、カリムの発する雰囲気に足を止め、戸惑うようにカリムとイズモを見る。
「カリム、何があった？」

バーリが尋ねるが、カリムの視線はイズモに向けられたまま動かない。
「許されざる行いには神罰が下ります。私はイズモ様を失いたくありません」
「そんな大げさな。ちょっと試したいだけなんだ。駄目か？」
「なりません」
カリムの右手が伸ばされ、イズモが反射的に剣を構える。
カリムは躊躇うことなく、刃を握り込んだ。
イズモと三人が息を呑む。
指の間から血があふれ、刀身を伝って柄へと流れる。血がイズモの手に滴り、濡らしていく。相当な痛みがあるはずだが、カリムは表情を変えることなく、どこまでも静かな瞳でイズモを見ていた。
「オレの心配をしてくれるのは嬉しい」イズモは食い下がる。「だが、これはお前たちのためでもあるんだ。お前だって外の世界を見てみたいって言ってただろ。この方法なら、きっと森の外に出られる。だから大目に見てくれないか？」
「それとこれは話が違います。村の根幹に関わることなのです。祈祷師として、神の使いとして、村を守る者として、見過ごすことはできません」
カリムの声には迷いがない。イズモが魔術を使えば、何かが起きると確信しているようだった。裏を返せば、イズモの読みが正しいということでもある。

脳裏に閃き、と同時に、思いついた自分の品性を疑う。
本当にそれを口にしていいのか。カリムとの関係を壊してしまわないか。そこまでするに値することか。
「前に、お前はオレに味方してくれるって言ったよな？」
しかし、気づいたときには口にしていた。
「だから、今回だけ見逃してくれないか？　どうなるか試したいんだ。頼む」
カリムが目を伏せる。カリムはこんなことのために、味方をすると言ったのではないはずだ。
カリムの善意と覚悟を利用したことに、自分でも吐き気がした。それでも、目の前に可能性があるなら、試さずにはいられなかった。
ここまで言えば、カリムも折れるだろう。そんなイズモの思惑は、顔を上げたカリムの目の鋭さに打ち砕かれた。
「分かりました。では、こうしましょう」
カリムは刀身から手を離すと、両手でイズモの手を包んだ。血がイズモの手を濡らす。
困惑するイズモに、カリムが悲しそうに微笑む。
「イズモ様、ご決断を」

次の瞬間、カリムはイズモの手を一気に引き寄せた。
剣が、カリムの腹に刺さる。
刃先が皮膚を破り、肉に食い込む感触。
カリムはとっさに引こうとするイズモの手を押し留め、さらに深く刺す。カリムの顔が苦痛に歪む。腹から血があふれ出し、白い毛を赤く染めていく。
「カリム!?」
近づこうとするバーリたちを、カリムは手で制する。その鬼気迫る表情に、三人もそれ以上、近づくことができなかった。
「イズモ様、選んで、ください。森を出るか、森に残るか」
カリムは口から血を垂らしながら、凄絶（せいぜつ）な笑みを浮かべる。
今度こそ、イズモは言葉を失った。
短剣は内臓を傷つけている。早急に処置をしなければ命に関わる。当然、森を出るどころの話ではない。
その一方で、今ならイズモを止める者はいない。魔術を再開すれば、森を出られるだろう。それは、カリムを見捨てることを意味する。
――こいつは、自分の命を盾にして、オレを止める気なのか？
カリムの手が力を失い、体が後ろへと傾く。

剣が抜け、腹から血が吹き出す。
倒れるカリムの体を、バーリが滑り込むようにして抱きとめる。丁重に地面に寝かせ、ラティフとムグニが駆け寄る。
「出血がひどい！　血を止めなきゃ！」
ラティフとムグニが自分の腰布を外し、カリムの傷に押し当てる。腰布が本来の赤とは別の、どす黒い色へと変わっていく。
「カリム！　目を開けろ！　カリム！」
バーリの呼びかけにも、カリムは目を閉じたまま、返事をしなかった。カリムの白い顔は血の気を失い、死人の蒼白に変わっていた。
布で止めきれなかった血が腹からこぼれ、地面にまで広がり始めていた。三人の顔が焦燥に歪む。
「ムグニ！　カリムの鞄から血止めの薬を探せ！」
「傷が深すぎる！　塗り薬が役に立つかよ！」
「ムグニ、そこをどけ」
低い声に、ムグニが顔を上げる。
イズモが魔術符を手に立っていた。
「カリムに近づくな！　人殺しはすっこんでろ！」

「カリムはまだ死んでいない。ここはイズモ殿に任せよう」
怒鳴るムグニをバーリが引き剥がし、羽交い締めにする。イズモは血で濡れた腰布をどけ、傷をあらためる。
「やめろ！　バーリ、離せ！」
「お前は少し静かにしていろ」
バーリが力を込め、ムグニはカエルが潰れるような声を出して静かになった。
「助かるよね？」ラティフがすがるように問う。
イズモは黙ったまま頷き、持っていた魔術符を腹の傷を覆うように貼る。
最上級の治療用魔術符が発動。傷ついた臓器や筋組織が修復され、傷口が見る間に塞がる。失われた血が補充され、顔に赤みが戻る。
続いてカリムの手を取り、指と手のひらの切創に魔術符を貼る。切り傷が閉じていき、どこに傷があったのかさえ分からなくなる。
「カリム」イズモが呼びかける。
夢から覚めるように、カリムがゆっくりと目を開く。青い目が、自らを覗き込むラティフとバーリ、そしてイズモを捉える。口元に弱々しい笑みが浮かぶ。
「信じていました」
「すまない」

カリムの手が伸ばされ、イズモの頬に触れる。存在を確かめるように、毛並みに沿って、優しく撫でる。
「ご不便をおかけしていることは承知しています。ですが、今しばらく我々と時間を共にしていただけないでしょうか。イズモ様がこの森に来られたことには、何か意味があるはずです」
「すまない」
カリムはもう片方の手で、傷のあった場所を撫でる。
「戦士たちは、日々このような痛みに耐えて、戦いに臨んでいるのですね。その一端を知ることができ、嬉しく思います」
「すまない」
カリムはイズモのうなじに手を回すと、優しく引き寄せた。イズモは抵抗することなく、服に血がつくのも構わず、カリムに身を委ねる。
ラティフとバーリは顔を見合わせ、静かに微笑んだ。

4

その日は、珍しく雨が降った。

夜明け前から分厚い雲が空を覆い、普段なら日が昇る頃に、雨がぱらぱらと降り始めた。雨脚は時間とともに激しくなり、日が暮れる頃には叩きつけるような雨へと変わった。

戸口から見える森は新月の夜を思わせる暗さで、何かが息を潜め、好機を待っているように思われた。

――これが〈風〉の予言した雨なのでしょうか。

屋根を打ちつける雨音を聞きながら、カリムはそんなことを思った。

二度目の〈風寄せ〉によると、この雨をきっかけに事態が動く。森に潜んでいる彼は、この雨に自身の運命を託してしまう。ただ、それによって村や彼がどうなるのかまでは、告げられなかった。その価値がなかったのか、あるいは、すべてを知るとされる〈風〉にも見通せなかったのか。

雨には、いい思い出がない。

何年か前の夏、退屈のあまり、雨が降りしきる中を村に降りたことがあった。普段とは違う村の雰囲気を楽しんでいると、年配の男が飛んできた。すぐに家に戻され、風邪を引いたらどうすると、こっぴどく怒られた。さすがにムッと来て、川に入るのと何が違うのかと不満を漏らしたら、川に入ることも禁じられた。

それ以来、カリムは村人と距離を置くようになった。彼らにとって大切なのは神

の使いであり、カリム個人ではないのだと痛感した出来事だった。
それからというもの、家の中で時間がすぎるのを待つだけの日が続いた。閉塞感のあまり、生きる意味を見失いかけたとき、現れたのがイズモだった。
——そういう意味では、イズモ様も私と同じですね。
カリムが自傷行為に及んでから、イズモは村の中で静かにすごしている。畑を手伝ったり、子どもたちの相手をしたりと、村人と交流を深めている。
森を出ることを諦めたのだろうか。イズモの性格を考えると可能性は低い。きっと、カリムの想像の及ばないようなことを密かに考えているに違いない。それも懸念材料のひとつだが、イズモに尋ねても答えてくれないだろう。
ふと、人の気配を感じ、カリムは顔を上げた。戸口に誰かが立っている。
「イズモ様？」
他に、こんな時間にやってくる人間に心当たりがなかった。今日は夕食をガビトたちと食べると言っていたが、気が変わったのだろうか。
しかし、入ってきたのは大柄な黒い虎人だった。闇夜を切り取ったような体毛に夜明けの光を思わせる金色の縞模様。
「あの男でなくて悪かったな」
アドルは全身から水滴を滴らせながら、低い淡々とした声を出した。めったに感

情を見せないアドルにしては珍しく、不機嫌そうな言い方だった。
アドルは水気を払わないまま家の中に入ってきて、火のそばに腰を下ろした。濡れそぼった毛が床に触れ、ぐしゃりと湿った音を立てた。おかげでアドルが通ったところは水浸しになっていたが、カリムは何も言わなかった。アドルが身の回りのことに無頓着なのは昔からだ。
「酒をくれ」アドルはカリムに目を合わせないまま言う。
アドルが自ら酒を求めるのは珍しい。不思議に思いながら、カリムは棚から酒の壺と杯をふたつ取った。ひとつをアドルに渡し、アドルと自分に酒を注ぐ。ふたりは杯を軽くぶつけると、同時にあおった。酒が胃に入り、体が熱くなる。
「こんな時間にどうしたのですか？」
「腹の傷はもう平気なのか？」
アドルがカリムの腹に手を伸ばす。長い指が臍の下の毛をかき分けると、柔らかな毛の間から桃色の地肌が現れる。毛が多少不揃いになっているくらいで、傷の痕跡は見えなかった。
「痛みも違和感もありません。魔術とは便利なものですね。私の薬では間違いなく死んでいたでしょう」
カリムは微笑み、アドルの手に自分の手を重ねる。話が逸らされたことには気づ

いていたが、あえて指摘しなかった。
「バーリは、もう助からないと思った、と言っていた」
「実際、そうだったと思います」
「お前が何を考えているのか、俺には理解できない」
アドルが呆れたようにため息を吐いた。
「お前が自分の腹を刺したと聞いたときは耳を疑った。村のためとはいえ、自分の命を取引に使うなど正気の沙汰ではない。あの男が己の利益を優先するとは考えなかったのか」
「あのときは、そこまで深く考えていませんでした」
カリムはそのときのことを思い出したように目を伏せる。
「どんな手段を使ってでも止めねばと思い、気がついたら自分を刺していました」
イズモが祈り始めた瞬間、全身に悪寒が走った。ほとんど本能的に、これは駄目だと思った。
そこから先のことは、よく覚えていない。自分が自分でなくなったように、考えるより先に行動していた。
腹から剣が抜け、血が冗談のように流れ出すのを見たときは、さすがに死ぬかもしれないと思った。しかし、怖くはなかった。イズモの、あのうろたえる目を見た

とき、自分は間違っていなかったと安心さえした。
アドルは理解できないというように、眉をひそめる。
「どうしてそうなる。剣を奪うなり、殴って気絶させるなり、抱き上げてその場から離れるなり、方法はいくらでもあったはずだ」
「それでは、その場しのぎにしかなりません。あの行為が望ましい解決方法ではないことを、分かっていただく必要があったのです。ただ、どうして自分を刺せばいいと思ったのかは覚えていません」
困ったような笑みを浮かべるカリムに、アドルは深々と息を吐いた。
「お前にしろ、ラティフにしろ、バーリにしろ、あの男に肩入れしすぎだ。大人たちは警戒すべきという意見が大半にもかかわらず、お前たちが支持するために村は分断しかかっている。平衡を保つ身にもなれ」
表情は変わらないものの、アドルの声には疲れの色が滲んでいた。
長という立場の難しさはカリムも承知していた。村の会合において、発言力の強さは年齢に比例する。そのため、年長者がアドルの方針に真っ向から反対することも珍しくなく、議論が紛糾し、何も決まらないことが多々ある。それでも村が成り立っているのは、最高齢であるバーリのとりなしがあるからだ。
今回はそこに、イズモという前代未聞の存在が関わっている。成人とはとても思

えない見た目と背丈にもかかわらず、バーリに次ぐ高齢だという。大人たちの立場を覆しかねない存在だった。

イズモの扱いについては、大人たちの間でも意見は割れており、そこに個々人の確執が入ることで収拾がつかなくなっている。

イズモに村の状況を伝えないことで、いったんは合意したが、表立って味方する者がいると、微妙な均衡が崩れてしまうのだろう。

「アドルの心労は承知しています。しかし、イズモ様は村の恩人です。蔑ろにしては我々の品位に関わります」

「あの男に関わるなとは言わない。ただ、程々にしろ。あの男がお前たちを助けたのは偶然だ。常に、村のために行動するとは限らない」

「それは忠告ですか？」

「俺にもしものことがあったときの遺言だ」

アドルの表情が引き締まり、まとう空気が緊張を帯びる。ふたりを包んでいた穏やかな雰囲気は消え去り、雨でひんやりとしていた家の温度がさらに下がった気がした。

「どういうことですか？」

「予定通り、明日決行する」

「明日、ですか」
「儀式の日が迫っている。これ以上、相手の出方を窺っている余裕はない」
アドルの言葉に、カリムの表情が曇る。
「それが村の決定なのは分かっています。しかし、本当に、争わずに済む道はないのですか？」
「相手は我々に攻撃の意思を見せ、あの場から動こうとしない。予言の期日もある以上、一刻も早く取り除かねばならない」
アドルの声には、有無を言わせない硬質な響きがあった。
それは年長者たちと議論に議論を重ねた上で出した結論だった。話し合いの場にはカリムも同席し、納得したはずだった。それでも、実行の時が迫ると、胸がざわめいた。
「ひとりで行くことも、変える気はありませんか」
「彼らは総がかりでも、俺に〈神剣〉を使わせることができなかった。同行したところで足手まといになるだけだ」
アドルは無感動に言い放った。揶揄するわけでも、見下すわけでもない。事実を冷徹に告げているだけだった。
アドルが敵陣に単独で乗り込むと宣言した際、カリムを除く全員が反対した。特

にバーリは、副長のルールを曲げてでも自分を連れて行けと凄んだ。結局、アドルに残りの全員が同時に挑み、地面に膝をつかせたら、相手の言うことを聞くという話になった。そして、アドルは数秒で全員をねじ伏せた。
「バーリたちが反対したのは、アドルひとりに村の命運を背負わせるべきではないと考えたからです。彼らにも戦士としての誇りがあります」
「感情的な納得のために、彼らを犠牲にするわけにはいかない。これは村の存続の問題だ。お前が命懸けでやったことを、俺もするだけだ」
アドルの手がカリムの頬に触れる。美しい指が、頬を優しく撫でる。
彼の決意を後押ししてしまったのは、他ならぬ自分なのかもしれないと、カリムは思った。
アドルは言葉や表情にこそ出さないが、村の者たちを大切に思っている。中にはアドルを悪し様に言う者もいるが、アドルはそういった者たちも含めて、彼らがより良く生きるために、心を砕いている。
「ではせめて、イズモ様を頼ることはできませんか？　すべてを話さずとも、助言をもらえるかもしれません。アドルが話しにくいのなら、私から――」
「カリム」アドルの冷たい声が遮る。「お前は、あの男が予言の狩人だと本気で信じているのか？」

カリムは頷く。一度目の〈風寄せ〉のとき、村の行く末を尋ねたら〈風〉が言ったのだ。心に鳥を宿した、小さな狩人が森にやってくる、と。

「それで、あの男を惚れさせることはできたか？」

「それは……」

「あの男が我々を救うには、お前に好意を抱くことが条件だと、お前は言った。そして、任せてほしいとも言った。だから、俺はお前の望むままにさせた。ふたりだけで村を案内させ、山で魔石を探させ、魔術を見せる場を用意した。さらには村を出る手伝いに同行させた。それで、成果は？」

アドルの詰問に、カリムは答えられなかった。断言できることは何もなかった。

「親切にすれば、好意を返してくれると思ったか？　あの男は混沌だ。誰にも制御できない。お前は利用されているだけだ」

「そんなことありません。私に外の世界を案内すると約束してくださいました」

「ただの世辞だ」

「〈神獣の瞳〉のことを話してくださいました」

「俺が脅したからだ」

「森を出るより、私を選んでくれました」

「人殺しになりたくなかっただけだ」

カリムは言い返せなかった。言い返せるほど、イズモのことを知らなかった。そのことがカリムをさらに動揺させた。
「諦めろ。あの男がお前を好きになることはない。これ以上、俺の前であの男の名を呼ぶな」
突き飛ばされるように押し倒される。カリムが起き上がる前に、腰布が剥ぎ取られた。いつにない強引さにカリムはたじろぐ。
「アドル、せめて、寝床で――」
不平はアドルの唇によって塞がれた。舌がねじ込まれ、口の中で暴れまわる。噛みつくような、乱暴な口づけだった。
ようやく解放されたとき、アドルが壺ごと酒をあおっているのが見えた。アドルは驚くカリムの顎を掴み、唇を押し当てる。直後、甘い液体が口の中に流れ込んでくる。吐き出そうとするが、アドルの舌に防がれる。鼻を押さえられ、注ぎ込まれた大半を飲み込んでしまう。
胃が焼けるように熱くなる。顔が火照り、視界が滲む。酒を一度にこんなに飲んだのは初めてだった。
困惑するカリムをアドルが覗き込む。
「お前の相方は俺だ。それとも、あの男のほうがいいのか？」

「そんなことは言っていません。ですが、こんな乱暴な――」
「今夜が最後になるかもしれない。それでも、拒むか？」
アドルの深い憂いを帯びた声に、カリムは続く言葉を飲み込んだ。渦巻く天球のような瞳に、深い哀愁の色が滲んでいる。
イズモが村に来てからというもの、アドルはカリムの家に近寄らなくなった。今ならそれが、イズモがカリムに近づきやすくするための配慮だったと分かる。しかし、当時のカリムは、ただ不思議に思うだけだった。
アドルは優しい。自己を顧みず、他人を思いやる。だからこそ、今夜は酒の力を借りたのだ。強すぎる自制を捨て、カリムを強引にでも抱くために。これが最後の機会かもしれないから。
「あなたの気持ちに気づかないなんて、相方失格ですね」カリムが申し訳なさそうに目を伏せる。「許してもらえますか？」
「お前の態度次第だ」
アドルが腰布をむしり取り、猛々しく膨れ上がった己を剥き出しにする。太く反り返り、血管の浮き出たそれは肉でできた凶器だった。先端は待ちきれないように濡れていた。
アドルの指先がカリムの花芯を探る。

カリムが息を吐くと、肉の蕾は自ら咥え込むように口を開けた。アドルが指を動かすと、簡単に指の形に広がる。しばらくそうしていると、淡い桃色の穴が物欲しげに湿り気を帯びる。

　アドルは指を引き抜くと、緩んだ蕾に自分自身をあてがった。

「アドル、もう少し待ってくださ――」

　制止も虚しく、アドルは腰を突き出した。襞が引き伸ばされ、肉の凶器がカリムの未知の領域にまで侵攻する。

　いきなり奥まで突かれ、カリムは苦しさに顔を歪める。しかし、アドルは気にする様子もなく、性急に腰を動かす。いつものアドルとは思えない乱暴さだった。

　腰がぶつかるたびに、肉壷は粘着質な悲鳴を上げ、アドルにまとわりつくように締めつける。鋭敏になった感覚で、自分の中で動くアドルの、血管の凹凸（おうとつ）までも感じられる気がした。

　荒々しく犯されながらも、カリム自身もまた歓喜の涙を流していた。体が揺れるたびに滴が落ち、堀の深い腹筋に淫らな光を散らす。

　アドルの手がカリム自身に伸びる。先走りを塗り込めるように扱く。

「――――！」

　カリムは声にならない悲鳴を上げ、体をこわばらせる。足の付け根をくすぐられ

るような、こらえきれないむず痒さが全身を駆け抜ける。
アドルはカリムの反応を楽しむように、手を動かす。腰使いの激しさとは裏腹に壊れ物を扱うかのような優しい愛撫だった。
耐え難い快楽に身を捩(よじ)らせながら、カリムはアドルを見上げた。
アドルは黒い大きな影のようだった。漆黒の毛は焚き火の光を吸い込み、目だけが爛々(らんらん)と輝いている。
アドルの呼吸が荒くなる。大きな手がカリムの腰骨を掴み、うねらせるように腰を振る。カリムの中で甘い痺れが形を持ち、腹の底で渦巻き始める。小さかった渦は、瞬く間に大きなうねりとなり、カリムの理性を揺さぶった。
「アドル、私は、もう」
カリムは熱に潤んだ目で懇願する。アドルは黙ったまま動きを加速させ、カリムを撫で上げる。それが最後のひと押しとなった。
「ぐ……ぅ……」
渦が爆発。すべてを飲み込む流れとなって、駆け上がる。
白濁がカリムの先端からほとばしる。大きな弧を描き、腹どころか胸元にまで達する。放出は続き、純白の毛の草原に、濁った大河を作る。川は胸や腹筋の谷間を流れ、地面へとこぼれる。

激情に襲われ、カリムはアドルを一層締めつけた。
アドルがぐぐもった声を漏らす。カリムを抱きしめ、腰を押しつける。カリムの奥深くに、灼熱の嵐が吐き出された。荒れ狂う濁流が体の内側を打ちつけるように流れ込み、体の奥深くに熱が溜まっていく。睾丸が収縮を繰り返し、一滴残らず送り込もうと動く。カリムに、己の痕跡を残そうとするかのように。
脈動が終わった後も、アドルは体を離そうとはしなかった。粘度を失った精液がふたりの毛に染み込んでいく。
「……アドル？」
声をかけるが、返事はなかった。
酔いが回ったか、あるいは疲れたのか。しかし、息を切らせた様子はなく、規則正しい鼓動が分厚い胸から伝わってくる。
アドルはカリムの首筋に鼻先を埋めたまま、動こうとしなかった。
「カリム」心配になってきたころ、耳元で囁くような声。「愛している」
カリムはしばし言葉を失い、ふっと口元を緩める。
「私もです。兄さん」
アドルの背中に手を回し、力を込める。山のように隆起した筋肉。自分と同じはずなのに、ひと回り大きく感じる体。しかし今は、幼い子どもを抱いているような

気がした。
「私は神の使いです。世界がそうあろうとするならば、私は従わねばなりません」
アドルはカリムの言葉を黙って聞いていた。その様子からは、肯定の意思も否定の意思も読み取れなかった。
「だから、アドル。あなたをもっとください」
「……望むところだ」
アドルはカリムを抱き上げると、寝床へと向かった。

五章　災いの訪れ

「夜になっても、弟は帰ってこなかった」
「心配になり、兄は弟を探しに向かった」
「弟の匂いを手がかりに、森を歩き回った」
「ようやく見つけた弟は、花畑の中で息絶えていた」
「弟の遺体には首がなかった」
「無数の足跡と魔術の痕跡から、人間に殺されたのだと悟った」
「弟の首を取り返すため、兄は地面にこぼれた血の跡を追った」

1

夜明け前にイズモは目を覚ました。寝床から抜け出して、大きく伸びをする。凝り固まった体に血が流れ、全身が目覚めていく。
外を見ると、薄紫の空が広がっていた。雲ひとつない、昨日の雨が嘘のような快晴だった。森を満たす湿気を帯びた空気も、日が昇れば消えるだろう。
計画を実行するのに、これほどうってつけの日もない。
イズモはポケットに触れ、例のモノが間違いなくそこにあることを確かめた。この日のために、家に閉じこもって試行錯誤を重ねた品だ。うまくいくかは分からないが、試す価値は十分にある。
「こっちは人生がかかってんだ。そう簡単に諦められるか」
口にすると、後には引けないという思いが強くなる。
カリムの自傷騒ぎは、アドルの指示によって隠匿（いんとく）された。罰しない代わりに、しばらくは行動を慎むように言われて終わりだった。

理由を尋ねると、村の男たちが知ったが最後、イズモは生まれてきたことを後悔しながら数日かけて死ぬことになるだろうと、アドルは真顔で言った。カリムが自分で傷つけたなどという言い訳は、彼らには通用しないらしい。

イズモとしては、アドルの寛大な措置に感謝する他なく、ここ数日は村人の手伝いをして慎ましく過ごしていた。

実際のところ、イズモ自身も、先日の行動は軽率だったと反省していた。急な思いつきを深く考えないまま実行し、それがカリムの予想外の行動を招いた。本来のイズモなら、入念に検討し、密かに準備を進めるはずだ。

そして、その通りに行動し、完成したのが、ポケットの中のものだった。

――やるとしたら山だな。

道具の性質上、人目のない高い場所が望ましい。となると、一箇所しかない。それなりに離れているが、往復でもそこまで時間はかからないだろう。

カリムは以前、ひとりで山に登ってはならないと言っていた。つまり、ひとりだけいなくなった人間を探す場合、山は最後となる。掟を守るのが当たり前なら、山にいる可能性は低いからだ。それを逆手に取り、あえて山に行くことで、時間を稼ぐことができる。

案外、昔の人間も密かに山で作業するために、この掟を作ったのかもしれない。

——それはそれとして、村には早く戻らないとな。
いずれ裏切るにしても、そのときまでは村に溶け込んだふりをして、表面だけでも村人たちと仲良くしておかなければならない。そのために、イズモは毎日、午前中は畑の手伝いをし、午後は子どもたちの相手をした。できれば狩りにも参加したかったが、村が厳戒態勢にある中、申し出ることははばかられた。
村の一員を演じるのも楽ではない。そんなことを思っていると、何かが爆ぜる小さな音と魔術の波長を感じた。
ユピトガが来たのかと身構えるが、敵意は感じなかった。不思議に思い、戸口から顔を出す。
広場にラティィフとムグニの姿があった。
ラティィフが銃を構え、ムグニはそばに座っている。
ふたりの視線の先には、太い木の枝で作った的が三つ並べあった。ラティィフから的までは、銃の有効射程ギリギリといったところ。ラティィフの目は鋭く、気安く声をかけられない雰囲気があった。
ラティィフの指が動く。パパパ、と連射音。直後、枝が左から順に弾かれたように跳ねる。さらに連射音。浮き上がった的にさらに弾が当たり、枝は激しく回転しながら宙を舞った後、地面に落ちた。

ラティフが銃を下ろし、息を吐く。
イズモは思わず拍手をしていた。ふたりがイズモに気づき、ラティフははにかむように笑い、ムグニは鼻白んだように眉をひそめた。
「すごいじゃないか。動いている的に当てるなんて、なかなかできないぞ」
「ありがとう。いっぱい練習したんだ」
イズモに褒められ、ラティフの笑顔が数段上がる。
「こんな短期間に、ここまで上達するとは思わなかった。もしかして、オレの知らないところで、ずっと練習してたのか。ムグニも一緒に？」
「朝から隣でゴソゴソされたら、嫌でも目が覚める」
ムグニがぶっきらぼうに言い、わざとらしくあくびをする。言い方には棘があるが、なんだかんだ手伝っているあたり、ラティフが気になるのだろう。
「いつもは川でやってるんだけど、今日は昨日の雨で増水してるから、皆が起きてくる前に少しだけ練習しようと思ったんだ」
「いい心がけだな。開けた場所なら誤射の心配がない」
「それもあるんだけど、大人たちはあんまりいい顔をしないから」
「そんなことないだろ。カリムもお前が元気になったら、皆は喜ぶと言ってたぞ」
「いろいろあるんだよ」ムグニが横から口を挟み、ラティフを肘でつつく。

なんだからよく分からないが、イズモの知らない事情があるらしい。
「残念だな。この腕前なら、狩りもできると思うんだが」
「ほんと⁉」
ラティフの顔がぱっと明るくなり、反対にムグニの顔が曇る。
「鹿とか猪なら問題なく仕留められるはずだ」
「魔獣は？」
「うーん、ちょっと厳しいだろうな」
今度はラティフが少し残念そうな顔をし、ムグニの表情が和らぐ。
「そう落ち込むなって。無茶をして、また危ない目に遭ったらどうするんだ。それに、一緒に狩りをする人間にも銃への理解が必要だ。急いでもいいことはない」
ムグニが同意するように何度も頷く。
実際のところ、魔獣が相手でも、ちゃんと急所を狙えば、それなりに戦えるだろう。ただ、それを言ってしまうと、ラティフはひとりで狩りに行きかねない。大人たちが銃に肯定的でないなら、睨まれるような真似は避けたかった。
ラティフは俯いて地面を蹴っていたが、気を取り直したように顔を上げる。
「ねえ、イズモ。ひとつお願いがあるんだけど」
「なんだ？」

「アドルの許可が出たらだけど、一緒に狩りがしたいんだ」
「おい、なんで俺じゃなくて、こいつとなんだよ」
「ムグニが一緒に行くのは前提でしょ」
突っかかってきたムグニに、ラティフは当たり前のように言う。ムグニは頬を膨らませ、目を逸らす。
「もちろんいいぞ。練習の成果を見せてもらおうか」
ラティフの顔が明るさを取り戻す。イズモが見た中で、一番いい笑顔だった。
「それはそうと、お前はこんな朝早くにどうしたんだよ」
「用を足しに起きただけだ。そしたら、射撃の音が聞こえて……」
本来の目的を思い出し、何食わぬ顔で用意していた言い訳を言う。備えあれば憂いなしとはよく言ったものだ。
「だったら、とっとと行けよ。ちんたらしゃべってたら、皆が起きてくるぞ」
ムグニはそう吐き捨てると、的を回収に向かった。
「分かってはいたが、あいつに好かれるのは難しそうだな」
「そんなことないよ。口が悪いだけで、本当はイズモのことを認めてる」
「そう思える要素は皆無なんだが」イズモは疑わしそうに言う。「お前にだけは別の顔を見せるのか？」

「ううん。ムグニは誰に対しても、あんな感じ」
「……お前の相方を悪く言うつもりはないが、なんであいつはああなんだ？」
　思わず言ってしまい、ラティフが目を伏せる。
「僕が悪いんだ」
「あ、いや、お前を責める気はなくてだな」
　イズモは慌てるが、ラティフは「そうじゃなくて」と首を振る。
「ムグニは、自分のせいで僕が狩りをできなくなったと思ってる。もともと暴力なんて好きじゃなくて、体もイズモより小さくて、女の子みたいにきれいな顔で、誰にでも優しくて。でも、僕を守るために全部捨てたんだ」
　以前、カリムから話を聞いたとき、相方であるムグニについては、一切言及がなかった。今のラティフの話と合わせると、ある仮説が浮かんできた。
「お前が〈成人の儀〉で魔獣から守ろうとしたのは、ムグニだったのか？　もしかして、原因を作ったのも？」
　ラティフはすぐには答えなかった。遠くで的を並べるムグニを見つめていた。
「このことは、誰にも言わないって決めてたんだけど」
　しばらくして、ラティフが口を開いた。
「あのとき、ムグニは崖の上から、おしっこをしてたんだ。でも、運の悪いことに

下で大猪口が寝てて、怒って突っ込んできたんだ。ムグニはびっくりして動けなくなっちゃって、気づいたら飛び出してた」

辛いはずの過去を語るラティフの口元には、微笑すら浮かんでいた。この少年にとって、その日は大切な相方を守り抜いた、誇るべき日なのかもしれない。

もし、自分の行動が引き金となり、将来を約束されていた人間がすべてを失ってしまったら。そして、その相手は自分を責めすらしないとしたら。イズモはその負い目に耐えられるだろうか。ムグニの変貌は、彼の出した答えなのだろう。

「ムグニは、本当はすごく優しいんだ。口と態度が悪くて誤解されやすいけど、誰よりも皆のことを考えてる」ラティフが乞うような目でイズモを見る。

そう言われてみると、言い方や態度の割に、ムグニの振る舞いは紳士的だ。

山では、パンを盗み食いしたガビトを叱っただけで、代わりに鞄を背負い、誰に言われるでもなく見張りをした。イズモが森を出ようとしたときも、木の印を見逃さず、伝承をきちんと語ってくれた。的の並べ方にしても、位置や角度を工夫している。ラティフの言う通り、悪い人間ではないのだろう。

「……そうだな。ムグニの責任感の強さは、オレも認める」

不思議な組み合わせだ、とイズモは思う。穏やかに見えて、突拍子もない行動に出るラティフと、粗暴に見えて、慎重で思慮深いムグニ。正反対に見えて、互いに

補い合い、相手のことを深く気にかけている。
――これは、間に入るのは無理だな。
イズモがどれほどラティフと仲良くなったところで、ムグニは次元の違う位置にいる。ムグニにとってラティフも、そうなのだろう。魂が結びついているというのは、決して大げさな表現ではないようだ。
イズモはふたりを、少しだけ羨ましく思った。
そうこうする内にムグニが戻ってきて、眉を上げる。
「まだ行ってなかったのかよ。本当に小便に起きてきたのか？」
「おっと、失礼」
そう言うと、イズモはそそくさと家の裏側へと向かった。用を足すふりをしながら練習が再開するのを見計らい、山へと向かう。
途中で何度か振り返るが、誰かがつけてくる気配はなかった。
練習を再開してしばらくすると、太陽が顔を出した。ラティフは構えていた銃を下ろし、目を細める。森に陽光が差し込み、雨露に濡れた葉を輝かせる。湿った空気が日陰へと追いやられ、爽やかな一日が始まろうとしていた。
「落ち着いたか？」

「うん、ありがとう」
ラティフは銃をホルスターにしまうと、大きく息を吐いた。銃撃に集中したおかげで、アドルを見送ったときの胸のざわめきは収まっていた。
「不安になるのは分かるけどな。アドルなら大丈夫だろ」
ムグニが軽く言い、ラティフも頷く。アドルなら心配はない。しかし、万一ということもある。
「今からでも、イズモに手伝ってもらえないのかな」
「無理だろ。あいつを疑っているやつが、いっぱいいるんだから」
「ムグニも、今でも疑ってる？」
ラティフがおそるおそる尋ねると、ムグニは少し考える素振りをする。
「まあ、な。だけど、お前の信頼は裏切らないって信じてる」
「それって、全面的に信じてるってこと？」
「お前、そこまで信頼してるのかよ」
ちょっとは疑えよ、とムグニは呆れたようにため息を吐く。
イズモを信じて何が悪いのか。そう思っていると、ラティフの腹が鳴った。今日はまだ、朝食を食べていないことを思い出す。
「朝ごはんどうしよっか」

「最近、肉が続いてたから違うものがいいな」
「マスの干物がまだあったはずだから、それを焼こうか」
ラティフの提案に、ムグニが目を輝かせる。
ふたりで的を片付け、家に戻ろうとしたころ、カリムがやってきた。
「イズモ様を見かけませんでしたか？」
「さっきまで一緒にいたよ。おしっこしに起きたって言ってたから、今は家にいると思うけど」
「それが、いらっしゃらないのです」
ラティフとムグニは顔を見合わせる。ふたりはずっと広場にいた。イズモがどこかに出かけたなら、気づかないはずがない。
「よく考えたら、あいつが家に戻ったところも見てないな」
ムグニが思い出したように言う。つまり、ふたりに隠れてどこかに行ったということだ。ラティフはある可能性に思い当たった。
「もしかして、アドルを助けに向かったんじゃない？」
「あいつは何も知らないはずだろ」
アドルからは、イズモには何も話すなと厳命されている。誰かが漏らしたとは考えにくいが、他に出かける理由が思いつかなかった。

「────!?」
突然の奇声に振り返ると、カリムが空を見上げていた。ラティフには分からない言葉で、何かと言い合うように話している。相手は〈風〉のようだが、いつになく切羽詰まった様子だった。
しばらくして、カリムはラティフとムグニに視線を戻した。燃えるような赤い瞳に体が強ばる。
「イズモ様を連れ戻します。ムグニ、同行を」
「なんで俺？　そもそもどこにいるか分か────」
「御山（おんやま）です。急ぎます」
カリムのただならぬ気配に、ムグニがしぶしぶ頷く。
「バーリには私から伝えます。ラティフ、留守番を頼みます」
言うが早いか、カリムはアドルの家に走り出していた。
「いったい、なんなんだよ」
ムグニが不平をこぼしつつ追いかける。ラティフには、ふたりの背中を見送ることしかできなかった。
──イズモが、ひとりで御山に？
収まっていた不安が再びざわめき始める。

魔石が足りなかったのだろうか。ラティフを巻き込まないように、内緒で出かけたのだろうか。心遣いはありがたいが、それならそれで、ひと言欲しかった。

しかし、カリムの様子を思うと、単に魔石を取りに行ったとは思えなかった。ひとりで御山に行って魔石を持ち出すのが問題なら、ラティフが捕まっていなければおかしい。

では〈風〉がカリムに伝え、連れ戻させるほどのこととは？　魔石を持ち出すよりもっと悪いことを、イズモはする気なのだろうか。

御山にひとりで登ると、村に災いが訪れる。

ラティフのときは倉庫が襲われた。イズモの場合、もっと悪いことが起きるのだろうか。

――あれは迷信だ。僕はイズモを信じる。

そっと、ホルスターの銃に触れる。イズモはラティフのことを気にかけ、銃をくれた。イズモのせいで、悪いことが起きるはずがない。

朝食の準備をして、ムグニを待とう。そう思い、家に戻ろうとしたとき、バーリが戸惑った表情でやって来るのが見えた。

「カリムが御山に行くと言って飛び出していったが、何かあったのか？」

「イズモが行方不明なんだ。さっきまで僕たちと一緒にいたんだけど」

言った途端、バーリが肩を落とす。
「最近、妙に静かだとは思っていたが、なんと間の悪い」
バーリの声には、仲裁者としての嘆きが多分に含まれていた。
実のところ、アドルやバーリがイズモを扱いあぐねていることに、ラティフは気づいていた。
言葉を話せるようになってから、イズモは村のことに、積極的に関わってくるようになった。それ自体は喜ばしいことなのだが、残念なことに、何をするにしても少し偉そうなのだ。具体的にどこがどうとは言えないが、言動から滲み出す、どこか見下したような雰囲気が、大人たちの反感を買っていた。
イズモは自分たちとは違う人間である。一緒にいる時間が長くなるほど、そんな思いが拭えなくなっていた。
「バーリは、イズモが悪い人だと思う？」
「お前らしくもない。だが、そう尋ねたくもなるか」
ラティフの問いに、バーリは苦笑する。
「人は複数の顔を持っている。他人から見て好ましい面もあれば、好ましくない面もある。俺やお前はイズモ殿のいい面を知っているが、村のすべての人間がそうではない」

「皆もイズモのいいところを知ったら、仲良くできるのに」
「残念ながら、そう簡単にはいかないだろう。考えの違う人間が理解し合うのはとても難しいことだ」
　バーリの言葉には、長を務めた者の苦渋が滲んでいた。村の中にも、気の合う人間もいれば、気の合わない人間もいる。皆仲良くが幻想にすぎないことは、ラティフも知っている。
「でも、イズモがずっと仲間外れなんて嫌だよ。せっかく、一緒に狩りに行くって約束してくれたのに」
　バーリがふと優しい目をする。
「分かっている。だからこそ、俺やアドルはイズモ殿が村に馴染めるよう、腐心している。あの方はきっと、村に光をもたらしてくれる。だからお前も信じてやってくれ」
　バーリの大きな手が、ラティフの頭に乗せられる。いつもなら、子ども扱いに憤慨するところだが、今日はとても頼もしく思えた。イズモはきっと大丈夫だと、信じさせてくれる温かさがあった。
「お前が狩りに行くときは、俺も同行させてくれ。死ぬ前に、お前が戦う姿をこの目で見られるとは、俺は幸せ者だ」

　バーリが妙に感慨深げに言う。大げさな、とラティフは思ったが、余計なことを言って、水を差すのも気が引けた。
「一緒に狩りに行くなら、僕が撃つところを見てほしいな。弓とも違うから、知らないと危ないよ」
「それは大変だ。ぜひ見せてくれ」
　ラティフが的を置きに走りかけたとき、森の中で何かが動くのが見えた。

「この辺でいいか」辺りを見回し、イズモは満足気に言った。
イズモがやって来たのは、以前、カリムたちと魔石を探した広場だった。ガラントのいる街の方角に開けており、村から見えないという条件を満たしている。ここより下だと木が邪魔になり、ここより上だと帰るのに余計な時間がかかる。まさに最適な場所だった。
「さて、始めるか」
　イズモは懐から用意していた魔術具を取り出した。
　ガラントが作った、通信機の魔術具だった。イズモの手を少しはみ出すくらいの大きさで、外見は一般的な無線機に偽装されている。攻撃魔術が使えないにもかかわらず、ガラントが特級魔術師に認定されているのは、この魔術具と世界中の雑談

相手、もとい協力者のおかげだ。

作ったガラントいわく、星の裏側にいる相手とでも話せるらしいのだが、この森に入ってからはどういうわけか通じずにいた。

――おそらく、強すぎる結界の影響だ。

ガラントの通信機は、対となる魔術具の間に魔術空間を形成し、音声を伝達する仕組みらしい。物理的な手段では妨害できないが、この森に張り巡らされた結界のせいで魔術空間自体が作れず、通話できなかった可能性がある。

――つまり、結界を迂回できれば通じるってことだ。

常識外の力による結界といえども、山の上空を含めた森すべてを完全に包んでいるとは考えにくい。それを裏付けるように、光や空気が制限を受けているようには見えず、雨が降るということは水も循環している。超常の存在である〈風〉も出入りしていることから、上空は手薄な可能性が高い。

強力な魔石によって通信機の性能を引き上げれば、結界を突破できる見込みは十分にあった。

魔術具のスイッチを入れ、祈りと魔力をつなぐと、雑音が流れ出す。

「こちらイズモ、こちらイズモ。聞こえていたら返事をくれ」

通信機に向かって呼びかける。何度か繰り返すが、聞こえるのは雑音だけだ。気

にせず、声をかけ続ける。
突風に帽子が飛ばされそうになり、慌てて押さえる。〈風〉が邪魔しようとしているのだろうか。だが、知ったことではない。むしろ、イズモの方法が正しいと教えてくれているようなものだ。
「こちらイズモ。ガラント、聞こえていたら返事をくれ」
諦めかけたころ、雑音の中に聞き覚えのある声が混ざる。
「こちら、ガラン……聞こえ……こち……ラント……」
「おい、聞こえるか！　オレだ！　イズモだ！」
通信機に飛びつく。
「よか……イズ……今、どこに……」
「どこって、お前の言っていた森に決まってるだろ」
「まずい……すぐに……逃げろ……」
とぎれとぎれに聞こえてくる声には、いつになく切迫した雰囲気があった。
「そうしたいのは山々だが、森に魔術がかけられているらしくて出られない」
「……けを向か……俺が間違ってい……」
「お前が正しかったことのほうが少ないだろ。それより、いい話がある。森にある山で魔石の鉱脈を見つけたんだ。人生を何回でもやり直せる量だ。売り捌くのを手

伝ってくれ」
「それどころじゃ……ユピトガは違……本当は魔狼……」
魔狼？
「おい、今なん――」
「これはまた珍妙な魔術だ」
殺気。
とっさに頭を下げる。直前まで頭のあった空間を、何かが唸りを立てて通過。逃げ遅れた耳の先がちぎれる感覚。
銃を構えつつ、距離を取る。通信機を地面に落としてしまうが無視。
声のした方、神域に向かう道の途中に、奇妙な格好をした人物が立っていた。
複数の動物の頭蓋骨を混ぜ合わせたような不気味な面をかぶり、深紅のローブをまとっている。
背格好からすると男らしいが、気配はあまりに異質だった。アドルの威圧感とカリムの神秘性を足したような、人間とは思えない空気。圧倒的な存在感にも関わらず、いつの間に現れたのか、まったく気づかなかった。
「お前、何者だ!?」
イズモの問いかけにも、相手は悠然と立ったまま答えない。術式機構を向けられ

ても意に介した様子もない。

村の言葉を使ったことから、ユピトガではありえない。なら、誰だ？

「不干渉を貫くつもりだったが、森を危険に晒すなら看過できぬ」

腹に響くような深い声。落ち着いているが、尋常ではない怒りを孕（はら）んでいる。

ローブの裾から尻尾が現れる。金色の毛に黒い縞模様。虎の尻尾のようだが、身長の割に妙に長い。

男は尻尾を持ち上げ、先端を空に向ける。尻尾の先が捻（ねじ）れるように回転、輝く槍に変わる。突撃槍のような鋭い円錐形。

唖然とするイズモに、男は槍を向ける。反射的に祈りを紡ぐが、切っ先は通信機を狙っていることに気づく。

「やめ――」

尾が伸長。魔術具を直撃し、爆散させる。残骸に紫電が走り、炎上。見る間に灰となり、風に舞って消えた。

「何しやがる!?　オレの人生がかかってたんだぞ!?」

「浅ましい。なぜ、カリムは汝のような存在を選んだのだ」

正体不明の男から、知った名前が出て驚く。

「お前、カリムを知っているのか？　何者だ？　なぜオレを狙う？」

「侵略者に教えるべきことはない」
拒絶の言葉とともに、尾が鎌首をもたげ、背筋が凍るような殺気が吹きつける。
完全な臨戦態勢。話し合うどころか、事情を説明する気さえないらしい。ひとつ確かなのは、相手がイズモを殺す気でいるということだ。
イズモは交渉不能と判断。引き金にかけた指に、力を込める。
――顔のない獣を撃つ、始まりの鳥の。
腕に衝撃。
男の尾が薙ぎ払うようにイズモの腕を襲撃。両腕の骨が折れる。
銃が弾き飛ばされ、崖面に叩きつけられる。
反応する間もなく、伸びた尾が体に巻きつき、拘束。
そのまま体が持ち上げられる。大蛇に巻きつかれた獣のように、直立した状態から身動きひとつできなかった。
「この森もこの山も、我が民のものだ。葉の一枚、石の一欠片とて奪わせはせぬ」
尾が締まり、全身の骨が悲鳴を上げる。激痛に視界が明滅し、イズモは絶叫するが、尻尾が口を覆い、くぐもったうめき声になるだけだった。
さらに力が込められ、体の中で重要な骨が折れる感覚。息ができなくなり、意識が遠のく。

死を覚悟した瞬間、遠くで声がした。
「イズモ様〜、いらっしゃいませんか〜」
カリムの声。
突然、縛めから解放され、その場に崩れ落ちる。踏ん張ろうにも、腕や足が関節以外のところで曲がり、体を支えることができなかった。為す術もなく、地面に顔から突っ込む。
「カリム、もう帰ろうぜ。もうすぐ神域じゃ……ん？　あれって」
「イズモ様⁉」
慌ただしく駆け寄ってくる音。
「しっかりしてください！　イズモ様！」
カリムが肩を叩く。新鮮な痛みに、イズモは声にならない声を漏らす。
「これは骨が……？　イズモ様、話せますか？」
「ま、まじゅ、魔術、符。上着、に、入って」痛みをこらえ、声を絞り出す。
カリムはムグニに指示を出しながら、イズモをゆっくりと仰向けにし、イズモの懐から魔術符を取り出す。
「状況が状況です。ご容赦ください」
シャツが破かれ、胸に魔術符が貼られる。痛みが和らぎ、呼吸が楽になる。

「大丈夫ですか？」
「ああ、助かった。腕と足も頼む」
ふたりに指示を出し、体のあちこちに魔術符を貼ってもらう。高位の魔術符を十枚以上も消費して、ようやく動けるようになる。体を起こし、ふたりに礼を言う。
「何があったのですか」「こんなとこで何してたんだよ」
ふたりが同時に尋ねてくる。
「ちょっとひとりになりたくて、気晴らしに散歩をしていたんだ」こんなときではあるが、何があるか分からないので言い訳はしておく。「帰ろうとしたら、いきなり知らないやつに襲われた。さっきまで、そこにいた」
崖の近くを指差すが、当然、誰もいない。穏やかな風が吹くだけの、のどかな光景があるだけだった。
「どのような方でしたか？」
「どんなと言われても、変な仮面と赤い服で全身を隠していた。見えたのは尻尾くらいだ。金色と黒の縞模様だった」
「やはり、そうでしたか」カリムの表情が曇る。「間に合って何よりです」
「どういうことだ？　というか、なんでオレがここにいると分かった？」
「〈風〉が教えてくれたのです。ラシド様が、イズモ様の命を狙っていると」

「〈風〉が？」
どうやら〈風〉はイズモの計画を知っていたらしい。それがラシドの逆鱗に触れると思い、カリムに助言したのだろう。今から思うと、通信機を使い始めたときの突風は、彼らの警告だったのかもしれない。
――あいつらには、オレを助ける事情があるのか？
ラシドは、カリムがイズモを選んだと言っていたが、それと何か関係があるのだろうか。
そのとき、重要なことを思い出す。
「ちょっと待て。ラシドは三年前に死んだと言ってなかったか？」
「直接見たのは、カリムとバーリだけだ」
ムグニの言い方に含みを感じ、カリムを見る。
「三年前の〈命脈の儀〉の夜、ラシド様があそこから落ちるのを、私とバーリは間違いなく見ました」カリムが近くにある崖を指差す。「しかし、ご遺体はどこにもありませんでした。村を挙げて探しても行方は分からないままで、やむを得ず、亡くなられたものとしたのです」
「だが、本当は生きていたってことか」
「あいつ、俺が男の村に来たときにはもう、長より年上だったぞ。いつまで生きて

んだよ」

「ラシドが外の人間なら不思議でもなんでもない。それに、あいつは間違いなく特級の魔術師だ。常人の数倍は生きられる」

魔術に精通すると、体に術式機構に似た特性が備わり、無意識の魔術によって身体能力が向上する。特級の魔術師ともなれば、最盛期の肉体のまま、普通の人間よりはるかに長生きする。現に、師匠は百歳を超えているにもかかわらず、性欲旺盛なところも含めて、壮年にしか見えない。

「問題は目的だ。なんのために、自分の死を偽装してまで姿を隠したのか。どうして、偽装が無駄になる危険を冒してまで、オレを襲ったのか」

後半に関しては、外部と連絡を取ろうとしたのが駄目だったのだろう。カリムが止めようとしたのと同じと推測できる。だが、前半は謎だ。三年もの間、なんのために姿を隠し続けたのか。

「ラシドは気になるけどさ。イズモも無事だったんだし、そろそろ戻ろうぜ」

イズモが思索に耽っていると、ムグニがそわそわしたように言う。

「そうですね。イズモ様、行きましょう」

カリムに促され、イズモは銃を拾うとふたりに付き添われて山を下った。

先を行くムグニはかなりの早足だった。イズモとカリムはほとんど走るように追

いかける。ムグニの背中には、どこか緊張した様子が窺えた。
「ムグニ、やけに急いでいるみたいだが、何かあったのか？」
イズモが声をかけると、ムグニは振り返り、カリムと視線を交わす。カリムが頷くと、何も言わないまま、また前を向いた。わけが分からない。
「アドルには口止めされているのですが、やはりお伝えしておきます」
カリムが外の言葉で話す。ムグニに聞かれないため、というより、ムグニが聞いたという事実を作らないための配慮らしい。
「何をだ？」
「倉庫から食料と魔狼の首を奪い、鹿の魔獣に我々を襲わせた存在についてです」
「口止めも何も、あれはユピトガとその子どもの仕業だろ」
「いえ、犯人は魔狼です」
意味が分からず、カリムを見る。
「……どういうことだ？」
「この森には魔狼が二匹いたのです。彼らは双子の兄弟で、はぐれた親を待っていました。イズモ様が倒されたのは、食べ物を探しに出ていた弟です」
「ちょっと待て、なんでそんなことが分かる？」
「〈風寄せ〉を使いました。〈風〉に供物を捧げ、過去と未来を知る術です」

供物という言葉に、疑問だったことを思い出す。
「もしかして、魔狼の肉を回収していたのは、そのためだったのか」
カリムが頷く。
「それと、私の血と精液です」
「血と精液……？　それって、いつやったんだ？」
「イズモ様から〈神獣の瞳〉について、お聞かせいただいた夜です」
つまり、ラティフと魔石を盗んだ夜だ。
その翌日は、たしかカリムの乱れた姿を見た日だ。カリムの体についた無数の歯型と、むせ返るような精液の匂い。アドルと交わった痕跡だと思っていたが、そうではなかったらしい。
——信じがたいが、辻褄は合うな。
魔狼が犯人なら、魔狼の臭いを恐れるわけがない。消えた大量の食料も、魔狼なら食べ切れる。魔狼なら他の魔獣を従わせたとしても不思議はなく、仇を見極めるために鹿の魔獣を使ったのだろう。
——また、ガラントに振り回されたってことか。
ガラントは自分の情報が間違っていたと言い、魔狼という言葉を口にした。話の流れから推測するに、客が追っていた相手は魔狼の一家だったのだ。しかし、王都

の事件とユピトガが失踪した時期、親子という情報が一致していたため、ガラントは両者を結びつけてしまった。
ガラントの早とちりと思い込みはいつものことだが、そのせいでイズモは魔狼という最悪の相手を、それと知らないまま追いかけていたのだ。
「親はどうしたんだ？　まさか、この森にいるのか？」
「いえ、森には来ていないようです。詳しくは分かりませんが、子どもたちを逃すために囮となったようです。今は、おそらく……」
カリムは言葉を濁した。
「……だから、あんなに怒っていたのか」
先の魔狼が怒り狂っていた理由が分かった。親が迎えに来ないことから、人間に殺されたと思っていたのだろう。男たちを嬲るような戦い方や、イズモに対する執着も理解できた。それゆえに破れたのだから、なおのこと救いがない。
「残るもう一匹はどうなっている？　千手鹿の一件以来、何もしてきてないが」
「予言によると、今日、動くはずです。〈命脈の儀〉が近いため、今朝、アドルがひとりで討伐に向かいました」
今朝と言われ、胸の中に暗いものが立ち込める。当然、ラティフやムグニも知っていたはずだが、おくびにも出さなかった。

「村のやつらは、そのことを知ってるんだよな？　なんでオレには黙っていた？」
「それは……。」カリムが目を伏せる。「村の問題は村の人間で対処すべきと考えたからです。都合のいいときだけイズモ様に頼るのは、不敬に当たるだろうと」
嘘だな、とイズモの冷たい部分が囁く。
協力の申し出を断るならともかく、村に留まり続ける予定の人間に情報共有すらしないのは奇妙だ。そうしなかったのは、信用されていないからに他ならない。
――ガラントの勘違いが、こんなところで響いてくるとはな。
イズモはユピトガが犯人だとずっと言ってきた。実際、先ほどまで、本当にそう思っていた。しかし、真実を知っていた彼らからすると、間違った方へ誘導する詐欺師か、見当違いのことを言う間抜けに見えたことだろう。
面倒なことに、イズモは村の状況を知らないまま、鉱脈の計画を進めた。ラティフに銃を与えたり、村の雑用を引き受けたり。結果として、彼らの不審を裏付けることをしてしまっていた。不運と自業自得に、目も当てられない。
「殊勝な心がけだな」思わず出た言葉は、思う以上に刺々しくなった。
カリムもイズモが言葉通りに受け取らなかったことを察し、複雑な表情をする。
――信頼されてなかったのは痛いが、今の状況はむしろ都合がいいな。
計画を進める上で、魔狼は物理的な脅威であり、アドルは村を掌握する上で障害

となる。両者がぶつかって共倒れしてくれたら万々歳だ。
「アドルが魔狼に勝てる見込みはあるのか？　余計なお世話だろうが、一級魔術師が集団で戦っても死人が出る相手だぞ」
「アドルには〈神眼〉と〈神剣〉があります。負けるとは思えません」
そう言うカリムの言葉は、確信に満ちていた。
〈神眼〉はあの目のことだとして、〈神剣〉は鹿の魔獣の足を細切れにした魔術のことだろうか。
――アドルが特級クラスの魔術師なのは間違いない。相打ちは無理でも、魔狼には頑張ってもらいたいところだな。
ふと、疑問が湧く。
魔狼の狙いは間違いなくイズモだ。では、イズモを殺す前に、とんでもない力を持つ魔術師が近づいていると知ったら、魔狼はどうするだろうか。
――逃げるに決まってる。そして、オレを狙って探し回るはずだ。
どうやって？
――臭い、だろうな。
では、アドルから逃げた魔狼がイズモの臭いを追いかけたとして、最初にたどり着く場所は？

──村、か……？

イズモは村の住民ではないが、何日も寝泊まりして、村のあちこちに臭いが染みついている。おまけに、着替えや荷物は家に置きっぱなしだ。

最悪の予感に、体中から血の気が引いていく。

「まさか、そんなこと、あるわけ──」

ドン、と大気を震わせるような音が響く。一泊置いて、驚いた鳥たちが叫びを上げて飛び立つ。

「村の方だ!!」ムグニが走り出す。

「ムグニ！　待ちなさい！」カリムも後を追う。

──クソが！

イズモは銃を抱え、ふたりを追いかけた。

2

ラティフは最初、それが生き物だと認識できなかった。

景色がその部分だけ切り取られたように、黒い空間が広がっている。何もないものがある。そんな生理的な違和感を覚える光景だった。

光すら飲み込む闇の中に、ふたつの赤い玉が浮いていた。濁った血のようにどす黒く、正視できないほど禍々しい眼球だった。
本当に生き物なのかと疑いたくなる風貌。
アドルが討伐するはずの存在。
「魔狼が出たぞおおおぉぉぉ！」
バーリの雄叫びが村に響く。
怒号を聞きつけ、男たちが一斉に飛び出して来る。手には槍が握られ、弓と矢筒を背負っていた。
魔狼を見た途端、男たちが表情を固くする。歴戦の猛者や、一度戦ったことのある者たちでさえ、あまりの異様さに面食らっていた。
「うろたえるな」どよめく男たちをバーリが一喝する。「あの魔狼はアドルに恐れをなして逃げ出して来たのだろう。アドルの指示通りに行動しろ。子どもたちの安全を最優先に、アドルが戻ってくるまでの時間を稼ぐ」
バーリの言葉に、男たちが表情を引き締める。その力強い声に、自分たちの役割を思い出す。
「カリムはどうした？」ふと、誰かが尋ねる。
「イズモ殿とムグニに付き添ってもらい、御山に避難させた」

バーリは魔狼を睨んだまま、平然と言う。
上手だな、とラティフは思った。バーリも本当のことは知らない。それでも、男たちを目の前のことに集中させるために必要な方便だった。強さだけでは長は務まらないのだと、よく分かる。
「ムキト、狼煙を上げろ」
呼ばれた男が村の裏手へと走る。
狼煙は村を出ている者に、緊急事態を知らせるためのものだ。アドルが無事であれば、すぐに戻ってくるだろう。
続いて、いくつかの家から何かが壊れる音がする。家の裏手の壁を壊し、集めていた子どもたちを逃しているのだ。
魔狼は耳を動かしたが、それ以上の反応は示さなかった。それどころか、現れた場所からほとんど動かず、しきりに臭いを嗅いでいる。
「ねえ、バーリ。あの魔狼、もしかして戦う気がないんじゃない？」隣に来ていたガビトが震えた声で尋ねる。「魔狼の目的がイズモなら、オイラたちが戦わなくてもいいんじゃないかなあ？」
「魔狼の狙いがイズモ殿だとしても、やつが村にとって脅威であることに変わりはない。それに、だ」バーリの顔に荒々しさが宿る。「武装し、敵意を向ける我々に

見向きもしないとはな。舐められたものだ。総員、配置につけ」
バーリが怒りを抑えた声で言い、男たちが静かに散開する。互いに誤射しない位置に広がり、矢をつがえる。
ラティフも銃を取り出し、撃てる場所を探す。が、バーリに肩を掴まれる。
「お前は逃げろ。お前には他にやるべきことがあるはずだ」バーリが魔狼から目を離さずに言う。
ラティフが言い返そうとしたとき、魔狼が何かに気づいたように、ラティフに視線を向けた。目が合った瞬間、冷水を浴びせかけられたような感覚。
赤い瞳に渦巻くのは、煮えたぎる憎悪だった。怨敵を切り刻み、踏み潰し、焼き尽くしてもなお治まらない、底なしの悪意。抜き身の感情に、息ができなくなる。
「やつの目を見るな！　構えろ！」
バーリが腕で、ラティフの視界を遮る。それだけで、気分が楽になった。
「放て！」
バーリの号令とともに、雲霞（うんか）のような矢の群れが魔狼に殺到する。
魔狼が無数の矢を一瞥、体全体が淡く光り始める。
次の瞬間、魔狼の体が爆発するように炎上。命中寸前だった矢は炎に巻き込まれて灰となり、続く矢も風圧で弾き飛ばされる。爆発の衝撃で、魔狼の近くにあった

家の屋根が落ち、壁が崩れる。熱で寝床や家具が燃え上がる。
炎が収まり、魔狼が元の黒へと戻る。魔狼は退屈そうにあくびをしていた。
「怯むな！　第二射、構えろ！」
男たちが弓を引き絞り、今度はラティフも銃を構える。
そのとき、視界の端で黒い狼煙が登り始めた。風に煽られながら、ゆっくりと上昇していく。
魔狼が不愉快そうに目を細める。口が開かれ、喉の奥に光。
「放て！」
再び矢が放たれ、ラティフも魔狼の目を狙って連射。
しかし、魔狼も魔術を発動。魔狼の口から炎の濁流が吐き出される。滝のような炎は矢と弾を軽々と飲み込み、そのままラティフたちの方へと押し寄せる。
「まずい、全力で避けろ！」
バーリがラティフとガビトを抱えて横に跳ね、他の男たちも慌てて逃げる。何人かの槍や弓、腰布の一部に引火するが、素早く捨てて難を逃れる。
だが、流れの先に人影。炎に気づいていないのか、逃げる気配がない。
「ムキト！　逃げて！」
ラティフが叫ぶのと、ムキトが顔を上げるのが同時。

炎が狼煙の焚き火を襲う。薪や狼煙の材料が焼き尽くされ、熱が生み出す気流で煙がかき消される。さらに、炎は水のように弾け、周囲へと飛び散る。

ムキトはラティフの声でとっさに後ろに跳ね、直撃を回避する。

しかし、完全には避けきれず、すねに炎の飛沫がかかる。反射的に手で叩いて消そうとするが、触れた手に燃え移る。それを払おうと太ももに打ちつけ、そこにも火がつく。

火が肉に到達。体を焼かれる激痛に、ムキトは悲鳴を上げ、手足を振り回す。周りの男たちが土や水をかけるが、瞬く間に全身が炎に包まれる。

ひとりが苦渋の表情で矢をつがえ、踊り狂う炎の塊を射る。心臓を貫かれ、ムキトが痙攣。声が途絶え、倒れる。

射った男がその場に崩れ落ち、燃えていく男を呆然と見つめていた。ムキトの相方のサラムだった。

村全体がしんと静まり返る。

――ムキトが、死んだ？

肉付きがよく、笑うと目が糸のように細くなる年上の男。畑の世話をするのが好きで、昨日もイズモが野菜の手入れを手伝ってくれたと笑っていた。その男が、炉にくべられた薪のように燃えていた。

「狼煙の意味を察して壊したのか」
　バーリが苦虫を噛み潰したような顔をし、ラティフとムグニを解放する。
「作戦変更だ。ガフル、シャクル」バーリが近くの男たちに声をかける。「聖域に走って、村に魔狼が出たと、アドルに直接伝えろ」
　ふたりは背筋を伸ばすと、一目散に走っていった。若い背中が森に消えたのを見届けると、バーリは前に出た。
「俺が打って出る！　その間に全員逃げろ！　これは命令だ！」
　男たちがはっとしたようにバーリを見る。
「おい、もう諦めるつもりか⁉」
「諦めてはいない。だが、このまま戦っても無駄な犠牲が出るだけだ」
「子どもたちは逃したただろ。俺たちが全滅したって、村は続く」
「先のない俺の一存で、覚悟のない者たちや、未来のある者たちを巻き込むわけにはいかない」
　男たちの間に戸惑いが広がる。
　若い男たちがバーリと魔狼を交互に見た後、じりじりと後退していく。森まで下がると踵を返し、消えていった。迷っていた男たちも、それに続くように森へと逃げていく。

「ラティフ、お前も行け。イズモ殿と狩りの約束をしたのだろう」
「嫌だ」
「そうか、ならば仕方がない。ガビト」
背後の気配を感じ、はっとしたときには、ラティフはガビトに羽交い締めされていた。必死に抵抗するが、太い腕はびくともしなかった。
「ガビト！　離して！」
「ごめんねえ。バーリから頼まれてたんだよう」
ガビトは暴れるラティフを引きずるようにして、森へと向かう。
「そんな、嫌だ！　バーリ！」
ラティフの叫びにも、バーリは振り返らなかった。炎の熱が遠ざかり、やがて魔狼や男たちの姿も見えなくなった。
森の中は、いつもと変わらない穏やかさに満ちていた。木漏れ日が優しく降り注ぎ、鳥や動物たちが鳴いている。村の惨状が嘘のような静けさだった。ここにいれば、すべてが終わるまで安全だと思えた。
しかし、村から離れても、ガビトはラティフを解放しようとしなかった。
「ガビト、もう放して！　村には戻らないから！」

「ラティフはそう言って逃げるに決まってるって、バーリに言われてるんだよう」
間延びした口調とは裏腹に、ガビトの腕は少しも緩まなかった。バーリはよほどラティフを戦わせたくないらしい。
「なんで僕だけ」悔しさに唇を噛む。
バーリが自分に対して、妙に過保護だとは感じていた。〈成人の儀〉の事件が原因だと思っていたが、どうやらそれだけではないらしい。まるで、ラティフを守ることを、至上命題としているようだった。
「僕は守ってほしいなんて、思ってないのに」
「でもねえ、命は自分だけのものじゃないよう。オイラも、ラティフには元気でいてほしいよう。ムグニもきっと、そう思ってるよう」
「僕だって、皆には幸せに――」
言いかけて、自分にはそんな資格がないことに気づく。
ラティフは、また狩りをしたいという理由で禁を犯した。あの魔狼は、ラティフが招いた災いかもしれないのだ。
このままでは、より多くの人が犠牲になる。自分のせいで、守るべき人々を死なせてしまう。その中に、ムグニがいない保証はない。
「ムグニ……」

ラティフの体から力が抜ける。それを諦めと解釈したのか、ガビトもほっとしたように力を弱めた。
次の瞬間、ラティフは右足のかかとでガビトの股間を蹴り上げた。「ふぐっ」というめき声とともに、ガビトが崩れ落ちる。
「ガビト、ごめん。でも僕は行かなきゃならないんだ」
股間を押さえ、目を白黒させているガビトに謝ると、ラティフは急いで村へと引き返した。
しばらく走っていると、木々の間に村が見えた。
飛び出すことはせず、木の陰に隠れて、村の様子を窺う。まだ、戦闘は始まっていないらしく、村は静かだった。男たちや魔狼に気づかれないよう、家の裏手から近づき、そっと顔を覗かせる。
広場には魔狼とバーリ、そして幾人かの男たちがいた。彼らは弓と矢筒をその場に置き、槍を手にバーリの周りに集まっていた。彼らも魔狼と戦うために残ったらしい。多くは狩りで名を馳せた者たちだったが、その中には好戦的ではないはずのサラムの姿もあった。
「くそっ、この村には大馬鹿者が多すぎる」
顔を歪めるバーリに、男たちが笑う。

「お前だけに格好つけさせられるかよ」「俺たちだって、村を守りたい」「あんな魔獣、二度とお目にかかれないだろ」「ムキトを殺されて逃げられるか」
男たちの顔には晴れ晴れとした笑顔が浮かんでいた。死や苦痛さえ栄誉とする狂戦士の顔だった。
男たちが陣形を組み、魔狼に対峙する。
男たちの気配に気づき、家を漁っていた魔狼が顔を上げる。
魔狼は不愉快そうに顔を歪め、頭を低くする。口元から漏れた高熱が、空気を揺らめかせる。
「行くぞ、野郎ども！　やつを無傷で村から出すな！　我らの誇りにかけて！」
「応!!」
バーリが吠え、男たちが応じる。
「魔狼よ、参る！」
男たちが風となって走り出す。
魔狼が息を吸い込み、灼熱の濁流を吐き出す。
男たちは大きく距離を取って回避。後ろにあった複数の家が巻き込まれ、燃え上がる。
足の速いふたりが接近。魔狼の頭を狙い、両側から飛びかかる。

魔狼の前脚が閃く。ふたりの首、胴、足に赤い線が走り、一拍遅れてばらばらになる。断面から血と内臓を撒き散らしながら落下。

死体を隠れ蓑に、バーリともうひとりが死角から槍を突き上げる。

魔狼はバーリの槍を避けつつ、前脚を振り下ろす。男が逃げ遅れ、頭から圧縮される。悲鳴を上げる間もなく、地面の染みとなる。

バーリのさらなる刺突を魔狼は転がって回避。穂先が顎をかすめ、毛が舞うが肉には届かない。

続く男たちの槍の群れを、魔狼は後ろに跳んで避ける。すぐさま男たちが追いすがり、魔狼は押されるように後退する。

ラティフは魔狼の動きが、かすかにぎこちないことに気づいた。後ろ足をわずかに引きずっている。

――あの魔狼、もしかして体が悪いのかな。

自分と同じように。胸に痛みが走るが無視する。どんな事情があっても、魔狼は倒すべき敵だ。

「ねえ、ラティフ。危ないよう。逃げようよう」

泣きそうな声に振り向くと、やりを抱えたガビトが立っていた。思わず身構えるが、ガビトは首を横に振る。

どうやら、言いつけを守れなかったことに責任を感じ、付いてきたらしい。ガビトの意外な豪胆さに、ラティフも追い返すのを躊躇ってしまう。

視界の端で、魔狼がまた炎を吐き出すのが見えた。炎の嵐が押し寄せるが、男たちは炎の範囲を見切り、軽々と避ける。

広場に描かれた炎の文様の中で、男たちは魔狼を追い詰めていく。

「攻め立てろ！」

男たちの全方位からの攻撃に、魔狼は爪や牙、尻尾まで使って応戦。男たちの血や肉片が飛び散るが、猛攻をくぐり抜けた槍が魔狼の腹に刺さる。魔狼が悲鳴を上げて逃げる。

「すごい！　魔狼を押してるよう！」

ガビトが喜色満面でラティフの肩を揺する。しかし、ラティフは険しい表情を浮かべていた。

――何か、おかしい。

魔狼はイズモと戦うつもりで村に来たはずだ。なのに、男たちに劣勢になっていては、イズモに勝つどころではない。接近戦が苦手なら、森に逃げて態勢を立て直せばいい。なぜ、村の中で無様に逃げ回っているのか。

――勝てる見込みがあるから……？

そう思ったとき、魔狼の悲鳴が聞こえた。
きゃんきゃんと情けない声を上げて、森の方へと走っていく。最初の威厳が嘘のような情けない遁走だった。
「追え！　逃がすな！」
勝利を確信し、炎の中を突き進む。走る男たちの両脇には炎の壁があり、まるで魔狼までの道ができているようだった。
「まさか……!?」
ラティフが立ち上がるとの、魔狼が振り返るのが同時。
魔狼の口腔には、すでに小さな太陽を思わせる輝きがあった。
「罠だ！　皆、逃げて！」
ラティフは思わず飛び出していた。魔狼の気を引くため、側面に回り込むようにして連射。
魔狼は嫌悪に顔を歪め、尻尾を振り回して銃弾を防ぐ。さらに、尻尾で燃える家の残骸を飛ばしてきた。
ラティフは走る勢いのまま、飛び込むようにして前転。瓦礫の弾を間一髪で避ける。しかし、飛び散った火の粉が右前腕にかかる。とっさに左手で押さえつけて消火。肌の焦げる痛みに声が出そうになるが、歯を食いしばって耐える。

その間にも、魔狼の口に魔力が集中していく。
男たちも魔術に気づき、急停止。しかし、両脇には炎の壁があり、慌てて来た道を引き返す。
「そっちは駄目だ！　横に逃げて！」
ラティフが銃撃を再開。しかし、急に引き金が軽くなり、弾が出なくなる。
――弾切れ!?
朝の練習を終えた後、弾を補充していなかった。鞄の石を掴むが、装填が間に合わない。
ラティフの叫びにバーリが反応、炎へと身を投げる。毛を焼かれながらも壁を飛び越え、さらに転がって消火。他の男たちも続こうとするが、炎を前に一瞬の迷いが生まれる。
それが致命となった。
閃光。
魔狼の口から膨大な熱量が放射。極太の光が男たちの輪郭をかき消す。
「ラティフ！」
バーリがラティフに飛びつき、自身の胸にラティフの顔を押しつける。
直後、嵐のような熱風に襲われる。ふたりの体は突風にさらわれる枯れ枝のよう

に吹き飛ぶ。バーリはラティフを抱えたまま転がり続け、距離を取る。
熱が弱まり、静けさが戻る。
「ラティフ、無事か⁉」
頭の上で声がして、顔を上げる。目の前に、焦燥に歪む男の顔があった。
「僕は大丈夫。皆は？」
バーリは苦渋の顔で振り返る。
地面に引かれた炎の線によって、村はふたつに分かたれていた。それは村の反対側の家を吹き飛ばし、森にまで続いていた。
光線の射線上にいた男たちは、黒い塊となっていた。毛はすべて焼け落ち、耳や指は溶け崩れている。それはさながら、焼きすぎた肉のようだった。もはや誰が誰か区別することもできない。
風が吹き、焦げた肉の臭いが鼻先をかすめた。
――これが狙いだったんだ。
あの魔狼は身体能力に劣る。そのため、男たちを同時に相手にしないよう炎で牽制しながら、一気に殲滅する方法を選んだ。逃げ回っていたのは、男たちに優勢だと思わせたため、そしてイズモの出方を窺うためだ。
魔狼がふたりに目を向ける。だが、じっと見つめたまま、動こうしない。

魔狼もイズモが村にいないことに気づいたらしい。ふたりがイズモに助けを求めることを期待しているのか。あるいは、イズモが戻って来たときの人質か。どちらにせよ、脅威とはみなされていない。

ラティフは魔狼を睨んだまま、腰の物入れに手を伸ばす。しかし、あるべき場所には何もなかった。バーリに庇われた際に、どこかに落としたらしい。

「バーリ、魔狼は――」

「なぜ逃げなかった⁉」耳元で怒鳴られる。「俺たちがなんのために残ったと思っている⁉　俺たちの覚悟を無駄にする気か⁉」

「僕のせいなんだ！」ラティフも叫んでいた。「魔狼が村に来たのは、僕のせいなんだ！」

バーリの怒りがすっと引くのを感じた。

「……どういうことだ？」

「倉庫が襲われた日、僕はひとりで御山に登ったんだ。どうしても魔石を手に入れたくて、神域に入った。僕が掟を破ったから、村に災いが訪れた。だから僕は、責任を取らなきゃならない」

遅すぎる懺悔だった。あのとき、バーリにすべて話していれば、こんなことにはならなかったかもしれない。しかし、今さら、どうにもならない。

そのとき、頭の上からクツクツという声が聞こえてきた。見ると、バーリが口元を緩めて笑っていた。
「お前は、本当にあいつに似ているな」
「どういうこと？」今度はラティフが尋ねる番だった。
「俺には昔、ジャリルという相方がいた。互いに負けず嫌いで、いつも、どうでもいいことで競い合っていた」
話の見えないラティフを無視してバーリは続ける。
「ある日、ジャリルは度胸試しを持ちかけてきた。ひとりで御山に登った上、神域で小便をして、証拠として石を持ち帰ること」
「まさか」
「俺たちは実行した。ふたりとも、な」
「それで、その人は死んじゃったの？」
「ジャリルが死んだのは、その数年後だ。その間、村には何も起きなかった」
バーリがラティフを見る。優しい目だった。
「掟と罰は人を管理しやすくするためにある。お前が掟を破ったことと、村に魔狼が来たことは関係ない。この件に関して、お前が責任を感じることない」
「でも、皆が……」

「ラティフ、お前はなんのために戦う」バーリがラティフの目を見る。「掟を破った後ろめたさからか？　犠牲を出した罪悪感からか？　お前が戦う理由はそんなものなのか？　そんなくだらないことで戦う気なのか？」
いつになく厳しい口調でバーリが問う。
「お前の向こう見ずな性格は知っている。こうと決めたら譲らない頑固さも知っている。お前がどうしても戦うと言うなら、いくらでも協力してやる。だが、その程度の覚悟なら、やめておけ。ここはお前の戦場ではない」
答えられないラティフの頭を、バーリはくしゃくしゃと撫でる。
「いい男になったな。あいつにも見せたかった」
そう言うと、バーリは立ち上がった。目は魔狼に向けられていた。
「まだ戦うの!?」
「アドルは俺たちが魔狼を引き止めていると信じている。信じる者がいるなら、ひとりでも戦う。それが俺の、戦士としての矜持だ」
そう言い残し、男は走り出した。
見送るラティフの元にガビトが駆け寄ってきた。ラティフに有無を言わせず、焼け残っている家の影に引っ張っていく。
「ラティフ、もう逃げようよう」ガビトが泣きながら言う。「あんなの、勝てっこ

ないよう」

ガビトの言う通りだと、ラティフにも分かっていた。

――だけど、ここで逃げたら僕は……。

逃げたら、なんだというか。魔獣と戦いたいだけなら、機会はこの先、いくらでもあるはずだ。自分はなぜ、今にこだわっているのか。

バーリはラティフに、なぜ戦うのかと問うた。そんなこと、今まで考えたこともなかった。敵を目の前にしたら、体が勝手に動いた。それだけだった。大人たちは名誉とか誇りとか言うけれど、ラティフにはピンとこなかった。

「あんなのイズモに任せればいいんだよう。イズモなら、きっと前みたいに倒してくれるよう」

ガビトの言葉に、あのときの光景がまざまざと蘇る。

動けないイズモに、とどめを刺そうとする魔狼の姿。気づいたときには、体が自分のものじゃないように動いていた。勝てるとか勝てないとか頭になかった。

――そうだ、僕は守りたいんだ。

誰かが助けてくれる、では駄目なのだ。それでは、目の前で失われる命を救えない。誰かが傷つくのを止められない。だから戦う。他の誰でもない自分が。今。

頭の中が、すっと晴れていく。

「そうかもしれない。でも、僕は戦う」
「で、でも、弾はどうするんだよう。今から集めてたら間に合わないよう」
「それでも、やるしかない」
ラティフが行こうとしたとき、ガビトが背負ったままだった矢筒が目に入った。
脳裏に、閃光が走る。
ガビトから矢筒をひったくり、矢を取り出す。枝を削って作った矢に、鳥の羽の矢羽と石の矢尻がつけられている。
「矢尻を弾にすればいいんだ！」
「で、でも、一個一個外すなんて……」
「いいから！　みんなが置いていった矢を集めてきて！」
剣幕に押され、ガビトは走り出した。
ラティフは腰布を取ると、矢の先端を包んで矢筒の底で叩く。手応えがあり、布を開くと矢尻が外れていた。腰布越しに石を掴み、弾倉に入れる。
遊底を引き、薬室に弾を送り込む。銃口を地面に向け、引き金を引く。乾いた音と同時に、地面に穴が開く。
――いける！
バーリの吠える声が聞こえる。魔狼の周りを風となって駆け、死角から喉や目を

狙う。煩わしそうに振るわれる魔狼の爪を間一髪でかわし、毛と血を飛び散らせながらも、バーリは決して止まらない。
「持ってきたよう！」
ガビトが集めてきた矢から、何回かに分けて矢尻を取り出す。
石を弾倉に詰めていると、手に激痛が走る。見ると、手に線が走り、血が滲み出していた。腰布を貫通した矢の先で手のひらを切ってしまったらしい。
――これくらい、みんなの痛みに比べれば！
無視して弾倉を銃に叩き込む。
ガビトの悲鳴に振り返る。
「ああっ、バーリが！」
バーリが魔狼の前で膝をついていた。斬撃を避け損なったのだろう。体に大きな切り傷ができ、槍は細切れになっていた。体を庇ったらしい左腕は深く抉れ、白い骨が覗いていた。
自らの血に塗れながらも、バーリの戦意はまだ消えていなかった。
魔狼もまた、無傷ではなかった。体のあちこちに槍で突かれた刺し傷ができ、血を流していた。
魔狼の口に火が灯る。

動けないバーリに、イズモの姿が重なる。
ぞわりと、心に何かが触れてくるのを感じた。
心の底から、言いようのない感情が湧き上がり、噴出する。
「バーリ!!」
銃を構え、引き金を引く。
ドン、と爆発するような音とともに、弾丸が飛び出す。
魔狼の体に着弾。弾は毛皮を突き破り、鮮血が舞う。
悲鳴。
魔狼が叫んでいた。痛みに悶えるように身をのけ反らせる。
――効いた!?
ラティフは連射。撃つたびに、イズモの魔術のような轟音が響く。魔狼は転がって避け、毛を逆立てる。
効果はある。しかし、もっと近くで弱点を狙わなければ、致命傷にはならない。
だが、ラティフの足では近づく前に殺される。仮に近づけたとしても、弱点となる目、口、耳、肛門などといった部位は高く、直接狙うのは難しい。
魔狼が唸りながら臨戦態勢に入る。ラティフを敵と認識したようだ。
時間がない。

——考えろ！　イズモならどうする⁉

そのとき、河原でのイズモとバーリの戦いを思い出した。バーリの背を蹴り、宙の枝を掴むイズモの姿。

——そうだ、アレが使える！

うまくいく保証はない。しかし、それに賭けるしかない。

走り出そうとしたとき、バーリがこちらを見ていることに気づいた。腰布で左上腕を縛って止血し、右手に槍の残骸を持っている。

怒っているかと思いきや、バーリは笑っていた。仕方のないやつだ、という呆れの混じった笑顔だった。まるで、こうなることを予想していたように。

視線だけで案があることを伝える。

バーリは頷くと、魔狼へと走り出した。

ラティフは魔狼に背を向け、家の裏を走る。

「ラティフ！　魔狼が狙ってるよう！」背後でガビトが叫ぶ。

魔狼の口から炎が放射。爆音とともにラティフの背後にあった家が吹き飛ぶ。

これまでの炎とは違う、指向性をもたせた爆炎だった。

魔狼が炎を連発。背後で、粉々になった家が嵐となって森に抜けていくのを感じながら、ラティフは四足で村を駆け抜ける。

爆発がラティフに追いつきかけると、バーリが槍を魔狼の目を狙って投げる。魔狼の爪が届かない距離からの、正確な投擲だった。魔狼の気が逸れた隙に、ラティフはさらに速度を上げて走る。
魔狼が動きを見せるたびに、バーリは近くにあるものを投げ、邪魔をする。苛立った魔狼の口に再び、光が灯る。男たちを焼き払った、あの光だった。
光が収縮し、熱量が凝縮。
方向が定められ、射出。
魔術が放たれる瞬間、バーリが跳んだ。
「うおおおらあああぁぁぁ!!」
右手で首飾りの牙を引きちぎり、魔狼の左目に突き立てる。
絶叫。
魔狼の口腔で魔術が暴発。魔狼の頭部を包み込むほどの爆炎が生まれ、爆音が空気を震わせる。
爆発に巻き込まれ、バーリの上半身が吹き飛ぶ。
ラティフは振り返らなかった。バーリが命懸けで作った隙を無駄にしないことだけを考えていた。
狙いであるアドルの家に到達、屋根を駆け上がる。

茅の切り口が手のひらや足の裏に刺さるが無視。ひたすら手足を動かし、屋根を駆け上がる。
屋根の頂点に到達。
ラティフは躊躇いなく跳んだ。
眼下に、火の海となった村が見えた。半分近い家が壊れ、燃えていた。ラティフが育った村。自分を大切にしてくれた男たちの村。新たな世代を育む村。
――僕が、僕たちが守るんだ！
ラティフは着地点に目を向ける。そこには上を向いた魔狼の顔があった。顔の左半分が焼けただれ、左の眼窩は暗い穴になっていた。
魔狼がラティフに気づく。しかし、上空からの奇襲に判断が遅れる。
ラティフは魔狼の顔に飛びついた。
振り払おうとする魔狼に必死にしがみつき、口に下半身を突っ込む。足に熱い粘液が絡みつき、足の裏に粘液をまとった肉の感触。
魔狼が反射的に口を閉じ、動きが止まる。
鋭い刃物のような歯がラティフの足を貫く。筋肉がちぎれ、骨が砕ける。それでもラティフは魔狼を放さなかった。極度の興奮が痛みも恐怖も忘れさせた。
魔狼と目が合う。漆黒の瞳に燃え上がる憎悪の炎。その奥に、深い悲しみがある

ことに、ラティフは気づいた。
——そうか、あいつはお前の兄弟だったんだ。
アドルからは、森に魔狼がもう一匹いるとしか伝えられていなかった。余計なことを考えさせないために、言わなかったのだろう。
——でも、僕たちにも譲れないものがあるんだ！
銃を構え、残った右目に銃口を向ける。
至近距離から発射された弾が魔狼の眼球を直撃、破裂させる。
森に、耳を覆いたくなるような叫びがこだまする。
魔狼が激しく身を振り、振り落とされる。
地面にぶつかる寸前、腕で頭を庇う。衝撃とともに骨が折れる感覚。飛びそうになる意識を必死につなぎ留める。
なんとか頭を上げると、血を滴らせながら、森に消えていく魔狼の姿があった。
ほっとしたのも束の間、全身が痛みを訴える。痛すぎてどこがどう痛いのかも分からない。ただ、その痛みが、自分がまだ生きていることを伝えていた。
「ラティフ！　ラティフ！」
ガビトが駆け寄ってくる。顔が涙でグシャグシャになっていた。
「やったよ。皆で、魔狼を、追い払った」

ガビトが何度も頷き、その度に涙が落ちる。
その顔が面白くて、思わず笑ってしまう。魔狼は倒せなかったが、あとはイズモとアドルがなんとかしてくれるだろう。
体を起こそうとして、違和感。体に力が入らなかった。腕も足も、思うように動かない。ガビトが慌てたように止める。
「動いちゃ駄目だよう！　血が、血が……」
首を動かし、体を見下ろす。腰から下がなくなっていた。ちぎれた胴体から流れ出した血で水たまりができており、潰れた内臓が飛び出していた。ガビトが必死に血や内臓をかき集めているが、無駄だと分かった。
「ごめん、駄目かも」
残っていた力も抜けていき、地面に突っ伏す。
眠くもないのに、まぶたが閉じていく。もう痛みも感じなかった。
「ラティフ！　起きてよう！　目を開けてよう！　ラティフ――」
叫ぶガビトの声も遠のき、やがて聞こえなくなる。
何も見えず、何も聞こえず、何も匂わない。ただ、何もない闇の中に浮かんでいることだけが分かった。
少しずつ、自分という存在が解けていく。

かとして。

怖くはなかった。むしろ、奇妙な懐かしさと、心地よさがあった。

この感覚を、自分は前にも経験している。ラティフという人間ではなく、別の何

――僕は、死ぬのか。

――ムグニは怒るだろうな。

ムグニはラティフが狩りをすることに反対だった。いつか、こうなると分かって

いたからだ。その予感が的中してしまった。自分が選んだこととはいえ、少し申し

訳なかった。

――ムグニを泣かさないって、決めてたのに。

薄れていく意識の中、相方の姿を思い浮かべる。

ラティフの記憶の中では、ムグニはいつも泣いていた。夜の森を見て泣き、魔獣

の目玉のスープを見て泣き。泣き虫と言われて、また泣くムグニを、ラティフは守

りたいと思った。この子が泣かなくていいように、自分だけは味方でいようと。

――でも、もう大丈夫だよね。

ムグニは強いから。

イズモが村に着いたとき、すでに魔狼の姿はなかった。

だがそれは、男たちを殺し尽くしたからだと、すぐに分かった。

折り重なった黒焦げの死体。切り刻まれた死体。崩れ落ち、燃える家々。平和な森の隠れ里は、暴虐の嵐によって破壊されていた。

――オレのせいだ。

村の光景がかつての故郷と重なる。

知った人々の死体。充満する煙と死臭。

――オレは、二度とこんな光景を見たくなくて、魔術師になったんじゃなかったのか？

ムグニがひとつの死体の前で膝を折っていた。隣でガビトが泣きじゃくり、カリムがふたりの肩に手を置いている。

「ラティフ」ムグニが呟く。

ムグニの前で眠る少年は、腰から下がなくなっていた。両腕は折れ、骨が飛び出していた。

それでも、少年の顔は穏やかだった。

右手に銃を握りしめ、何かをやり遂げたように、微笑んでいた。

気配を感じ、振り返る。

そこには、立ち尽くすアドルの姿があった。

全身がずぶ濡れで、紐のようなものが絡まっている。紐の先端に目がついていることから、それが千手鹿の触手だと分かった。
アドルの手が握り込まれ、指の隙間から血が滴る。
アドルが天に向け、吠える。
長い長い、嘆きの咆哮（ほうこう）だった。

3

闇夜に祈りの言葉が解ける。
広場では大きな火が焚かれ、その前にカリムが立ち、その後ろに男たちが集まって火を見つめている。あちこちから、すすり泣く声が聞こえてくる。大切な仲間や相方を失った嘆きだった。
カリムは赤い布で身を包み、奇妙な仮面を被っていた。いくつもの動物の頭蓋骨が混ざりあったような異質な造形。山でイズモを殺そうとした、あの男と同じ格好だった。
仮面を通して響く声は、ごうごうと吹き荒れる風を思わせた。未知なるもの、人智の及ばない大きな存在に、祈りを捧げるように。

イズモはその様子を、男たちの離れた所で眺めていた。自分に、彼らと一緒に悲嘆に暮れる権利があるとは思えなかった。
今回の襲撃で、十四人もの男が死んだ。魔狼に殺された者たちに加え、アドルを呼びに行ったガフルとシャクルも犠牲となった。
魔狼は狡猾だった。聖域にやってきたアドルを、事前に操っていた多数の大猪口で足止めし、その隙に村を襲った。
しかも、逃げる際に橋を落としており、ガフルとシャクルは雨で増水した川を泳いで渡るしかなかった。対岸にたどり着けたのはシャクルだけだった。
知らせを受けたアドルは、すぐに村に戻ろうとした。しかし、シャクルを抱いて川を跳ぼうとしたとき、突然現れた千手鹿に巻きつかれ、魔獣ごと川に落ちた。
助かったのはアドルだけだった。
「死者に送る品を」カリムが振り返り、厳かに告げる。
男のひとりが進み出て、持っていた弓を火に投げ入れる。
火は一瞬大きくなり、火の粉を高々と舞い上げる。無数の小さな輝きは、天に届く前に、光を失い闇に混じる。
男が下がると、別の男が入れ替わるように前に出て、持っていた毛皮の肌掛けを火にくべる。死者に縁の深い者たちが、故人との思い出の品を燃やしていく。

死者の遺品は、すべて燃やす習わしなのだという。あの世での生活に困らないように、煙と一緒に天に送るということらしい。

それは死者を忘れるための儀式だった。現世を生きる者たちが、死者と決別するための。

過去が、生きる上で重荷となることを、イズモは知っている。

村全体がひとつの家族のような彼らにとって、仲間の死はあまりにも重く、早く忘れなければ日々の生活が行き詰まってしまう。だからこその風習なのだろう。人は深い悲しみを抱えたまま生きられるほど強くない。

死者の使っていた武器、食器、寝具、その他の道具が次々と燃やされ、灰となっていく。

アドルの番になった。持っていたのはバーリが使っていた木の器だった。イズモが使っているものと、負けず劣らずの大きさだった。アドルが投げ入れると、すぐに火が付き、黒い影となる。

アドルは器が燃えていく様子をじっと見つめていた。

イズモがバーリの家に入ったことで、バーリはアドルの家で暮らしていた。現長と前長。寡黙なアドルとおしゃべりなバーリ。対称的なふたりは、ひとつ屋根の下でどんな会話をしていたのだろうか。

　アドルは目を閉じて祈るような素振りをした後、火に背を向けた。
　続いて、ムグニが前に出る。手には、何かの牙があった。
　ムグニは迷うことなく、それを炎の中に放った。牙は抗議するようにパチパチと音を立てたが、ムグニは一瞥すらしなかった。
　ムグニは黙って夜空を見上げていたが、おもむろに口を開いた。
「英雄よ、聞いているだろうか。君が守りし民の安らかな寝息を。英雄よ、知っているだろうか。君の在りし日を今も夢に見ることを」
　闇に透き通るような声が溶けていく。
「君は笑った。これが私の運命（さだめ）だと。君は戦った。これが私の使命だと。悪意の雲霞にも臆することなく。失意の炎にも屈することなく」
　ムグニは空を見つめたまま、何かに乗り移られたように旋律を紡ぐ。
　風が吹き、歌声に導かれるように、火の粉が高く、高く舞い上がる。
「君の骸（むくろ）は大いなる森の礎（いしずえ）となり、君の心は遺された者の標（しるべ）となる。君の命は風に乗り、終わることない旅に出る。いつかまた、我らは惹かれ、出逢うだろう。今はただ、すべてを忘れ、眠るといい。光差す道が開かれる、その日まで」
　歌が終わり、静寂が戻る。ムグニは何かをこらえるように唇を引き結ぶと、乱暴な足取りで戻っていった。

後で聞いたところによると、村に伝わる弔いの歌だそうだ。戦いで散っていった戦士の魂を称え、残された者を慰めるための歌。過去を残さない村で、伝承とともに語り継がれている歌だった。

最後にカリムが火に近づき、持っていた物に目を落とす。イズモがラティフに渡した銃の魔術具だった。カリムはイズモに返すことを提案したが、断ったものだった。

カリムが銃を投げ入れる。その瞬間、火が幾筋もの螺旋を描くように高く燃え上がり、広場を明るく照らした。カリムの鎮魂の祈りに、魔術具の魔石が反応しただけだが、虎人たちには魂が天に昇っていくように見えたのだろう。呆然と空を見上げ、中には死者の名を呼ぶ者もいた。

――オレのせいだ。

昇っていく炎を見つめながら、イズモは手を握りしめた。爪が手のひらに食い込み、皮膚を破る。痛みで自分を律する。自分には、死者を悼む権利も、感傷に浸る権利もない。

祈りは、本質的に身勝手なものだ。

己の無力さに耐えられず、非情な現実を受け入れられず、理想と夢想を押し通す願い。それは恐ろしく利己的で、傲慢な行為だ。

だからこそ、祈りは尊い。
運命に抗い、未来を変えたいと願う、その意思こそが、人間を人間足らしめているから。それゆえに、魔術師は他者の祈りを尊重しなければならない。師匠はそう言っていた。
にもかかわらず、イズモはラティフの切なる祈りに気づかなかった。心の奥底から放たれる叫びに、気づいてやれなかった。
なぜ、禁忌を犯してまで魔石を探したのか。
なぜ、イズモと体を重ねてまで仲良くなろうとしたのか。
ラティフは取り戻したかったのだ。誇りを。他者のために戦う己の魂を。イズモや魔術は、その手段でしかなかった。
気づく機会はいくらでもあった。
だが、イズモは深く考えなかった。
——オレは、見下していたんだ。
秘境に住み、原始的な暮らしをする蛮族。
魔術師を神のように尊敬してくる、時代遅れの人々。
魔獣を狩ることを娯楽とする、贅沢で野蛮な原人。
口には出さずとも、心のどこかで、そんなふうに思っていた。彼らを手玉に取れ

ると思い込み、利用しようとした。
彼らもきっと、イズモのそうした下心に気づいていたのだろう。だからこそ信用されず、魔狼のことを伝えられなかった。
その結果、大勢の男たちを死なせることになった。
――オレは、なんなんだ。
答えなど、あるはずもなかった。
火が元の大きさに戻り、カリムが〈送魂の儀〉の終わりを告げる。
しかし、誰も動こうとしなかった。多くは帰る家を失っており、家が無事だったとしても、皆と離れることを恐れていた。
誰もが不安だった。村はどうなるのか。自分たちはどうすればいいのか。頼るべき大人たちは、もう、この世にいない。
「長の家を開放する」
不安げな顔の男たちを見回し、アドルが言う。
「家のある者もない者も、今夜は同じ寝床で眠れ」
続いて、アドルは食事や寝床の準備など、矢継ぎ早に指示を出した。命じられた男たちが、気持ちを切り替えるように動き出す。
カリムは衣装を片付けると、怯える子どもたちの元に向かった。穏やかな表情で

語りかけ、アドルの家へと連れて行く。
それぞれが役割をこなす中、イズモはただ見ていることしかできなかった。
「おい」
声をかけられ、顔を上げる。
右頬に衝撃。
完全な不意打ちに、殴られた勢いのまま地面を転がる。
起き上がろうとして、腹に重いものが落とされる。
馬乗りになったムグニが見えると同時に、また殴られる。
「お前が！　お前のせいで！」
さらにもう一発。鼻の奥から錆のような臭いがして、口の中に鉄の味が広がる。
「ラティフもバーリも、お前のせいで死んだんだ！　お前が来てから、何もかもおかしくなった！」
ムグニが叫びながら拳を振るう。躊躇いのない殴打がイズモの顔を襲う。イズモは抵抗することも、声を出すこともできないまま殴られ続けた。
ふいに拳の嵐がやんだ。腫れ上がったまぶたを上げると、ムグニが拳を振り上げたまま、震えていた。
「俺、ずっと決めてたんだ」

涙が頬を伝い、滴となって落ちる。
「あいつは馬鹿だから、俺が何言ったって、無茶して死ぬんだろうって、覚悟はしてた。だから、せめて、そのときは俺が看取ってやろうって、決めてたんだ」
ムグニは幼い少年の顔をしていた。大切な友人を亡くし、やり場のない気持ちを抱えた子どもの顔だった。
「ずっと伝えたかったんだ。弱くてごめんって、泣き虫でごめんって。だけど、誰よりも好きだったって。なのに、こんなのって、あんまりだろ」
涙はとめどなく流れ、雨となってイズモに降り注ぐ。込められた思いの強さを物語るように、熱かった。
「あいつは、お前のことを信じてた。心の底から信じてたんだ。あいつが信じるなら俺も信じようって、思ってたんだ。なのに、なんでこんなことになるんだ。お前も、あいつのことを気に入ってたんじゃないのかよ。なんであいつが一番いてほしいときに、そばにいてやんなかったんだよ。信じたあいつが、馬鹿みたいだろ」
ムグニの濡れた瞳に力が宿り、憤怒となって燃え上がる。
「お前が、お前さえ、来なかったら……！」
声が怒りに震え、手が強く握り込まれる。
「それくらいにしておけ」

拳が振り下ろされる寸前、その腕をアドルが掴んだ。
ムグニが、いつの間にか隣に立っていた人物を見上げる。アドルは厳粛な長の顔をしていたが、目には沈痛な光を宿していた。
「ラティフを殺したのは魔狼だ。彼ではない」
「こいつが銃を渡したせいで、ラティフは逃げなかった。ラティフが死んだのはこいつのせいだ」
ムグニはアドルの腕を振り払い、イズモの鼻先に指を突きつける。
「ラティフは村のため、己の誇りのために、自分の意思で魔狼に立ち向かった。その想いを貶めるつもりか？」
ムグニはぐっと詰まる。
「責を負うべきは俺だ。魔狼が逃げ出すことも、罠を仕掛けていることも、村を襲うことも、何ひとつ予測できなかった。すまない」
静かに話すアドルからは、いつもの威厳が感じられなかった。何もできなかった己を責める、ひとりの男だった。
ムグニも言うべきことを失ったように、肩を落とす。
「分かったら彼を解放しろ。彼は客人だ。村のことで責任を負う立場にない」
アドルの言葉が胸に刺さる。

――オレは責任すら取らせてもらえないのか。
自分は村の一員として認められつつあると思っていた。それが幻想にすぎないと突きつけられた気がした。
ムグニは渋々といった様子で、立ち上がった。
しかし、すぐには行こうとせず、アドルの横でイズモを見下ろしている。アドルがイズモをどうするのか、見届けるつもりらしい。
起き上がろうとするイズモをアドルが手伝った。太い腕で体を支え、座るのを補助する。礼を言おうとしたが、血と唾液の混じった泡がこぼれるだけで、声が出なかった。
「イズモ殿、村の者が申し訳ないことをした。すぐにカリムに手当てをさせよう」
アドルはどこまでも慇懃（いんぎん）な口調でイズモに語りかける。
「どんな事情があったとしても、暴力は許されることではない。後日、彼に謝罪させよう」
「アドル、なんでそいつにそんなこと――」
「お前は黙っていろ」
アドルに睨まれ、ムグニは言葉を飲み込んだ。
「ムグニを、責めるつもりはない」かすれつつも、なんとか声を出す。「大切な人

を失う悲しみは、オレも知っている」
「ご配慮、感謝する」
「オレにも」イズモは思わず言っていた。「オレにも何か手伝わせてくれ」
「申し出は嬉しいが、客人の手を煩わせては我々の沽券に関わる」
「魔狼の狙いはオレだ。この件はオレにも責任がある」
「魔獣の事情など関係ない。村での狼藉は、長である私が償わせる」
アドルの声には、怒りも嫌悪も嘲弄もなかった。ただ静かに、長として言うべきことを言っているだけだった。
アドルは他人に期待していない。自分の抱えている問題を誰かが解決してくれるなど、微塵も考えていない。信じられるのは自分の力だけ。そんな思いが、言葉の端々から感じられた。
イズモが言い返せずにいると、アドルはムグニに目を向けた。
「ムグニ、お前も今日は俺の家で休め」
「眠れるわけがない。見張りをする」
「子どもたちには、ひとりでも多くの大人が必要だ。それに、水の確保、食料の確保、家の建て直し。やるべきことは多い。休めるときに休んでおけ」
ムグニは不承不承といった様子で、アドルの家へと向かった。一度だけ振り返っ

てイズモを見たが、何も言わなかった。
「イズモ殿。幸い、貴殿の家は無事だ。今日はこのまま休まれるといい。村はしばらく慌ただしくなるが、ご容赦願いたい」
アドルは立ち上がると、男たちの方へと戻っていった。入れ違いにカリムが走ってくる。
「イズモ様、話は聞きました。今、手当てをいたします」
「いや、このままでいい」
「しかし――」
「オレは何もできなかった。くだらない自己満足なのは分かっているが、この痛みくらい引き受けさせてくれ」
「……承知しました」
イズモの気持ちを察したのか、カリムは取り出した薬を鞄に戻した。
「私はこれから、アドルと今後の話をなければなりません。今日は、これで失礼いたします」
カリムはそう言うと、静かに立ち去った。余計なことを言わない気遣いがありがたかった。
顔に意識を向ける。ひりひりするような熱。肉が腫れ、鼻にも口にも血が溜まっ

ている。少し動くだけで、盛大に痛んだ。
自分はまだ、痛みを感じられる。心も体も。ならば、すべきことをしなければならない。それが生きている人間の特権であり、義務だ。
——これで終わりなんて、絶対にさせるか。
イズモは立ち上がると、自分の家に向かった。

祈祷師の家は、静寂に満ちていた。
炉の火が小さく爆ぜ、火の粉が舞い上がる。淡い光はゆらゆらと昇っていき、天井にたどり着く前に消えた。
カリムは光を追っていた目を戻し、正面に座る人物に向ける。アドルは家に来てから、ずっと黙ったままだった。カリムが勧めた酒や肉にも手を付けず、思い詰めた表情で火を見つめている。
アドルは目に見えて疲弊していた。
聖域での戦闘に加え、男たちの埋葬も、ほとんどひとりで行った。イズモやカリムの申し出を断り、黙々と穴を掘る姿は、助けられなかった己を罰しているようにしか見えなかった。
「あまり自分を責めないでください」

　黙するアドルを見ていられず、声をかける。
「あなたのおかげで、子どもたちは全員無事です。大人たちも多くは難を逃れました。あなたができるだけのことをしたとみな知っています」
　カリムは真摯に語りかけるが、アドルは反応しない。それどころか、カリムの声が聞こえてすらいないようだった。
「アドル……？」
「――ずっと、魔狼を殺す方法を考えていた」
　アドルの目がカリムに向けられる。
　金色の瞳には、恐怖も悲嘆もなかった。ただ、獰猛な光が宿っていた。
「生き残った者から話を聞くかぎり、手に負えないほどの力はない。だが、悪知恵が働きすぎる」
　アドルが吐き捨てるように言う。
「魔狼は俺が来ることを想定し、何重にも罠を張った上で逃げ出した。すべて計画してのことだ。魔狼は俺と戦う気などない。俺の気配を察すれば、迷わず逃げるだろう。そして、また村を襲う気だ」
　魔狼は、アドルと正面から戦っても、勝ち目がないことを知っている。そこでアドルの大切なものを破壊して、精神的に追い詰めることにした。自分自身より他人

が傷つくことを厭うアドルには、極めて有効な戦術だった。
イズモを探しつつ、アドルの脅威を削ぐ。身の毛のよだつ悪辣さだった。
「どうするつもりですか？」
「男たちを神域に避難させる。その上で、魔狼をおびき出し、殺す」
アドルの目にゆらゆらと憎悪の炎が灯るのが見えた。
「どうか落ち着いてください。あなたを怒らせることも魔狼の策です。あなたを失えば、今度こそ村は立ち直れなくなります」
「ではどうする。放置して、魔狼に怯えて暮らせと？」
「そうではありません。殺し合う以外の道を探るべきだと言っているのです」
「人と魔獣が分かり合うことなどできない」
「私はそうは思いません。魔狼にも、兄弟の死を嘆き、復讐に身を捧げる心があります。〈風〉と話ができる私なら、魔狼とも話せるかもしれません」
「却下だ。危険すぎる」
「魔狼のことは俺に任せておけばいい」
「できません。すべての責は私にあります」
「……お前は、何を言っている」
「薬草を取りに行った日、魔狼に手を出したのは私なのです」

皆で手分けして薬草を探していると、カリムは見たことのない魔獣が、こちらをじっと観察していることに気づいた。煤のような顔と、頼りない赤い目。異様な外見だったが、弱っているのが一目で分かった。

カリムは非常用に持っていた肉を、魔狼に差し出した。

最初は警戒していた魔狼も、食欲には勝てなかったのか、おそるおそるカリムの手から肉を取った。カリムは一心不乱に肉を貪る魔狼を、黙って見ていた。

カリムが何もしないことに安心したのか、もう一切れ差し出すと、魔狼は疑いの目を向けつつも迷わず食らいついた。そんなやり取りを何度か繰り返すうち、魔狼もカリムに心を許したようだった。

だが、魔狼が最後の一切れに飛びついたとき、牙が指に当たった。

牙の先端が人差し指の腹を軽く傷つけただけだったが、カリムは思わず声を出してしまった。

バーリが魔狼に気づいた。

バーリは一瞬で間合いを詰めると、裂帛に気合とともに、戸惑う魔狼を槍で薙ぎ払った。そして、魔狼が怯んだ隙に、カリムを後方へと投げた。

カリムはそのまま気を失い、イズモに起こされたときには、すべてが終わっていた。イズモという外の人間が不思議な力で魔獣を倒したと、早口に話すラティフの

声を、カリムは呆然と聞いていた。

「魔狼は悪くありません。悪いことなど、何もしていません」

バーリに殴られたとき、魔狼は裏切られたと思ったに違いない。食べ物で油断させて、殺そうとしたも同然なのだから。

一方で、バーリやイズモも悪くない。彼らは自分のすべきことをしただけだ。

カリム以外の全員が、カリムの気まぐれに巻き込まれた被害者だった。

「私が余計なことをしなければ、こんなことにはなりませんでした。私には、魔狼と話す義務があります」

「原因など知ったことではない。どんな理由があろうと、魔狼は殺す」

「同意見だ」

闖入者（ちんにゅうしゃ）の声に、ふたりが振り返る。

戸口にイズモが立っていた。顔は腫れ上がったままだったが、瞳には強い意志の光が宿っていた。

「盗み聞きするつもりはなかったんだが、近くに来たら話が聞こえてしまった。大目に見てくれ」

イズモはそのまま家の中に入ってくる。

「魔獣にとって人間はただの餌だ。人間が肉と話し合わないように、魔獣が人間と

話し合うことはない。無駄死にするだけだ」
「申し訳ないが、今は村の重要な話をしている。客人はお引取り願おう」
「オレはもう客じゃない」
イズモは持っていた鞄をふたりの方へ倒した。鞄のかぶせが外れ、詰め込まれていたものが、じゃらじゃらと音を立てて転がりだした。
アドルが、近くに転がってきたひとつを掴む。
黒い石。よく見ると、石の中で光が燃えるように揺れていた。
「これは？」
「魔石だ。神域から盗んだ」
「どうして、そんなことを」カリムは思わず尋ねていた。
イズモが魔術を見せると言った日、イズモは子どもたちが集めた石の中に十分な量の魔石があったと言っていたが、あれは嘘だったらしい。
「悪いな。オレはやるなと言われたらやりたくなる性分なんだよ。特に、神域なんて特別な場所、入りたくなるに決まっている」
「ひとりでやったのか？」
アドルがぞんざいな口調で尋ねる。怒りを表すこともなく、イズモをじっと見つめている。

「当たり前だ」
　イズモは奇妙なほど堂々としていた。とても謝罪に来たようには見えず、むしろ罰せられることを望んでいるようにに思えた。
　アドルが手の中で転がしていた魔石を握りしめる。
「……なぜ、今、白状しに来た？」アドルは眼光を鋭くする。「我々は今、魔狼という難題を抱えている。他のことにかかずらっている時間はない」
「それは百も承知だ。だから言い訳も言い逃れもしない。罰として、オレを魔狼に差し出してくれ」
　カリムはハッと息を呑み、アドルの目に理解の色が浮かぶ。
　アドルはこれまで、イズモを部外者として村の問題から遠ざけてきた。そこでイズモは自分の罪を示し、村との関係をこじつけた。魔狼と戦う理由を正当化するために。黙っていれば、隠し通せたはずの罪を告白してまで。
「俺としては、今、ここで殺しても構わないが？」
　アドルの探るような視線にも、イズモは怯まない。
「それでお前の気が済むならそうしてくれ。お前がどんな判断をしようとオレは受け入れる」イズモは両手を挙げ、抵抗の意思がないことを示す。「だが、それだとオレが死ぬだけで、お前にはなんの得もない。どうせ殺すなら、使えるだけ使っ

てみないか？　村人じゃない罪人なら、どうなろうが気に病まなくていいし、捨て駒には最適だろ」
「待ってください。私が皆を巻き込んだのです。私に責任を取らせてください」
「駄目だ」「駄目だ」
　アドルとイズモが口をそろえる。
「きっかけはどうであれ、事態はお前の手を離れた。俺が対処する」
「汚れ役はオレが引き受ける。いわゆる『餅は餅屋』ってやつだ」
　ふたりが同時に言い、アドルは眉をしかめ、イズモは不敵な笑みを浮かべる。カリムには何もさせないという点で、ふたりの意見は一致しているようだった。
　――私はまた、見ていることしかできないと。
　自分のせいで誰かが傷つくのに、自分には何もできない。己の無力さに、カリムは唇を噛んだ。
　ふたりは、カリムの失意に気づかず、話を進めている。
「罪人の名誉挽回を手伝う気はない」
「お前にも体面があるのは分かっている。だが、ひとりで行っても相手は逃げるだけだ。今度は子どもたちを人質にするかもしれない。だから、最初はオレがひとりで行って、お前は戦闘が始まったら駆けつければいい」

「小賢しい男だ。こうなることを見越した上で打ち明けたのか」
アドルが呆れたように言う。アドルでもイズモを御するのは無理らしい。
だが、とアドルの瞳に鋭さが戻る。
「お前の提案は、俺がお前を信用することが前提にある。しかし、俺にはお前を信じる理由がない。殊勝な態度で我々を信頼させ、そのまま森から脱出する。お前ならやりかねない」
「アドル。それはいくらなんでも――」
「この男は疑われて然るべきことをした。安易に飛びつくわけにはいかない」
「分かっている」
イズモは懐の留具を外し、短剣を鞘ごと取り出す。
「師匠からもらった術式機構だ。これがなければ、オレは森を出られない」
イズモは剣を引き抜く。不思議な文様の書かれた銀色に輝く短剣。カリムが自分の腹を刺したものに間違いなかった。
イズモは剣を鞘に戻すと、アドルに差し出した。
「これをお前に預ける。それで信じてもらえないか？」
アドルは剣に視線を注いでいたが、おもむろに両手を差し出し、ひどく恭しい所作で受け取った。

「確かに預かった。お前のことは信用ならないが、この剣の栄誉のために、今は手を組もう」
「十分だ。感謝する」
イズモが手を差し出すと、アドルもその手を取った。互いに、がっしりと手を握り合う。
「イズモ様」カリムは我慢できず、声をかけた。「本当に、あの魔狼と戦うしか道はないのでしょうか？　私にできることは何もないのですか？」
「残念だが、互いに一線を越えてしまった以上、力で解決するしかない」
「ですが、これでは、あまりにも……」
「なら、祈るといい」
イズモがカリムを励ますように肩を叩く。
「自分には何もできないとき、自分の力ではどうしようもないとき、オレはそうすることにしている。自分はどうありたいのか、世界にどうあってほしいのか。現実は変えられないとしても、祈りは心を導いてくれる」
お前の祈りなら魔術になりそうだけどな、とイズモは笑った。
ならば祈ろう。アドルと話し合うイズモを見て、カリムは心に決めた。
自分の祈りで、世界が少しでも良くなるのなら。

この人の笑顔を失いたくないから。

4

イズモは銃を構え、早朝の森を歩いていた。

日は昇って間もなく、樹冠の隙間から漏れた光が地面を斑に照らしている。頭上では何も知らない鳥たちがさえずり、木立の向こうでは鹿たちがのんびりと草をはんでいる。村の行く末を懸けた死闘をするには、あまりにものどかな光景だった。

地面をよく見ると、ところどころに窪みができていた。イズモの靴よりはるかに大きな、動物の足跡だ。後ろ足に微妙な歩調の乱れがあり、その周囲には赤黒い血の跡があった。負傷した魔狼のもので間違いないだろう。

足跡は迷うことなく、ねぐらのある聖域へと向かっていた。そこには、自分の痕跡を消そうとする努力も、追跡者を撒こうとする意図も感じられなかった。

――十中八九、罠だろうな。

アドルを陥れた狡猾さを考えると、重症で余裕を失っていたとしても、場所が割れているねぐらに一直線に戻るのは迂闊(うかつ)すぎる。

そして、魔狼が準備もなく、イズモを待っているわけがない。

——罠があったところで、飛び込むしかないんだけどな。
足跡をたどっていると川に出た。以前、カリムと水浴びをした場所だった。雨が降ったのは一昨日だが、川はまだ茶色い水が濁流となって流れていた。
報告の通り、橋はなくなっていた。崖が少し焦げていることから、魔狼が落としたのは間違いなさそうだった。
反対側の崖を見ると、足跡と血の跡が続いていた。
「橋を作るには距離があるか」
イズモは銃を構えると、対岸の木に銃口を向けた。
——揺らぐ稲穂で編む鎖。紡ぐ忘却の糸の結び目。つなぐ意識の貴金属の爪。
狙いをつけつつ、引き金を引く。
——掴め、鶚（ミサゴ）！
『鳥打ち』第十三羽〈鶚〉によって鎖の付いた金属の筒が生成され、銃口から飛び出す。銃口と鎖でつながった筒が狙った木に命中。鉤爪が飛び出し、幹に食い込む。体重をかけて引っ張り、外れないことを確認する。
——巻き取れ！
祈りとともに、鎖が銃口に戻っていく。最初はゆっくりと、徐々に巻き取る速度が上がっていく。

鎖の遊びがなくなるのを見計らって、崖から跳ぶ。体が木に引っ張られ、イズモは飛ぶように川を越える。木にぶつかる前に魔術を解除。着地と同時に転がって勢いを殺す。そのまま木の陰に隠れ、周囲に銃口を向ける。

無防備な空中を狙ってくることも想定していたが、待ち伏せはないようだった。地面を見ると、足跡は森の奥へと続いている。イズモは銃を構え直すと、周囲を警戒しつつ歩き出した。

しばらく進むと、あちらこちらに魔獣の死骸が転がっていた。魔狼に操られ、アドルを待ち構えていた大猪口や千手鹿たちだった。ほとんどの魔獣は正確に首を刎(は)ねられていたが、中には正面から真っ二つにされているものもあった。

「分かってはいたが、とんでもないな」

断面は鋭利な刃物で切られたように滑らかだった。硬い被毛も強靭な筋肉も頑強な骨も、まるで存在しないかのような切れ方をしている。アドルの魔術なのは疑いようもないが、恐るべき力だった。

――だが、力では悪意に勝てない。

純粋な力勝負なら、アドルの右に出るものはいないだろう。だが、その力はあまりにも素直だ。圧倒的な力も、策を弄(ろう)する相手には敵わない。

――目には目を、歯には歯を、悪知恵には悪知恵を、だ。

それこそがイズモの得意とするところだった。
——相手が罠を張るなら、こっちもできるだけのことはしないとな。
寄り道をしつつ進んでいると、木々の先に崖が見えた。
そびえ立つ荒々しい岩肌に、大きな穴が口を開けている。足跡と血は穴の中へと続いていた。周囲の特徴からも、アドルから聞いた魔狼が根城にしている洞穴に間違いない。
ふと、穴の前に何かが置いてあるのが目に入った。
それは魔狼の首だった。
本格的に腐敗が始まっており、眼球は溶け崩れ、眼窩は暗い穴になっていた。周りには蝿が飛び回り、蛆が黒い毛皮の上でのたうち回っている。もはや、腐った動物の頭部でしかないが、それでも魔狼だと分かる不気味さがあった。
口吻に槍が刺さった痕があることから、倉庫から盗まれたものに間違いない。
木の陰に身を潜め、状況を確認する。
陽は洞穴の入り口を照らすだけで、イズモの位置からは、中の様子までは分からなかった。耳を澄ましても、気になるような音はない。魔狼はまだ、イズモが来たことに気づいていないらしい。
——先手必勝。巣穴ごと吹き飛ばしてやる。

魔狼はまともに戦って勝てる相手ではない。ならば、まともではない方法で戦うのみだ。
洞穴に銃口を向け、引き金に指をかける。
直後、悪寒。
銃を抱え、横に跳ねる。
極大の熱線が、イズモが直前までいた空間を焼く。余波で毛先が焦げるのを感じながら、転がってさらに距離を取る。
熱線が来た方向を見ると、穴を見下ろす位置に黒く揺らめく影を見つける。
――こっちの考えなんてお見通しってわけかよ！
先手を取ろうとしたこと自体が罠。まんまと騙された自分が腹立たしい。
魔狼の口腔に光が集まり、第二射を放つ。イズモは木を盾にして耐える。
不意打ちは失敗。当初の計画に戻す。
――極彩色の神経束をかき鳴らす震天の嬌声。狂王の狂騒に恐々(きょうきょう)と恐慌せよ。
祈りながら近くの草を耳に詰める。銃口を空に向け、目を閉じて引き金を引く。
――叫べ、鈴鳥！
直後、目のくらむ閃光が放たれ、耳を聾する大音声が森に響き渡る。驚いた鳥や獣たちが、大騒ぎしながら逃げ出す。

第二十五羽〈鈴鳥〉。強烈な光と高周波で敵を無力化する非殺傷魔術だ。本来は室内で使うものであり、屋外では音が拡散して効果が薄い。

だが、アドルに戦闘が始まったことを知らせるには十分だった。千手鹿からムグニを助けたアドルなら、すぐに来るはずだ。

——だからって、悠長にしてる暇はない！

木の陰から〈駒鳥〉を連射。銃弾を浴びた岩や木が吹き飛び、魔狼が跳び出すように逃げる。イズモも走りながら撃ち続ける。しかし、魔狼は緩急をつけながら木の間を縫うように走り、捉えることができない。

——目が見えないのに、なんで森の中を走れる⁉

昨日聞いたとおり、魔狼は目が潰れている。それでも魔術を避けられるのは、魔術になる直前の祈りを感じとっているからだ。しかし、ただの木は知覚できるはずがない。

——どうなってんだ。まさか、本当は見えてるのか？

魔狼の口に魔力が集中。

思考を中断し、大きな木を見つけて飛び込む。イズモがいた位置から、ややずれた場所を光線が横切る。やはり、見えているわけではないらしい。イズモが魔術を放つ際の祈りから、方向を割り出しているのだろう。正確さには欠けるが、無視で

きるほど雑でもない。
――さすがに、火炎放射で追い立てる気はないみたいだな。
弾倉を交換しながら安堵する。
魔狼が村で使ったのは、粗製ガソリンに増粘剤を混ぜた、ナパームと呼ばれる可燃性の液体をばらまく魔術だった。親油性のため付着すれば容易には落ちず、長時間燃え続ける。こんな森の中で使えば、山火事になることは確実だろう。
魔狼も生き物だ。難燃性の分厚い毛に蓄えた空気で熱を防いでいるだけで、炎を無効化する力はない。また、他の生き物同様、呼吸をしているので酸素がなくなれば酸欠に陥る。安易に森を焼けば、イズモを見失うどころか自分の命すら危うい。
――見えない状態で接近戦はあり得ない。となると、魔術の撃ち合いか。消耗戦になったらオレの負け。罠の場所まで誘導して、一気に片を付ける。
牽制の銃撃を放ち、走り出す。が、木から飛び出した直後に、異なる魔術の波長を察知する。異常を感じ、慌てて引き返し、耳をふさいで口を開ける。
内臓がひっくり返るような衝撃。
熱線では捉えられないと判断したのか、爆裂魔術に切り替えてきた。熱線ほどの貫通力はないが、爆風は広い範囲を焼く。命中率の低さを攻撃範囲の広さで補ってきた。常套手段ではあるが、かつて自分が魔狼にしたことの意趣返しされているよ

うで、なんとも言えない気分になる。
魔狼が魔術を連発。次々に爆風が押し寄せ、動くに動けない。しかし、爆風を浴び続けた木が不穏な音を立て始める。
イズモが反撃に出ようとしたとき、ふいに爆発が止む。
奇妙な静寂。
――さすがに疲れたか？　それとも、アドルが来たのか？
そっと、木の陰から顔を出す。
目の前に闇。おそるおそる見上げる。
巨大な黒い影がイズモを見下ろしていた。顔の半分が焼け爛れ、潰れた両目からは、赤黒い血が涙のように滴る。魔術を連発した反動からか、口からも血を流していた。
魔狼。
爆風に気を取られ、接近に気づかなかった。
魔狼の右爪が閃く。とっさに後ろに跳ねるが、爪の先端が左腕をかすめ、吹き飛ばされる。木に叩きつけられ、息が漏れる。
銃を構えようとして違和感。腕が動かない。見ると、左上腕に深い裂傷。上着とシャツが切り裂かれ、肉が抉れて骨が見えていた。

痛みを無視して、右手だけで銃を向ける。しかし、すでに前脚が振り降ろされた後だった。死神の鎌のような爪が迫る。
「どけ」
突然、左脇腹に衝撃。反応する間もなく、吹き飛ばされる。
地面を数度転がった後、激痛をこらえて体を起こす。
前方に、輝く剣を掲げ、魔狼の爪とせめぎ合う黒虎の姿があった。
「うるううぅあぁぁぁ！」
叫びとともに全身の筋肉が隆起、魔狼の腕を押し返し、剣が振り抜かれる。
魔狼は飛び退り、唸り声を上げる。
アドルの乱入にも、魔狼が逃げる気配はない。後がないのか、勝てる見込みがあるのか。どちらにせよ、ここで決着をつけるつもりのようだ。
「助かった」
左腕に魔術符を貼りつつ、アドルの隣に並ぶ。
「囮に死なれては元も子もない」
アドルは素っ気なく答え、剣を構え直す。
アドルが握っているのは、ほのかに光る金色の長剣だった。幅広で、緩やかな弧を描く刀身はイズモが両手を広げたほどもある。装飾のない無骨な外見は、アドル

の性格を表しているようだった。
「魔術で作り出した剣か」
「民を守る軍神の力、と聞いている」
つまり、そういう祈りなのだろう。剣から放たれる魔力の圧は、イズモの魔術の比ではなかった。イズモに協力を求めなかったのも頷ける。
魔狼が天に向かって吠える。耳を塞ぎたくなるような声。
ほどなく、地面が揺れ始め、森の奥から黒い塊が向かってくるのが見えた。
黒い毛に覆われた異常発達した筋肉の鎧。白い仮面のような顔には、黒い穴が三つ並んでいた。
「肉熊!?　まさか、あいつらまで操ったのか!?」
全部で五頭。それも、倉庫を漁っていた個体よりも、ひと回り大きい個体ばかりだった。魔狼が多数の魔獣を使役できるのは分かっていたが、肉熊まで支配できるとは思わなかった。
肉熊が魔狼の前に集結。痙攣するように首を震わせ、カタカタという威嚇音の大合唱が森に響く。凶暴極まりない魔獣の群れにイズモは気が気でないが、アドルは平然としていた。
「お前、怖くないのか？」思わず尋ねる。

「この程度で怯んでいては、カリムは守れない」アドルは表情を変えることなく言い放つ。「預かっていたものは返す。逃げたいなら逃げればいい」
アドルが物入れから短剣を取り出す。当然、イズモが逃げないと分かってのことだろう。イズモはそれを信頼と解釈し、冷静さを取り戻した。
「肉態に足止めさせている間に、魔狼が魔術で攻める気だ」
アドルに魔狼の作戦を解説する。
「ここに来る途中で罠を仕掛けた。オレが砲台になって妨害するから、お前はオレを担いで、あいつらを誘導しろ。いくらお前でも、あの数の肉態を一度に相手するのは無理だ。それでいいか？」
「好きにしろ」アドルが言い放ち、剣を構える。
魔狼と肉態も迎撃体勢に入る。焼け付くような緊張感に、ひげの先が焦げるような幻覚に襲われる。
呼吸を整え、肉態に銃口を向ける。
「走れ！」イズモが叫ぶと同時に、アドルが走り出した。肉態の方へ。
射線が塞がれ、イズモは銃口を下げる。
「何やってんだ、お前⁉　人の話を聞いてなかったのか⁉」
「好きにしろとは言ったが、従うとは言っていない。後は俺がやる」

「協調性って知ってる⁉　オレを信頼したんじゃなかったのか⁉」
魔狼が吠え、肉熊たちが突撃。
先頭にいた肉熊がアドルめがけ剛腕を振り下ろす。爪がアドルに触れる寸前、アドルの右腕が霞む。
悲鳴。
アドルを攻撃した肉熊が腕を押さえ、叫んでいた。肘から先がなくなり、血が滝のように流れている。どすん、とイズモの目の前に何かが落ちる。見ると、イズモとほぼ同じ大きさの肉塊だった。肉熊の腕だ。
「あの一瞬で斬った、のか？」
イズモが驚いている間に、アドルが間合いを詰める。負傷した肉熊の首に向けて刺突を放つ。それを他の肉熊が横から腕を割り込ませて阻止、剣が分厚い肉に食い込み、アドルの動きが止まる。その隙に、別の肉熊の腕が振り下ろされる。アドルは剣を放し、跳んで離脱。
浮いたアドルを狙い、魔狼の口に魔力が集中。
だが、アドルが宙を掴むような仕草をすると、指と指の間に投げナイフのような短剣が出現、魔狼に向け投げる。魔狼は近くの木の裏に転がり込み、剣の群れは地面を縫いつけるだけ。

着地したアドルに、二匹の肉熊が前後から強襲。しかし、アドルは背面宙返りで回避し、後方の肉熊の背中に飛び乗る。アドルの手に剣が生まれ、肉熊の脊髄に突き立てる。事切れた体を蹴り、向かってきた肉熊の頭部にかかとを落とす。白い顔にヒビが入り、頭が陥没する。
アドルは次々と繰り出される致死の攻撃を、悠々と捌いていく。
――言うだけのことはある、か。
並の魔術師なら一匹でも手を焼く肉熊を、アドルは複数体を相手に、まったく引けを取らない。しかも、意識は常に魔狼に向けられており、魔狼も手が出せずにいる。まさに化け物じみた戦闘能力だった。
そう思った矢先、魔狼が肉熊に向け、炎を吐き出した。腕を失った個体と頭を負傷した個体に、ナパームの火が降り注ぐ。二匹はすぐに火だるまとなり、絶叫を上げながらアドルに突進する。
「あいつ、鬼か⁉」
アドルの剣は肉熊の腕力でも止められない。ならば、剣で防げない攻撃をすればいい。負傷した肉熊なら惜しくない。合理的だが、情け容赦がなさすぎる。
イズモは肉熊に向けて〈駒鳥〉を放つ。しかし、表面の肉が爆ぜるだけで動きは止められない。想像以上の頑丈さだった。

――空虚なる久遠の庭で朽ちゆく鯨頭の偶像に命ず。群青の寓話に苦悶する愚者に軍神の杭を打て。

イズモはその場に片膝を突いて銃床を肩に当てて固定。銃口の前に、直径百ミリを超える砲弾が生成。

――粉砕せよ、嘴広鸛(ハシビロコウ)！

砲弾が射出され、アドルに向かっていた一匹の肩口に命中する。着弾の衝撃で肉熊の体が爆発したように砕ける。粉々になった骨や肉が、周囲にぶちまけられ、緑の森を赤く染める。

『鳥打ち』第七十八羽〈嘴広鸛〉。戦車の主砲に使われる巨大な砲弾を発射する魔術で、本来は敵が潜んでいる建造物を破壊するためのものだった。生き物に使えば、原型すら残らない。

イズモの体が揺らぎ、膝をつく。魔術の反動により、頭が割れるような頭痛に襲われる。あまりの痛みに現実感が失われ、思考できなくなる。

それでも耐え、もう一匹の肉熊を狙う。が、魔術の気配を感じ、木の陰に転がり込む。足の先を爆風が通り過ぎていく。

イズモが体勢を立て直したときには、炎の塊はアドルの数メートル先まで迫っていた。周りにいた肉熊は巻き添えを恐れるように離れる。

アドルが両腕を掲げ、両手で剣の柄を握るような仕草をする。次の瞬間、長大な剣が出現。横幅はイズモの肩ほど、刃渡りはアドルの身長の三倍以上もある。馬鹿馬鹿しいほどの大剣だった。

「なっ」

アドルが振り下ろす。

輝く刃が、燃える肉熊に吸い込まれるように落ちる。そのまま抵抗など存在しないかのように体を通過、地面に叩きつけられる。大木が倒れたような衝撃で地面が揺れ、落ち葉が舞う。

肉熊は脳天から股間まで、完璧に両断されていた。思い出したように体が両側に倒れ、肉の断面から内臓と血が吹き出す。大量の血が地面にできた深い裂け目の中に溜まっていき、まるで大地にできた裂傷のようだった。

呆気に取られるイズモの視界の端で何かが動く。剣を振り下ろし、無防備になったアドルの背中を肉熊が狙っていた。イズモが援護できないよう、射線上にアドルが入るようにしている。

「伏せろ！」

イチかバチかで銃口を向けるが、当然のようにアドルは従わない。肉熊の腕が振られ、アドルは両腕を盾にして横薙ぎの一線を受ける。腕がへし折れ、アドルの体

が小枝のように吹き飛ぶ。

――掴め、鶚！

離れた木に鎖を巻きつけつつ、アドルを受け止める。ぶつかった拍子に肋骨が折れる感覚。支えられるわけもなく、一緒に地面を転がっていく。

痛みで明滅する視界の中、魔狼が炎を吐くのが見えた。

――巻き取れ！

高速で鎖を回収。アドルとともに引きずられる。

足のすぐ先で炎が弾け、一部が上着の裾にかかる。血の気が引くが、上着は難燃性ですぐには燃え広がらないと判断し、巻き取る速度を上げる。はずみで肩が外れそうになるが、銃を手放せば死ぬしかなく、必死に耐える。

イズモはアドルを抱え、森の中を逃げていく。

魔狼が完全に見えなくなり、しばらくしてからイズモは魔術を解いた。

引きずられて全身が痛んだが無視。短剣を取り出し、上着の裾を切り離す。さらに魔術符を胸に貼る。

隣でアドルの苦鳴。見ると、右足のすねが燃えていた。イズモはアドルの足に短剣を当てる。

「痛いだろうが我慢しろ」

そう言って、肉ごと炎を削り落とす。さらに足と両腕に魔術符を貼る。折れた骨が接合し、失われた筋肉が再生する。アドルがほっと息を吐く。

「手間をかけさせた」

「囮に死なれたら元も子もないからな」

イズモの皮肉に、アドルの顔に苦味が走る。

「さっき、なぜ剣で受け止めなかった？」

「剣は大きさを自由に変えられるが、大型化すると、しばらく出せなくなる」

どうやら、アドルの魔術は時間あたりの出力が決まっているらしい。恐るべき力にも限度は存在するということだ。

「そういうことは昨日のうちに言っとけよ」

「すまない」アドルは意外なほど素直に謝った。

言い訳も何もない。本当にひとりで魔狼を倒す気でいて、イズモの助力を不甲斐なく思っているようだった。イズモは深々とため息を吐く。

「少しはオレのことを信じてくれ。オレはよそ者だし、信用に値しないのはオレ自身、分かっている。だが、あいつを是が非でも倒すって点は一緒のはずだ。今だけでいい。オレを頼ってくれ。オレもお前を信じる」

イズモは真剣だったが、言葉を重ねるほど空々しく聞こえることに気づき、口を閉じた。信頼は一朝一夕で築けるものではない。都合のいいときだけ信頼を持ち出すなど、詐欺師の常套句だ。

アドルはイズモを見つめていた。道に迷った子どもが、親切に話しかけてきた大人を信じてもいいのかと、決めかねているような表情だった。

かつての自分を思い出し、イズモは舌打ちする。自分はそうやって近づいてきた相手を信じてしまい、全財産を奪われたというのに。

「それはそうと、ひとつ気になったことがある」アドルの視線に耐えられず、イズモは話を逸らした。「お前が剣を投げたとき、魔狼は近くの木に逃げ込んだ。あいつは目が見えないのに、なんで木の位置が分かったんだ」

「簡単なことだ。この辺り一帯の木の配置を覚えているのだろう」

「位置を覚えるって、どうやって」

「木に引っ掻いたような傷がついている。それに、ここを嗅いでみろ」アドルが近くの木の根本を顎で指す。「かすかだが尿の臭いがする」

言われてみると、木の幹には深い爪痕があり、根本からは異臭がする。

「まさか、全部の木に付けたのか？　一晩で？」

「逆だ。大型の動物は自分の縄張りを主張するため、木に傷をつけたり、臭いをつ

けたりする。それを利用したのだろう」
「つまり、ここは魔狼の縄張りってことか。自分たちが習性でつけた痕跡を利用するために、オレたちをここに誘い込んだ」
魔狼の頭の中には臭いの地図ができており、それを頼りに森を動き回っているということだ。近くの木に逃げ込むくらい造作もないだろう。
「まったく、迷惑な話だ」アドルが忌々しげに言う。
遠吠えがして、肉熊の走る音がする。少しずつ近づいてくる。
「木に印をつけたとしても、こっちの位置までは分からないはずだろうが。なんで追ってこられるんだ」
「自覚がないようだから言うが、お前はかなり臭う。追跡できて当然だろう」
「だから!!　そういうことは!!　先に言え!!　これでも気にしてんだよ!!」
ムグニに言われてから、体は毎日洗っているのだが、上着や靴、装備など洗いようのないものはそのままだった。これでは、臭いに敏感な魔獣には、大声で叫んでいるのと大差ないだろう。
――位置がバレているとなると、戦法が限られるな。
魔術は発動する前に察知され、避けるか防がれるかしてしまう。となると、不意を突くしかない。問題はどうやって身を潜め、魔狼の気を逸らすかだ。

――魔狼を欺く方法なんてあるのか？

犬の嗅覚は人間の数千から数百万倍とされる。泥をかぶったくらいでは、ごまかせない。かといって〈爪羽鶏〉のような露骨な異臭では余計に目立つ。

――完全に隠せなくても、魔狼がオレを見失えばいいんだ。だが、そんな都合のいい方法があるわけ……。

肉熊の威嚇音がすぐ側まで迫っていた。出ていこうとするアドルの腕を掴む。

「待て。無策で行っても、さっきの二の舞いになるだけだ。それに、魔狼はお前の弱点を知った。同じ手は通用しない」

「なら、どうする。お前の首を斬って、謝罪すればいいか？」

「それには断固反対す――」

脳裏に閃光が煌めく。

手がかりを元に、魔狼を倒す理論を組み立てていく。一歩間違えば死ぬが、このまま押し負けて死ぬよりはマシだ。

「作戦がある」

時間がないので必要なことだけ手短に話す。案の定、アドルは眉をひそめ、イズモを見る。目には最大の疑念。

「正気か？」

「一回死んだ人間が、まともなわけないだろ」
イズモの瞳に鬼火のような炎が灯る。
「あいつは怒りに狂い、手段を選ばなくなった。目には目を、暴力には暴力を、狂気には狂気を。狂った鼠を敵に回したらどうなるか、思い知らせてやる」
アドルに手を差し出す。
「正気はないが勝機はある。この賭けに乗るか？」
「答えるまでもない」
言うやいなや、アドルがイズモを抱き寄せて前転。直後、背後にあった木を貫いて黒い腕が出現。幹がへし折れ、倒れてくる。
アドルは起き上がって走る。後ろを見ると、陣形を組んだ肉熊と、後ろに控える魔狼の姿があった。森の暗がりに浮かぶ黒い塊は浮かばれない幽鬼を思わせた。
「橋がかかっていた方に走れ！　そこに罠が仕掛けてある！」
魔狼が吠え、肉熊たちが一斉に突進を開始する。
イズモはアドルの肩から身を乗り出し〈駒鳥〉を連射。木を倒し、進路を妨害する。しかし、先頭にいた肉熊が木を支え、その間に他の肉熊が通過する。千手鹿の一件から対策してきたらしい。
肉熊が腕を振り、爪の先が木をかすめる。幹が爆散し、破片が弾丸となって飛ん

でくる。イズモは祈りを〈啄木鳥(キツツキ)〉に切り替え、撃ち落としていく。
「木を盾にしながら、方向を変えて走れ！」
「注文の多い鼠様だ」
アドルは不平をこぼしつつも、言われた通りにする。少しずつ距離が離れ、やがて見えなくなった。どうやら、魔狼がついて来られなくなったらしい。その隙に目的地へと急ぐ。
「ここだ」
木々の間の少し開けたところで、アドルを止める。
「この辺りには魔獣を検知すると発動する魔術を仕掛けた。合図したら、オレを抱えて木の上に逃げろ。巻き添えを食うと、挽き肉になるぞ」
アドルは不服そうな顔をしつつも頷いた。美しい口元が、俺は運び屋ではないのだがな、と動いているように見えたが、気にしないことにした。
「来た」
アドルの声に振り向くと、森の奥からやってくる黒い集団が見えた。だが、妙に地響きが大きい。三匹だった肉熊が、八匹まで増えていた。
「予備まで用意してるとか、準備よすぎだろ！」
少し大げさに叫び、慌てたように銃を向ける。

魔狼が吠え、肉熊たちが散開する。
狙いを定めさせず、木を盾にする戦法だ。しかも、こちらを取り囲むような動きで、逃げ道を塞いでくる。
イズモは肉熊たちの動きに翻弄されたように〈駒鳥〉を乱発する。いくつかは空を切り、いくつかは木に当たり、いくつかは肉熊に当たる。
アドルもイズモの策を理解し、剣を向ける先を迷わせている。
魔狼は動かない。なんとなく罠を察しているような気配はあるが、気づいたころには遅い。徐々に輪が狭まり、肉熊が迫ってくる。
「今だ！」
イズモが叫ぶと同時にアドルがイズモを抱え、跳ぶ。近くの木に剣を突き立てて体を固定する。
――爆砕せよ、塚造（ツカツクリ）・改！
イズモの祈りが周囲に広がる。
ばら撒いていた魔石が起動。肉熊に反応し、次々に金属の塊を生成して空中へと打ち上げる。
標的を見失った肉熊たちが、戸惑ったように、自分たちの周囲に浮かび上がる無数の塊を見る。魔狼は素早く反応、後ろに飛び、木の陰に隠れる。

次の瞬間、爆発。
爆風と金属片が肉熊をあらゆる方向から襲う。逃げ惑う肉熊がさらに別の魔石を刺激し、魔術が発動。平和だった森の一角は、第七十一羽〈塚造・改〉が生み出す爆裂の地獄と化していた。
対象の足を破壊する〈塚造〉に対し、〈塚造・改〉は殺傷を目的とする。魔石が獲物を検知すると、爆弾を生成して打ち上げ、目標の上半身付近で爆発する。爆弾には殺傷力を高めるための金属球が仕込まれており、爆風と散弾の二段構えで対象を屠る。
いくら肉熊の体が頑強だろうと、至近距離で連続発動する爆風と金属片には耐えられない。
「これで肉熊は一網打尽――」
言いかけたイズモの背中の毛が逆立つ。膨大な魔力の波濤。見ると、魔狼が木の陰から姿を表し、口腔に光が浮かんでいた。あふれんばかりの光が力を圧縮するように収束していく。
「避けろ！」
イズモが叫び、アドルがその場から離脱。
魔狼の口からほとばしる幾筋もの光線が森の中を乱舞する。

周囲の木々に斜線が入る。一拍遅れて、ずれる。

幹を輪切りにされた木が次々と倒れ、樹冠が地面に落ちていく。アドルは崩れていく木を足場にしながら、さらに逃げる。

超超高出力の熱線。

村を焼く膨大な熱量を、糸ほどの太さにまで凝縮すると、大木をも切り裂く死神の刃となる。

細切れになった幹や樹冠が肉熊たちの上に降り注ぎ、爆発を押え込む。恐ろしく強引な沈静化の方法だった。

イズモは必死に痛みに耐える。逃げ遅れた尻尾が巻き込まれ、長さが半分になっていた。断面は炭化し、血も出ない。

「大丈夫か!?」

「オレに、構うな」イズモは声を絞り出す。「計画通りに、行動しろ」

魔狼の視線を感じ、反射的に銃口を向ける。しかし、引き金を引く前に、魔狼の口腔に灯っていた火が霧散し、咳き込むように血を吐き出す。村で受けた傷は治っておらず、魔術の反動が出たらしい。

絶好の機会にもかかわらず、イズモは躊躇った。数瞬が過ぎ、魔狼の姿は木の向こうに消えた。

イズモは銃口を下ろし、尻尾に鎮痛用の魔術符を貼った。
「お前は戦士には向いていない」アドルがポツリと漏らす。
イズモは苦い顔をしたが、反論しなかった。一瞬の迷いが生死を分ける戦場において、撃つべきときに撃てなかったことは非難されてしかるべきだ。
「それはそうと、これはどうする？」
アドルは走りながら、手に持っていたものを見せてくる。だらんと垂れた巨大なミミズのようなもの。イズモの尻尾だった。
「さっすがアドル様!!　初めてお会いしたときから尊敬していました!!」
「調子のいい男だ」
心底呆れた顔をするアドルから尻尾を受け取り、懐から魔術符を取り出す。自分側の断面に貼り、尻尾の断面を触れ合わせる。魔術符が発動、切断面から死んだ細胞が取り除かれ、未分化細胞が筋肉や骨、神経をつなげていく。
接合用の魔術符は今回の依頼が吹き飛ぶ値段がする。差し引きでいえば、完全な大赤字だ。勝ったとしても、金は手に入らず、過去は取り戻せない。戦う意味がどれほどあるのか、イズモ自身、よく分からない。
――それでも、やるしかない。
虚しくても、救いがなくても。

前に進むために。
明日を生きるために。
「作戦続行だ。あいつはここで倒す」
イズモの目に炎が灯る。

イズモが準備を終えて間もなく、魔狼がやってきた。イズモは万が一にも声が漏れないよう、両手を口に当て、息を潜める。
そこは魔狼が拠点としていた崖の近くだった。イズモと魔狼の戦った形跡が、そこかしこに残っていた。
生き残った肉熊は二体だった。どちらも重症で、被毛の大半が吹き飛び、肉が露出している。白い面は砕け、穴からは血が流れ続ける。歩いているのがやっとの状態だろう。
魔狼の足が止まる。鼻を地面に近づけ、臭いを確かめるように動かす。
魔狼が嗅いでいるのはイズモの血だった。森のあちらこちらに、かなりの量の血が撒いてあった。木を隠すなら森の中と言うように、イズモは本体の臭いを隠すために、自分の血を使ったのだ。魔術符があればこその荒技だった。
魔狼は、ふと思い出したように、弟の首に足を向けた。

首のそばに寄ると、何かを求めるように鼻先でつつく。首だけになり、腐りきってもなお、愛情を失っていないかのように。
ふと、魔狼が顔をしかめる。
イズモの血は魔狼の首にも撒かれており、それが気になるのか、飛び回る蝿を鼻先で追い払いながら、しきりに臭いを嗅いでいる。
――落ち着け、まだだ。
イズモは息を止めて機会を待つ。
気が済んだのか、魔狼は地面に鼻をこすりつけるようにして周囲を探る。しばらくして、魔狼の顔が一本の木に向けられる。
魔狼が肉態を呼び、周囲を警戒させる。魔狼の口に光が集まり、収縮。細い光となって、狙った木とその周りを薙ぐ。
倒れていく木々の間で、真っ二つになったイズモの上着が舞い上がった。
だが、肝心のイズモもアドルもいない。魔狼が切ったのは、上着をアドルの短剣で木に留めた囮だった。
魔狼が異常に気づき、周囲に最大の警戒を向ける。と、背後から何かが飛んでくるのを察知する。
アドルが投げた〈塚造・改〉の魔石だった。

肉熊が飛び出し、魔狼を庇う。生成された爆弾が爆発。二頭の肉熊の頭部がひき肉となる。
アドルが突撃。魔狼に斬りかかる。
喉元を狙う刺突を魔狼が顔を逸らして回避。魔狼が腕を横薙ぎに振るい、アドルが剣で受け止める。魔狼の腕力とアドルの全身の筋力が拮抗。
魔狼が腕を引き、アドルの体が一瞬、前のめりになる。
噛みついてくる魔狼の牙を、アドルは横に跳んで回避。だが、予想していた魔狼の口には炎。特大の火球が吐き出される。
アドルは剣の幅を限界まで広げ、剣を盾にして防ぐ。炎が消えると同時にアドルの剣も消滅する。
無防備になったアドルに、魔狼が襲いかかる。
――今だ！
イズモは立ち上がると、足元にある魔狼の首を掴んだ。
「取ってこおおぉぉぉい！」
両手で放り投げる。首は魔狼の頭上ギリギリを飛んでいく。
予想外の場所からの声と兄弟の臭いに、魔狼の動きが止まる。
「るううぅぅぅらああぁぁぁ！」

アドルが、再び預けていたイズモの短剣を引き抜き、魔狼の首に突き立てる。
鮮血が吹き出し、アドルに降り注ぐ。
だが、刃渡りが足りず、即死には至らない。
魔狼の虚ろな眼窩に炎が灯る。
魔狼の体から魔力が放射され、全身が光り輝く。これまでの魔術が児戯に思えるような、圧倒的な魔術の気配だった。
——自爆……！
今になって、魔狼の真の狙いに気づく。
魔狼は最初から死ぬつもりでいたのだ。今際の祈りを魔術とし、すべてを道連れにするために。己の死すら利用し、復讐を達成させるなど、魔獣のやることとは思えない。
魔術が最終段階に入る。
アドルが斬りかかるが、吹き出す熱風に弾き飛ばされ、木に叩きつけられる。短剣が手から滑り落ち、そのまま動かなくなる。
魔狼の体から直視できない光が放たれる。魔力を溜めた体を吹き飛ばすしかないが、〈嘴広鸛〉では間に合わない。
「させるかよおおおぉぉぉ！」

イズモは右手で銃の形を作り、右手首を左手で固定。
ぞわぞわと背中の毛が逆立ち、感情がこみ上げる。湧き上がった祈りに〈神獣の瞳〉が反応。祈りを重ね、物理法則を書き換えていく。
指先に鈍色の円筒が発生。
「翔べ!!　隼（はやぶさ）!!」
弾丸が瞬時に音速の八倍まで加速。衝撃でイズモの体が反対側に吹き飛ぶ。
弾は十万分の一秒以下で魔狼の横腹に到達。速度の二乗という膨大な運動量が放出され、被毛や筋肉、骨、内臓を粉砕し、弾の進行方向へとぶち撒ける。体にくり抜いたような大穴が空き、滝のように血と臓腑（ぞうふ）がこぼれ落ちる。
魔力を保持していた肉体の大半が失われ、魔術が消滅する。
魔狼の体が揺れ、血の海に倒れた。
『鳥打ち』第八十四羽〈隼〉。
生成した親指ほどの金属棒を、秒速約三千メートルの速さで射出する。イズモが使える魔術の中で、最速を誇る。
イズモが死に、そして生まれたあの日、師匠が自分を助けたように、自分も誰かを助けたい、その強い祈りによって発動する。イズモの原初で、いまだに言語化できずにいる魔術だった。

もっとも、祈りの性質上、いつでも使えるわけではなく、威力の調整や軌道の制御はほぼできない。さらに、大量の魔力を消費するため、使用には〈神獣の瞳〉が必須となる。いい意味でも悪い意味でも、イズモの切り札だった。

反動で倒れそうになるのを、用意しておいた魔術符で強引に耐える。まだ最後の仕事が残っており、気を失う訳にはいかない。体を引きずるようにして、アドルのもとに向かう。

飛ばされた拍子に頭をぶつけたのか、アドルは意識を失っていた。イズモの呼びかけにも反応がない。

「あれを使うか」

アドルの物入れから預けていた気づけ薬を取り出し、青年の鼻先で栓を緩める。途端、目が見開かれ、盛大に咳き込む。尻尾を逆立て、呻（うめ）く姿に、カリムに初めて会ったときも同じような状況だったと、イズモはふと思い出した。

「魔狼を、倒したのか？」ややあって、アドルが立ち上がる。

「いや、まだ終わっていない」

魔狼は自らの血の海に沈んでいたが、まだ死にきってはいなかった。

近づくと、気配を感じ取ったのか、空洞になった目でイズモを睨みつける。口に弱々しい光が宿るが、魔術にはならず、煙が吐き出されるだけだった。

「もう眠るがいい」
アドルが手を掲げると剣が出現。魔狼の首へと振り下ろす。
頚椎が切断され、頭が体から離れる。
それが村に災いをもたらした、魔狼の最期だった。
達成感はなかった。
互いに事情があり、互いに譲れず、互いに相手を殺すことでしか、終わらせる方法がなかった。善と悪の戦いや誇りと誇りの衝突などという、分かりやすく美しい物語には程遠い、どこまでも泥臭い殺し合い。
虚しいが、それでも生きるためには必要なことだった。
「戻ろう。まずはお前の体を洗わねばなるまい」
アドルが口元にわずかな笑みを浮かべ、イズモを見る。
「腐った肉で自分の臭いを隠すなど、正気とは思えない」
イズモが魔狼を出し抜くために使ったもの、それは魔狼の腐った肉だった。
イズモは洞穴に戻って血を撒いた後、服をすべて脱ぎ、魔狼の首にこびりついていた肉を、頭の先から尻尾の先まで塗りたくった。
そして、そのまま首の後ろに座り、魔狼の隙を窺っていた。魔狼の両目が潰れており、肉熊の自我が失われているからこそ、できたことだった。

あとは上着を囮にしたり、魔石で攪乱したり、アドルが攻撃したり、首を投げたりして魔狼の意識を逸らし、アドルが致命の一撃を叩き込んだ。もっとも、自爆は予想しておらず、〈隼〉が発動できたのは運だった。
「こんなギリギリの戦い、二度とごめんだ。早く帰って飯を――」
イズモの体から力が抜ける。
――ああ、限界か。
世界が暗く閉じていき、イズモは気を失った。

5

月が夜を照らしている。満月が明日に迫り、月はいよいよ明るさを増している。星が見えなくなるほどの輝きが地面に影を浮かび上がらせ、昼とも夜ともつかない不思議な風景を作り出していた。
イズモは川面に浮かびながら、夜空を眺めていた。
カリムに支えられ、緩やかな流れに任せて暗い川を漂う。まるで空に浮かんでいるようだと、イズモは思った。月以外に明かりはなく、ときおり波が光を反射する以外、静かな世界だった。

「悪いな。またお前の家に変な臭いをつけてしまった」
空に目を向けたまま、カリムに言葉を投げる。
「とんでもありません。イズモ様が目を覚ましてくださったことが一番です」
魔狼を倒した後、イズモはそのまま気を失い、カリムの家で目を覚ましたときには夜になっていた。眠っている間に汚れは落とされていたが、カリムの提案で、あらためて川で洗ってもらった。
イズモは首元にそっと手を伸ばす。指の先に、二本の牙をあしらった首飾りの魔力があった。カリムは二匹の魔狼を弔い、約束通り牙を残しておいてくれた。魔狼を倒した証明であり、多くの命が散っていったことを忘れないためでもあった。
「お前たちの考えでは、人は死んだら、どうなるんだ？」
「魂は天に昇り、新たな生を受ける時を待ちます。いわゆる『転生』ですね」
「次に生まれてくる子どもたちの中に、ラティフやバーリの生まれ変わりがいるかもしれないってことか」
「それはどうでしょう。現世で人間だった者が来世でも人間に生まれるとは限りません。獣や鳥、虫、あるいは魔獣かもしれません」
「それだと、狩りの獲物が、かつての仲間って可能性も出てくるだろ」
「もちろんです。しかし、それでいいのです」

カリムが背後で微笑むのを感じる。
「あるときは食い、あるときは食われ、命は巡ります。無限に続く命の円環にあって、我々は今回、たまたま人間に生まれただけです。だからこそ、我々は命に対して真摯であるべきなのです」
「だから、お前は魔獣を弔うのか」
不思議な世界観だと、イズモは思った。生まれ変わりの話はよく聞くが、人は人になるのが普通だ。生前に罪を犯した者が、罰として動物や虫になるくらいで、すべての命を平等とする価値観は初めてだった。
――ラティフやバーリは、いまごろ何をしてるんだろうな。
イズモは生まれ変わりを信じない。魂など存在せず、死んだら消えるだけ。あの世もなければ、前世も来世もない。
それでも今だけは、天上の世界があると思いたかった。あの勇敢な少年には、死んだ後くらい、自由に好きなことをしていてほしかった。それが自分の願望にすぎないとしても。
「そろそろ上がりましょうか」
カリムに促され、イズモは白く大きな体にしがみつく。カリムはイズモを抱いたまま川の流れに逆らうように泳ぎ、河原へと上がる。

被毛に染み込んだ水気を絞るように落とし、焚き火のそばに座る。優しい暖かさが体を温め、毛を乾かしていく。

火には、いい思い出がない。火はイズモから、様々なものを奪っていった。それでも、火から離れて生きることはできない。それどころか、イズモ自身も火を武器としている。毒で毒を制すように、火には火でしか対抗できないから。

——なのに、なんでこうなるんだろうな。

イズモは力を求めた。人々を不条理から守るために。自分と同じ目に遭う人を救うために。しかし、力はイズモに、己の愚かさと無力さを思い知らせた。

自分がもっと賢明だったら、失われずに済んだ命があったはずだ。

「イズモ様」

物思いに耽るイズモに、カリムが焚き火の向こうから声をかけてくる。

「イズモ様は我々のために立ち向かい、我々に勇気を与えてくださいました。その結果、多くの命が生き延び、我々は安心して〈命脈の儀〉を迎えられます。私はイズモ様が間違ったことをなさったとは思いません。どうか、胸を張ってください」

「……お前、人の心が読めたりしないよな」

「そのような力はありません。しかし、イズモ様はよく、ご自身を責めてらっしゃるようにお見受けしますので」

「お前には、そう見えるのか」
実際、そうかもしれない。自嘲していると、砂利を踏む足音が近づいてきた。森の方からふたつの人影がこちらにやってくる。
アドルとムグニだった。
「オレに用か？」
「ムグニが伝えたいことがあるというので連れてきた」
少年は黙ったまま、なんともいい難い表情でイズモを見ていた。まだ殴り足りないのだろうか。イズモが身構えていると、ムグニが口を開いた。
「ありがとう」
ムグニはそれだけ言うと、足早に来た道を戻っていった。
イズモはしばし呆気にとられていたが、ふっと表情を緩める。
「感謝されるようなことは、してないんだけどな」
「あれがムグニなりのケジメの付け方なのだろう」ムグニの背中を見ながらアドルが言う。「まだ納得できたわけでも、気持ちの整理ができたわけでもないが、過去と決別すると決めたのだ。自分のすべきことをなすために」
「強いな」
皮肉ではなかった。やるべきことを山積みにしながら、前に進めないイズモには

ムグニは眩しく映った。
　ムグニの背中に、いなくなってしまった少年の姿を重ねていると、体を洗ってい
る間に教えてもらった話を思い出した。
「カリムから聞いたんだが、魔石のことは本当にいいのか？」
　アドルの計らいにより、イズモが神域から魔石を盗み出した件は、隠蔽されるこ
ととなった。
　それに伴い、イズモは村の惨状に心を痛め、ひとりで聖域に乗り込んだことにさ
れ、それに気づいたアドルが応援に駆けつけ、ふたりで魔狼を倒した。という美し
く分かりやすい物語に差し替えられていた。
「なんのことだ？」アドルは眉ひとつ動かさずに言う。「あれは子どもたちが見つ
けてきたのだろう」
　アドルの態度に、イズモは黙って頭を下げるしかなかった。政治的な判断なのだ
ろうが、ありがたさより申し訳なさが上回った。
「いろいろあったが、これで一件落着だな」イズモは砂地に寝っ転がり、体を伸ば
す。「明日の儀式が終われば、お前たちも少しは暇になるんだろ？　なら、一緒に
脱出の方法を考えてくれ。お前たちがいれば、なんとかなりそうな気がしてきた」
　ふと、アドルが表情を引き締め、カリムに目を向ける。

「まだ話していなかったのか」
カリムは黙ったまま顔を伏せた。それだけでアドルには十分だったらしい。呆れたようにため息をついた。
「今夜は好きに過ごすがいい。ただ、悔いだけは残すな」
「……感謝します」
カリムはうつむいたまま、呟くように言った。アドルは再びため息をつくと、森へと戻っていった。
「どういうことだ？」イズモは体を起こし、尋ねる。ふたりの雰囲気から、カリムは何か重大なことを隠しているらしい。
長い長い沈黙の後、カリムは話しだした。
「以前にもお伝えしましたが、神の使いは十八になった〈命脈の儀〉の夜、神と子を成します」
「それの何が問題なんだ？　女の村の誰かと交わるって意味だろ？」
「そうではありません。神の使いは神に食われ、新たな命の糧となるのです。いわゆる『生贄』です。村の者なら誰でも知っています」
イズモの頭の中に、祭壇に括りつけられたカリムの姿が浮かんだ。仮面を被ったアドルが前に立ち、剣を振り下ろす。カリムの体は切り刻まれ、男たちや女たちに

振る舞われる。カリムを食い尽くした虎人たちは、おもむろにまぐわい始める。
「それって」イズモは言葉を探すように視線をさまよわせる。「お前は死ぬってことか？」
カリムは黙って頷いた。
「ふざけんな！」イズモは吠えていた。「村のやつらは、お前がもうすぐ死ぬことを知っていて、何食わぬ顔で振る舞っていたっていうのか⁉」
「それが普通なのです」
「この村の普通なんざ知るか！　そんなもん誰が認めるか！」
イズモは立ち上がり、カリムに手を差し出した。
「行くぞ」
「どこへですか？」
「どこでもいい。お前が死なずに済む場所ならどこでも。結界を無理やり破ってお前を外に連れ出してやる」
「それはなりません」
強い風が吹いた。森がザワザワと音を立て、焚き火が激しく燃える。
「どこへ逃げようと、私は必ず連れ戻されます。神の意思に逆らえば、イズモ様といえども命の保証はありません」

カリムは静かな声で警告する。
「なんでそんな他人事みたいに落ち着いてんだ。お前、死ぬんだぞ」
「それが私の使命なのです」カリムはイズモから焚き火に視線を移す。「私は神の一部となり、村の者たちがより良く生きるための礎となります。悲しむことでも恐れることでもありません」
沈黙が落ちる。ぱちぱちと火が爆ぜる音だけが、妙に大きく聞こえた。
イズモはカリムを見つめていたが、肩を落とし、ため息を吐いた。
「嘘だな」イズモはカリムのそばに腰を下ろし、顔を覗き込む。「自分の癖くらい自覚しておけ、お前は嘘をつくとき目を逸らす」
カリムがハッとしたようにイズモを見る。
「お前の使命感を否定するつもりはない。だが、本当に何もかも納得して言っているのか？　部外者であるオレだったら、何を言っても、お前の立場が悪くなることはないだろ。だから、今くらい本音を聞かせてくれないか？」
イズモを見るカリムの瞳に涙が滲む。見る間にあふれ、滂沱と流れ出した。
「怖いです。死にたくありません」
カリムの声は震えていた。涙は流れ続け、頬を伝って顎から滴る。それでも、カリムは目を逸らさなかった。

「私は生まれたときから、村のために死ぬことが決まっていました。村の者たちが私を大切にするのは、私が神への供物だからです。誰も私の死に疑問を抱かず、誰もが私の死を望んでいるのです」

いつになく饒舌だった。これまで抑えていた感情があふれ出すように。

カリムが外の世界をまったく知らなければ、ある意味、救いがあった。

閉ざされた世界の極めて狭い価値観で育ち、村のための死を無上の喜びだと教えられ続けていれば、死を恐れずに済んだのかもしれない。

しかし、カリムは〈風〉から森の外のこと、自分が恵まれていないことを知ってしまった。あまりにも残酷だった。

「アドルも、そうなのか？」

「アドルだけは、私の味方をしてくれました。私の役目を知った日の夜に、私を村から連れ出してくれました。村に来て間もないころで、勝手に村を出てはならないと強く言われていたにもかかわらず」

ふたりは真っ暗な森をひたすら走り続けた。行く宛もなく、いつ魔獣に襲われるともしれないのに、怖くはなかった、とカリムは言った。自分の手を引くアドルの力強さに、安堵すらした、と。

「むろん、すぐに連れ戻され、アドルは罰を受けました」

アドルを待っていたのは、激しい折檻だった。
神の使いを許可なく連れ出し、危険に晒した。それは村の掟の中でも、最も重い罪だった。
アドルは大人たちに囲まれ、殴る蹴るの暴行を受けた。気絶したら、水瓶の中に首を突っ込まれ、目を覚ましたら、また殴られる。
それが地面に頭を付けて謝り、二度としないと誓うまで繰り返される。
「ですが、アドルは決して謝りませんでした。顔が腫れ上がり、前が見えなくなっても、骨が折れて自分で立てなくなっても。最後は私が耐えられなくなり、二度と逃げないこと、離れて住むことを条件に許してもらいました」
カリムは当時のことを思い出したように表情を曇らせる。
「アドルが妙に浮いてるのは、それが原因か？」
「小さな村ですから、一度犯した罪は死ぬまで消えません。表立った対立こそありませんが、わだかまりは今も残っています。バーリが長に選んでいなければ、居場所を失っていたでしょう」
バーリは以前、自分が認めているのはジャリルとアドル、イズモだけだと言ったが、いったいどんな思いで、アドルをそこに並べたのだろうか。
「酷いな」

「村の者たちに悪意はありません。彼らもまた村のことを第一に考え、行動しているだけなのです。今回のことで、それがよく分かりました」
　イズモの表情を読み取ったのか、カリムがとりなすように言う。
「我々にとって最も大切なことは村の安寧です。皆は私が役目を果たすと信じているからこそ、命を賭して魔狼と戦いました。私が使命を投げ出したら、彼らの死が無駄になります。だから、私は逃げません」
　カリムが笑みを見せる。もう涙はなかった。その真っ直ぐな目に、今度はイズモが目を逸らした。
　不条理だ、とイズモは思った。前時代的な因習のために、優しい青年の命が失われてしまうことが。そしてカリムも、その優しさゆえに、運命を受け入れてしまっていることが。
　今、自分がどんな言葉を並べようと、カリムの気持ちを変えることはできないだろう。ならば、イズモの答えはひとつだった。
「お前の気持ちは分かった」しばらくして、イズモは言った。「ならせめて、何か礼をさせてくれ」
　カリムが驚いたような顔をし、イズモは照れくさそうに頭を掻いた。
「この村に来てから、お前にはさんざん世話になったのに、迷惑もかけてばっかり

だったからな。最後くらい、わがままを聞かせてくれ」
「そんな、ご迷惑をおかけしたのは我々の方です。何かをしていただくなど……」
「オレはお前個人の話をしてるんだ。オレはお前に世話になった。だから、この気持ちをお前に対して返したい。受け取ってくれないか？」
カリムは返事を躊躇った。口にしたら、後には戻れないとでもいうように。
「本当に、なんでもいいのですか？」
「もちろんだ」
それでも言いよどむカリムを、イズモは辛抱強く待った。
「私を」
イズモが沈黙に耐えきれなくなってきたころ、カリムが口を開いた。
「私を、抱いていただけませんか」
「…………………………は？」
予期せぬ答えに、イズモはキョトンとする。
「申し訳ありません。忘れてください」
返事を恐れるように、カリムは自ら取り下げた。
「イズモ様のご厚意に対し、あまりにも図々しいことを言ってしまいました。ご無礼をお許しください」

「おいおい、オレはまだ何も言ってないだろうが」

「しかし――」

「お前がそうしてほしいって言うなら、もちろん叶えてやる。こう言っちゃなんだが、前やったときも、なんていうか、悪くなかったしな」

カリムが驚いていると、イズモは恥ずかしそうに頬を掻いた。

「だが、お前は本当にそれでいいのか？　オレは願いをひとつに絞れとも、今すぐできることとも言ってない。儀式から逃げるための魔術具をくれとか、儀式の途中で助けに来てくれとか、いろいろあるだろうが」

イズモはカリムに生きたいと言ってほしかった。穏やかな笑みでなんでも受け入れてしまう青年に、運命に抵抗してほしかった。

だが、やはり、カリムは穏やかに微笑むだけだった。

「イズモ様はやはり、私の思った通りの方です。だからこそ、私の願いは変わりません。私はイズモ様を心からお慕いしているのです」

あまりに真っ直ぐな言葉に、イズモは反応に困った。

「誰かのために立ち向かう気高さ。弱き者に寄り添う優しさ。深く傷つけられながらも、消えることのない善良さ。その心を支え、見届けたいと思いました。それまで守られるばかりだった私が、こんな気持ちになったのは初めてなのです」

カリムは目を逸らさない。目に強い光を浮かべ、イズモを見ている。

「これを愛と呼ぶつもりはありません。最初で最後の機会に、執着しているだけなのでしょう。それでも、願うことが許されるなら、もう一度だけ、イズモ様に触れたいのです。大切に思う人を、全身で感じたい。そう思ったのです」

イズモは目を閉じ、額に手を当てる。

この世に、打算的な理由なしに自分を求める人間がいるとは思わなかった。自分には、目の前の青年が求めるほどの価値があるとは思えない。気持ちに答えることで、青年を汚すことにならないか、それだけが心配だった。

沈黙するイズモに、カリムが微笑む。

「話を聞いていただいて、気持ちの整理がつきました。先ほどのことは忘れてください。私はもう、思い残すことは――」

続く言葉を、イズモは自分の唇で塞いだ。

唇と唇を重ねるだけの軽い口づけ。それでも、カリムは雷に打たれたように動かなかった。

一秒、二秒。緩やかに時間が過ぎていく。

口を離すと、カリムは放心したように、イズモを見ていた。イズモは舌なめずりをするように唇を舐め、立ち上がった。

「返事をする前に勝手に決めるな。それと、オレは出されたものは遠慮なくいただく主義だ。食い物だろうと人間だろうと」

　イズモは不敵に微笑む。

「焚き付けたのはお前だ。覚悟しろよ」

　再びカリムの唇を奪う。今度は遠慮のない、噛みつくような口づけだった。左手をカリムの後頭部に当てて逃げ道を塞ぎ、口吻を噛み合わせるようにカリムと深くつながる。イズモの舌がカリムのザラザラとした舌の表面を撫で、唾液を溶け合わせていく。

　ときおり、カリムの歯がイズモの唇の縁に触れる。完璧な配置の犬歯と臼歯。その気になれば、イズモの喉笛を噛みちぎる猛獣の歯並びが、今はイズモを求めて吸い付いてくる。

　イズモの右手が、カリムの胸を揉みしだく。脂肪の少ない分厚い肉の塊は、イズモの手では収まりきらないほどの大きさだった。

「んっ」

　イズモの指が胸の先端をかすめたとき、カリムが甘い声を漏らした。イズモは口づけをしたままニヤリと笑い、未熟な果実のような突起を弾くように刺激する。カリムの舌が止まり、体を震わせる。

「ここが感じるのか？」からかうように尋ねる。
「そんっ、そんな、ことっは、あっ」
口では否定しても、刺激するたびに言葉が跳ねる。
イズモはカリムの前にしゃがみ込むと、淡い桃色の先端を口に含んだ。唾液をまとわりつかせるように、舌先で転がす。カリムが声にならない声で呻く。顔を赤く染め、もどかしい刺激に耐えている。
膝の先に熱いものが触れ、イズモは視線を下げる。カリムの男らしさは天を突かんばかりに猛り、興奮の涙を流していた。
カリムの手がイズモの薄い胸に伸ばされ、傷痕に触れる。何かを読み取ろうとするように、指先で毛のない部分をなぞる。イズモを傷つけないか、イズモに嫌われないか、反応を探るような、優しく、臆病な愛撫だった。
――人に触られるって、こんなに気持ちいいのか。
カリムに撫でられながら、イズモはそんなことを思った。
女を買ったことは何度もある。魔術師仲間の付き合いもあれば、人肌恋しさに一晩の慰めを求めたこともある。しかし、好き好んでイズモを触ろうとした女はいなかった。
自分に魅力がないことは、イズモも理解していた。女より低い背丈、骨の浮いた

筋肉に乏しい体。固く艶のないドブ色の毛。血色の悪い肌が剥き出しになった手足や尻尾。異様に若く見える一方で、人を苛立たせてしまう顔。好かれる要素は何ひとつない。

人を好くことはあっても、好かれることはない。カリムの手は、そんな一方的な関係しか知らないイズモに、新しい喜びを植えつけた。

無意識に封じていた、人とつながりたいという根源的な欲望が頭をもたげる。

「オレも、お前がほしい」

耐えきれず、カリムを押し倒す。

月光に照らされたカリムの裸身は、言語に絶する美しさだった。純白の被毛は無垢な雪原のように輝き、青い瞳は月を映す湖面を思わせた。へそまで届く雄々しい屹立でさえ、神々しいと感じてしまう。

これより美しいものに触れる機会は二度とないだろう。この体に自分の正直な欲望を向けていいのか。神性に対する冒涜ではないのか。イズモは迷ったが、それも一瞬のことだった。

イズモはカリムの足の間に腰を下ろすと、右手で足の付根をまさぐった。指先で肉の蕾を探り、指の腹で優しく撫でほぐす。緩んだ花芯に指を当て、ゆっくりと押し込むと、指はわずかな抵抗とともに、開いた花の中へと吸い込まれていった。

すぐにでも入れたい気持ちを抑え、ゆっくりと指を前後させる。指の先が肉壁に当たるたびに、青年の体がビクリと跳ねる。
見ると、カリムは自分の手首に歯を立て、声を押し殺していた。瞳は熱く潤んでいて、まるで泣き出しそうだった。
「嫌ならすぐに言えよ」
「そ、そんな、つも、つもりで、ううっ」
反論はイズモの指の動きにかき消される。イズモが指を軽く動かし、壁を圧迫するだけで、カリムは体をガクガクと震わせ、カリム自身から透明な先走りをあふれさせた。
肉の蕾が花開き、物欲しそうに広がる。二本目の指を滑り込ませる。入れてすぐは驚いたように締めつけてくるが、少しすると力が弱まる。ゆっくりと動かしていると、すぐに慣れ、広がる。
三本の指が難なく動くようになったとき、イズモの我慢は限界に達した。指を引き抜くと、カリムの足を掴み、前に出る。固くなった欲望を肉壺に押しつけ、腰を突き出す。
肉の杭がカリムを押し広げ、聖域へと侵入していく。カリムは強すぎず、弱すぎない力で、イズモをくわえ込む。

自分自身が温かく柔らかな肉に埋もれていく感触に、イズモはぞくぞくと背中を駆け上がるものを感じた。青年を性欲の赴くままに蹂躙したい、美しいものを完膚なきまでに破壊したいと、暗い欲望が頭をもたげる。
それでも、我を忘れることなく、ゆっくりと進んでいく。
カリムは両腕を顔の前で交差させ、目元を隠していた。覗く口からは荒い呼吸が繰り返される。イズモが進むに連れ、息は熱を帯び、激しくなる。すべて収まったとき、甘い吐息が漏れた。
イズモは軽く腰を引くと、ゆっくりと前に出した。焦ることなく、自分自身に肉の襞が絡みついてくるのを楽しむように。
イズモが動くたびに、カリムの足が細かく振るえる。イズモに貫かれても衰えることのない猛りからは、滴が糸を引いて垂れ、月光を反射して輝いていた。
「顔を見せてくれ」
カリムの尻に腰を押し付けるようにして前傾し、カリムの腕を掴む。カリムは抵抗したが、体内を抉るように腰を動かすと力が弱まった。
現れたカリムの顔は蕩(とろ)けるようだった。普段の笑みは取り払われ、押し寄せる快楽に上気していた。それでも、イズモにすべてを見せるのを拒むように、瞳には理性を残している。

「我慢しなくていいんだぞ」
「我慢なんて、してません」
「じゃあ、遠慮しなくていいな」
イズモはカリムに体重をかけると、腰を押しつけたまま上下に動かした。肉の凶器がカリムの弱い部分を圧迫する。
カリムは体を大きくのけ反らせた。大きく開いた口からは、声なき絶叫がほとばしり、ガクガクと全身を震わせる。
カリムは未知の感覚に襲われていた。今までの、体の中を掻き回される性交では感じたことのない快楽だった。
「なんだ、もういったのか」
カリムの痙攣が収まったころ、イズモが楽しそうに言った。カリムが首を持ち上げると、腹の上は白い洪水に襲われたようになっていた。深く抉れた腹筋の溝に精液が溜まっていた。
自分の身に何が起きたのか、カリムには分からなかった。射精した感覚も、倦怠感もなく、体はまだまだイズモを求めていた。ひとつ確かなのは、これまで味わったことのない悦びを、イズモに教えられたということだ。
「初日に搾り取られたお返しだ。今夜は空になってもらうからな」

「ま、待って、待ってください。まだ、心の準備が」
イズモはカリムの制止を無視して、腰を振る。再び言いようのない刺激がカリムを襲い、思考を漂白していく。
絶頂してなお、カリムはイズモを離さなかった。与えられる快楽を逃すまいとするように、イズモの肉欲を締めつける。
カリムの反応を楽しむように、イズモは腰を振り続けた。
イズモにとっても、カリムがもたらす快楽は未知のものだった。
根本的に異なる生き物だとさえ思っていた美貌の青年とつながり、ひとつになる心地よさ。心理的な充足感。互いの心と体を求めあった結果として、体を重ねることの喜び。それはイズモの心に空いた穴を、埋めてくれるものだった。
――オレは、こいつを失いたくない。
そう思ったとき、イズモの体の奥底で、熱が湧き上がった。イズモの中で激しく暴れ、やがて大きなうねりとなる。
限界が近いことを察し、さらに腰を動かす。腹の中をかき回す粘着質な音と腰と腰がぶつかる音が、激しさを増す。
駆け上がってくる熱を感じながら、腰を一気に押しつける。カリムが痙攣し、イズモ自身を締めつけた。それが、最後のひと押しとなった。



勢いを押しとめていた抑制が外れ、一線を越える。
濁流がせり上がり、理性を塗り潰しながら噴出。欲望の奔流がカリムの体内へと放たれる。一度では飽き足りないかのように、イズモの睾丸は収縮を繰り返し、その度に命の流れをカリムに注いでいく。
脈動が終わると、イズモは力尽きたようにカリムの体の上に身を投げた。生温かい水たまりに倒れ込むような感覚。鼻孔を満たす青く生臭い臭いも、今はとても心地よかった。
手を伸ばし、手でカリムの胸の乾いたところを撫でる。手触りの良い毛が指の間を滑っていく。
カリムの大きな手が、イズモの頭を撫でる。
顔を上げると、白虎のはにかむような笑みがあった。今までの、どの笑顔とも違う、自然で屈託のない表情だった。
このまま時間が止まればいいと、イズモは思った。明日が来なければいい、朝が来なければいい。そうすれば、カリムと、ずっとこうしていられる。
それが叶わないことは、よく分かっていた。
せめて匂いだけでも残そうと、イズモは大きな体を抱きしめた。
カリムもまた、イズモの背に腕を回し、力を込める。

わずかに欠けた月が、ふたりを静かに見下ろしていた。

六章　神の棲む森

「僕たちの何がいけなかったんだろう。兄は弟の首に問いかけた」
「僕たちは争いを望まなかった。なのに、父さんも母さんも、お前までいなくなった。僕の許せないという気持ちは間違っているんだろうか、と」
「兄は弟の首を這う蛆を眺めていたが、やがて、決めた、と言った」
「僕は賭けをする。明日も雨が降ったら森を出る。だけど、もし晴れたら、お前を殺した鼠に復讐する。どんな手を使っても、僕がどうなっても」
「おやすみ。兄は弟の首に鼻先を軽く押し当てると、体を丸め眠りについた」

1

「イズモ、おはよう」
　上から降ってくる明るい声で、イズモは目を開いた。目の前に、自分を見下ろす見慣れた少年の笑顔があった。
　体を起こし、周りを見る。いつものバーリの家だ。
　まだ夜は明けていないらしく、戸口の向こうは闇が満ちていた。
「こんな朝早くからどうした？」
「行かないといけないところがあるんだけど、もしよかったら、イズモに近くまで付き添ってほしいんだ」
「ああ、銃の練習だな。今日は、ムグニは一緒じゃないのか？」
「ムグニは行かないって。その代わり、イズモに声をかけたらって言ってくれた」
「珍しいな。お前たちはいつも一緒なのに」
　どこか寂しそうに微笑む少年の胸元で、大きな牙の首飾りが揺れる。少年が装飾

品を身に付けているところを初めて見た。バーリのものに似ているが、こちらの方が新しいらしい。
「早く。日が昇る前に行かないと」
「そう急かすなって」
　イズモが靴を履いていると、少年は待ちきれないように、先に家を出ていってしまった。不思議に思いつつ後を追う。
　外はまだ闇が深かった。空には星が輝き、東の方がようやく白みがかってきたところだ。村は静かで、他に誰かが起きている様子はなかった。
　広場を見回すと、木々の間に消えていく黄色い背中があった。
「そんなに急がなくてもいいだろ」
　声をかけるが、少年は振り返ることなく進んでいく。
らしくないな、とイズモは思った。今まで、イズモをおいて先に行くことなどなかったはずだ。少なくとも、イズモがついてきているか常に確認していた。
　畑の横を通り、林に入る。それでも少年の背中はまだ遠くにあった。少年が立ち止まる気配はない。
　違和感が増す。少年に追いつこうと速度を上げる。しかし、距離は一向に縮まらなかった。

しばらく走っていると、川に出た。
息を整えつつ、少年を探す。少しずつ空は明るくなっているが、河原はいまだに薄暗く、川は闇が流れているかのように黒かった。
「どこにいるんだ？」
「こっちだよ」
声のした方を見ると、対岸の河原に少年の姿があった。
自分と少年を隔てる大きな流れに、イズモの心がざわつく。
「そっちにいたら、銃の練習ができないだろ。戻ってこい」
イズモの呼びかけにも、少年は残念そうに首を振るだけだった。
「もう行かなきゃ。約束、守れなくてごめん」
少年はイズモに背を向け、森へと向かう。
太陽が木々の間から顔を出し、イズモの目を焼いた。直視できない輝きの中を少年が進んでいく。
「行くな」
イズモは走り出した。石に足を取られながらも、足を前に出す。しかし、走っても走っても、体は思うように進まなかった。まるで見えない壁に、進路を防がれているように。

銃を構え、対岸の木に向けて〈鶚〉を放つ。
しかし、何度引き金を引いても、魔術が発動しない。
弾倉を取り出すと、魔石がひとつも入っていなかった。慌てて懐を探るが、予備が見つからない。
そうしている間にも、少年の背中は遠のき、輪郭が薄れていく。
「イズモに会えてよかった。カリムのこと、任せたからね」
「待て、行くな！　行かないでくれ！　ラティフ！」
イズモの叫びにも、少年はもう振り返らなかった。
視界が白一色に染まり、虎人の少年は光の中に溶けていった。

イズモがハッと目を覚ますと、まばゆい光が目に飛び込んできた。
思わず目を閉じ、体をよじる。ほのかな温かさを伴う明るさから、朝になったことを知る。
動いた拍子に体の下で藁が擦れる音がして、頬に柔らかな毛皮が当たる。体に馴染んでしまった、心地よいベッドの感触。
――ん？
違和感を覚え、まぶたを上げる。

目に映ったのは質素な茅葺きの天井だった。二重になった屋根の隙間から、焚き火の煙が外へと逃げていく。
視線を横に向けると、向かい側の壁際にかまどがあり、鍋の中で何かが煮えていた。足元の方には、いくつもの棚が整然と並んでいる。
——カリムの家か……？
家具の配置や心地よい家の雰囲気には覚えがあった。しかし、自分がなぜここにいるのか、すぐには思い出せなかった。
ぼんやりとした頭で記憶をたどっていく。
最初に思い出したのは、ガラントと連絡を取るために、ひとりで山に登ったことだった。
そこで奇妙な格好をした人物に遭遇し、殺されかけた。しかし、間一髪でカリムとムグニがやってきて、事なきを得た。
——結局、あいつは何者なんだ？　ラシドならなぜ村を守らなかった？
疑問は尽きないが、いったん脇に置いて状況の整理に専念する。
村に戻る道すがら、カリムに事件の真相を聞いた。急いで戻ると、村は魔狼の襲撃を受けて壊滅状態になっていた。弔いの儀式の後、ムグニに殴られて、アドルに協力を申し出た。

翌日、アドルと共に魔狼と戦い、倒した。目を覚ましたら夜になっていて、カリムに体を洗ってもらった。そして、神の使いの真実を聞いた。
――それから……。
カリムを抱いた。唇を奪い、体を重ねた。
きっかけは向こうだったにせよ、強引に迫られたわけでも、酒の勢いでもなかった。自分の意志で、そうしたいと思った。
顔を赤らめ、喘ぐ青年の息遣い。手に残る毛の柔らかさと筋肉の硬さ。イズモを離すまいと締めつける肉の感触。どちらのものともつかない青い匂い。
「イズモ様、おはようございます」
「うわあああぁぁぁ!?」
突然声をかけられ、飛び上がるように跳ね起きる。
見ると、カリムが驚いたように目を見開いていた。
「申し訳ありません。目を開けてらっしゃったので、起きているものとばかり」
「あ、ああ。少し考え事をしていただけだ。なんで、お前の家にいるのか、まったく記憶になくてだな」
お前との情事を思い出していた、などと言えるわけがない。
カリムは目を泳がせていたが、すぐに微笑んだ。

「昨夜は水浴びの後、お眠りになってしまったので、私がお運びしました。それより、お食事のご用意ができております。冷めないうちにいかがですか？」

「おっ、食う食う」

ベッドから出て、体を伸ばす。その拍子に体の節々がバキバキと鳴った。激しい戦闘の後は、いつもこうだった。死んでいる体を無理やり動かしているのに、無理に無理を重ねたのだから無理もない。毎回よく生きていると思う。

ふと、体を見下ろし、自分が服を着ていることに気づいた。シャツのボタンはすべて留めてあり、ズボンのベルトも締めてある。鼻を近づけてみても、昨夜の残滓は感じられなかった。

――夢、じゃないよな？

カリムを見ると、穏やかな顔で鍋をかき混ぜていた。

――むしろ、夢ならよかったんだけどな。

カリムから聞いた儀式の真実。あれがすべて夢で、明日以降もこれまで通り過ごせるのなら、それが一番だった。

だが、そんな都合のいいことは起こらない。カリムが昨夜の出来事をなかったことのように振る舞っているのが、何よりの証拠だった。

「どうされました？」

突っ立ったまま動こうとしないイズモを見て、カリムが首を傾げる。
イズモは「なんでもない」とごまかし、火のそばに座った。
「熱いのでお気をつけください」
差し出された木の椀を、礼を言って受け取る。
まるで棚にあるものをすべて詰め込んだような具沢山のスープだった。汁をすすりながら、カリムが食事を作るのも、今日で終わりなのだと思い至る。
——残念だな。
この味を作る人間がいなくなる。それが残念でならなかった。
死とは日常に空く穴だ。それまで、いて当然だと思っていた存在が、ある日を境に、二度と戻ってこなくなる。その埋めがたい喪失のことだ。自分を慕っていた少年が、銃の練習に付き合ってほしいと頼んでこなくなったように。
カリムもまた、今夜、この世から姿を消す。その後に訪れる日常が、イズモには想像ができなかった。
「今日はどうするんだ？」
思考を振り切るように、カリムに話を振る。
「儀式の準備をします。まじないに使う薬を作ったり、参加する子たちの体を洗ったりと、祈祷師が一番忙しい日です」

もっとも、忙しいのは祈祷師だけではない。聖域の環境を整えたり、宴の準備をしたりと、仕事はいくらでもあるのだそうだ。

「今年は特に手が足りないため、早めに取り掛かって、私も他の者たちを手伝おうと思います」

魔狼の襲撃により、村の人口は激減した。さらに、精神的な衝撃から立ち直れていない者も少なくない。働ける人間は限られている。

それでも、村を途絶えさせないために、皆、懸命になっている。

「よかったら、手伝わせてもらえないか？　できることならなんでもする」

「本当ですか？　それは助かります」

カリムが嬉しそうに言う。

あと何回、この笑顔を見られるだろうか。

食事を終えて最初に向かったのは山だった。

儀式に使う薬の材料を、神域に取りに行くのだという。以前言っていた、神域に合法的に入れるときだ。

いつかと同じように、アドルが決めた同行者――ワリスとムジャニに付き添われて山を登っていく。

「イズモ様、大丈夫ですか？」カリムが心配そうに声をかける。
目はイズモの背嚢に向けられていた。中には魔石が詰め込まれており、今にも破けそうだった。
イズモがラティフと共に、神域から持ち出した魔石だった。半分ほどは魔狼との戦闘で消費したが、その残りを元の場所に戻すつもりでいた。
「あんまり大丈夫じゃないが、気にしないでくれ。これはオレが運ばないと意味がないからな」イズモは息を切らせながら言う。
重さは持ち出したときより減っているはずだが、歩くたびに肩紐が食い込み、肩が悲鳴をあげる。足取りは重く、照りつける太陽は体力を奪っていく。
アドルの配慮により、この魔石は子どもたちが集めたことになっている。そのまま持っていても、アドルもカリムも責めないだろうが、イズモとしては、けじめをつけておきたかった。
「それより儀式で使う薬ってどんなものなんだ？」
気を紛らわせるように、話題を振る。
「薬というと、少し語弊があるでしょうか」カリムが言葉を探すように、顎に手を当てる。「軟膏といいますか、顔や体に模様を描くためのものです。いわゆる『化粧』ですね」

「戦化粧みたいなもの、ってことか」
化粧には見栄えをよくする以外にも、宗教的、呪術的な意味合いがあると聞いたことがある。化粧を施し、姿を変えることで人ならざるものの力を借りるのだ。
「〈命脈の儀〉のための化粧ってどんな――」
「しゃべる元気があるなら、とっとと歩け」
前の方から鋭い声が飛ぶ。
前を歩いていたワリスが振り返り、苛立ったように槍の石突で何度も地面を突いていた。イズモは急ぐが、大して変わらない。
「ワリス、もう少しゆっくり歩けませんか？」見かねたカリムが声をかける。
「仕事は山ほどある。そんなやつ放って先に行くべきだ」
取りつく島もなく、ワリスは先に行ってしまった。イズモに対して好意的でないのは確かだが、それ以上に何か感情を抱えているようだった。
「その荷物、おれが持つっすよ」
しんがりに控えていたムジャニが声をかけてきた。
「ずいぶん重そうっすけど、何が入ってるんすか？」
「言うなれば、オレの罪だ」イズモが肩で息をしながら答える。「申し出は嬉しいし、手伝ってほしいのは山々だが、代わってもらう訳にはいかないんだ」

　ムジャニは意味が分からないと言いたげに首を傾げたが、イズモの真剣な表情を見て、それ以上は何も言わなかった。
　――自己満足なのは分かってる。
　こんなことをしても、誰かが生き返るわけでも、喜ぶわけでもない。むしろ、彼らの仕事を邪魔している分、悪いかもしれない。しかし、これを投げ出してしまったら、人として最後の一線を越えてしまう気がした。
「それにしてもワリスは速いですね。私も疲れてきました」
　カリムが立ち止まり、額の汗を拭う。
「あいつ、まだ引きずってるんすよ」
　ムジャニがため息混じりに言う。
「相方のガニーが、魔狼と戦って死んじゃったっすから」
「……それは、すまないことをした」
「なんでイズモが謝るんすか」
　ムジャニが苦笑する。
「バーリは早々に実力差を見切って、皆に逃げるように言ったっす。いくら強いやつと戦うのがかっこいいって言ったって、死にたくないっすからね。残ったやつらはそれを分かった上で戦ったんすよ。ハック――俺の相方もね。イズモに八つ当た

りするなんて、お門違いもいいとこっすよ」
魔狼を倒して大団円となるほど、人の心は単純ではない。本のページをめくるように感情を切り替えることはできず、過去の失敗を延々と思い出し、あり得たはずの未来を夢想してしまう。
ワリスは相方を残して逃げてしまった。自分を責めるだけでは足りず、イズモに怒りの矛先を向けたとしても、無理もないと思った。
「ムジャニは、なんでオレの味方をしてくれるんだ？」
「俺はイズモが村をぶっ壊してくれるんじゃないかって期待してたんすよ」
青年はおどけるように、イズモに片目をつぶって見せる。
「歳下の俺たちじゃ言えないようなことを言って、偉そうにしてたやつらが困ってるとこを見るの、楽しかったんすよ」
今から思えば、不謹慎だったっすね。少し寂しそうに言うムジャニに、イズモはかける言葉がなかった。
そうこうしている内に、神域の手前にある鳥居にたどり着いた。警戒していたもののの、あの人物の姿はない。風が強く吹くということもなかった。
カリムが柱と柱の間に張られた縄に軽く触れる。すると、縄が自分から解けるように、はらりと地面に落ちた。護衛のふたりが身をこわばらせる。

「ワリスとムジャニは、ここで待っていてください」
「そいつを神域に入れるのか」ワリスが嫌そうな顔をする。
「では、あなたが手伝ってくれますか？」
カリムが尋ねると、ワリスは目に見えてうろたえ、首を横に振った。
「イズモ様、行きましょう」
カリムに促され、縄をまたぐ。ワリスの突き刺すような視線に居心地の悪さを感じつつも、カリムの後に続く。
カリムは神域を迷うことなく進んでいく。素材を探す素振りはなく、目的地が決まっているようだった。
しばらくして、カリムが立ち止まる。ラティフと魔石を拾った場所だった。カリムがそれを知っているはずもないが、脈が早くなるのは止められない。
「薬の材料ってどんなものだ？」たまらず尋ねる。
「これです」カリムはその場にしゃがみ、転がっていた石を拾う。「この黒い石を砕いて、薬の材料とします」
背負っていた背嚢が滑り落ち、ガシャリと重々しい音を立てた。
カリムが手にしているのは魔石だった。カリムがそれに気づかないはずがない。
「お前は、最初から知っていたのか」

「この石には特殊な力があり、争いを招くとラシド様に教えられました。決して他言してはならない、とも」
カリムが石に目を落とし、呟くように言う。
「オレをここに案内するのは、立場的にまずいんじゃないのか」
「薬の素材集めに、外の方の手を借りてはならない、とは言われていません。それに、手伝いに来た人が石のことを知っていたとしても、私から話したことにはなりません」
カリムはいたずらっぽい笑みを浮かべ、舌を出す。
イズモが河原で魔石を見せたとき、カリムはその時点で気づいていた。魔石探しの場所として神域の近くを選んだのも、神域について話し、後日案内すると伝えるためだったのだろう。
魔石のことを話せないカリムの、最大限の譲歩だった。
カリムがイズモの話を聞きたがった理由も今なら分かる。
ラシドの言っていたことが本当なのか、知りたかったのだ。魔術師から。魔石を使い、争いを起こしている当の本人から。
「オレが持っていってもいいのか？」
「手伝いの者が、間違って必要以上に多く持って帰ったとしても、それは無理もな

いことです」
　カリムがまた舌を出す。
　カリムはイズモのために、屁理屈まで用意していた。自分のことしか考えていなかった自分が、ひどく恥ずかしかった。
　イズモは背嚢の留具を外すと、持ってきた魔石を道端へと戻した。じゃらじゃらとこぼれていく魔石は、腹から内臓が飛び出していくようにも思えた。
「ひとつ、聞いてもいいか」
　石を戻しながら尋ねる。
「去年も誰かが手伝ったのか」
「はい」
「ラティフか」
「よくおわかりですね」カリムは表情を変えることなく言う。「ワリスの態度で明らかなように、多くの者は神域に入ることを強く拒みます。私が許し、私と一緒でもです。しかし、あの子は臆することなく、進んで手伝ってくれました」
　カリムがふと手を止め、道端の一角に視線を向ける。まるで、そこにラティフの姿を見ているかのように。
　――そういうことだったのか。

その日の内に、ひとりで神域に入り、持ち出した。だから、イズモが魔術の説明をしたことを、なぜ知っていたのか不思議だったが、そういう事情があったのだ。

ラティフも、これが魔石だと気づいていた。だから、イズモが魔術の説明をした場所にあることを、なぜ知っていたのか不思議だったが、そういう事情があったのだ。

――もし、ラティフが魔石を持ってきていなかったら。

イズモは森に潜む存在を勘違いしたまま、あてどなく魔石を探し回っていたはずだ。最悪、なんの準備もないまま、目の見える魔狼と戦うためになっていた。そうなれば、まず間違いなく殺されていただろう。

ラティフのしたことは、いいことだったのだろうか。今も分からない。ただひとつ言えるのは、ラティフが掟を破ったことで、イズモは死なずに済んだ。

「じゃあ、手伝わせてもらうか」

すべて戻し終えると、場所を変えて魔石を集め始めた。今度は手当たり次第ではなく、良質なものの中でも、さらに質のいいものを探す。自分の命を任せるに値する確かなものを。

今度こそ、自分のやるべきことを間違うわけにはいかない。

魔石はすぐに集め終わった。

カリムは家に戻ると、さっそく薬の準備に取り掛かった。

棚から大きな乳鉢と乳棒、何種類もの植物、干からびた虫や黒焦げのトカゲにしか見えない何か、色のついた石などを取り出し、床に並べていく。いずれもイズモの知識になく、最終的にどんな効果になるのか見当もつかなかった。
「化粧って言うから、てっきり岩絵の具のようなものを想像していたんだが」所狭しと置かれた品々に、イズモは頭を傾ける。「本当に薬なんだな」
「ラシド様には様々な薬の作り方を教わりましたが、これから作る薬はその中でも特に重要なものです。いわゆる『秘薬』ですね」
「オレはいないほうが良さそうだな。魔石の加工は自分の家でするか」
「いえ、大丈夫です」出ていこうとするイズモを、カリムが引き止める。「見て真似ができるものではありません。イズモ様さえ良ければ、ここにいてください」
「じゃあ、お言葉に甘えて」とイズモは炉の近くに座り、魔石と魔石を加工する魔術具を取り出す。
カリムはほっとしたように表情を和らげると、イズモの反対側に腰を下ろした。
「少々うるさくしますが、ご容赦ください」
カリムはそう断り、鉢に入れた魔石を砕き始めた。破片が飛び散るのも意に介さず、力任せに乳棒を叩きつける。涼しい顔のまま、腕に筋を浮かべながら石を割る様子を、イズモは手を動かしながら眺めていた。

石が細かくなってくると、カリムはあぐらをかき、乳鉢を抱えるようにして、さらに砕いていく。

魔石が粉状になったところで、水と他の材料を何回かに分けて投入し、すり潰しながら混ぜ合わせる。何十という材料が原型を失っていき、湿地帯の汚泥のようなものへと変わる。

「失礼するよう」

間延びした声がしたかと思うと、大きな荷物を背負ったガビトが入ってきた。イズモの姿を認め、にっこりと微笑む。

「良かったよう。イズモもここにいたんだよう」

「その荷物は、どこかに出かけるのか？」

「違うよう。今日はみんな忙しいから、お昼を配ってるんだよう。はい、これはイズモの分だよう」

ガビトが鞄から何種類かのパンと木の筒を取り出す。干した肉や果物を混ぜ込んだパンとスープだった。焼き立てなのか、まだ温かい。

「これは前に山で食べたやつだな。塩気が効いて美味かった」

「あのとき、すっごく美味しそうに食べてたから、覚えてたんだよう」

三人で取り合うように食べていたのに、意外としっかりと観察している。

「ご苦労さまです。ガビトのご飯を食べると、ほっとしますね」
「みんなには早く元気になってほしいから、頑張ったんだよう」
カリムのねぎらいの言葉に、ガビトは照れたように頭を掻く。
「宴の料理も楽しみにしていますね」
「ガビトが作るのか？」
「みんなで手分けして作るんだけど、指示はオイラが出すんだよう」
いわゆる料理長という立場らしい。大の男、数十人前と考えただけでも大変そうだが、ガビトの目は槍を持っているときよりも生き生きとしている。
「イズモが来たときは準備してなくて大変だったんだよう。でも、今日はイズモでも食べきれないくらい用意するよう」
「オレにそんなことを言っていいのか？　遠慮しないぞ？」
「大丈夫だよう。もし足りなかったら、オイラの分をあげるよう」
自信ありげにガビトが胸を張る。
「ねえ、カリム。ムグニがどこにいるか、知ってたら教えてほしいんだよう。探しても見当たらないんだよう」
「ムグニはアドルに付き添い、女村の長と会っています」
イズモとガビトが不思議そうな顔でカリムを見る。

「何しに行ったんだ？」
「魔狼討伐の報告と儀式の最終調整です。男側の人数に合わせて、女側は参加する人数を決めるのです。最近は生まれる子の数が減っているので、参加者も増えるでしょうね」
「でもそれって、次の長がやる仕事だよう。なんでムグニなんだよう？」
ガビトが首を傾げるが、カリムは微笑むだけだった。
昼食を終えると、カリムは薬作りに戻った。一言もしゃべることなく、どろどろとした液体をひたすらかき混ぜる。その横顔は、はっとするほど真剣で、魔狼と対峙するアドルを彷彿（ほうふつ）とさせた。
声をかけるのもはばかられ、イズモも自分の作業に専念することにする。
乳鉢と乳棒の擦れるごりごりという音が家に響く。
イズモが必要数の魔石を削り、弾倉にすべて込めたとき、ようやくカリムの手が止まった。
「できました」
カリムが鉢を置き、汗を拭う。
「どれどれ、うっ……⁉」中身を見たイズモは思わず鼻を押さえた。
液体は墨やインクを思わせる艶のない黒に変わり、火にかけられたわけでもない

のに禍々しく泡立っている。さらに、蛆の湧いた腐肉ですら平気だったイズモでさえ顔をしかめる、名状しがたい臭いを発していた。
「これは本当に、これでいいのか……？」
「そうですが、何か？」
「触ったら毛が溶けたり、泡を吹いて倒れたりしないか？」
「ご安心ください。今はひどい見た目と臭いですが、宴が終わることにはちゃんと薬になっています」
　他人事ながら心配になるが、カリムが言うのだから本当なのだろう。
「次は儀式に参加する子どもたちの体を洗います。今年は人数が多いので、よろしければ手伝っていただけませんか？」
「ああ、もちろんだ。任せておけ」
　まだ時間はある。
　ふたりは内心を隠したまま笑みを向けあった。

　イズモとカリムが川に向かうと、仕事を与えられなかった子どもたちが年少の子どもたちと遊んでいた。一見すると以前と変わらないようだったが、無闇矢鱈な元気の良さはなくなり、表情もどことなく寂しげに見えた。

彼らは魔狼の出現の直後に避難させられ、魔狼の姿や村の惨状を直接見たわけではない。しかし、少し前まで一緒だった大人たちが姿を消し、多くの家がなくなっている事実に、何も感じないはずがない。だが、大人たちを心配させまいと明るく振る舞っているようだった。

イズモの姿を認めた途端、子どもたちが一斉に駆け寄ってきた。

「体はもう大丈夫なの？」「イズモが魔狼を倒したって本当？」「なんであんなに臭かったの？」「どんな魔術使ったの？」「一緒に遊んでくれるの？」

イズモを取り囲み、口々に質問を浴びせかけてくる。しかし、前のように揉みくちゃにはせず、体が触れるかどうかの距離を保っている。

子どもたちの質問に答えながら、イズモはラティフの姿を探していた。子どもたちの後ろで、静かに好奇心をたぎらせる少年がいる気がしたのだ。しかし、さまよう視線は彼の不在を確かめるだけだった。

「では、説明に入ります」

子どもたちの話が一段落するのを待ち、カリムが咳払いをする。

「前々から伝えているように、今日は〈命脈の儀〉です。参加する者は儀式に備えて身を清めなければなりません。私とイズモ様がひとりひとり洗いますので、手の空いている者は薪を集めてください」

カリムが言い終わるやいなや、参加者の子どもたちは川に飛び込み、他の子たちは森へと走っていった。
「元気だな。少し分けてほしいくらいだ」
「村の未来を担う子たちです。私も頼もしく思います」
カリムは眩しいものを見るような目で、川で泳ぐ子どもたちを見ていた。
「ハイユ、ワジド。来てください」
カリムが声をかけると、呼ばれたふたりが川から上がり、いつかイズモがそうしたように、浅瀬に腰を下ろす。
イズモは上着と靴を脱ぎ、ズボンの端を膝の辺りまで折った。カリムから石鹸を受け取り、ワジドの背後に立つ。
「じゃ、始めるぞ」
声をかけ、小さな背中に石鹸をこすりつける。カリムに洗ってもらったときのことを思い出しながら、頭や腕を洗っていく。
少年の毛は鮮やかな橙色で、撫でると指の間をさらさらと通り抜けていく。上質の布に触れているような、いつまでも撫でていたくなるような柔らかさだ。その下の筋肉はまだまだ薄く頼りないが、この子もいつか、バーリのように大きくなるのだろうか。

「ねえ、イズモ。聞きたいことがあるんだけど、いい？」

少年のほっそりした腕を洗っていると、おそるおそる尋ねてくる。

「どうした？」

「イズモは、女の子としたことある？」

「そりゃまあ、あるが」

「どんな感じだった？」

「どんなって言われてもな」イズモは困ったように、空に目を向ける。「そういうことは、オレより年上のやつらに聞くほうがいいと思うぞ」

「聞いたよ。でも『気持ちよかった』とか『気づいたら終わってた』とか、そんなことばっかりなんだもん」

それはそうだろう。

「そもそも、お前は何が知りたいんだ？　お前も向こうの村でそれなりに暮らしてたわけだし、女がどんな生き物か知らないわけじゃないだろ」

「それはそうなんだけど」少年が言いよどむ。「大人が言ってるのを聞いちゃったんだ。最近、生まれてくる子の数が減ってるって。もし、うまくできなくて、子どもができなかったらって思ったら、怖くなって……」

話を聞いていると、彼らにとって異性と交わることは、本当に子どもを作るため

の儀式なのだと実感する。当の本人たちも異性との性交に胸を躍らせるより、責任を感じているらしかった。

イズモはしばし手を止め、過ぎ去りし日々に目を向ける。あのとき、自分はどう感じていただろうか。

「……そうだな。オレも初めてのときは、不安で仕方なかった」少年の毛を泡立てながら、イズモは呟くように語りかける。「嫌われたらどうしようとか、うまくできなかったらどうしようとか、そんなことばかり考えていた」

イズモの初めての相手は、同じ村に住む年上の少女だった。美人というほどでもないが、気立てがよく、イズモが幼いころから面倒を見てくれた。母親も彼女のことを気に入っていたと思う。

「だが、そのときが来ると、不安なんて消し飛んだ。体が自然に動くんだ。相手の感じている姿が見たくて、少しでも長くつながっていたいと思った」

年に一度の収穫を祝う祭りの日。町から行商がやってきて、片田舎の寂れた村がにわかに騒がしくなる。イズモはわずかな金を握りしめて、彼女と見世物や露店を見て回った。

その帰り道、彼女はイズモを人気（ひとけ）のない林に誘った。

祭りの華やかさから離れた暗がりの中、イズモが射的で当てた玩具の腕輪が、彼

女の手首できらきらと光っていた。
「誰にでも初めてがあって、それを乗り越えてきた。世界が終わりそうなくらい不安でも、いざとなれば意外となんとかなる」
「ほんと？」少年が顔を上げ、イズモを見る。
「ああ、お前なら大丈夫だ」少年の耳に顔を近づけ、囁く。「こんな話で興奮するくらいなんだからな」
少年は慌てて股間を隠すと、泡だらけのまま川に飛び込んだ。
ああ、いいな。とイズモは思った。自分にも、目の届く範囲が世界のすべてだった時期があった。何事もない日常が続くと信じて疑わず、自分のことだけを悩んでいればよかった。退屈な日々。しかし、世界は間違いなく輝いていた。
たとえ、唐突に終わりを迎えたとしても。
「次は俺の番ね！」
「はいはい」
イズモは彼らの未来を祈った。取り戻した平穏が二度と奪われないように。願わくは誰の犠牲も必要としないように。

日が暮れたころ、それはもう盛大な宴が催された。

広場の火の周りには、何十という大皿が隙間なく並べられ、村中に食べ物の匂いが満ちていた。兎や鳥、鹿、猪、魔獣、川魚を、焼いたり蒸したり煮たり腸詰めにしたり燻製にしたりしたもの。付け合せの野菜も彩り豊かで、時間も人手も限られた中でよくここまで作ったと感心してしまった。

中でも圧巻だったのはイズモの前に置かれた、大猪口の幼体の丸焼きだった。腹には野菜や香草がこれでもかと詰め込まれ、魔獣の肉とは思えない芳醇な香りが食欲を刺激する。ガビトが胸を張ったのも頷ける出来だった。

全員が今や遅しと待ち受ける中、アドルが壇上(だんじょう)に上がった。アドルは全員を見回すと、静かに話し始めた。

「村を襲った悲劇により、多くの命が失われた。大切な相方を亡くした者も多いだろう。しかし、彼らの英雄的な犠牲により、我々は〈命脈の儀〉を迎えることができた。我らの血を未来に受け継ぐため、今宵は彼らの分まで食おう」

アドルの言葉が終わるやいなや、大人も子どもも我先に料理に手を伸ばす。イズモも負けじと肉に食らいつき、手当たり次第に口に放り込む。次から次へと平らげていると、食べ慣れた一品に出くわす。

「お、これはオレが教えた『天ぷら』だな。作ってくれたのか」

「一度でいいから試したかったんだよう。ちょっと脂っこいけど、溶かした獣脂で

火を通すなんて、よく思いつくんだよう」
「油で揚げるのは、森の外じゃ一般的な調理法だ。もっとも、使うのは植物の実から取った油だけどな。カリムも食ってみろ。熱いから気をつけろよ」
「これは鳥の肉ですか？　いただきま――ギャーッ!?」
笑うイズモの耳に、澄んだ歌声が聞こえてきた。目を向けると、火を囲む一角にムグニと子どもたちがいた。子どもたちにせがまれて歌っているらしい。険のあった表情も、いくぶんか和らいでいるように見えた。
あちこちで笑い声が起こり、村中が沸き立っている。
それでもどこか寂しく思えてしまうのは、男たちの間に空白を見つけてしまうからだろう。不自然に空いた空間に、そこにいたはずの誰かのことを、意識せずにはいられなかった。
男たちも、ときおり視線を宙に漂わせ、一筋の寂しさが宿る。しかし、すぐに表情を戻し、また笑う。
今だけは、寂しさを忘れよう。誰もがそう思っていた。
そんな村の様子を、アドルは料理に手を付けないまま、じっと眺めていた。

食事が終わると、残るは儀式の最後の仕上げのみとなった。食事の片付けはガビ

トたちに任せ、儀式の参加者と共にカリムの家に向かう。
坂を登りきると、祈祷師の装束に身を包んだカリムが、薬の鉢を手にして待っていた。どす黒かった液体は目の覚めるような朱色に変わり、妖艶な花を思わせる濃密な甘い芳香が鼻先をかすめる。
家の前には小さな火がたかれ、チロチロと揺れる淡い光が、祈祷師の得体の知れなさを際立てていた。
子どもたちは横一列になり、焚き火を挟んでカリムと向かい合う。
「ハイユ、腰布を外して前に」
カリムが厳かな声で告げ、緊張した面持ちの少年が進みでる。
カリムは指先を薬に浸すと、少年の体に指を走らせた。
迷いのない大胆な指使いで、胸、腕、腹、足、顔、背中、尻、尻尾、陰茎、陰嚢に至るまで、燃え上がる炎のような模様を描いていく。月明かりの下で、抽象化された炎が淡く光っていた。
――この化粧も魔術なのか。
仕組みは魔術符と同じだ。材料となる魔石に祈りを込め、対象に塗布することで魔術が発動する。効果はおそらく、性欲亢進や性機能の向上だろう。
外の世界にも、娯楽としての性交を補助する魔術や魔術具は存在する。だが、カ

リムが施すそれはもっと素朴で切実なものだった。

子孫繁栄。

子をなし、次の世代へ命を紡ぐ祈り。生き物が本来持っている、産み、増えるという根源的な願いを叶えるための魔術。

結果として性に働きかける点は同じでも、根底にあるものの違いで、ここまで崇高になるのかと、イズモは驚きを隠せなかった。

ひとり目が終わると、カリムはすぐに次の少年を呼び、また描く。

黒縞の上に赤い文様をまとったハイユは、元気な少年から屈強な青年へと姿を変えていた。心なしか体が少し大きく見え、再びまとった腰布越しにも男らしさが分かる。少年に描かれた赤い炎が、月光の下でぼんやりと光る。まるで、戦いに赴く戦士のようだ。

ひとり、またひとりと名前を呼ばれ、その姿を変えていく。

「カリム、子どもたちの準備はできたか？」

全員に描き終わったころ、ムグニがやってきた。

「ええ、ちょうど終わったところです」

「では、これより聖域に向かう。二列になって俺に続け」

ムグニを先頭に、子どもたちが列をなして坂を下っていく。

すれ違う一瞬、ムグニと目が合った。
あいつとちゃんと別れることができたのか。そう尋ねられた気がして、イズモは大きく頷いた。ムグニはかすかに笑みを浮かべると、村へと降りていった。
「これで、私の仕事はすべて終わりです」
少年たちが見えなくなると、カリムは肩の荷が下りたように仮面を外した。
「あとはアドルが迎えに来るまで、家の片付けをしようと思います。次の祈祷師が困るといけませんから」
「いまさらだが、来年は誰が祈祷師をするんだ？」
「ラシド様の話では、神が生む金色の毛の少年が祈祷師となります。本当のことは分かりませんが、私にはどうにもできませんし、きっと大丈夫なのでしょう。いわゆる『あとは野となれ草となれ』ですね」
カリムは舌を出して見せる。明るく振る舞っているが、それがただの強がりなのは、イズモにも分かっていた。
「じゃあ、ここでお別れだな」
イズモが軽く言うと、カリムが「えっ」と声を漏らす。
「アドルが来るまで待っていたら、別れるのが辛くなる」
「そう、ですか……」

せめてもう少しだけ、話をしていたい。そう顔に書いてある。しかし、イズモはそれに気づかないふりをした。

「今まで世話になった。お前のことは忘れない。絶対に」

イズモは右手を差し出す。

「私も、イズモ様と過ごした日々を決して忘れません」

カリムはその手を両手で包み込むように握った。別れを惜しむように強く。

握手には長過ぎる時間が過ぎたころ、カリムはようやくイズモの手を離した。

「じゃあな」

軽く手を振って、カリムに背を向ける。

「イズモ様」

坂に差し掛かったころ、カリムが声をかけてきた。

振り返るイズモの目に、カリムの姿が映る。

月明かりを受け、光をまとうように輝く純白の虎人。この世のものとは思えないほどに美しい顔立ちと、均整の取れた剛健な体の青年。だが、その青い目は悲痛に陰り、ひどく儚く見えた。

カリムは何かを言おうとして、口を開いた。しかし、言葉が出て来ないまま、奇

妙な間が空く。
「……今まで、ありがとうございました」
カリムは頭を下げると、逃げるように家の中へと入った。
イズモは家の戸口をしばらく見つめた後、自分の家へと戻った。

2

青白い月明かりに照らされた山道を、カリムとアドルが歩いている。
夜空には雲ひとつなく、太陽と見紛うばかりに輝く月が、星のない闇の中にぼんやりと浮かんでいる。月光が描き出す荒々しい山の風景は、黒だけで刷られた版画を思わせ、ふたりの容姿と相まって、ことごとく現実感がなかった。
ふと、カリムが立ち止まり、空を仰いだ。物思いに耽るように月を眺める。
「三年前も、こんな夜でした」
アドルも足を止め、問いかけるような視線をカリムに向ける。
「あの夜、私はラシド様を探して、バーリと御山を登っていました」
カリムは過去に思いを馳せるように言葉を漏らす。
「それがどうした」

「あのとき、ラシド様がおっしゃっていたのです。私の祈りが我々を導くと。その意味が今なら分かる気がします」
「死者の言葉に惑わされるな。あの男はお前を贄として縛り続けた」
「そうだとしても、あの方がそうしたのには理由があるはずです。思いを無下にはできません」
「死者を敬う気持ちは否定しない。だが、我々は死者の奴隷ではない。死者のために自らを犠牲にすることはない」
「私はラシド様に言われて、ここにいるのではありません。これから生まれてくる子どもたちのために、自らの意思で選んだのです」
「その子どもたちに、己と同じ犠牲を強いるとしてもか？」
「そうさせないために私は行くのです」
カリムとアドルが見つめ合う。先に目を逸らしたのは、意外なことにアドルの方だった。
「イズモのことは、もういいのか？」
カリムは少し迷い、目を伏せた。
「私にできることは、もうありません」呻くように言う。「これ以上、私のことでお手を煩わせるわけにはいきません」

カリムは思いを振り切るように前を向き、歩き出した。
アドルはその背中を黙って見つめていたが、諦めたようにため息を吐くと、カリムを追いかけた。
ふたりは言葉を交わすことなく、黙々と山道を登っていった。風もなく、砂利を踏みしめる音だけが山にこだまする。
鳥居の前まで来たとき、ふとアドルが足を止めた。
「どうしました？」
「用を足したくなった」
「それくらいなら待ちます。早く済ませてください」
「お前は俺が糞をしているところを見たいのか？　先に行け。すぐに追いつく」
カリムは呆れた顔をしたが、「分かりました」と言って、鳥居の間に張り直されていた縄をまたいだ。そのまま崖の曲がり角に消える。
アドルはカリムが戻ってこないのを確かめると、来た道を振り返った。
「イズモ、出てこい」
アドルの鋭い声に、崖の影に隠れていたイズモの心臓が跳ねた。声が出そうになるのを両手で口を塞いで耐える。
――この距離で尾行がバレただと!?。

実のところ、イズモはふたりが村を出たときから、ずっと後をつけていた。隙を見て儀式に割り込み、カリムを連れ出すつもりだったのだ。カリムにあっさりと別れを告げたのも、未練がないように見せかけ、油断させるためだった。

──落ち着け。まだ位置までは分からないはずだ。

イズモに諦める気などなく、むざむざ出ていくような真似はしない。

「出てこないなら、こちらから行く」

アドルの声が怒気を帯びる。姿が見えないにもかかわらず、毛が逆立つような緊迫感があった。

──こうなったら実力行使だ。

心の中で〈鈴鳥〉を唱える。指向性をもたせた音と爆光でアドルを気絶させ、その間にカリムを追いかけるしかない。

銃の引き金に指をかける。

「動くな」

耳元で低い声がした。喉元に押し当てられた冷たい感触に、紡いでいた祈りが霧散する。

「その程度で気づかれないとでも思ったのか。カリムならともかく、俺を出し抜きたいなら、もっと真面目にやれ」

目だけを動かし、後ろを確認する。

無感動な金色の瞳がイズモを見下ろしていた。ほとんど密着するような位置に黒虎がおり、手には果物ナイフほどの剣が握られている。

頭突き、肘打ち、後ろ蹴り、足先を踏む。背後を取られたときの対処法はいくつかあるが、どう考えても、アドルが喉を切り裂く方が早い。

魔術を使おうにも、引き金の後ろにアドルの指がねじ込まれ、動かすことができなかった。

「ええと、アドル様」言葉を発するたびに刃が喉に触れるのを感じつつ、男に話しかける。「少しよろしいでしょうか」

「なんだ」

「ここはひとつ、あなた様の寛大な心で見逃していただけないでしょうか。私には可及的速やかに実行しなければならないことがありまして」

「何をする気だ」

「えっと、その、カリムを誘拐しようと……」

「儀式の邪魔をすれば、神の怒りを買う」

「そこはまあ、生まれてこの方、人の怒りを買うことばっかりしてるもんで、いまさらというかなんというか」

「俺にやすやすと背後を取られる程度のお前に何ができる」
「物理的に勝てなくても、カリムの気持ちを変えられれば望みはあるかな、と」
アドルはすぐには返事をしなかった。ややあって、短剣が消える。
「俺の目を見ろ」
言われるまま振り向く。鼻先が触れるほどの距離にアドルの顔があった。瞳の中で渦巻く銀河が、イズモを覗き込む。
しばらくして、アドルが顔を離す。
「行くぞ」
そう言うと、アドルはイズモに背を向け、歩き出した。朽ちた柱を通り抜け、道なりに進んでいく。
イズモは唖然としてアドルの背中を見つめていたが、アドルの「早くしろ」という声で我に返った。
「オレを止めないのか？」
大股で歩くアドルに、小走りで追いすがる。
「味方は多いに越したことはない」
アドルは足を止めることなく、言葉少なに答える。
「味方って、お前もカリムを助けるつもりなのか？」

「当然だ。弟が殺されるのを、黙って見ていられるわけがない」
「殺される？　儀式って、お前の剣でカリムを殺して、カリムの肉を皆で食べるんじゃないのか？」
「お前は我々をなんだと思っている」アドルが呆れたようにイズモを見る。「その程度なら、お前の助けなど必要ない」
「だったら、ちゃんと説明しろよ。儀式って本当は何をするんだ？　お前が戦おうとしている相手って誰だ？」
「俺も詳しいことは知らされていない」イズモの問いをアドルは一蹴する。「時が来たら、神域の庭園に来いと言われているだけだ」
「そんな話を真に受けて、おとなしく従うなんて、おかしいだろ」
「お前は神域の本当の姿を見ていないから、そんなことが言える」アドルは気分を害した様子もなく、イズモに憐れむような目を向ける。「あれを見ても同じ口を叩けるようなら、そのときは褒めてやろう」
　昼間に魔石を集めた場所を通り過ぎ、さらに奥へと進む。カリムは先に行ってしまったらしく、追いつく気配はなかった。
　何度目かの角を曲がったとき、イズモはその場に立ちすくんだ。
「嘘だろ……」

道も崖も、目に見えるすべてが燦然と輝いていた。岩に魔石が埋まっているのではない。道や崖など、山を構成するそれ自体が光を放っていた。もはや鉱脈などという次元を超えていた。

「これはまさか、この山自体が、巨大な魔石なのか？」

世界の魔石事情を、根底から覆す規模だった。このことが公になれば、この山をめぐって世界中が争うことになる。たとえ世界を敵に回し、何十万、何百万という命を犠牲にしてでも手に入れる価値のあるものだった。

「お前が言っていたのは、これのことだったのか」

アドルは答えず、魔石でできた道を進んでいく。

──森を閉ざした本当の理由はこれか。

伝承によれば、ここにあった国が他国から攻められた際、神と呼ばれる存在が森を世界から切り離したという。その真の目的は、山を守るためだったのだ。虎人たちが御山と敬っているのも、そこから来ているのだろう。

しかし、そうなると別の疑問も出てくる。

なぜ、長や祈祷師にも事情が伝わっていないのか。なぜ、今も生贄の風習が残っているのか。なぜ、今も虎人たちは森の外に出られないのか。

そもそも誰が、この森を閉ざしているのか。

「うおっ⁉」
考えながら歩いていると、アドルの背中にぶつかってしまう。見上げると、アドルが足を止め、前を見ていた。イズモも倣うように、前に目を向ける。
そこにあったのは、巨大な鳥居だった。
神域の入り口にあったものとは異なり、笠木や貫、額束などが揃った完全な形をしていた。ごつごつした質感から、どうやら魔石でできているらしい。表面は月明かりの下でも分かる鮮やかな朱色に塗られていた。
「ここから先が、本当の神域だ」
「えっ？」イズモは思わず振り返る。「なら、さっきの木の柱は？」
「これを模して作られた偽物だと聞いている」
アドルの口元にかすかな笑みが浮かぶ。
「いくら禁じても、好奇心や冒険心、その他の事情で掟を破る人間は出てくる。その際、彼らが本当の禁忌に触れることのないよう講じられた措置だ」
「あれだけの魔石が囮にすぎなかっただと……？」
普通の人間なら、視界を埋め尽くす幻想的な光景を見た時点で、村の秘密を知った気になるだろう。その先に真の秘密があるとは思いもしない。
ラティフは禁忌に触れたが、想定されたものだった。少しだけ気が楽になる。

あらためて鳥居に目を向ける。ふと、鳥居の向こうに見慣れた人物がいることに気づいた。薄汚れた上着に身を包んだ、小柄な鼠人。隣には大柄な黒虎もいる。

「あれは……オレ？」

試しに左手を上げる。同時に相手もイズモから見て左側の手を挙げる。近づいてみると、鳥居の柱で囲まれた部分が鏡のようになり、手前の風景を映していた。

「ここから先は神の庭だ。許可なく入った者に、神は容赦しないだろう」

アドルが鏡に近づき、右手で触れる。すると、まるで水面に触れたように、表面がさざめいた。どうやら、鏡の向こうにも空間が続いているらしい。まさに人間の世界と神の世界をつなぐ門だった。

「覚悟はいいか？」

「全員で生きて帰る覚悟ならな」

イズモは笑みを浮かべ、手を差し出す。

「では参ろう。招かれざる英雄よ」

アドルも不敵な笑みで応じ、その手を握る。

アドルはイズモを抱き上げると、鏡の中に飛び込んだ。

目のくらむような光に包まれ、イズモは思わず目を細めた。

少しずつ明るさに慣れ、周りの様子が鮮明になっていく。
「なん、だ。これ」
イズモは金色の波の中にいた。
一面の麦畑。赤い夕焼けに照らされ、膨らんだ麦の穂がきらきらと輝く。イズモの頬を撫でる風からは、秋の匂いがした。爽やかさの中にも、かすかに冬の気配を感じさせる心地よい風だった。
アドルが手を離し、地面に降りる。靴の下で土が擦れる感触があった。
後ろを見ると、同じように麦の畑が広がっている。その中央に、山道で見たものと同じ赤い鳥居がそびえ立っている。柱に囲まれた空間には驚くイズモとアドルの後ろ姿が映っており、ここが山から続く現実であることを示していた。
――魔術でひとつの世界を作り出したっていうのか？
理論上は、たしかに可能だ。イズモが祈りで銃弾を作るように、空間それ自体を生成しているのだろう。風も土も麦も、すべて擬似的に作り出された、仮初の存在なのだ。
――だとして、この世にそんなことができる存在がいるのか？
山の魔石を使ったとしても、特級どころか人間の域をはるかに越えている。現実主義者であるアドルが、神の存在を信じるのも無理はなかった。

「こっちだ」
アドルが穂をかき分けるようにして歩き出す。向かう先を見ると、遠くに石を積み上げた城壁が見えた。壁の向こうには屋根が見え、街があるらしい。
「ここに来たことがあるのか？」
「男の村に来て間もないころ、ラシドに連れられて来られた。伝承と神の使いの役目を聞いたのもそのときだ」
だから、アドルはカリムを連れて逃げ出したのだ。生贄が、形式的なものではないと確信したために。
「ここは、なんなんだ？」
「伝承にある、神の住む国。そして、侵略者によって滅ぼされた国だ」
遠くに見えていた壁が少しずつ近づいてくる。
街はいわゆる城郭都市と呼ばれるものだった。城館を中心に街が広がり、それを城壁が囲んでいる。壁は遠くからでも堅牢な造りであることが見て取れたが、魔術を撃ち込まれたように、ところどころ穴が空いたり、崩れたりしていた。
畑を抜け、広い道に出る。土を固めて作った平らな道だった。アドルが歩く速度を上げ、イズモも小走りで追いかける。
道の終端には、大きな城門があった。

だが、外敵の侵入を防ぐはずの扉がない。門の脇には破城鎚が打ち捨てられ、破壊された分厚い木の扉が、壁の内側に崩れ落ちている。

門の近くには、人の形をしたものが折り重なるように倒れていた。

虎人を模した人形だった。

服屋で見かけるマネキンのように、全身が影のように黒く、毛や顔の造形などの細部は省かれている。

揃いの鎧を身に着け、剣を握っているところを見ると、彼らは兵士のようだ。

「戦場を再現しているのか」

倒れたおびただしい人形を見て、イズモが呟く。

ある人形には無数の矢が刺さり、ある人形には腕や首がなかった。

単純化されているが、今にも血の匂いが漂ってきそうな、凄惨な戦場だった。

「いくぞ」

アドルは剣を出すこともなく、悠然と街の中に入っていく。

痛ましい光景から目を逸らし、アドルに続く。

街の中には、丁寧に組まれた石畳の道が続いていた。道の両脇には石造りの家々が連なるように並んでいる。灰色の石の壁は歴史を感じさせ、いたるところに植えられた木や花と相まって、とても美しい街だった。

だが、街はすべて破壊されていた。
「ひどいな」イズモは思わず呻いた。
木製の扉や窓は焼け落ち、家の中には焼け焦げた家具が散乱していた。壁や天井にも火が舐めた形跡があり、屋根が落ち、崩壊している建物も少なくない。
家の中にも道端にも、服を焦がした人形が倒れていた。男だけではない。女や子どもの姿もあった。逃げ惑うように、誰かを守るように、あるいは敵に立ち向かうようにして死んでいった人々の姿が、克明に残されていた。
生々しい侵略の光景。平穏な田園風景との落差が、悲惨さを際立てていた。
イズモは太陽を見やる。
赤く滲む夕日は、下半分を地面に沈めたまま、まったく動いていなかった。夜になることも、朝が来ることもない。永遠の黄昏時（たそがれどき）。
今このときが、この国にいた神にとっての、世界が終わった瞬間なのだろう。
——哀れだな。
これから戦うであろう相手に対し、イズモはそんなことを思った。
魔術は良くも悪くも術者の心を反映する。心の奥底に刻まれた自責の念。救えなかった命への悔恨の情。この世界を形作っているのは、そんな感情だった。イズモが故郷の夢を見るように。

「ひとつ言っておくことがある」
物思いに耽っていると、アドルが声をかけてきた。
「なんだ？」
「神との戦闘は避けられない。万が一、カリムとお前のどちらかを選ばなければならなくなったとき、俺は迷わずカリムを選ぶ。覚悟しておけ」
「そういうことは、思ってても口にするな！　地味に凹むだろ！」
「だから、お前も迷うな」
続けようとした文句が引っ込む。
「そのときが来たら、迷わず撃て」
「……なんでそんなことを言う」
真意を測りかね、アドルを見る。
「お前は殺すべき敵にさえ憐憫の情を向ける。必要に迫られても味方を撃てないと考えるのは当然の帰結だ。現に、今も神のことを考えていただろう」
「人の心を読むなよ」図星を突かれ、イズモは嫌そうな顔をする。「今回はカリムの命が懸かっている。お前には悪いが、躊躇う気はない」
「それを聞いて安心した」
アドルはイズモを一瞥すると、また前を向いた。

ふたりは入り組んだ城下町を進んでいく。
どこも荒れ果て、無事なところはひとつもなかった。小さな民家ですら、ドアが破られ、室内が焼き尽くされていた。
ガラントが調べてきた昔話では、突然やってきた竜に国は滅ぼされ、他国はそれを助けようとしたが手に負えなかった、となっている。しかし、これはどう見ても人間の仕業だった。城門のところにあった破城鎚が動かぬ証拠だ。
――祈りは嘘をつかない。そうなると、自分たちのやったことを隠すために、竜のせいにしたのか。
魔石を求めて侵略したが、超常の存在によって失敗に終わった、という都合の悪い事実を、当事者が消えたのをいいことに捻じ曲げたのだろう。そして、訂正する者がいないまま、この国のことは忘れ去られた。
歴史は勝者が作るというが、なんとも気の滅入る話だった。
「お前はカリムのどこに惹かれた？」
ふいにアドルが尋ねてくる。
見ると、アドルは道に横たわる人形に目を向けていた。イズモと同じくらいの背丈の人形が二体、抱き合うようにして倒れている。片方が、もう片方を庇おうとしたのだろうか。

「惹かれたって、オレは別にそういうわけじゃ……」
「お前は得にならないことをする性格ではない。にもかかわらず、危険を冒してまでカリムを助けるのには理由があるはずだ。カリムの何がそうさせる？　神の使いという立場か？　祈祷師という地位か？　顔か？　体か？　尻か？」
「お前な」
からかわれていると思い、アドルを睨む。しかし、アドルは至極真面目な顔をしていた。純粋に疑問に思っているらしい。
実際問題として、イズモが金にならない相手に深入りするのは、めったにないことだった。改めて問われると、返事に困った。
「……あいつは優しいからな」
出てきたのは、思いの外、単純な言葉だった。
「優しい？　その程度のことなのか？」
「オレには十分な理由になったんだよ」
自嘲するようにイズモが言う。
「名前が知られるようになった魔術師は、自然と二つ名がつけられる。オレはなんて呼ばれていると思う？」
「詐欺師――」

「〈落穂拾(おちぼひろ)いのイズモ〉」
即答するアドルを遮るように言う。
「師匠の元を飛び出したばかりで、金も実績も人脈もないオレには、仕事を選んでいる余裕なんてなかった。まともな魔術師なら見向きもしないような仕事を引き受けていたら、いつの間にかそう呼ばれるようになっていた」
仕事で最も大切なのは信頼だ。魔術師に依頼する人間も馬鹿ではなく、仕事ができる相手に頼もうとする。
必然的に、大きな仕事や条件のいい仕事は名のある事務所が持っていき、そここの仕事は中堅の事務所が持っていく。残るのは、下請けの下請けや金のない個人からの依頼、法的に問題のある仕事となる。要するに、ろくでもない仕事だ。
〈落穂拾い〉という二つ名は、そんな大手や中堅のおこぼれを預かって食いつなぐ姿と、田舎者であることを揶揄した名前だった。極めて不名誉ではあるが、噂を聞きつけて仕事を持ってくる人間もいるため、拒むこともできなかった。
「後ろ暗い仕事を引き受ける魔術師なんてのは、いいように使われる一方で、軽蔑されるのが普通だ。だが、事情を知らなかったとはいえ、カリムはオレをひとりの人間として扱ってくれた。そんな優しいやつが死ななければならないなんて、絶対に間違っている」

「その優しさが演技だったとしても、そう言えるか？」
アドルが試すように問いを投げる。
「村を守るために、お前に好かれるよう振る舞っていただけで、本心は別だったとしても、お前はカリムを助けるか？」
「助けるだろうな」自嘲するように、イズモは口元に笑みを浮かべる。「あいつがどう思っているとか、もう関係ない。どんな理由があっても、あいつ自身が望んだとしても、あいつには死んでほしくない。それに――」
イズモは言葉を切った。口にすべきか、逡巡（しゅんじゅん）するような間。
「――全部が全部、嘘とも思えないしな」
「それがお前の答えか」アドルは納得とも呆れともつかない息を吐く。「カリムが言ったように、お前は予言の狩人で間違いないようだ」
「予言の狩人？　なんの話だ？」
「悪いが、説明している暇はないようだ」
アドルが足を止める。
見ると、道の先にある石畳の隙間から黒い液体が滲み出していた。水たまりは見る間に広がり、行く手を遮るように満ちていく。
アドルが何もない空間から剣を取り出し、構える。

それに呼応するように水たまりから黒い手が飛び出した。
空中へと伸びていき、腕と肩が出現。地面に手を付き、体を持ち上げるように力が込められる。兜に覆われた頭部と無骨な戦斧を持った左腕が現れ、続いて穴から這い出るように下半身が出てくる。
あっという間に、物々しい鎧で覆われた巨躯がイズモの前に立ち塞がった。
「侵入者を排除する兵士ってとこか」
イズモも銃を構える。
黒い兵士は、ふたりの行く手を阻むように、次々と生まれていく。
「人間じゃないなら、遠慮はいらないな」
銃の安全装置を外す。
それを合図に、兵士たちが雄叫びを上げ、突進を開始。
――顔のない獣を撃つ始まりの鳥の矢羽。腕は弓、願いは矢。
〈駒鳥〉を射出。先頭の兵士の胸に着弾。後ろにいた兵士数人を巻き込んで爆散する。飛び散った手足は黒い煤となって霧散する。
仲間の残滓を蹴散らしながら、兵士たちは黒い波となって押し寄せる。
「これは時間稼ぎだ。構わず行くぞ」
アドルが加速。一瞬で敵の懐に飛び込むと、剣を振り抜く。ひと振りで十数人が

吹き飛び、波をかき分けるように道を作る。
「カリムは絶対に連れ戻してやる！」
イズモは〈駒鳥〉を連射しながら、アドルの後に続いた。

3

破壊された街の中心、崩れ落ちた城の一角に、静かな庭園があった。
森かと錯覚するような不均一に植えられた木々や曲がりくねった清らかなせせらぎを設えつつも、道には歩きやすいように石畳が敷かれ、人や動物の彫刻がさり気なく置かれている。自然と人工物が調和した、美しい場所だった。
カリムはそんな庭の中央にある、浅く水が張られた池の小島、伝承の世界の最深部に座り、沈まない夕焼けを眺めていた。
黄昏時は胸が騒ぐ。
小さいころ、カリムはいつも不安に思っていた。沈んでいった太陽は、本当にまた昇るのか。眠りについた自分や動物たちは、本当に目を覚ますのか。世界は夜の闇に溶けて、消えてしまうのではないか。昨日は大丈夫だったといって、今日もそうだとは限らないのではないか。

だが、ある日、アドルが言ってくれた。もし、太陽が昇らなかったら、自分が太陽を起こしに行く。だからお前は心配しなくていい、と。その日から、カリムは夜を恐れなくなった。夜明けは必ず来ると、信じられるようになった。

――でも、この世界には明日がない。

カリムがこの世界に足を踏み入れてから、太陽はその場から動いていない。永遠に続く昼でも夜でもない光景。それは、空に縛りつけられた太陽が、自分から流れる血で世界を赤く染めながら、訪れることのない死を待ち続けているように思えた。

いたたまれなくなり、カリムは膝の間に顔を埋める。

この世界の根源たる、あまりにも悲痛な祈り。

滅びるくらいなら、明日など来なくていい。

この世界を作った誰かは、未来を捨てることで今を永遠とした。そして、終わりのない悲しみを糧に、国の生き残りである村を守り続けることを選んだ。

自身が救われることは、決してないと知りながら。

「あなたは、本当にそれでいいのですか？」

「もちろんだ。愛しき子よ」

聞き慣れた声に、カリムは顔を上げた。

目の前に誰かが立っていた。いくつもの動物の頭蓋骨を混ぜ合わせたような仮面をかぶり、赤い布を羽織っている。

祈祷師の正装。

村の者は触れることすらはばかる衣装。だが、自分以外にひとりだけ、これをまとう人物を知っていた。

「ラシド様……？」

「待っていたぞ、カリム」

懐かしい声とともに、仮面が外される。

出てきたのは金色の虎の顔。そして、両目を横切るような痛々しい傷跡。最後に見たあの日から、見た目も話し方も、何ひとつ変わらない。

ラシドはカリムのそばにしゃがむと、愛おしそうにカリムの頬に触れる。壊れ物を扱うような繊細な手つきは、カリムを育てた祈祷師のそれだった。

「こうして会うのは三年ぶりか。人は瞬く間に大きくなる」

「生きてらっしゃった、のですか」

「我輩は神であるからな。都合により、しばらく姿を隠していた」

天気の話をする気安さでラシドが言う。カリムは言葉を失うが、ラシドは気にした様子もなく、カリムを撫で続ける。

ふと、その手が止まった。
金色の毛に包まれた手は、カリムの腹、わずかに毛が不揃いになっている部分に置かれていた。
「歴代の神の子には幾度となく驚かされてきたが、汝は特に、我輩の予想を超える振る舞いをする。自らの腹を刺したときは、さすがに肝が冷えた」
カリムの顔が跳ね上がる。
「どうして、それを」
「この森で起きることは〈風〉たちがすべて教えてくれる。汝が魔狼に襲われたことも、あの鼠が神域から魔石を持ち出したことも」
「魔狼が村に来たことも、ですか？」
「当然だ」
「それなら、どうして」カリムの唇が震えるように動く。「どうして助けてくださらなかったのですか!?　神にとって、村は守るべき存在ではないのですか!?」
カリムの叫びに、金色の虎が悲痛に顔を歪ませる。カリムが初めて見るラシドの表情だった。
「我輩としても、彼らをみすみす死なせるのは忍びなかった。しかし、あれは汝の祈りがもたらしたものだ。苦渋の末、我輩は手を出さぬことにした」

「私の、祈りが？　どういうこと、ですか？」
「祈りとは心の深層で形作られる想いの発露だ」ラシドは子どもをあやすように語りかける。「運命の不条理に対するやるせなさ。外界への渇望。そういった汝の想いが積み重なり、魔狼と鼠を呼び寄せた。よもや、我輩の〈とこしえの森〉を越えさせるとは思わなかったがな」
「私が、魔狼たちとイズモ様を……？」
村を危険に晒し、魔狼の兄弟や男たちを死なせたのは、他ならぬ自分だったというのか。
愕然とするカリムを傍目に、ラシドは考えるように顎に手をやる。
「闖入者を駆除すべきか、我輩も悩みに悩んだ。だが、汝の祈りを信じて正解だったようだ。彼らが巻き起こした多くの変化と犠牲は、汝の祈りをより高い次元へと昇華させた。これでまた、我々は在りし日に近づく」
ラシドは嬉しそうに笑った。心からの笑顔だった。
「どうして、笑っていられるのですか」カリムの青い瞳が涙に滲む。「私が祈らなければ、私がいなければ、誰も死なずに済んだのでしょう？」
「悲しむことはない」ラシドが優しく、カリムの涙を拭う。「彼らの犠牲は決して無駄にはならない。汝が彼らの死を悼み、平穏を祈ることで村は繁栄する。何を不

満に思うことがある？」
「私は……、私はただ……」
「汝の悲しみも、じきに癒える」
ラシドがカリムの肩に手を置く。
「我輩とひとつになれば、汝にも理解できるだろう。それとも」ラシドの手に力が込められる。「我輩を拒否し、尊い犠牲を無駄にするのか？　汝の覚悟は、その程度で揺らぐほどのものだったのか？」
カリムの体が震える。
アドルに言ったではないか。自分は、未来の子どもたちのために行くのだと。自分のせいで多くの命が散っていったのなら、その責任を取らねばならない。自分の祈りは、数多の名もなき人々の祈りでもあるのだから。
カリムの内心を読み取ったように、ラシドは満足そうに頷く。
「さあ、来るがいい」ラシドが手を差し出す。「汝の祈りを聞かせてくれ」
カリムが手を取ろうとしたとき、庭園に轟音が響いた。
庭を囲う生け垣の一角が吹き飛び、大きな黒い塊が飛び込んでくる。それは地面にぶつかると粉々に砕け、もうもうとした煙を立てた。
唖然とするカリムが見守る中、煙の中からふたつの影が現れる。金色の剣を持つ

黒虎と、長銃を構えた鼠人だった。
「カリム、迎えに来たぞ」
埃だらけのイズモが、ニヤリと笑った。

「イズモ様……！」
突入してきたイズモを見て、カリムは驚きを隠せないようだった。あんな別れ方をしておいて、まさか追いかけてくるとは思わなかったのだろう。
カリムがまだ生きていることにひとまずほっとするが、カリムの後ろにいる人物を見て、銃を持つ手に力がこもる。
深紅の外套をまとった金毛の虎人。漂う雰囲気はただものではなく、高位の魔術師特有の、息が詰まるような圧を放っていた。
「汝も健在そうだな、アドル」
「やはり、お前が神だったのか」
アドルが吐き捨てるように言う。
「知り合いか？」
「ラシド。先代の祈祷師だ」アドルの声には忌々しさが滲んでいた。
あらためて相手を観察する。



背丈はアドルと同じくらいだが、服の上からでも分かる体格の良さ。顔はカリムの秀麗さとアドルの勇猛さを兼ね揃え、目を疑うような美しさだった。しかし、顔には真横に切り裂かれたような傷跡があり、目は潰れて見えないらしい。
服装と背格好、何より金色の被毛から、山で襲ってきた男とみて間違いない。
「お前がラシドだったのか。先日、世話になった礼をさせてもらおうか」
イズモは相手を威嚇するように銃を向ける。前回の失態を踏まえ、すでに術式機構には祈りが込められ、指は引き金にかかっている。
しかし、ラシドは知ってか知らずか、イズモの方を向こうともしなかった。
「して、この騒ぎはどういうことだ？」
「カリムを連れ戻しに来た。邪魔するのであれば容赦しない」
アドルは男に剣を向ける。清々しいまでの宣戦布告だった。ラシドはやれやれとでも言いたげに首を振る。
「汝も変わらぬな」
「戦う前に教えろ。なぜ生贄を必要とする？」いつでもアドルを援護できるよう警戒しつつ、尋ねる。「この森はすでにお前の魔術で守られている。魔術や肉体の維持が目的なら、山の魔石を使えばいいはずだ。お前はなんのために神の使いを必要とする？　神の使いとは、なんなんだ？」

「鼠ごときに話す気はない」
迷わず引き金を引く。
〈梟（フクロウ）〉が発動。弾丸が銃口から無音で飛び出し、ラシドの右肩を強襲。
だが、着弾の寸前、ラシドの右手が霞む。
「なっ……!?」
ラシドが手を開くと、そこには魔術で構築された弾丸が乗っていた。魔術が解除され、弾が光の粒子となって霧散していく。
「ずいぶん静かな魔術だ。だが、脆弱にすぎる」
「無音の銃弾を、素手で掴んだ、だと……？」イズモが呆然と呟く。
『鳥打ち』第六十二羽〈梟〉。対人に特化した暗殺用の魔術だった。
通常の弾丸に発射音や風切り音、着弾音を防ぐ消音魔術を重ねることで、弾を限りなく認識困難にする。特に、見張りや単独行動をしている敵の始末など、周りに気づかれては困る状況で絶大な効果を発揮する。
だが、ラシドは初見で反応し、弾を掴んでみせた。非常識にも程がある。
「そんな小手先の技で倒せるなら苦労はしない」戦慄するイズモに、アドルが呆れたようにため息を吐く。「やつは盲目だが我々の動きを正確に把握している。正面から撃って当たるわけがない」

「だから！　そういうことは！　先に言え！」
聴覚に優れ、筋肉の動く音が聞こえたとしても、狙った位置までは分かるはずがない。おそらく、魔狼と同じく祈りを察知しているのだろう。
問題はその精度が極めて高く、反応速度と肉体強度がアドル並みか、それ以上ということだ。勝てる見込みがどんどんなくなっていく。
――分かってはいたが、本当に人間かよ。
イズモの心配をよそに、アドルの敵意が膨れ上がっていく。
「カリムを解放しろ。断るなら、力付くで連れて行く」
「私情に囚われ、長の役目を放棄するというのか」
「我々を箱庭に閉じ込め、生贄を強いる神の下僕になった覚えはない。神に頼らずとも我々は生きていける」
「受け継がれた血を絶やさぬため、我輩と最初の者たちがどれほど苦心したか、汝には想像もできぬのだろうな。現状に不満を持つのは結構だが、ただ漠然と変化を望み、先人の作り上げた功績を破壊するのは愚かな子どものやることだ。恥を知るがいい」
「俺は説教を受ける気も、話し合う気もない。邪魔するなら殺す」
「アドルもイズモ様もやめてください！　私はもういいのです！」

「お前が良くても、オレは良くないんだよ」イズモが口を挟む。「お前が自分を犠牲にしてでも村を守るって言うなら、オレは何を犠牲にしてでもお前を守る」
「同意するのは癪だが、そういうことだ」
「……致し方あるまい」ラシドがカリムを守るように前に出る。「我輩には民を在りし日に導く務めがある。カリムは渡さぬ」
ラシドの宣言と同時にアドルが剣を投げる。
唸りを上げて眉間を狙う剣を、ラシドは首を傾けるだけで回避。
だが、その隙にアドルはラシドの左横に滑り込んでいた。目視すら不可能な超高速移動。アドルの手に新たな剣が出現。首筋を狙い、渾身の突きを放つ。
キン、と金属同士がぶつかるような音がした。
イズモとカリムが息を呑む。
アドルの一撃を、ラシドは右手の人差し指で受け止めていた。アドルは全身の筋肉を隆起させているが、剣先が指の腹に食い込んだだけで、それ以上進むことができずにいた。
刀身に赤い筋が垂れる。
「ほう」ラシドの顔に少なくない驚きが広がる。「我輩に傷をつけたか。しばらく見ない間に腕を上げたな」

「次は首を刎ねる」
アドルが剣を引き、袈裟斬りを放つ。ラシドの右手が閃き、迎撃。剣を受け流した指先がアドルの喉を狙うが、アドルはそれを剣で弾く。攻守が目まぐるしく入れ替わり、相手を殺すべく速度を上げていく。
常人の視認限界を超えた超高速の剣戟の応酬。イズモにはふたりの腕が霞んで見えず、鳴り響く硬質な音でしか認識できなかった。並の魔術師なら、すでに数十回は死んでいる。
だが、指を咥えて見ているわけにはいかない。
――そこだ！
ラシドの頭に向け、〈駒鳥〉を放つ。ラシドの尻尾が跳ね上がり、弾丸の軌道を逸らす。弾は後ろにあった木を粉砕し、なぎ倒す。
イズモは〈駒鳥〉を連射。しかし、ラシドはアドルをいなしながら、尻尾だけで銃撃を防ぐ。どれほど攻撃しても、最初の位置から微動だにしない。
――ふたりがかりでも隙ができないだと⁉
ラシドが特級レベルの魔術師なのは覚悟していたが、アドルと自分が組めば同等程度にはなると思っていた。しかし、現実は足元にも及んでいない。
弾倉が尽き、一瞬の隙が生まれる。

その瞬間、尻尾の先が槍に変わり、イズモに襲いかかってきた。

イズモは横に飛んで回避、石畳が紙のように粉砕され、地面に大穴が開く。追尾してくる尻尾を、さらに跳んで避ける。

「ラシド様！　おやめください！」

カリムがラシドの尻尾の根元にしがみつく。

尻尾の動きが止まる。

——粉砕せよ、嘴広鸛！

砲弾が尻尾の中間に着弾。爆発するようにちぎれ、血が撒き散らされる。

だが、次の瞬間には尻尾が再生、イズモに向け振り下ろされる。反動で明滅する視界の中、倒れるようにして直撃を躱す。

だが、床が割れる衝撃で吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

尻尾が狙っているのを感じつつも動けない。

「イズモ！」

アドルの意識が一瞬、逸れる。

ラシドの手刀がアドルの心臓めがけ、繰り出される。アドルは体をひねり、胸板を抉られながらも回避。そのまま距離を取り、イズモに向けて走る。

動けないイズモに飛びつくようにして転がる。直前にいた空間を尻尾が貫く。

アドルはさらに転がって距離を稼ぐと、跳び上がるようにして立ち上がる。
「生きているか？」
「な、なんとか、な」
イズモは血を吐きながら答える。尻尾の直撃は避けられたものの、余波で内臓が損傷していた。アドルは表情を変えていないが、胸の傷は深く、肉の間から骨が見えていた。
イズモは魔術符を取り出し、アドルと自分に貼る。傷が癒え、自分で立てるようになる。
ふたりが態勢を立て直すのを、ラシドは悠然と待っていた。
「手加減してもらってこれか。絶望的だな」
「残念だが、そのようだ」
イズモの所感に、アドルが苦々しく答える。わずか数十秒の攻防で、実力差をまざまざと見せつけられた。
「手数も威力もまるで違う。ふたりで同時に仕掛けても対等未満。森を守る魔術と神域を構成する魔術を同時展開していながら、だ」
言葉にしてみると、その異常さが際立つ。
「まだ諦めがつかぬか？」

「当たり前だろうが」
　イズモの返答に、ラシドが深々とため息を吐く。
「では、もう少し手荒にしよう。腕や足を失えば、さすがに諦めもつくだろう」
　ラシドが尻尾を持ち上げる。イズモとアドルも武器を構える。
「もうやめてください！」三者が動き出す直前、カリムが叫んだ。「イズモ様もアドルも、これ以上、戦わないでください。私はもう、誰かが傷つくのを見たくありません。どうして、そこまでなさるのです」
　顔を伏せるカリムから、何か光るものがこぼれ落ちる。
「汝の優しさも相変わらずだ」
　ラシドが尻尾を元に戻し、カリムの横にしゃがむ。太い腕がカリムの背中を優しくさする。
「我輩も彼らに恨みがあるわけではない。おとなしく引くなら見逃そう。我輩が求めるのは汝の祈りだけだ」ラシドの顔がふたりに向けられる。「我らが戦うことに意味はない。神域での無礼は咎(とが)めぬ。出て行くがいい」
「はい、そうですかって引き下がるくらいなら、こんなとこまで来てないんだよ」
　折れかかる心を叱咤し、せめてもの強がりを言う。勝ち目があるとは思えないが諦める気にはなれない。必死に頭を動かし、活路を探す。

「いくつか気になったことがある」小声でアドルに話しかける。「ラシドはあの場所から一歩も動かず、人形を出す様子もない。カリムを食うのが目的なら、オレたちをとっとと殺すなり、人形で足止めして移動すればいい。なんで馬鹿正直にオレたちの相手をする？」

攻撃魔術を使わないのは、さすがのラシドにも同時使用できる魔術に限度があるからだろう。それでも、ふたりを殺すには十分な力があるはずだ。どうして、手っ取り早い方法を使わないのか。

「本人が言っているように、カリムの祈りが大切だからだ」アドルがラシドから目を離すことなく答える。「カリムは己を犠牲にすることは厭わないが、他者が傷つくことは良しとしない。ラシドもそれを理解しており、我々に対しても迂闊なことはできないのだろう」

「オレたちを目の前で殺したら、いくらカリムでも許さないだろうな。なら、なんで逃げない？」

「あの小島が神域の最深部だからだ。カリムを食うのは、あの場所でなければならないらしい」

高度で複雑な祈りほど、些細に思える条件を厳密に守る必要がある。池に作られた小さな浮島が、ラシドにとっては重要な意味を持つのだろう。

「本人が無敵の強さを誇っていても、祈りに強い縛りがあって、なんでもできるわけじゃないってことか」
一筋の光が見えた気がした。
「アドル。オレに命を託す気はないか？」
「あるわけないだろう」
「おい！　一緒に魔狼を倒した仲だろうが！」
「ただし」アドルが笑う。「策があれば話は別だ」
「ある。といっても、お前がラシドの気を逸らせている間に、オレがカリムを担いで逃げるってだけだ」
「その体でカリムを持ち上げられるのか？」
「方法はある。寿命はかなり縮むがな」
「承知した。お前がその気なら、俺も答えよう」
アドルが腰の後ろに手を回し、尻尾の付け根に付けていた物入れを探る。
出てきたのは手のひらに載るほどの魔石だった。
何かを察したように、ラシドの耳がピクリと動く。
「何をする気だ」
「こうする」

アドルが持っていた剣を頭上に掲げる。
剣先の空間が歪み、何かが出てきた。アドルが持っている剣を十倍ほど大きくし、柄を伸ばしたような形をしていた。
「なっ……!?」
呆気にとられるイズモを無視して、アドルは剣をラシドに向ける。
「翔べ」
アドルが号令を発した瞬間、槍が爆音と共に飛翔。
盾にしたラシドの尻尾が爆散。ラシドがとっさに掲げた右手に刺さる。槍は勢いのまま手のひらを貫通し、庭園の後方に着弾。地響きとともに、土が太陽を隠さんばかりに舞い上がる。
「初代黒虎の神槍〈霹靂〉を独力で再現したか」ラシドが感嘆の声を漏らす。
直撃こそ免れたものの、ラシドは右腕の肘から先が消失し、顔の右側が大きく削られていた。滝のように流れる血が右半身を赤く染めていく。
「ラシド様！」
「案ずることはない」右頬を失い、歯茎がむき出しになった顔でラシドが笑う。
傷ついた箇所の肉が盛り上がり、すぐに尻尾も腕も顔も元通りになる。

「初めてにしては悪くはないが、ラシドを殺すには力不足か」
「いや、お前、初めてって……」
「昨日、お前の魔術を見て思いついた。実戦は今が初めてだ」
ついていけないイズモに、アドルが平然と言い放つ。
ラティフがそうであったように、他人の魔術を見て魔術に目覚めることはままあるが、規模が違いすぎる。
「驚くべき才能だが、これで終いか？」
「まさか。今のは小手調べだ」
アドルが笑みを浮かべると、頭上に次々と波紋が生じ、槍が顕現していく。百を超える発光体により、夕焼けの赤がかき消される。
「これはこれは。片手間では荷が重いか」
アドルは外套を脱ぐと、へたり込んでいるカリムに被せた。
「これを汝に預ける」ラシドはカリムの頭を、毛を梳かすように撫でる。「案ずることはない。汝はただ、心の赴くままに祈ればいい」
ラシドは穏やかに微笑む。〈風〉に怯える幼いカリムをなだめるときの。カリムが作った食事をうまそうに食べるときの。カリムの知る、ラシドの笑顔だった。
「ラシド様、待ってください」

　カリムは手を伸ばすが、その手をすり抜けるようにラシドは立ち上がった。
「イズモ」
　常識外の魔術を見せつけられ絶句するイズモに、アドルが声をかける。
　見ると、アドルの顔には脂汗が浮かんでおり、鼻からは血が流れていた。超高品質の魔石を使い、自身の限界を超える魔術を行使したせいで、脳と体に尋常ではない負荷がかかっているのだ。
「最善を尽くすが、長くは持たない」
「分かっている。任せておけ」
　イズモが胸を叩いてみせると、アドルは満足そうに頷き、ラシドに剣を向けた。
「神よ、参る」
　宣言とともに、輝く槍が次々と射出。
　ラシドは尻尾をさらに伸ばして螺旋を描くように防壁を構築。回転と高速再生により、肉を削られながらも槍を捌いていく。
　軌道を逸らされた槍が街に降り注ぎ、家も道も城壁も人形も、あるものすべてを粉砕する。雷鳴のような、天が割れるような音が響き渡り、幻想の世界が破壊されていく。
「これは、いささか骨が折れる」

「光栄だ」
背後からの声に、ラシドが振り向きつつ手刀を放つ。手刀を受け止める剣の下にアドルの壮絶な笑みがあった。
アドルが剣を振るい、ラシドが応戦する。
その間にも槍は殺到し続け、防壁の隙間から、砕けた槍の一部が降り注ぐ。破片が体に刺さり、全身を血で染めながらも、アドルの勢いは衰えない。
アドルの斬撃にラシドの防御が間に合わず、肩口を切られる。傷口は瞬時に塞がるが、今度は刺突に頬を切り裂かれる。
少しずつ、アドルの攻撃速度がラシドの回復速度を上回っていく。
アドルはラシドの攻撃を防ぎ切ることを諦めていた。毛や肉を少々抉られる程度なら戦闘に支障はないと割り切り、防御に使う力を攻撃に回す。
それは意識してやっていることではなかった。アドルの脳は過負荷でほとんど思考できず、視覚も聴覚もほとんど役に立たなかった。ただただ直感に従い、剣を振るっていた。
アドルを突き動かしているのは闘争本能だった。強敵に奮起し、仲間を守るという激烈な意思。バーリやラティフと同じ、闘争に生きる者が持つ力だった。
「捨て身で来たか。正気とは思えぬ」

「正気では勝てぬ戦いがあると、イズモに教えられた」
　アドルは雄叫びを上げ、さらに剣を振るう。
――罅(ひび)割れた赤き空よ、干乾(ひから)びた赤き海よ、平伏(ひれふ)した贄の赤き血よ。渺渺(びょうびょう)たる悪夢を啜(すす)る赤き鳥の渇きを満たせ。
　特級魔術師同士の死闘を前に、イズモは祈る。
　アドルは自分を信じ、己の限界を超えて戦っている。その姿に、イズモも気持ちが高ぶるのを感じていた。
　作戦の命運を左右する魔術、『鳥打ち』第八十八羽〈火喰鳥(ヒクイドリ)〉は、イズモが最も苦手とする魔術だった。
　イズモの魔術の方針とは真逆のものであり、効果も割に合わない。しかし、今は作っておいて良かったと心の底から思えた。
――あいつがオレを信じて命張ってんだ。覚悟を決めろ！
　銃口を地面に向けたまま、引き金を引く。
――蹴散らせ！　火喰鳥！
　どくん、と心臓が脈動する。
　全身に血が巡り、体が燃え上がるように力が湧く。
　イズモは走り出した。

飛ぶような速さで地面を駆ける。

ラシドが異変を察知。尻尾の動きを調整し、槍の破片をイズモの方へと飛ばしてくる。

高速で飛来する凶器を、イズモは足を止めないまま見切って避ける。

ラシドの目がすっと細くなる。

〈火喰鳥〉はイズモの使える魔術で唯一の、身体能力を強化する魔術だった。

五感の精度と認識速度を限界まで上げ、体が自分を壊さないように無意識にかけている制限を取り払う。さらには生命活動の各種機能も強化され、効果中は魔術の反動を無視できる。

いうなれば、一時的に超人的な身体能力を得る魔術だ。

もっとも、副作用は深刻だった。

制限が取り払われた肉体は、自己破壊を気にせず力を発揮する。それを無理やり強化した自己治癒力で補うのだが、それは生命維持を司る〈神獣の瞳〉を酷使するに等しい。魔術の反動に対しても同様で、魔力の逆流による肉体の損傷を〈神獣の瞳〉に補わせる。

結局のところ、力の前借りであり、魔術が切れると同時に、借りた分に暴利を乗せて返済を迫られる。

その際の身体的負担は、〈神獣の瞳〉を直接使う〈隼〉の比ではない。
そもそも、非力なイズモが肉体を強化したところで、本職の前衛魔術師の足元にも及ばない。せいぜい、油断している相手に一矢報いるのが関の山で、『窮鼠猫を噛む』を地で行く魔術だ。
それを、カリムを神域の外に連れ出すまで連発する。
作戦とも呼べない力技によるゴリ押し。成功率は半々未満。仮に成功しても、イズモが生きている保証はない。
――それでも、他に方法はない！
致命の破片をかいくぐり、カリムの元に到達。驚くカリムを抱えあげる。
逃げようとして、体が引っ張られる感覚とカリムの苦鳴。振り返ると、ラシドの左手がカリムの腕を掴んでいた。
「カリムは渡さぬ」
ラシドがイズモに顔を向ける。
強大な魔獣を彷彿とさせる圧倒的殺意が叩きつけられ、〈火喰鳥〉を使っていてもなお、潰れた目から目が逸らせなくなる。
「その手を離せ！」
アドルがラシドの首めがけ、刺突を放つ。

ラシドは右手で刀身を掴み、何本か指を失いつつも剣をへし折る。さらに体勢の崩れたアドルの顔面に、握った剣先を叩きつける。
が、その腕が停止。
頬を切り裂かれ、歯を折りながらも、アドルはラシドの手に噛みついていた。そのままガラ空きの脇腹に折れた剣を突き立てる。
彫像のような腹筋から血が吹き出し、ラシドの顔が苦悶に歪む。
イズモはラシドの上腕に銃口を押しつけ、〈嘴広鸛〉を発射。砲弾がラシドの右腕を粉砕、引きちぎる。
ラシドはとっさに身を捩り、脇腹を抉られながらも致命傷を回避。肉体の損傷とアドルの猛攻に一瞬の遅れが生じる。
イズモは〈火喰鳥〉を再度発動。あらためてカリムを抱き上げ、全力で走る。
研ぎ澄まされた感覚で、背後に尻尾が迫るのを感じる。しかし、左右に何度も切り返し、間一髪で回避していく。魔狼の動きを思い出した自分に、拍手を送りたい気分だった。
だが、次の瞬間、イズモは転んでいた。何かに足を引っ張られたように躓(つまづ)き、カリムを投げ出すように倒れる。
起き上がろうとして、足に違和感。

振り向くと、地面から生えた黒い手がイズモの右足首を掴んでいた。手はすでに握り込まれており、足先があらぬ方向を向いていた。
〈駒鳥〉で破壊し、足を解放する。治療は〈神獣の瞳〉に丸投げし、次々と飛び出してくる手を転がりながら銃撃していく。隙を見て立ち上がり、カリムへと駆け寄る。
が、数歩も歩かないうちに再び足首が折れ、倒れる。見ると、足は中途半端に治された状態で終わっていた。
——〈火喰鳥〉を切らせるための足止めだったのか⁉
驚く間にも、足から鈍い痛みがじわじわと這い上がり、針で貫かれるような痛みに変わる。
——痛い。耐えろ。痛い痛い。蹴散らせ、痛い痛痛、火喰痛痛痛痛痛痛痛痛。
思考が痛みに塗り潰される。
〈火喰鳥〉が完全停止。
「あ」
反動。
「ああああああああああああああああああああっ⁉」
全身を襲う痛みと吐き気。

体のあらゆる機能が暴走し、幻視、幻嗅、幻聴、幻触覚、幻味、体感幻覚に襲われ、多臓器不全のような、自分という存在を破壊されるような痛みに、何が現実で何が幻かも分からなくなる。

股間に温かいものが広がっていく。失禁しているのだと分かったが、今のイズモには止める方法がなかった。

歪む視界の中で、何か光るものが迫ってくる。

ラシドの尻尾。

死ぬ。

「ラシド、彼は殺すな」

イズモを白く温かいものが包み込む。

世界が終わりそうな爆音が途絶え、世界が終わったような静寂が訪れる。

「彼には生きていてもらわねば困る」

耳元で奇妙な声がする。複数人が同時に話しているような声だった。

反動による痛みが和らぎ、肉体が再起動していく。

少しずつ視界が鮮明になる。

目の前に刃物のようなラシドの尻尾があった。威嚇するように揺れているが、それ以上は近寄ろうとしない。

見上げるとカリムの顔があった。目は深紅に染まり、ラシドを見つめている。
「なぜ、汝らが我輩の邪魔をする」
「主の命だ。それは君の使命に優越する」
「その鼠は何者だ？」
「君が知る必要はない」
ふたりはしばらく睨み合っていたが、ラシドが諦めたように尻尾を引く。何が起きたのかよく分からないが、助かったらしい。
「カリム？」
イズモが声をかけると、カリムの目の色が青に戻り、その場に崩れ落ちた。
イズモは地面に転がり落ち、振動で折れた足が盛大に痛んだ。思わず叫びそうになるのを、歯を食いしばって耐え、潰れた足に魔術符を貼る。
足が動くことを確認すると、銃を構え、立ち上がった。
庭園は惨憺（さんたん）たる有様になっていた。
置かれていた彫像や石畳の道はことごとく破壊され、地面はめくれ上がって茶色い臓腑を晒していた。庭を囲う生垣もほとんどが吹き飛ばされ、街との境が分からなくなっていた。
荒れ果てた戦場の中央に、アドルとラシドがいた。

ラシドはすでに完全回復し、金色の毛には一滴の血の跡も残っていない。対するアドルは、体中に破片が刺さり、無数の傷と出血で縞模様さえ分からなくなっていた。意識はあるようだが、金色の瞳は流れ込んだ血で濁っていた。

威厳を持って佇むラシドの横で、ひざまずいて肩を上下させるアドル。それはまるで、神の審判を待つ罪人のようだった。

「アド――」

「動くな」

ラシドの指がアドルの首に突きつけられる。

「動けばアドルを殺す」

「なっ……⁉」

作戦失敗。イズモは悔しさに歯噛みする。

イズモの計画は、アドルがラシドを足止めするという前提で成り立っている。アドルは生きているのがやっとの状態で、足元に転がる魔石も力を使い果たしたように光を失っている。

アドルの援護のない今、勝てる可能性は万にひとつもなかった。

「カリム、汝は兄を見殺しにするのか？」

「御冗談、ですよね？」カリムの声は震えていた。「まさか本当にアドルを――」

カリムの言葉はアドルの叫びにかき消された。
ラシドがアドルの右上腕を握り潰していた。ラシドの手に紫電。次の瞬間、アドルの折れた右腕が青白い炎に包まれ、燃え上がる。
火が収まり、アドルが地面に崩れ落ちる。しかし、黒焦げになった右腕はラシドの手に残ったままだった。
「我輩は嘘をつかぬ」
ラシドが無造作に腕を放り投げる。
炭化したそれは、イズモとカリムの目の前に落ち、ばらばらと形を崩した。イズモもカリムも声を発することができず、アドルの腕の残骸を見つめていた。
「戻れ、カリム。さもなくば、反逆者であるアドルは、より惨い責め苦を受けることになる。侵略者が我らの民にしたように」
人形たちの無惨な姿を思い出し、カリムがびくりと体を震わせる。
「行くな。あいつのしたことが無駄になる」
イズモはカリムの腕を握る。
カリムは潤んだ目でイズモの手を見つめていたが、首を横に振ると、その手を優しく解いた。
「そうだとしても、私はアドルを見殺しにすることはできません」

カリムが一歩踏み出す。
「俺のことは、気にしなくていい」ラシドの足元で小さな声がした。
全員の目がそちらに向けられる。
アドルは痛みに息を乱しながらも、言葉を紡ぐ。
「肉体の痛みなど、お前を失う痛みに比べれば屁でもない。お前は、お前自身のために、心から望む選択をしろ。お前が自分の意志で自分の生を全うすること、それだけが俺の望みだ」
アドルは笑った。
カリムそっくりの、朗らかな笑みだった。
「アドルは勝手すぎます」
カリムの目から、大粒の涙がこぼれる。
「私はあなたから学んだのです。誰かのために、己を犠牲にしてでも行動する勇気と優しさを。孤独を恐れず、なすべきことをなす強さに、憧れていたのです。なのに、私は自分のことしか考えていませんでした。そんな私の身勝手な祈りが、イズモ様と魔狼の兄弟をこの森に招いてしまったのです。私には私がしてしまったことへの責任があります」
黄昏の庭園に風が吹いた。

　柔らかく、優しく、それでいて寂しさを感じさせる秋の風だった。風はわずかに残っていた木の枝を揺らし、イズモやカリム、アドルやラシドの毛を撫でた。
　イズモはカリムとの出会いを思い返していた。
　すべては、カリムが心のどこかで望んでいたことだったのだろうか。
「……オレはカリムの意思を尊重する」
　イズモはため息を吐く。
「イズモ、裏切るつもりか⁉」
　アドルが身を乗り出すが、ラシドがそれを制する。
「お前は自分で言っただろ。心から望んだ選択をしろって。カリムはもう、お前を見捨てないって答えを出したんだよ。無理やり連れ出せたとしても、カリムの心は外へは向かわない。お前を見捨てた自分を責め続ける」
　言い返そうとするアドルに向け、イズモは口を大きく動かす。アドルはイズモを見つめていたが、黙ってうつむいた。
「交渉成立だ」ラシドに向け、声を張り上げる。「今からカリムを向かわせる。ただ、食う前に、アドルのけがを治す時間をくれ。必要な道具はカリムに渡す。アドルに使わせてやってくれ」
「断る。すべてが終わったあと、汝がすればよかろう」

「未練は祈りに多大な影響を及ぼす。お前も、カリムがどれくらいアドルを心配しているか分かっているはずだ。下手をすれば、お前の望む結果が得られないどころか、村が滅ぶぞ」

「猪口才（ちょこざい）な鼠だ」ラシドが心底嫌そうに言う。「好きにするがいい」

イズモは懐から必要なものを取り出す。

「これもですか？」

魔術符と一緒に渡されたものを見て、カリムが怪訝（けげん）な顔をする。

「今のアドルには必要なものだ」

「分かりました」

カリムは不思議そうにしていたが、素直に頷いた。

わがままを聞いてくださり、ありがとうございます。そう言って、カリムはイズモに背を向けた。

夕日に照らされるカリムの後ろ姿を、イズモはじっと見つめていた。性格に似合わない、たくましい体。初めて体を重ねたときの、焚き火で浮かび上がる姿を思い出した。

駆け寄りたい気持ちを押し殺す。

「どうして逃げなかった」そばに来たカリムにアドルが問う。

「あなたを置いて逃げるわけにはいきません」
カリムがしゃがみ、アドルに魔術符を貼ろうとする。
「待て」
ラシドが、カリムの手首を掴む。
「魔術符だけではないな。何を持っている」
「これは……」
説明を待たず、ラシドはカリムが持っていた物を奪う。
しかし、困惑したように顔の前に掲げ、首をひねる。
「液体が入っているのか？　祈りは感じないが、これはなんだ？」
「こうやって使うものだ」
アドルはカリムに支えられながら立ち上がると、ゆっくりと手を伸ばした。
親指と人差指で輪を作り、親指を支えにして人差し指に力を込める。
次の瞬間、人差し指がラシドの持っていた瓶を直撃。瓶が割れ、中身がラシドの顔にぶちまけられる。
強烈な刺激臭がラシドを襲う。
「がああああぁぁぁぁ⁉」
ラシドが初めて悲鳴を上げる。

イズモがカリムに渡したのは気つけ薬だった。
嗅覚や味覚があるなら、当然、粘膜が存在し、アンモニアの毒性が有効ということだ。高濃度の溶液が付着すれば、ラシドといえども、ただでは済まない。
イズモはすかさず銃を構える。
——掴め、鶚！
銃口から飛び出した鎖が、ラシドの体を手や尻尾ごと拘束する。
アドルが左手に剣を召喚、ラシドの左胸に突き立てる。しかし、片手では分厚い胸板を貫くことができない。
「るうううううあああああ!!」
アドルは剣の柄尻を膝で蹴り飛ばす。剣先が筋肉と骨を突破、心臓を貫く。
ラシドの体が痙攣し、口から血を吐き出す。
——巻き取れ！
祈りながら、イズモは地面を蹴る。体が引っ張られ、ラシドへと急接近する。途中で鎖を切断、転がるようにラシドの前に出る。
ラシドの下顎に銃口を押し当てる。
——粉砕せよ、嘴広鸛！
ゼロ距離で魔術が炸裂。

砲弾は顎の骨の間を抜け、舌の付け根と上顎を破壊しながら脳に到達。衝撃波が頭蓋骨の中に放たれる。
内圧に耐えきれず、後頭部が膨れ上がり、破裂。脳漿を撒き散らす。
上顎から上を失ったラシドは、突っ伏すように倒れる。
世界が揺らぐ。
太陽が光を失い、街の輪郭が曖昧になっていく。ろうそくが消えたあとの煙が風に吹かれるように、仮初の世界が崩れていく。
太陽は白い満月になり、街並みは荒れた山肌へと変わる。気がつくと、イズモたちは荒涼とした山の開けた場所にいた。
一陣の風が吹き、初夏を思わせる青々とした匂いがイズモを包んだ。
「戻ってきたのか」
夢から覚めたように、イズモが呟く。
神域の名残を思わせるものはなかったが、ラシドの死体と魔術の反動が、あれが現実だったと告げていた。
「お互い命拾いしたな」
「お前の機転には、つくづく感心させられる」
血まみれの笑みでアドルが応じる。

アドルが人質に取られた際、イズモはラシドの目が見えないことを利用し、言葉ではカリムに同意しつつ、口の動きでアドルに作戦を伝えていたのだ。
また、魔術要素の一切ない純粋な道具ならラシドは識別できない、という読みも当たった。感覚で瓶に入った液体の存在は察知できても、密閉された中身の分析まではできないのだ。
うまくいくかは賭けだったが、天はイズモたちに味方した。
「ラシド様……」
緊張の糸が切れたように、カリムが崩れ落ちる。カリムの目はラシドの死体に向けられていた。
カリムにとって、ラシドは育ての親であり、祈祷師の師匠でもあった。衝撃の事実を聞かされ、横暴な振る舞いを目の当たりにしても、捨てきれない思いがあったのだろう。
イズモはカリムの視界を遮るように立つと、肩に手を置いた。
「仕方がなかったとはいえ、つらい思いをさせてしまった。責任はオレが――」
言いかけて違和感。
カリムが羽織ったままだった祈祷師の上着に、祈りの気配があった。まるで魔術で生成された物質のような――。

「イズモ！」
アドルの声に、反射的に体を捻る。
光る何かが体をかすめ、上着とポーチが引きちぎられる。
脇腹が焼けつくように痛むが無視。銃を構え、臨戦態勢を取る。
イズモの背後には光る槍のようなものが浮いていた。出どころを探すと、ラシドの死体の尻尾に続いている。
「まさか、まだ生きてるのか⁉」
「汝らを甘く見ていたようだ」ラシドの死体が声を発する。「敬意を評し、本来の姿を見せよう」
直後、ラシドの体が膨れ上がる。
腕が爆発的に巨大化、指が失われ、爪が刃物のように伸びる。
顔の口吻が伸び、ワニのような顎に棘のような牙が並ぶ。潰れた頭から無数の角がせり出し、枝のように伸びる。
大木のごとく太くなった体から毛が抜け落ちたかと思うと、体表をさざなみが駆け抜けるように黄金色の鱗に覆われていく。
両目にまたがる顔の傷だけが、ラシドの面影を残していた。
「んな、馬鹿な……」

巨大なトカゲに、コウモリの羽をつけたような外見は、本で見たことがあった。
魔獣の王。地上最強の生物。生ける伝説。
特級の魔術師さえ恐れる存在。
竜。
その一匹が目の前にいた。
ラシドの強力な魔術も、強靭な肉体も当然のことだった。イズモごときが勝てるわけがない。
だが、新たな疑問が生まれる。竜は極めて誇り高い生き物だ。自分以外のすべてを見下し、気分ひとつで天災を起こすという。そんな生き物が、人間に姿を変えてまで人間を守り続けていた？　なんのために？
「イズモ！　何をしている！」
アドルの声に、我に返る。反射的に〈嘴広鸛〉を紡ぐ。
アドルの投げた剣と砲弾が竜を襲う。が、鱗に到達する前に消失。竜の発する魔力に負け、形を保てなかったのだ。
竜の尻尾が霞む。アドルはとっさにイズモを押しのけ、前に出る。尻尾による横薙ぎを、アドルは出した剣で防御。しかし、剣は薄氷のように砕かれ、アドルの体は広場の端まで吹き飛ばされる。

アドルの機転でイズモは直撃を免れるが、完全には避けられず、尻尾の先端が左腕をかすめる。骨が砕ける感覚。衝撃に銃が跳ね飛ばされる。
激痛をこらえ、カリムを守るように立ちはだかる。
しびれる右手で魔術符を探ろうとして、宙を切る。ポケットが破れ、魔術符の残骸が地面に散らばっていた。
——最初の攻撃は回復手段を防ぐためだったのか⁉
魔術符は体中のポケットに分散させていたが、激戦で数が減っていた上、祈りを察知する能力で高位のものを狙われた。一応、鞄には予備があるものの、村に置いてきてしまった。
せめてもの抵抗として、短剣を掲げる。
「カリムを渡せ」鐘の音のような声が夜空に響く。「〈風〉の意思により、汝を殺すことはせぬ。とくと失せよ」
「えっと、話し合いを——」「断る」
「アドルの生死を確かめ——」「断る」
「カリムの意思を——」「断る」
「なんで人間に擬態を——」「断る」
交渉不能。

先ほどの騙し討ちで、譲歩する気もなくなったのだろう。
アドルが起き上がる気配はない。ただでさえ満身創痍だったのに、かすっただけで骨折する一撃が直撃したのだ。イズモを助けるどころではない。
「カリム、動けるか？」
「はい、なんとか」
「オレが時間を稼ぐ、その隙に逃げろ」
カリムの返事を待たず、イズモは声を張り上げる。
「悪いがカリムを渡す気はない。かといって拷問を受ける気もない」
「言葉遊びには付き合わぬ」ラシドが尻尾を持ち上げる。
「おっと、動くなよ。何かしようとしたら――」
イズモは自身の胸に短剣を突きつける。
「この場で自爆する」
「……汝は何を言っている？」
「オレの体には、大陸最高品質の魔石が埋まっている。それを暴走させて、お前を道連れにしてやるっつってんだよ。それが嫌ならカリムが逃げるまで動くな」
ラシドの体から強烈な殺気が放射され、心臓が縮み上がる。それでもイズモは剣を構えたまま、挑発的な笑みを浮かべる。

イズモは本気だった。もちろん、死にたくはない。しかし、カリムのためだとしたら、それも悪くないと思えた。
背後でカリムが動く気配がする。イズモは逃げる時間を稼ごうと口を開くが、先に声を出したのはラシドだった。
「我輩を脅してでもカリムを渡さぬ。その心意気は評価しよう」
「そりゃどう――」
「だが、カリムはそれを望んでいないようだ」
後頭部に衝撃。
完全な不意打ちに、為す術もなく倒れる。
視界が明滅する中、殴った相手に目を向ける。
カリムだった。手にはアドルが使っていた魔石が握られている。
「お、おま、何を、して」
「申し訳ありません。ですが、私はもう誰も失いたくありません。誰かが傷つくのを見たくありません。私も大切な人を守りたいのです」
カリムは青い目のまま、凛と響く声で言った。カリムの手から魔石が離れ、地面に落ちて割れる。
カリムは確かな足取りで、竜の前に進み出た。

「私は逃げません。私の祈りを喰い、叶えてください」
「では始めよう」
竜の口に、金色の光が灯る。
正視できない爆光が闇を駆逐する。息ができないほどの風が吹き荒れ、体を飛ばされないよう耐える。
カリムの体が毛先から光となり、竜の口へと吸い込まれていく。
物質を分解し、情報化して取り込む魔術。
あれの前では、どんな攻撃魔術も防御魔術も意味をなさない。形あるものはすべて光に変えられ、飲み込まれてしまう。
カリムの体も、この世から消え去る。
跡形もなく。何も残さず。完全に。永遠に。
「そんなこと、許してたまるか……！」
左腕は相変わらず折れていて、息をするたびに激痛を発する。カリムに殴られた頭はがんがんする。それらを無視して短剣を掴む。
――無限錯誤の果てに至る万物真理の極限を束ね、
イズモは体を起こす。風に煽られ、左腕がちぎれそうなくらい痛む。
――生と死の狭間の無限階層を焼尽する天穹の火。

震える足を押さえ、立ち上がる。全身がバラバラになりそうに痛む。
――日輪を隠す無限後退に終焉を告げ、
一歩踏み出す。感覚が消失。それでも進む。
――黎明が導く無限無窮なる旅路の極致を示せ。
竜の光が、ひときわ輝く。
「させるかぁぁぁぁぁ！」
カリムの前に飛び出し、短剣を突き出す。
〈神獣の瞳〉が脈動。膨大な魔力があふれだし、短剣に集中。イズモの祈りが魔術となる。
「解き放て!!　常世長鳴鳥(とこよのながなきどり)!!」
短剣の切っ先から白い光が螺旋となって噴出。カリムを飲み込もうとしていた光の奔流の前に立ちはだかる。
光と光がぶつかり合い、余波が爆風となって大地を揺らす。
「イズモ様!?　何を!?」
「見りゃ分かんだろ！　お前を助けようとしてんだよ！」
吹き飛ばされないように踏ん張り、剣を掲げる。魔術が互いを喰いあい、霧散していく。

「逆元性縮退結界だと？」竜の目に嫌悪が宿る。

『鳥打ち』第九十羽〈常世長鳴鳥〉。魔術を無効化する魔術。

ラシドの分解魔術には、通常の魔術では対抗できない。その唯一の例外が、魔術それ自体に干渉し、効果を弱める縮退結界と呼ばれる魔術だ。その中でも〈常世長鳴鳥〉は逆元性に分類され、理論上、無効化できない魔術はない。

だが、その代償はあまりに大きい。

〈常世長鳴鳥〉は打ち消そうとする魔術と同じ量の魔力を要求する。つまり、相手の魔術が強大であるほど消費する魔力も爆発的に増え、相手が魔術を使い続ける限り、イズモも魔術を止めることができない。

その間、〈神獣の瞳〉はフル稼働するため生命維持機能は低下する。それは〈火喰鳥〉の反動を受け続けるようなものだった。

イズモの鼻や目から血が流れだし、分解されて光となっていく。全身が悲鳴を上げ、五感はほとんど意味をなしていない。

イズモは霞みそうになる意識を引き止め、魔術を紡ぎ続ける。

「おやめください！　このままではイズモ様が！」

「分かってるならとっとと行け！　オレを無駄死にさせる気か！」

口調とは裏腹に、イズモの口元は不敵につり上がっていた。

「イズモ様を置いては行けません！　イズモ様がこの森に来てしまったのは、私の祈りのせいなのです！」
「だったら、オレが助けるのもお前の祈りだ！　おとなしく助けられろ！」
短剣を握る爪が割れ、皮膚が破ける。血で滑るのを必死に握る。
少しずつ押され、防ぎきれなかった光がイズモの耳の先をかすめる。毛と肉が分解され、血が吹き出す。
「お前は外の世界を見たいって言っただろ！　こんなところで立ち止まるな！」
「どうして、どうしてそこまでなさるのですか⁉」
「お前のことが好きになっちまったんだよ！　それ以外に理由なんてあるか！」
カリムが息を呑む。
竜が出力を上げ、金色の光が目の前に迫る。
イズモも出力を上げて対抗するが、重すぎる負荷に体中の穴という穴から血が吹き出す。目が焦点を失い、上体が揺らぐ。イズモはかろうじて踏みとどまり、短剣を構え直す。
「他人の人生を歩むな！　お前が真に求めることをしろ！　運命なんて覆せ！」
神経系が焼き切れていき、現実感が喪失。
それでも、イズモは言葉を紡ぐ。

「生きろ!!　カリム!!」
〈神獣の瞳〉の全魔力を短剣に集中。魔術を最大出力で展開——。
「アドル、後は頼みます」
耳元で、声。
重力が消える。視界がぐるぐると回転し、天地が激しく入れ替わる。カリムに投げられたのだと気づく。
魔術が停止。光が押し寄せる。
落下していく視界の端で、カリムが光の中に消えていくのが見えた。
カリムは笑っていた。初めて会った日の夜に見せた、子どもっぽい、輝くような笑顔だった。イズモは我知らず手を伸ばしていた。
——オレはまだ、お前に何も……。
衝撃。
そこでイズモの意識は途切れた。

4

「本日は……にお越しいた……ありがとうご……」

耳に響く耳慣れない声に、カリムは意識を取り戻した。
目を開けると、自分が赤い地面に横たわっていることに気づく。土ではない。ゴザに似ているが格段に柔らかく、視界いっぱいに広がっていた。
――私は……何が……？
おそるおそる体を起こす。腕、足、白い体毛、腰布、祈祷師の装飾品。手で触れて確かめてみても、すべて揃っている。
自分は竜となったラシドに喰われたのではなかったのか。
「……分前になり……してお待ち……」
また声がした。
声の主を探すが、自分が薄暗い場所にいることしか分からない。
立ち上がり、辺りを見回す。
そこは村と同じ広さの空間だった。奥に向けてすぼまった扇形で、最奥には半円状の舞台がある。深紅の敷物が敷かれた床は、舞台を中心とした同心円状の狭い段になっており、艶のある木製の座席が並んでいる。
「劇場……？」頭の中に言葉が浮かび、口に出す。
〈風〉の話に出てきた、演奏や演劇などを披露する施設。実際に見るのは初めてだが、ここがそうだという確信があった。

——私は、ここを知っている。
自分という存在に深く刻まれた光景。
歴代の白虎たちが、竜に喰われるたびに訪れた場所。
「目を覚ましたか」
今度は聞き慣れた声がした。
舞台を正面から見下ろす座席に、金色の虎の後頭部が見えた。
「ラシド様……」
「カリム、こちらへ」ラシドが手招きし、隣を示す。「警戒せずとも良い。汝は我輩に喰われた。何をしようと、もう遅い」
ふたりしかいない劇場に、ラシドの声が響く。
カリムは少し迷ったあと、ラシドの隣に腰を下ろした。椅子の座面には床と同じ色の柔らかな布が貼られ、カリムの尻を優しく包んだ。
「ここは、どこですか？」
「祈りの最深部。終わりと始まりが出会う場所だ」
「私は死んだのですか？」
「死をどう定義するかによる」
ラシドは考えるように、顎に手をやる。

「死を、肉体の構造と機能の不可逆的な喪失とするなら、汝は間違いなく死んだと言える。汝の体は分子レベルまで分解され、殻の中で我輩の体と完全に溶け合っている。一方、死を自我の消滅と捉えるなら、まだだ。汝は我輩の内的世界で別個の人格を維持し、言葉を介さねば意思疎通できない」

まるで化学式を暗唱するような、感情のこもらない声でラシドが言った。

カリムは自分の手を見る。死んだという実感はまったくなかった。

自分が取り込まれてから、どれくらいの時間がたったのだろうか。元の世界はどうなったのだろうか。イズモやアドルは無事だろうか。

そのとき、耳障りな音が劇場に響いた。

「何が始まるのですか？」

「人形劇だ。なぜ、この森が生まれたのか」

照明が絞られ、客席が闇に包まれる。

緞帳が音もなく上がっていく。

舞台の上に、布でできた金色の竜が置かれていた。細部が省略された、ぬいぐるみだった。

作り物の竜は眠るように体を丸め、目を閉じている。

「昔々、ある森に一匹の竜が棲んでいた」

どこからともなく、何者ともつかない声が聞こえてくる。〈風〉に似た、性別も年齢も感じさせない声だった。
「人喰いの竜と恐れられ、人に滅ぼされた一族の生き残りだった。その竜は争いを好まず、森に人を寄せつけぬ結界を張り、動物たちと静かに暮らしていた」
舞台袖からハリボテの木や動物の人形が現れる。
鹿や猪、兎が竜の周りを飛び跳ね、何匹かは竜の体をよじ登ったり、尻尾を滑り降りたりして遊ぶ。
「しかし、ある日、平和な森にひとりの人間がやってきた。彼は竜の魔術に興味を示し、竜を捕まえに来たのだった」
照明が赤く変わり、ハリボテの木が反転して火のついた木に変わる。逃げ惑っていた動物たちも火の塊に変わり、力尽きたように倒れる。
動くもののなくなった舞台の端から、二本足の影が現れる。人の形に切った木の板を黒く塗ったものだが、言いようのない不気味さに胸がざわめいた。
人影は複数の影を従えていた。村の子どもたちが泥遊びで作るような、異形の下僕たちだ。それらは動物たちの死を楽しむように、動き回っていた。
「竜は逃げた。己の命惜しさに、棲み慣れた森と動物たちを見捨てて」
竜以外のすべてが舞台袖に引いていき、背景が次々と切り替わる。緑の山々、青

い海、稲光の走る灰色の雲、赤い夕焼け。
「しかし、とうとう力が尽き、ある森に落ちた」
目まぐるしく変わっていた背景が、薄暗い森で止まる。
「疲弊のあまり、竜が動けずにいると、ふたつの人影が近づいてきた」
舞台袖から小さな人形が出てくる。黒虎と白虎の子どもだった。
『よかった、まだ生きてる』
『あまり近づくな。喰われるかも……って、おい！』
「黒虎の警告にも耳を貸さず、白虎は持っていた肉を竜に差し出した。しかし、竜が食わないとみるや、ふたりはどこかに行ってしまった」
ふたりが舞台袖に戻っていく。
「しばらくすると、別の人間がやってきた。彼は森の近くにある国の王だった」
舞台に新たな人影が現れた。鎧を身につけた、背の高い虎人の男だった。王冠を戴き、深紅の外套を羽織っていた。
『竜よ、そんなところで寝ていては風邪を引いてしまう。よければ我が国で休まれてはどうか』
『竜を自国に招くなど正気とは思えぬ。汝は喰われたいのか？』
『助けた竜に喰われるのも、また一興。愉快な王として名を残すだろう』

「王は高らかに笑った。竜は追い払うのも面倒になり、その言葉に従った」
背景が生け垣に変わり、床に池と浮島が現れる。
「王は竜に庭園の一角を与え、丁重にもてなした」
『なぜ、我輩を助ける？』
『彼らに頼まれては断れぬ』
王の両脇から、小さな虎人が現れた。あの黒虎と白虎だった。
『我が自慢の息子たちだ』
王の右手が白虎の少年の頭に乗せられる。
『この子は風の声が聞こえる。死に瀕した竜が来たという風の声を聞き、竜を助けてほしいと言った』
続いて、王の左手が黒虎の少年の頭に乗せられる。
『この子は相手の心を見抜く。お前が善良なる心を持ち、我らの力になってくれるだろうと言った』
王はふたりを抱き上げる。
『我は彼らの祈りに応えただけだ。お前が感謝すべきはこの子たちだ。お前に恩に報いる心があるなら、この子たちの友となって欲しい』
王と子どもたちの姿が消え、背景が山に変わる。

「その国の領土に、ひとつの山があった。大陸でも有数の魔石の鉱山だ。売れば国に巨万の富をもたらすが、王は魔石が争いに使われることを良しとせず、採掘を制限していた。そのせいで他国から恨まれていた」

照明が消える。再びついたとき、竜は鎧をまとい、背中に王を乗せていた。背景は煙を上げる街になっていた。

「とうとう周辺の国々が手を組み、大軍となって攻めてきた。魔石を奪い、我が物とするために。竜は王と共に戦った。命を救われた恩を返すために。万の軍勢にも怯まず、命を賭して戦った。しかし、それにも終わりが来た」

竜の顔に赤い線が走ったかと思うと、血が吹き出した。

「戦いの中で竜は光を失い、王は死んだ」

王の体が傾き、竜から転げ落ちる。

外れた王冠が床を転がり、劇場に冷たい音が響いた。竜の心が砕けたかのような悲痛な音だった。

「王は最期に『民を頼む』と言い遺した。竜は残った人々を連れ、山に逃げた」

王の姿が消え、背景が夕焼けに変わる。血のように赤い落日に照らされ、竜の体が燃えるように輝く。

だが、すぐに木の折れる音と重いものが落ちる音がして、暗い森に変わった。

ぼんやりと明かりがつき、竜を囲む無数の人影が現れる。竜も人々も薄汚れ、疲れ果てていた。その中に、黒虎と白虎の姿もあった。

「人々は身を寄せ合い、終わりの時を待っていた」

黒虎が竜の前に進み出る。彼も戦ったのか、体は傷だらけになっていた。

『俺は父の敵を討つ。お前も父を慕っていたなら力を貸せ』

今度は白虎が竜の前に進み出た。

『我輩は力を使い果たした。もはや飛ぶこともできぬ』

『ならば私を喰いなさい。そうすれば父との約束を守れるのでしょう』

『なぜ、汝がそれを知っている』

『風から聞きました。皆を助けるには、それしかないと』

静寂。

竜の迷いを示すような、長い長い沈黙。

「竜は白虎を喰った」

白虎の姿が光の粒子となって散る。

日が暮れ、闇が満ちる中、白虎の残光だけが、きらきらと輝いていた。

「白虎の祈りを取り込んだ竜は、世界から山と森を隠した」

再び照明がつく。

背景は明るい森になっていた。木々があり、動物たちがいた。竜がもともと棲んでいた森によく似ていた。
違うのは、背景に山があること、人々がいること。そして、竜の姿が消え、同じ場所に金毛の虎人が横たわっていること。
金虎が立ち上がる。その目は、竜と同じように目が潰れていた。
「竜は神となり、人々を導いた。王の遺した言葉を守るために」
金虎の周りに人々が集まり、彼らを取り囲むように家ができていく。カリムの見慣れた村の姿だった。
「こうして、神の棲む森が生まれた」
舞台の明かりが消え、劇場は完全な闇に包まれる。
「これが我らの、本当の物語だ」
ラシドが呟くと、客席が明かりを取り戻した。
カリムがはっと息を呑む。
誰もいなかった席が、数え切れないほどの人影で埋まっていた。いずれもカリムと同じ年頃で、同じ背格好の白い虎人たちだった。尋ねるまでもなく、これまでに喰われた白虎たちだと分かった。
「私の前にも、これほどの者たちが……？」

「我輩は所詮、偽りの神だ」ラシドが悲しそうに微笑む。「喰った祈りは時ととも
に擦り減り、綻びが生まれる。朽ちていく祈りを補うためには、新たな祈りを喰う
しかなかった」
　カリムは、森を包む大きな布を想像した。
　その布は世界から森を隠し、守っていた。しかし、風雨に晒され続け、薄くなっ
たり穴が空いたりする。ラシドはそれを他の布で補った。綻びては繕い、綻びては
繕う。ここにいる白虎たちは、そうやって継ぎ接ぎされた、祈りの残骸だった。
「どうして、そこまで」
「我輩にはそれしかできぬからだ」
　ラシドの声には諦念と悲観が混じっていた。
「他者のために祈れるのは人だけだ。どれほど形を真似、どれほど人と過ごし、ど
れほど人を喰らおうとも、竜は人にはなれず、自分のためにしか祈れぬ。祈りを喰
い、叶える。それが人喰竜である我輩が、汝らにしてやれる唯一のことだ」
「そんなことありません！」カリムは叫んでいた。「ラシド様は我々を愛してくだ
さいました。人になれずとも、人を喰わずとも、共に生きることができます」
「喰うことをやめれば、あの鼠のような輩が村を蹂躙する。我輩は王も国も守れな
かった。ならばせめて、約束を果たさねばならぬ」

　もはや呪いだ、とカリムは思った。王の遺した真摯な祈りが、竜の運命を決定づけてしまった。あの王は、こうなることを望んでいただろうか。
「私は、どうすれば」
「祈れ。それが今の汝にできる唯一の、そして汝にしかできぬことだ」ラシドが神託を下すように言う。「汝の比類なき祈りが、我らを在りし日に導く」
　ラシドの秀麗な顔が崩れる。高熱に晒された飴細工のように、肉体が溶けるように形を失っていく。ラシドだけではない。白虎たちが、観客席が、舞台が劇場が世界が溶け、崩れ、混じり合っていく。
　世界を構成していたものが、大きな流れとなって渦を巻く。
「さあ、汝の祈りを聞かせてくれ」
　渦が声を発し、カリムを飲み込んだ。
　荒れ狂う命の奔流の中で、カリムの体は小枝のように翻弄された。しかし、怖くはなかった。温かく、優しく、懐かしいものに包まれ、深い眠りに落ちていくような心地よさがあった。
　自分という存在が曖昧になり、何か大きなものと溶け合っていく感覚。それとともに自分のものではない記憶、過去の白虎たちの記憶が流れ込んできた。
　不安、誇り、慈愛、諦め、迷い、意地、怒り、喜び、悲しみ。

様々な感情と景色が押し寄せ、自分と他人の境界が失われていく。
カリムが自我を手放そうとしたとき、誰かの声を聞いた気がした。とても小さな声だったが、心を惹かれた何かがあった。
薄れていく意識を引き戻し、声の主を探す。
それは、首飾りについていた魔石から発せられていた。
『手作りの贈り物なんて柄じゃないんだがな』
『たかが魔石でも記念って言えば受け取ってくれるだろ』
『あの性格なら変に勘ぐったりはしないだろうし』
『……あいつ、喜んでくれるかな』
首飾りを作るイズモの声。作った本人が気づかない内に込めてしまった、ささやかな祈りだった。
命たちが異物の気配を感じたのか、魔石を壊そうと動き出す。
流れに振り回され、今にも砕けそうな石を、カリムはそっと抱きしめた。間もなく消えてしまうのだとしても、これだけは誰にも渡したくなかった。
——小さな狩人が森を訪れ、神の子は恋をするだろう。
先の〈風寄せ〉で聞いた、予言の一節。アドルに伝えるべきか悩んだ末、自分の心にしまい込んだ言葉だった。

――予言は正しかった。
イズモとの出会いは、カリムの灰色だった日常に色彩をもたらした。カリムは生まれて初めて、過ぎていく日々を惜しいと思った。
――私はあなたと、世界が見たかった。
山で魔石を探していたとき、イズモは外の世界を案内すると言ってくれた。そうなれば、どんなにいいだろうと思った。
『なら、祈るといい』
イズモの言葉がよみがえる。
『自分には何もできないとき、自分の力ではどうしようもないとき、オレはそうすることにしている。自分はどうありたいのか、世界にどうあってほしいのか。現実は変えられないとしても、祈りは心を導いてくれる』
カリムは、魔石を握りしめた。
祈ろう。
すべての命のために。
――我らに未来を。
心の底から、想いが浮かび上がる。
――愛する者たちと共に歩む未来を。

カリムは祈った。
自分が生まれ育った、村のために。
この森を守り続けた、優しい人喰竜のために。
そして、自分を好きだと言ってくれた、小さな英雄のために。

終章　光差す道

「よし、こんなもんか」
家の中を見回し、イズモはほっと息を吐いた。
イズモが数週間過ごした家は、すっかり片付いていた。イズモが持ち込んだものはすべて処分され、残っているのは水瓶と棚くらいだ。借りたときと同じか、それ以上に、きれいになっていた。
「まだ家にいたのか」
呆れたような低い声にイズモが振り向く。
戸口に黒い虎人が立っていた。
「よう、アドル」
やってきた男に、イズモは気さくに返事をする。
アドルは右腕の上腕から先がなくなり、無数の傷痕が全身を覆っていた。あの美しかった毛並みは、もはや見る影もない。その一方で、近寄りがたいほどの威圧感は消え、心の奥底まで覗き込む硬質な瞳も、今では温かな光を宿している。
何より違うのは顔つきだった。憑き物が落ちたような表情は、今ならカリムと双

子だと言われても納得できる穏やかさだった。
「ヌールも見送りに来てくれたのか」
　イズモはアドルの左腕に抱かれた少年に声をかける。金色の毛の少年はアドルの首にしがみつき、大きな緑色の瞳でイズモを見ていた。
「出発の準備はできているのではなかったか？」
「日の出まで時間はあるし、少し掃除しておこうと思ってな」
「掃除？」アドルが首を傾げる。「この家もじきに取り壊す。するだけ無駄だ」
「こういうのは気持ちの問題なんだよ」
　この家を貸してくれた人間はいなくなってしまった。イズモが出ていけば家は解体され、薪として消費される。かまどや炉も埋められてしまい、掃除をすることに意味があるとは思えない。
　それでも、イズモはきれいにしておきたかった。自分の気持ちに区切りをつけるためにも。
　不思議そうなアドルの腕の中で、ヌールがふいに天井に目を向ける。漂う何かを追いかけるように視線を動かしている。
「結局、ヌールはお前が面倒を見るのか？」
「他にあてもない。女の村で引き取るには成長しすぎだと言われた」

「生まれて、まだ一週間くらいなのにな」
　ラシドとの戦闘後、アドルが意識を取り戻すと、ラシドがいた場所には、人が入れるほどの巨大な卵があったという。唖然とするアドルの前で卵が割れ、中から金色の毛の少年が出てきた。
　体の大きさから六歳前後と思われるが、今のところ簡単な単語をいくつか話すだけで、ひとりで立つこともままならない。
　確実に言えることは、目が見えていること、こちらの話を理解していることだけだった。あとは、先ほどのように、普通の人間には見えないものが見えていることから、祈祷師としての才能もあるらしい。
　最大の懸念は、ラシドやカリムの人格を有しているかだったが、アドルが神眼で見る限り、その可能性は限りなく低いとのことだった。
　最終的に、アドルが彼を引き取り、ヌールと名づけた。
「異例尽くしで大変なのに、押しつけていくようで申し訳ないな」
「客人と呼ぶには長居していたが、お前のいるべき場所はここではない。我々は新たな伝統を作る。お前は己の道に戻るがいい」
　アドルは天井を一瞥したあと、家から出ていった。
　イズモも荷物を背負い、追いかける。

戸口をくぐる前に、振り返る。
「バーリ、ありがとな」
家の持ち主に礼を言う。山のような体格の虎人の姿が浮かび上がることも、腹に響く笑い声が聞こえることもない。そこにあるのは静謐だけだった。
イズモは深く頭を下げ、家を後にした。
早朝の村はとても静かだった。出歩く者はおらず、家々からは焚き火の煙も出ていない。男たちが起き出してくるのは、もう少しあとだろう。
「そういえば、ムグニは来ないのか？」ふと気になり、尋ねる。
ヌールを引き取るとは言ったものの、アドルは壊滅的に生活力がなく、さらに利き手を失ったため、自分のこともままならなかった。そこで副長になったムグニが住み込みで身の回りのことを手伝っていた。
アドルとヌールが起きているのだから、ムグニも起きているはずだ。
「お前の見送りなど願い下げだそうだ」
「……そうか」
「ただ、言付けを預かっている。『お前を殴り、村に来なければ、と言ったことは謝る。また村に来ることがあったら、そのときは歓迎する』とのことだ」
「あいつらしいな」

そっぽを向く生真面目な少年の姿が思い浮かび、思わず苦笑する。次、会うことがあれば、今度はもう少し仲良くできるだろうか。
アドルと村の今後について話していると、地面に残った焦げ跡が目についた。
襲撃の傷跡は完全に消えたわけではない。焼かれた家は建て直せても、心に刻まれた傷は簡単には癒えない。それでも生き残った人々は、毎日を生きている。
「オレたちのやったことは、なんだったんだろうな」
イズモがポツリと漏らす。
「神域に乗り込んで、痛い思いをして、寿命を削って、お前は片腕を失って、おまけに竜と戦って。それでもカリムは喰われ、ヌールが生まれた。伝承通りに」
「やるだけ無駄だった、と言いたいのか？」
「そうは言わない。ただ、余計なことをして、あいつを不必要に苦しめたんじゃないかと思った」
「馬鹿馬鹿しい」アドルが鼻で笑う。「我々のしたことの意味など関係ない。そうせずにはいられなかった。運命に抗わずにはいられなかったのだ。結果を知っていたとしても、同じことをしただろう。違うか？」
「……そうだな」
話しているうちに、村の出入り口が見えてきた。

「気になるなら、本人に聞けばいい」
アドルが顎をしゃくる。
視線の先には、道を塞ぐように立つ人影があった。
「イズモ様！　遅いじゃないですか！」
イズモを見た途端、白い虎人の男が青い目を三角にして言った。首飾りについた魔石が同意するように淡く光る。
「お前が早すぎなんだよ、カリム。出発は日が昇ってからって言っただろ」
「それはそうですが」
カリムがしゅんとして尻尾を垂らす。
「呼びに行ったアドルもなかなか戻ってこないので、心配だったのです。私を置いて行ってしまったのではないかと」
「そんなことするわけないだろ。こう見えても約束は守る主義だ」
遠足に行く子どもでも、もう少し落ち着いているだろう。カリムの様子にイズモが呆れたような笑みを浮かべる。
卵から出てきたのは、ヌールだけではなかった。少年を守るように抱きかかえたカリムも一緒だったのだ。皆の心配とは裏腹に、心身ともに健康であり、イズモとアドルがラシドと死闘を繰り広げたことも覚えていた。

イズモが意識を取り戻したのは戦闘から三日後だったが、心配そうに覗き込むカリムを見て、自分は死んだのだと錯覚し、周囲を大いに笑わせた。
「それはともかく、本当にいいのか？」
「けがや病気で必要なことは村の者たちに伝えました。ヌールもアドルに懐いていますし、身の回りのことはムグニがしてくれるので問題ありません」
「そうじゃなくてだな。オレなんかと一緒に来て、後悔しないか？　いつ戻ってこれるかも分からないんだぞ？」
「承知しています。それでも私は行くと決めたのです。イズモ様が嫌だと言っても勝手についていきますので、覚悟してください」
　カリムは高らかに宣言し、足元の荷物を叩いた。いったい何が入っているのかと不思議に思うくらい大きな鞄だった。
「よし、じゃあ行くか」
「イズモ、イズモ」
　出発しようとしたとき、ヌールが手を伸ばした。
　イズモは顔を近づけ、手を握ってやる。少年の手は今でこそ小さいが、すぐにイズモを追い抜くはずだ。彼もまた村の未来を担う者となり、その手で運命を切り開いていくのだろう。ラティフがそうだったように。

「じゃあな、ヌール。大きくなれよ」
イズモは少年に手を振ると森へと向かった。

「カリム」
イズモを追いかけようとしたとき、アドルに呼び止められた。
イズモも足を止めかけたが、アドルを一瞥すると「先に行ってるぞ」と村を出ていってしまった。もっとも、それがイズモの配慮であることは、カリムにも分かっていた。慌てずとも、木の陰で待っているだろう。
「どうしました？」
カリムはアドルとまっすぐに向き合った。
「予言が正しければ、お前は世界の騒乱に巻き込まれることになる。何が起きたとしても、俺は助けてやることができない。それでも行くのだな」
「もちろんです」カリムは迷いなく頷く。「この世界に戻ってきたときから決めていました。私はイズモ様と共に行きます」
「今度こそ死ぬかもしれない。お前も、あの男も」
「分かっています。でも、きっと大丈夫です」
「なぜ、そう言える？」

「私が、そう祈るからです」
アドルは一瞬驚いた顔をしたあと、吹き出すように笑い出した。幼い頃、カリムを村から連れ出したあの日以来、笑うことを忘れたアドルが笑っていた。心から楽しそうに。そして嬉しそうに。
ヌールが不思議そうにアドルを見上げる。
「そんなに笑わなくても……」
「いや、すまない。お前が祈祷師だということを忘れていた。そうだな、お前が祈るなら大丈夫だろう」
ひとしきり笑ったあと、アドルがカリムを見る。小さいころと変わらない眼差しで、金色の瞳に優しい色を湛えて。
「いってきます。兄さん、ヌール」
「武運を祈る」「ばいばい」
カリムは頷くと、村に背を向け、走り出した。朝の爽やかな風が、カリムの門出を祝福するように頬を撫でた。
木々の向こうから太陽が顔を覗かせた。眠っていた森に光が差し込み、生き物たちに夜明けを告げる。
柔らかな光がカリムの進むべき道を照らした。

イズモの待つ方へ。
どこまでも広がる世界へ。
終わることのない未来へ。



あとがき

本を読んでいると、ときどき、とんでもない作品と出会う。
読み始めるやいなや、物語の世界に惹き込まれ、現実のことを忘れてしまう。登場人物たちの喜び、悲しみ、怒り、痛み、葛藤を自分のことのように感じ、降りかかる出来事に一喜一憂する。次は何が起きるのかという期待と興奮で、ただひたすらページをめくる。
そうして訪れる物語の終わり。
満足感とともに本を閉じても、物語の世界に心を置き忘れてきたような、ふわふわとした余韻に包まれ、先ほどまで一緒にいた人々の、その後を考えずにはいられなくなる。
感動と呼ぶには、あまりにも激しく心を揺さぶられる、あの感覚。自分が感じた思いを言葉にし、誰かと共有したくなる。
そんな圧倒的な読書体験をさせてくれる作品がある。
私も、そんな物語を書きたいと思った。
頭の中で渦巻く祈りを、力の限りを尽くして表現したいと思った。
こうして『イズモと神の棲む森』が生まれた。

ろくに長編を書いたことのない私が、この本を書き切ることができたのは、ひとえに支えてくれた人たちのおかげだ。
魅力的なキャラクターデザインに加え、物語を切り出したようなカバーイラストや挿絵を描いていただいた窓枠さん。忌憚のない意見と感想、課題管理表で執筆を手厚くサポートしてくれた神風シロさん。上巻の校正を手伝っていただいたぶれいずさん。そして、Pixiv 掲載時から読んでくださった方々。
多くの人のおかげで、この本は完成した。感謝してもしきれない。
この物語によって、誰かの心を少しでも動かすことができたら、自分も書きたいと思ってもらうことができたら、それに勝る幸せはない。

二〇二三年四月　むらうえ

イズモと神の棲む森　下

2023 年 5 月 13 日　初版第 1 刷発行

発行　祈りの獣
著者　むらうえ
イラスト　窓枠

連作先　praying.beast.x86@gmail.com
Twitter：@muraue_x86
pixiv　：391681

印刷所　緑陽社 様

ご意見・ご感想はこちらのマシュマロまで

イズモの手帳より(2)

【縮退結界】

防御結界のうち、魔術それ自体に作用し、威力を軽減する魔術の総称。原理により、遡源性や干渉性など、いくつか種類がある。
中でも逆元性縮退結界は、対象と結びつくことで相手を打ち消す、対魔術結界の最高峰とされる。その分、扱いが難しく、使えるのは伝説級の魔獣や特級魔術師のごく一部である。

【結魂の儀】

虎人たちが相方を決めるときに行う儀式。祈祷師の前で、互いに右手の親指の腹を切り、血を押し付けあう。これにより、ふたりの魂は分かちがたく結ばれる。
相方が死亡した場合、他の相手と再び行うことが許されているが、新しい相方を望まない者も多いという。

【とこしえの森】

虎人たちの住む森を世界から隠している魔術。迷宮結界とも呼ばれ決まった道順を通らなければ森に入ることも出ることもできない。
ただし、対象は人間や魔獣、魔術が介在するものに限られ、光や空気、普通の動植物は自由に出入りできる。
その祈りは「愛する者たちに、とこしえの平穏を」である。

